白木西原遺跡 II

福岡県八女郡立花町所在遺跡の発掘調査報告書

立花町文化財調査報告書

第8集

1995

立花町教育委員会

白木西原遺跡 II

福岡県八女郡立花町所在遺跡の発掘調査報告書

立花町文化財調査報告書

第8集

1995

立花町教育委員会

序

ここに報告する白木西原遺跡は、平成５・６年度の団体営土地改良総合事業に伴い、平成５年９月と６年７月から発掘調査を行ったものです。

ここは矢部川に注ぐ白木川の下流右岸に位置しますが、古墳時代の古墳群や集落、縄文時代早期・晩期、中世、江戸時代といった複合する時代の遺構・遺物が検出されました。

本町におきましては、北山今小路遺跡に引き続いての、大規模な遺跡であり、ともに貴重な資料が得られたことは、立花町の歴史を解きあかしていくうえでとても重要なことであると考えます。

これをもとに、私たちは、本町の埋蔵文化財に対して一層関心を深め、これらを愛護していきたいと念じる次第です。

最後になりましたが、発掘調査にあたりまして、南筑後教育事務所や県文化課をはじめ、発掘作業に携わっていただいた方々、その他多くの皆様のご指導、ご協力に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成７年３月31日

立花町教育委員会

教育長　　末 継 敬 一 郎

例言

1．本書は、立花町が平成5・6年度に国・県の補助金を得て発掘調査を行った白木西原遺跡の報告であって、立花町文化財調査報告書の第8集にあたる。

2．発掘調査は立花町教育委員会が主体となり、福岡県教育庁南筑後教育事務所および文化課の援助を受けて実施した。

3．調査中の遺構については、実測は伊崎俊秋・吉田東明・永田寧・平島隆夫・鵜木栄子・佐々木四十臣・清原ヤヨイ・馬場光子・中原恵美子・大塚恵治が行った。写真撮影は伊崎・永田が行い、空中写真についてはフォトオオツカに委託した。

4．出土遺物のうち、土器の整理は福岡県文化課甘木事務所・太宰府事務所および九州歴史資料館において行い、鉄器は九州歴史資料館の横田義章氏の指導もとに保存処理を実施した。

5．出土遺物の実測は、伊崎・吉田・永田と横田義章・水ノ江和同・杉原敏之・若松三枝子・田中典子・坂田順子・高瀬照美・平田春美・江口幸子が行い、写真は北岡伸一が撮影した。

6．遺構・遺物の図面の浄書は豊福弥生・原カヨ子・近藤美恵子と伊崎・水ノ江が行った。

7．挿図における方位は新平面直角座標系のII系に基づく座標北である。

8．本書の執筆は、基本的にI・II・IV～VIを伊崎が、VII～IXを永田が、III・Xは伊崎と永田が分担して行ったが、IV章においては、Aの各遺構出土の鉄器・耳環・玉類についてを吉田、B-1・2の縄文土器に関する部分を水ノ江、B-1・3の石器の一部を杉原、B-3の礫石器に関する部分を横田、またX章の一部を水ノ江の各氏にお願いし、その部分については文末に名を記した。

9．本書の編集は伊崎が行った。

目次

図版目次

挿図目次

Ⅰ．はじめに

立花町の白木西原地区を対象とした団体営圃場整備事業は昭和59(1984)年９月から地元推進が開始され、その後曲折を経ながら平成４年６月に至って土地改良総合整備事業として採択され、同５(1993)年度より工事に入る予定となった。圃場整備事業に関わる埋蔵文化財の試掘および協議等は事業実施前年度に行っており、この白木西原の平成５年度分については４年度の秋に重機を用いて試掘したが、ビニールハウスやキウイフルーツの植栽があってごく僅かな部分しかできなかった。その時は、地表面下には明確な遺構は捉えられず、若干の縄文土器片を確認したにとどまったが、それ以外に顕在しているものとして古墳らしき高まり４箇所と石を組んで祀った所があったので、５年度に本調査を行うこととした。これが一次調査である。６年度分については５年度の調査中に試掘を行い、ピットや土壙等の遺構を確認したのでこれも本調査が必要となった（二次調査）。

一次調査は平成５年の冷夏の過ぎた９月下旬から開始したが、当初の予想に反して多くの遺構が検出されたため年末までの３ケ月余を費やした。調査終了まぎわの12月23日には現地説明会を行い、約70名の参加を得た。

二次調査は平成６年７月から行い、約３ヶ月を費やして終了した。

調査期間：一次‥‥平成５年（1993）９月24日～12月30日
　　二次‥‥平成６年（1994）７月20日～９月10日

調査面積：一次‥‥約9000m²
　　二次‥‥約6000m²

調査の関係者は次のとおりである。

		平成５年度(1993)	平成６年度(1994)
立花町教育委員会			
教育長		末継　敬一郎	末継　敬一郎
社会教育課	課長	武田　行夫	武田　行夫
	課長補佐	原口　輝義	原口　輝義
	係長	久保　俊治	久保　俊治（前任）
			姫野　由美子
	主査	岡崎　知子	
	主任主事	平島　隆夫	
	主事		永田　寧
福岡県教育庁	南筑後教育事務所	伊崎　俊秋	
福岡県教育庁	文化課 調査班	吉田　東明	

調査においては次の方々に種々ご指導・ご援助を受けた。深謝いたします。
佐々木四十臣（福岡県文化財保護指導委員）、西健一郎（九州大学文学部）、川述昭人・渡辺輝子（福岡県文化課）、赤崎敏男・大塚恵治・中川寿賀子（八女市教育委員会）、永見秀徳・小林勇作（筑後市教育委員会）、尾崎源太郎（広川町教育委員会）、田中康信（瀬高町教育委員会）、吹春茂（立花町史編纂委員会）、原美智子、平和美、野中栄子、梅野孝子、秋山幸子

II．遺跡の位置と環境

（所在地）
福岡県八女郡立花町大字白木字西原

白木西原遺跡の周辺の歴史的環境については概要報告である『Ｉ』で述べたが、二次調査を経てもさしたる変更はないのでそれの一部を改変・再録しておく。

福岡県と熊本県を隔てる筑肥山塊の北側には、有明海に注ぐ矢部川の支流がいくつかあるが、その中流で、白木谷を北流してきて合流する白木川もその一つである。遺跡は白木川下流の右岸、矢部川に合流する所の1.7kmほど手前にある。ここは飛形山から伸びてきた丘陵先端のなだらかになった所を白木川が開析して河岸段丘としており、標高は40m前後を測る。白木川に沿って県道玉名八女線が略南北に走り、南は矢部谷峠を越えれば肥後国・熊本県三加和町に至る。遺跡の中心あたりで、国土座標系・II系のＸ＝18700m、Ｙ＝－40900mほどである。

この白木西原遺跡で検出された遺構・遺物は、縄文時代早期・晩期、弥生時代後期、古墳時代、中世、近世という多岐にわたるものであったが、特に縄文時代早期の押型文土器期の石組炉とその周辺の包含層、縄文時代晩期の竪穴住居跡、そして古墳時代後期（５～６世紀）の群集墳が検出されたのは、この地域にとってきわめて重要なことであった。

以下には関連する時期の周辺遺跡について概観しておこう。立花町内の遺跡等に関しては既刊の報告書に概観しておいたのでそれを参照されたい。

縄文時代早期･押型文土器の出土する遺跡は古く岩崎光氏が筑後市裏山･長崎、黒木町黒木高校･田本、八女市立山、立花町小倉谷などを挙げられていたが、最近では八女市南部の低位段丘上でもいくつかの例が知られてきた。八女市国武、六反田、大坪、池上などがそうであり、大坪遺跡の石組炉34基は当遺跡との比較の上で興味深い。正式報告が待たれるところである。これ以外でも八女市立山山、広川町平原などで押型文土器が出土している。

縄文時代晩期では、矢部川南岸沿いにある立花町北山今小路遺跡では甕棺墓２基と包含層が調査された。北岸の平野部では今のところ晩期の例はないものの、八女市アモメ遺跡では後期の竪穴住居跡22軒が検出され石囲炉を持つものがあった。また矢部川を少し下った瀬高町権現塚北遺跡では多量の土器が出土し晩期の編年がなされている。なお、奥八女の星野村星野小学校遺跡でも竪穴住居群が検出され、良好な資料を得ている。

弥生時代については今回は土器のみの出土であったが、立花町北山今小路遺跡では後期～古墳初頭期の集落があって銅戈片などが出土した。最近になって八女市茶ノ木ノ本遺跡で後期の甕棺墓・石棺墓群から銅剣・鉄戈・玉類・方格規矩鏡などが出土したことは、当時の「クニ」の実態に迫る資料が増えてきたといえよう。

古墳時代後期の群集墳は矢部川以南では立花町・瀬高町、以北では八女市、広川町に数多く築造されており、幾つかは発掘調査がなされ報告されている。瀬高町山内、八女市牛焼谷・童男山、広川町鈴ケ山・山の前・東山・上長延・植松などの古墳群は複室構造の石室を内部主体とし、６世紀

1．白木西原遺跡
2．北山今小路遺跡
3．北山小学校遺跡
4．北山清浄田遺跡
5．六所宮古墳群
6．名木野古墳群
7．山内古墳群
8．川犬古墳群
9．本古墳群
10．立山山古墳群
11．アモメ遺跡
12．茶ノ木ノ本遺跡
13．柿園遺跡
14．権現塚北遺跡
15．山崎城跡
16．白木城跡

Fig. 1　白木西原遺跡周辺遺跡分布図（1/50,000）

Fig. 2　白木西原遺跡調査区位置図（1/4000）

後半以降に形成されたものであるが、５世紀代を含めてやや古い時期に築造が開始されたとみられるものに瀬高町名木野、八女市立山山・東館、広川町平原などの古墳群がある。これらは当遺跡の古墳群を考察するうえで参考になるものといえよう。立花町においては墳丘を持った古墳よりもむしろ横穴墓の方が多く築かれており、瀬高町を含めて県内でも有数の横穴墓地帯といえるが、そのうちの鬼隈・小倉谷の横穴群が調査されている。横穴式石室を持つ古墳群と横穴墓群の造営主体の階層差を解きあかしてゆくのには絶好の地ともいえよう。

中世期は北山今小路遺跡でも溝などが検出されている。この近辺で居館跡とされるような遺構は八女市柿園遺跡に13世紀中頃以降とされる環濠を見るが、正式報告がなされていないため詳細はわからない。そのほかにも鎌倉期以降の遺構・遺物は断片的に知られるもののまだ点的な状況である。山城についてはこの付近での調査例は少ないが、黒木町猫尾城、八女市犬尾城の調査成果はこの地域の中世史解明に役立つことであろう。戦国時代の永禄年間に蒲池鑑廣が築き、のち天正15年(1587)の豊臣秀吉の九州平定後に筑紫広門が入城したという山下城跡は遺跡の西方にあり、また国見城が北方に、白木城が南方にある。

関ケ原の戦いの後に田中吉政が筑後一円33万1400石の領主となり、一里石を設置したり、灌漑・治水に力を尽くした。その後元和６(1620)年に田中吉政が死去すると、立花宗茂が柳川城主として矢部川以南の12万石を領有することとなり幕末に及んだのであった。この時代の考古学的知見はさほど多くないが、すぐ近くの男ノ子焼窯跡では陶器のほかに磁器も採集されている。おそらく江戸時代の開窯と思われ、窯跡の構造、製品の内容・流通等の解明は今後の課題である。

Ⅲ．調査の概要

(PL. １～３, Fig. ２)

［調査前の状況］

調査前の現地は、本来田圃であったものが圃場整備にかかるということで休耕しており、一面に雑草が繁茂している状態であった。

一次調査にかかる部分においては、後に17号墳が検出された所には石組みの上に祀られた石が立っており、古くみれば中世期に遡る遺構ではないかと思われた。５号墳の所は段違いの畦畔の回りが灌木の藪となっていた。11号墳の所も畦畔にあたり、一段低くなった西側のみが東側の田面の高さにまでこんもりとしていて、上面に多数の礫石があったことから田圃を耕す時に拾い集めた石を積み上げているのではないかと思われた。13・14号墳の所は若干の高まりの上に凝灰岩の墓石が倒れており、近世墓地の存することが予想されていた。

以上の他の所は不定形に区画され段のついた田圃が広がっているのみであった。正直に言って、古墳の存在など全く想定していなかったのであった。

二次調査の部分も田圃の広がりのみであって、特段の注意すべき点はなかった。

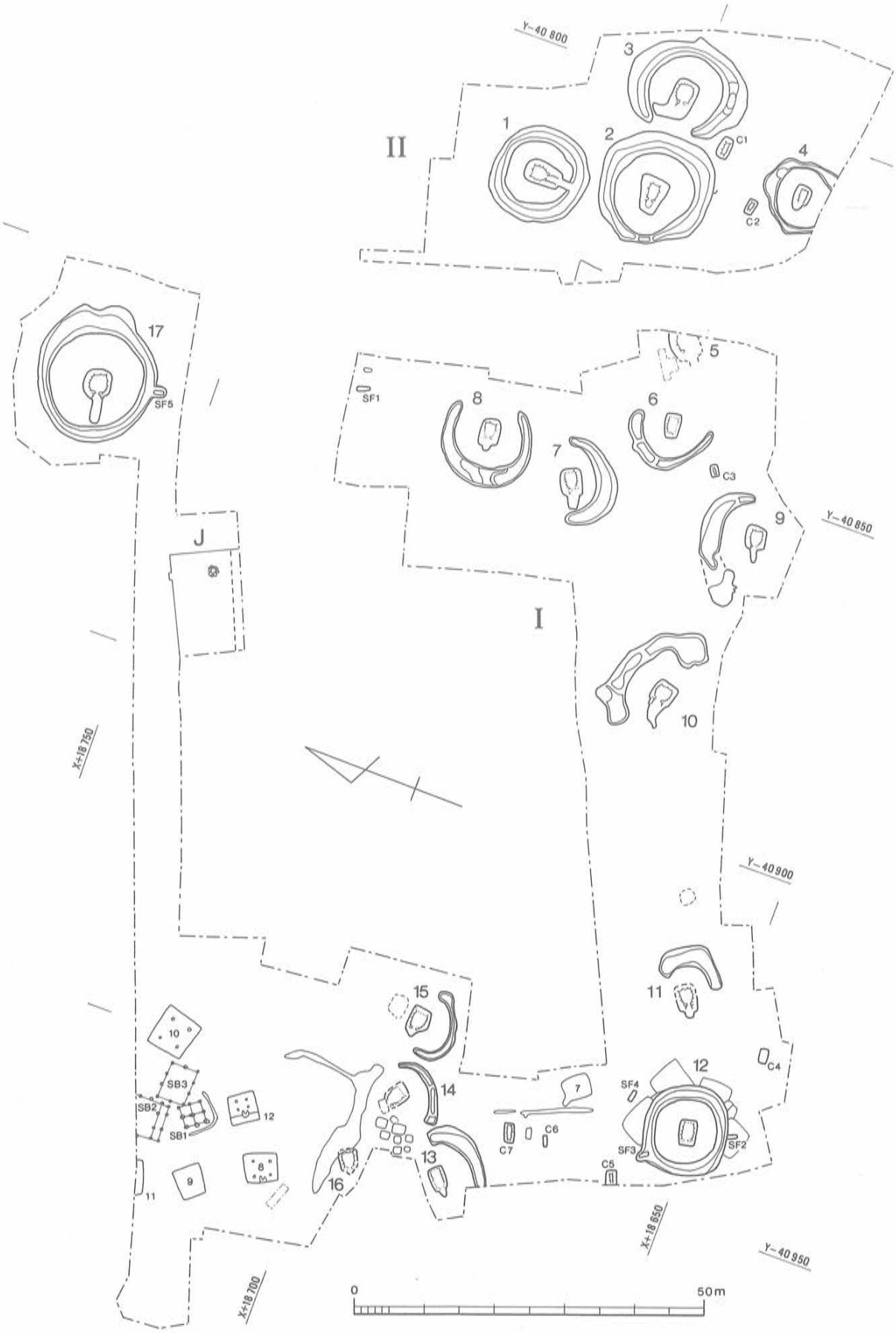


Fig. 3　白木西原遺跡Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図（1/800）

【一次調査】

平成５年度の調査はＩ区からＶ区に分けて行ったが、この区分けはあくまで便宜的なものであって、基本的には削土部分と道路・水路部分についてを調査対象とした結果である。ためにＩ区はコの字形の変則的な調査区となった。Ｉ・II区の調査面積が最も広く、III～Ｖ区はＩ・II区の北方に位置する。Ｉ～IV区には古墳群や竪穴住居跡・溝、縄文時代の遺構などが検出されたが、Ｖ区には何も遺構がなかった。以下の報告ではＶ区は省略する。また、II区の東側、県道より一段高くなった所に遺構確認の試掘壙を入れたが、ここには時期不詳の溝２条が存したのみであった。

古墳群はＩ・II区に分布し、II区に１～４号墳があり、Ｉ区南半の東半部に５～10号墳が、同西半部に11～16号墳があった。17号墳はＩ区北半の東半部にある。かつては墳丘を有する古墳であったものが、古くは中世に盗掘され、またいつの時点かに削平されて、調査前には一面田面となっていたものである。結果として、全周するとは限らないけれども基本的に全て周溝を持つ円墳17基が検出されたのであった。

石棺墓はII区に１・２号が、Ｉ区に３～７号があったが、これらは古墳に従属したものと考えた。焼土壙はＩ区のみにあったが、これもあるいは古墳に付属した遺構なのかも知れない。

竪穴住居跡群は古墳時代のものがＩ区北半の西端部にあり、縄文時代晩期のものは同じＩ区の南半西端部の12号墳下層から検出された。

なお、遺構検出面で時期不詳の石器としてプロピライト製の礫器数点が見られた。これは山門郡から八女郡にかけてよく見られる石器であるが、層位的把握はできていない。調査で検出された遺構と調査面積は次のとおりである。

〈Ｉ・II区〉　約7100㎡

・古墳	17基	・石棺墓	７基
・焼土壙［SF］	５基	・竪穴住居跡　（縄文時代晩期９、古墳時代５）	14軒
・掘立柱建物跡［SB］	３棟	・溝［SD］	２条
・縄文時代早期石組炉	１基	・柱穴［P］	多数

〈III区〉　約600㎡

・溝［SD］	２条	・柱穴［P］	少数

〈IV区〉　約230㎡

・掘立柱建物跡［SB］	２棟	・土壙［SK］	３基
・柱穴［P］	多数		

（伊﨑）

【二次調査】

平成６年度は圃場整備による削土部分にあわせてVI区からVIII区に分けて調査を行なった。VI区はVII区、VIII区の県道に隔てられた西側に位置する。調査を始めると田の床土のすぐ下から小石を多量に含む層にあたり、調査は非常に困難であったが、多くのピットが検出された。VII区はVIII区の南西に隣接し、多くのピットを検出したものの、遺物は手に取ると崩れてしまうような土器片のみで、取り上げられるような遺物はなかった。VIII区は二次調査の中で調査面積が最も広い調査区である。土壙とピット群、それと用途不明の遺構が検出された。中世の陶磁器が出土した。

〈VI区〉

・土壙	１基

〈VII区〉

・柱穴　　多数

〈VIII区〉

・土壙［ＳＫ］　　５基　　・柱穴　　多数

・不明遺構［ＳＸ］　　１基　　（永田）

Ⅳ．Ⅰ・Ⅱ区の調査

（PL. 1～3，Fig. 3）

A　古墳時代以降の遺構と遺物

17基の古墳は、すべてではないが墳丘・周溝や石室から、古墳と関係のない縄文時代早期・晩期、弥生時代後期の遺物が出土している。これらの土器については、B・Cの項でその他として触れることにする。石器については古墳に関連すると思われるもの以外はいずれの時期に属するかわからないものがあるのでその他の石器としてまとめてⅣ-B-3で説明する。また中世、近世の遺物が出土しているものもあるが、それは古墳の盗掘や破壊とも関係するであろうからここで一緒に報告しておく。なお、各古墳の計測値についてはTable. 1（P120）を参照されたい。

1、古墳群（PL. 1～3，Fig. 3）

1号墳（PL. 4～6，Fig. 4～9）

Ⅱ区の北端にあり、南に開口する石室を持つ。この白木西原古墳群の中で南に開口するのはこの一基だけである。また、この古墳群の中では最も多くの遺物が出土した。

周溝　北西部と南東部がやや角張って四角気味に見えるが、ほぼ正円に近いプランとしてよい。外径は南北13.3m、東西13.5m、内径は各々９mを測る。最深0.5m程あるので、この遺跡内の古墳ではやや深い方といえるだろう。周溝の円の中心は石室の中心と一致している。埋土は黒色土を基本とするが、茶色気味の部分も多かった。周溝内の特に石室前面に土師器・須恵器甕などの土器が多く、また鉄器（馬具）も出土している。完形の坏等は墓道の東方の所で検出された。これらは溝底より浮いているので墳裾付近に置かれたものが流れ込んで出土したものとみなされる。なお、埋土中からは縄文早期土器・弥生土器・石斧・土錘も出土している。

石室　単室で両袖の横穴式石室である。玄門の前面は貼石状に置かれた石列があり、ここに天井石が架けられていたとは考えにくいので羨道とするに不適切かもしれないが、一応羨道としておく。石室奥壁から周溝までは全長6.25mを測る。

石室掘り形　羨道部分までをも含めて幅2.3～３m、長さ5.5mの長台形プランをなす。埋土から土師器・縄文早期土器・弥生土器が出土している。

玄室　奥壁３個、西側壁３個、東側壁４個の腰石を据え、その上は扁平片岩を平積みしている。床面から0.6m程までが残存していた。床面プランでは側壁が胴張りを有するが、東壁の腰石が数が多

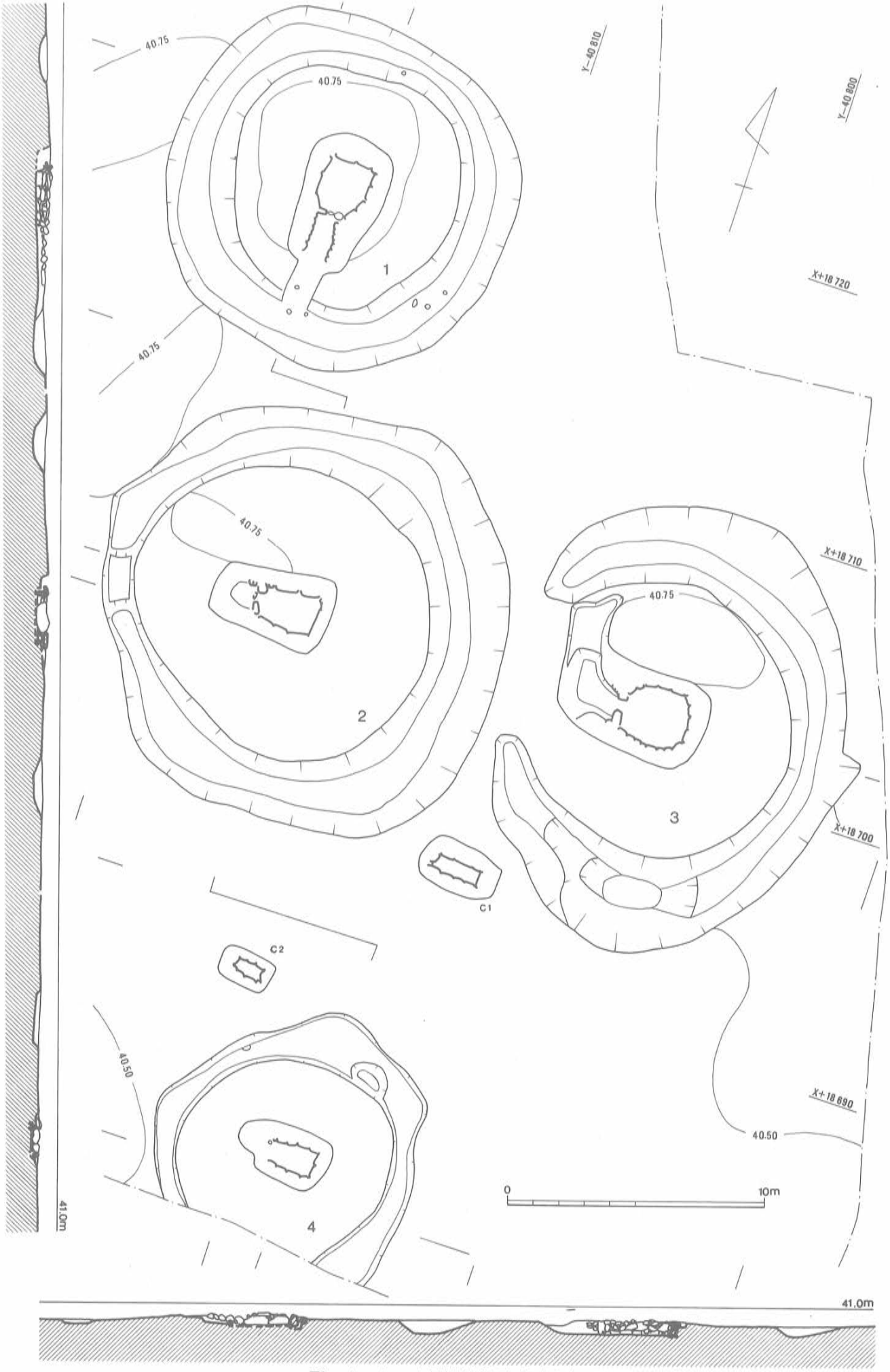


Fig. 4　1～4号墳地形図（1/200）

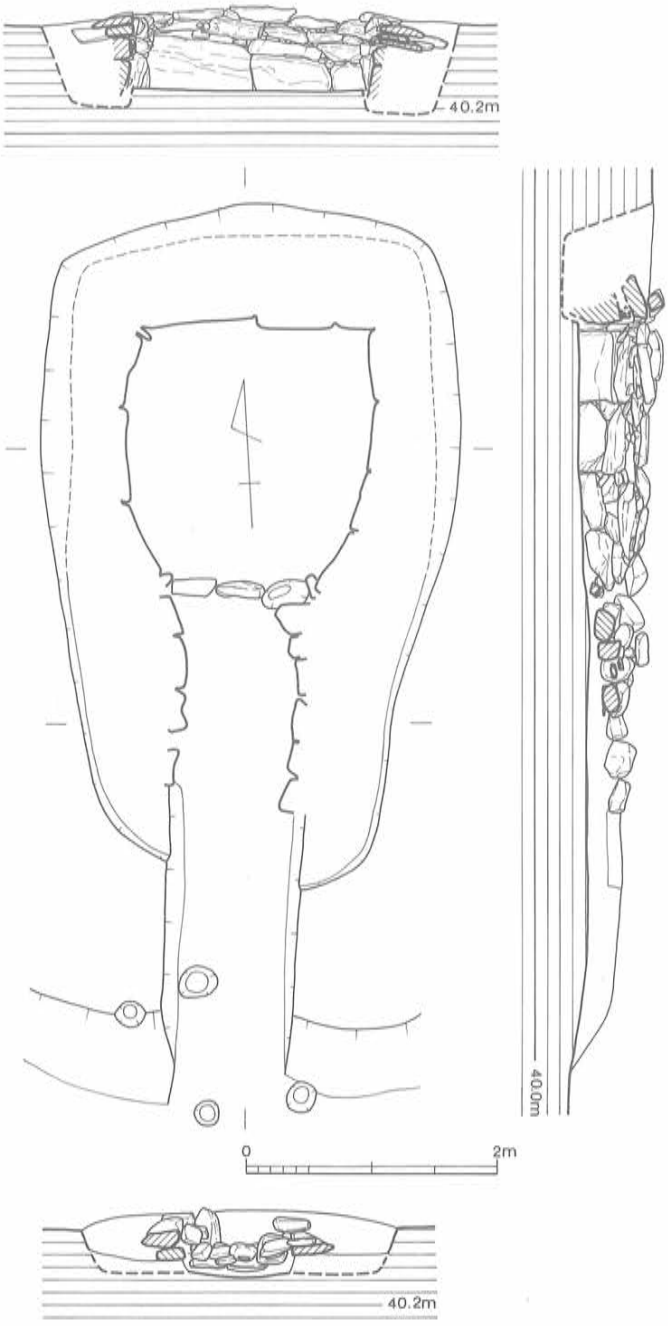


Fig. 5　1号墳石室実測図（1/60）

い分ややいびつな形状を呈する。奥壁幅1.8m、玄門側幅1.2m、最大幅1.9m、長さ2.1mを測り、主軸方位はN-3.5°-E。床面は玄門仕切石と同じ高さまでに大（20～30cm）・小（10～15cm）の扁平角礫が敷かれていたが、その二次床面は平坦とは言い難い状況であった。この面で玄門寄りに耳環6個のほか多くの鉄鏃と鉄刀子が出土している。二次床面の敷石を除去すると扁平河原石を敷いた一次床面が現れたが、この面も一部が攪乱されていた。奥壁に近い所で耳環2、玉（土玉・管玉・ガラス玉・水晶玉）、鉄器等が出土し、土師器、弥生土器もあった。敷石については動いているものが多かったので図示していない。

玄門　東袖石が検出時に除去されて埋込み穴のみがのこっているが、框石の長さ40cmが玄門幅としてよいだろう。玄門の前面から羨道にかけて閉塞に用いた河原石が積まれていたが、板石状の扁平なものは見られなかった。

羨道　幅0.8～0.9m、長さ1.7mで両側壁は床面から15～20cm程浮いて貼石状に石を置き並べている。埋土中から須恵器・土師器・弥生土器片が出土している。

墓道　幅0.85m、長さ2.3mで周溝に取り付く。床面の傾斜はなく、ほとんど平らである。埋土中から須恵器・土師器・弥生土器片・鉄片が出土している。

墓道内あるいは周溝内に径20～30cm程の小ピット10余個が検出されたが、この古墳に関連するものであったとしてもその性格は不明である。

出土遺物（PL. 6，Fig. 6～9，56，60・61）

須恵器・土師器（PL. 6，Fig. 6～9-1～56）のほか鉄器、耳環、玉類と縄文早期土器、弥生

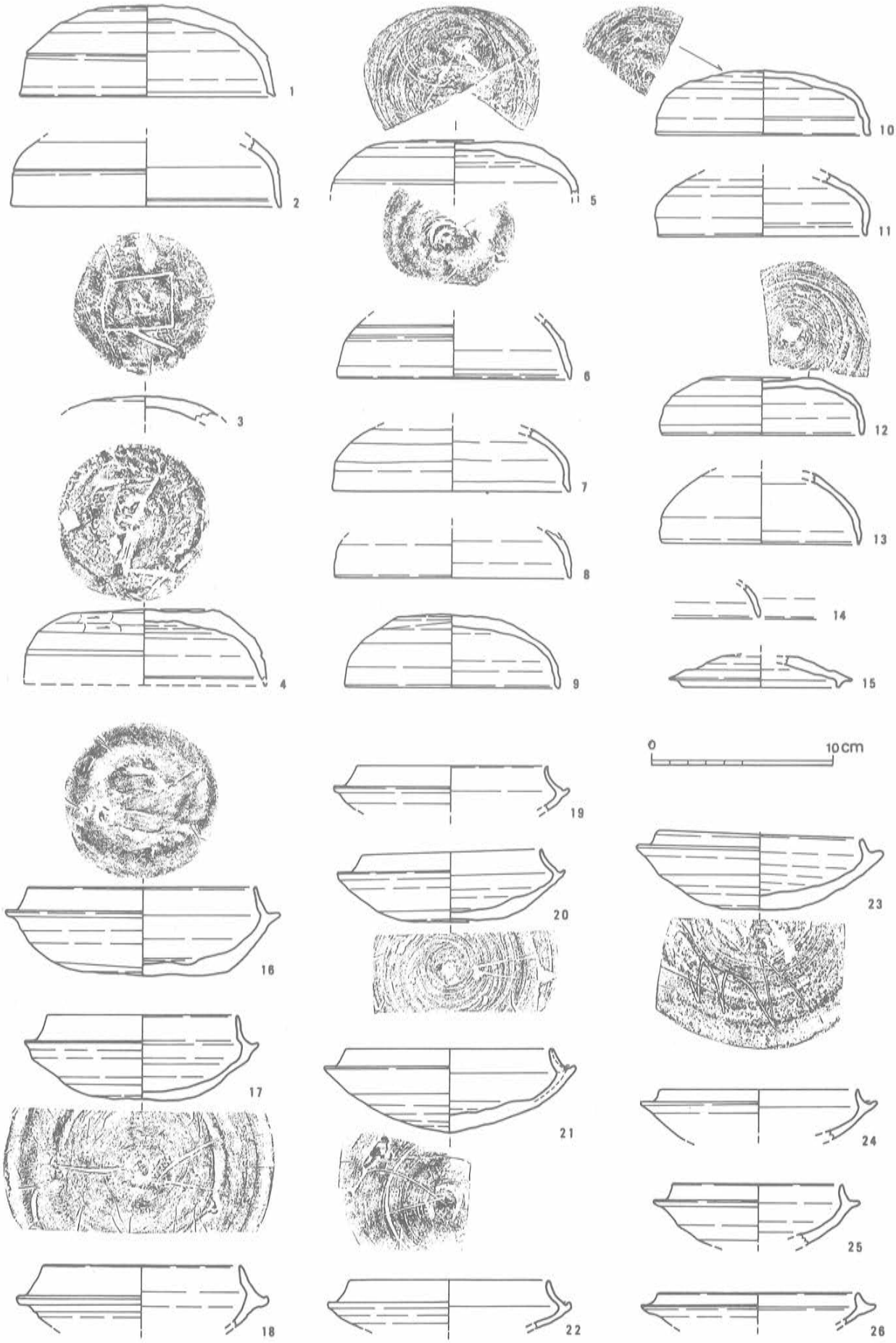


Fig. 6　1号墳出土土器実測図1 (1/3)

土器、石斧、土錘、叩石などがある。

須恵器(1～41)　1～15は坏蓋である。1は口縁内面を斜めにつくり、器肉は厚い。口縁と体部の境は沈線を入れての段がつく。外天井部は回転ヘラ削り、その他は回転ナデを施す。他の個体の大半はこれと同じ調整である。内天井部には最後に横一文字のナデが施されている。16とセットになるものと思われる。口径14.2cm。2は口縁内面に沈線を入れる。3の外天井部にはイネ科植物の茎によるヘラ記号がある。4の外天井部にもイネ科の茎圧痕がある。5の外天井部にはヘラ記号というより擦過痕とすべきものが印されている。内天井部には同心円の当具痕がある。6～13の口縁内面は僅かに段がついたり、沈線風となったりするが、10のように口唇部より上の方で段を付けるものもある。9・10の口径はともに12cmである。15は摘みの付くものであろう。須恵器としてつくっているが窯の中で焼成されたものではないようだ。16～26は坏身で、16の内底面は最後の指ナデがよく残っている。口径12.7cm。17～22は口縁の立ち上がりに特徴がある。17の口径10.4cm。18は生焼けである。20の口径は10cm。21は断面に粘土貼り合わせの線が見える。口径11.5cm。23は粗いつくりの土器で器肉が厚い。歪んでいて口径は10～11.8cm。26は須恵器の成形だが窯では焼かれていないようである。27・28は高坏で28の口径は7.3cm。29・34は壺で、33は蓋になろう。29の内底面には同心円とみられる当具痕がある。34はほぼ完形であるが、全体にぼってりとしたつくりである。肩部にイネ科植物によるヘラ記号がある。30・31は瓶である。30の口頸部はかなり大きく開く。31の

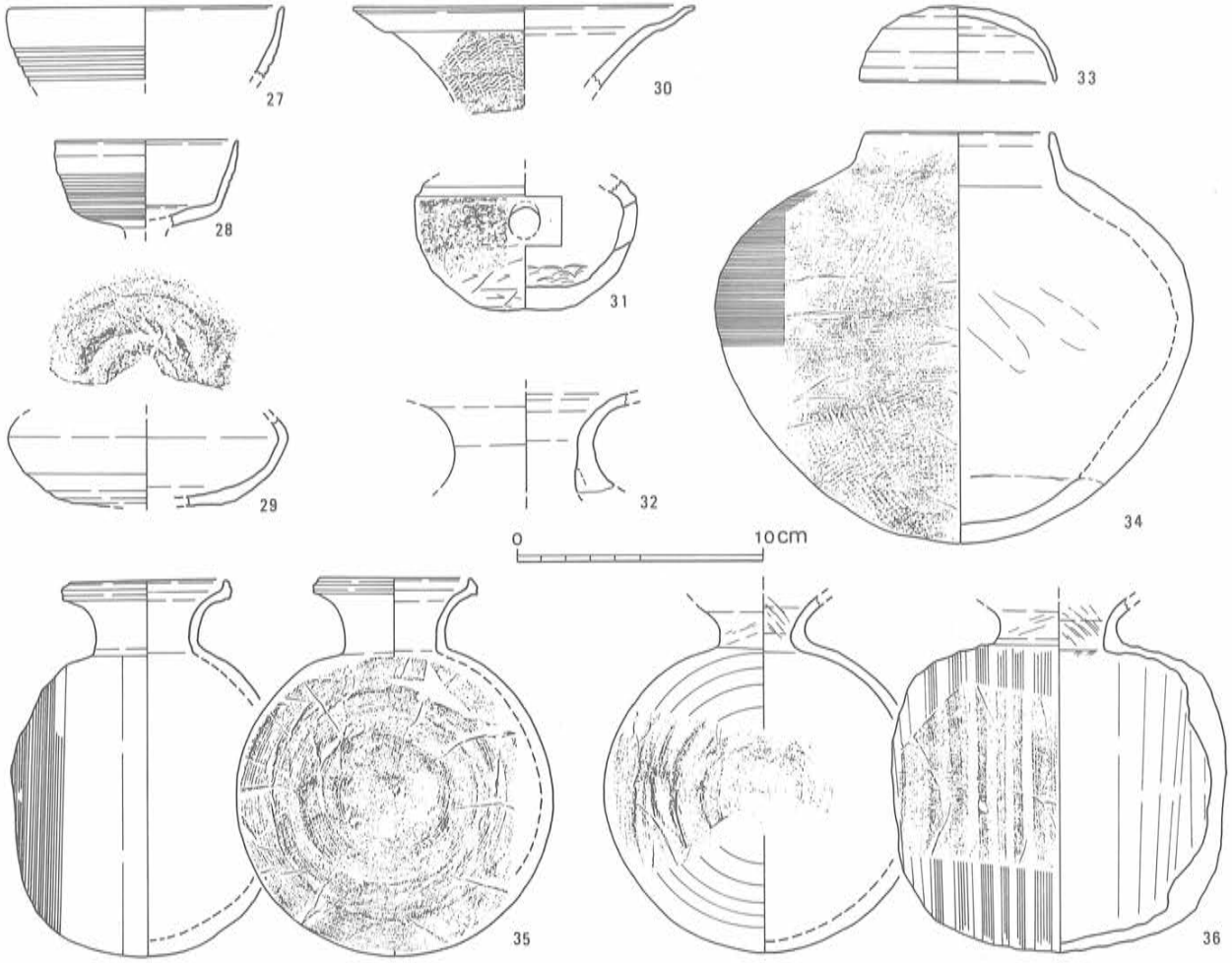


Fig. 7　1号墳出土土器実測図2 (1/3)

胴部には列点文が施される。32は壺か提瓶かの頸部であろう。焼成は不良。35はほぼ完形の提瓶である。かなり丸みを持つ。口径6.1～6.4cm、器高15.3cm。36は横瓶で図上での復原である。長径13.6cm。37～41は甕である。37は復原で口径21.4cm、胴部最大径38.1cm、器高40.3cm。40・41の内外のタタキ・当具痕は粗い。

土師器(42～56)　42～49は高坏であるが、42・43・45は須恵器の成形をまねている。42は精良な土器で化粧土を掛ける。口縁外面はヘラ先でなでつけて擬波状文を表す。坏部外面はカキ目が著しい。口径17cm、裾径10.6cm、器高12.8cm。43にはカキ目が残る。44の坏部底面には脚部との接合のための凹線が入る。45の透かしは4箇所に入るらしい。50～52は坏であり、51・52は内外にミガキが入る。53・54は壺であろう。53の肩部には沈線が入る。55・56は甕で、55の器肉は薄い。56は胴部に歪みがあって偏球形をなす。底部に赤変した所があり二次火熱を受けている。ほぼ完形で口径15.3cm、器高16.5cm。

以上の土器は2・4・36・39・41・48が墓道、6が玄室の埋土中からで、他は全て周溝内から出土した。周溝内も墓道が連結するあたりとその東側が最も多い。これらの土器は型式的に幅があり、石室の様相からみても追葬があったことは確実である。

ところでこれらの土器のうち須恵器は八女市塚ノ谷4号窯跡、中尾谷2・3号窯跡の出土品と類似しており、特に19・20・22等の口縁が外反するものや38の口縁部の形態などは特徴的であって、まず間違いなく上記の窯から供給されたものであろう。

鉄器（PL. 34, Fig. 56）

4～6・27・28・39～42は周溝の墓道が取り付く付近から出土、3・11・26・29は玄室一次床面、他は玄室二次床面からの出土である。

鏃(1～30)　1は両丸造で逆刺を有する。2は銹がひどいが、片丸造で棘箆被となろう。3～6は両丸造で身部と頸部の境に段を有さない。6は桜皮の沓巻・木質が認められる。7は片丸造で柳

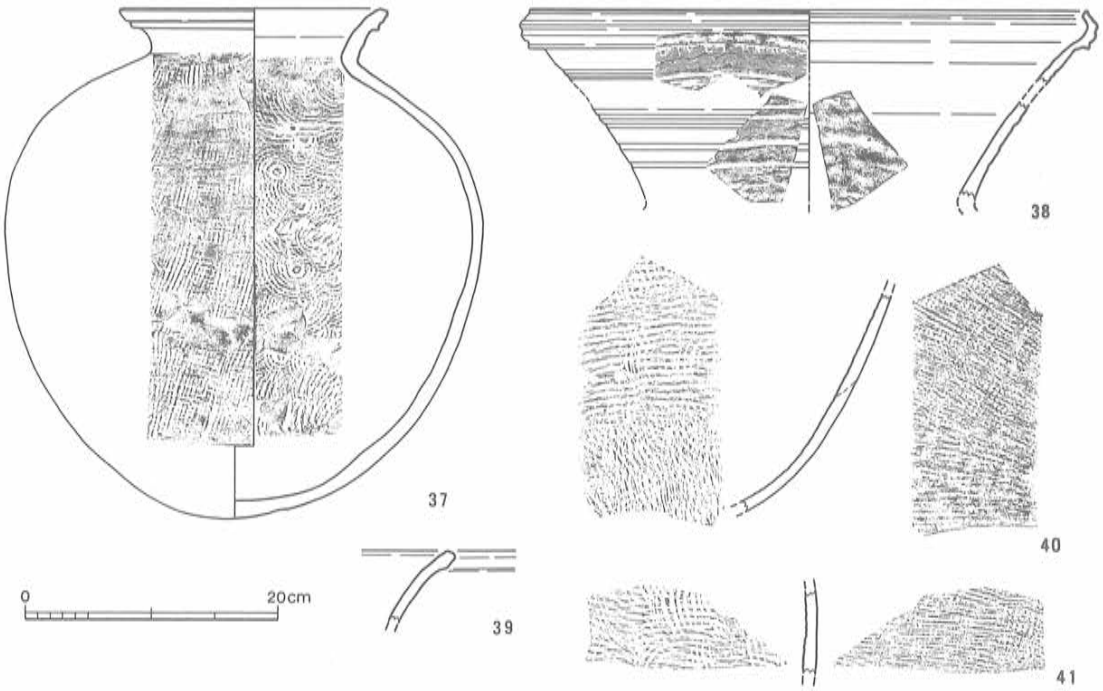


Fig. 8　1号墳出土土器実測図3 (1/6)

葉形に近い三角形である。身部と頸部の境に段を有さない。8は両丸造で身部が1.5cmの小型品である。11は幅5㎜単位で桜皮の沓巻が行われる。14～16は片丸造で柳葉に近い三角形である。14は布目が認められる。16は全長18cm程度になろう。幅4㎜単位で桜皮の沓巻が行われる。17～23の箆被部は頸部端で緩やかに広がり、急にすぼまる。21・27・28には幅4～5㎜の桜皮の沓巻が行われる。

刀子(31～37)31は鞘口金具が装着される。柄には木質がよく残る。32は身部長7.7cm、鋒に木質が認められ、木鞘に納められていたのだろう。34は一応刀子として図示しているが、柄にあたる部分に刃を有している。35は鹿角・木片がわずかに残る。37・38は幅5㎜単位で桜皮の沓巻が行われる。

馬具(38～40)38・39は鞍金具である。38は鉸具の部分のみで、全長6.0cm、39の鉸具は38と同タイプで、八角形の座金具が付く。40は鉸具の一部であろうか。小片のため不明。

耳環（PL. 34・35, Fig. 60-1～8）

1と2、5と6、7と8がセットになる。1～6は玄室埋土中出土で、1・2は銅地金銅張り、3は胎を失った金銅張り部分、4は銅胎のみ、5・6は銅地銀張りである。1は径24㎜、重さ15.8g、2は径24㎜、重さ16.5gで、ともに断面楕円形である。5は径24㎜、重さ9.6g、6は径28㎜、重さ13.1gで、ともに断面楕円形である。腐蝕が進んでおり、メッキ部分の剥離が著しい。6は滑石製

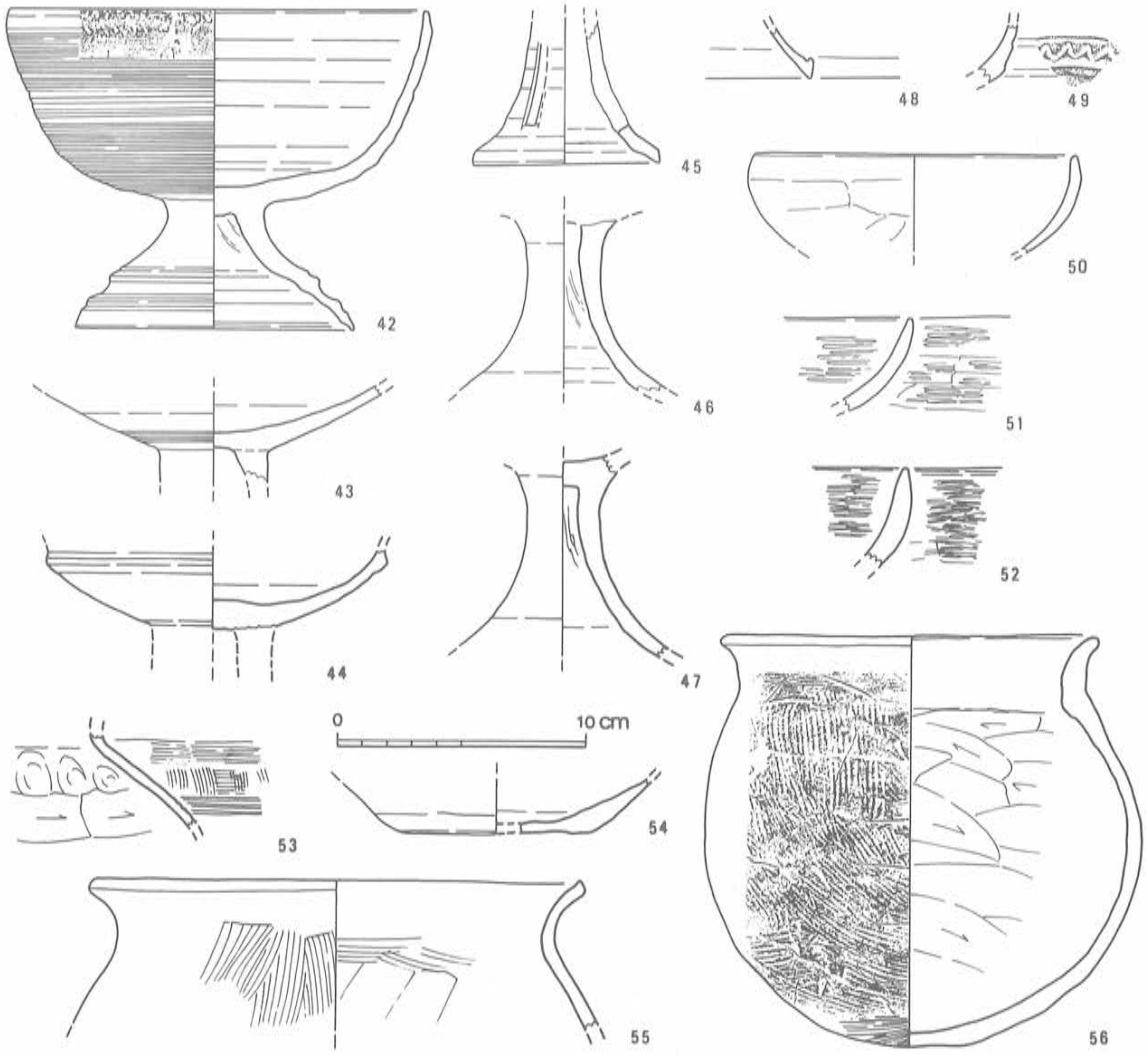


Fig. 9　1号墳出土土器実測図4 (1/3)

臼玉と思われるものが開き部に挟まれた状態で検出されている。7・8は玄室一次床面出土の銀環である。7は径20㎜、重さ6.5gで断面楕円形、8は径19㎜、重さ6.6gで断面円形である。表面の銹化が著しい。

玉類（PL. 35, Fig. 60-9～21）

管玉(9～11)　図示した3点を含め、玄室床面から計10点出土している。いずれもダークグリーン色の碧玉製で、片側から穿孔している。

丸玉(12～16)　水晶製(12・13)と土製(14～16)がある。すべて玄室床面出土である。水晶製は2点のみ。土製は図示した3点を含め計19点出土している。

小玉(17～21)　すべてガラス製。図示した5点を含め計14点出土している。スカイブルー色のものと黄色のものとがある。すべて玄室床面出土。（吉田）

土製品（PL. 35, Fig. 61-1）　石室北西部の周溝内出土の土錘である。竹のような棒に粘土を巻き付けてのち手づくねにて成形している。長さ54.8㎜、最大径27.5㎜、孔径6.3㎜、重さ37.2g。

時期的には1・16などの示す6世紀中葉でもやや後半に近い頃に築造され、同末に近い頃まで追葬がなされていたとみられる。

2号墳（PL. 7, Fig. 10・11）

1号墳の南にあり、西に開口する石室を持つ。周溝の外端部は1号墳と1.5m、3号墳とは僅かに0.7mしか離れていない。

周溝　やや出入りはあるが、平面プランはほぼ円形としてよい。外径は東西・南北とも16m、内径は南北10.5m、東西12mで、東西にやや長い。東側が深く、西側の石室入口前面にあたるところはごく浅くなっている。周溝内側の楕円形気味のプランでみると、その中心は石室の中心とほぼ一致する。各所から万偏なく須恵器、土師器のほか縄文早期・晩期土器、弥生土器が出土している。

石室　単室で両袖の横穴式石室である。1号墳のような墓道はつかない。石室全長は3.2mである。

石室掘り形　幅1.85～3m、長さ4.8mの長台形プランであり、その中に前庭部等をも包み込む。

玄室　奥壁に2個、両側壁に3個ずつの大きめの腰石を据え、その上に扁平片岩を小口積みするが、床面から0.5m

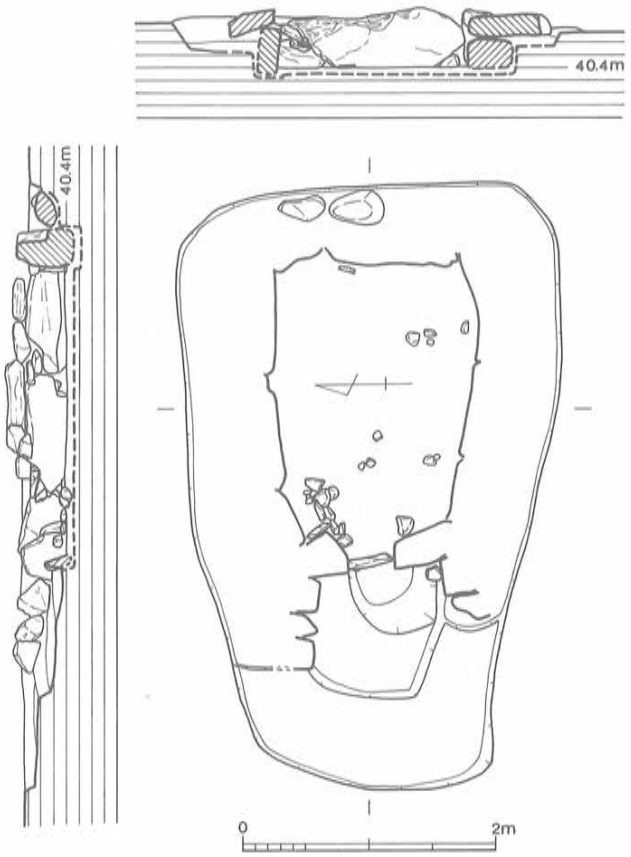


Fig. 10　2号墳石室実測図（1/60）

程しか残存しない。壁面には赤色顔料が塗布されていた。床面プランは奥壁幅1.45m、玄門側幅1.1m、最大幅1.58m、長さ2.1mを測り、やや歪つながら羽子板状を呈する。主軸方位はN-90°-Eである。床面にはもとは扁平河原石を敷いていたがかなり攪乱され、その下には硬化した面が見られた。陶器碗が出土していることより中世末期に盗掘されたものと思われる。奥壁から北側壁寄りに人骨片が検出され、床面・埋土中からは土師器、鉄器（馬具・鏃・刀子）、水晶玉のほかに縄文早期・晩期土器、弥生土器が出土している。敷石については図示していない。

玄門　長さ35cmの框石が据えられている。玄門幅35cmはかなり狭い。閉塞石は遺存していない。

前庭部　玄門の前面は前庭部と称してよく、北に3個、南に2個の石が貼石状に置かれている。ここの床面から入口側は約10cm高くなるが、貼石の底面レベルはその高さと一致している。土師器甕が出土している。

墓道　短い階段状のものが取り付いていたのであろう。

なお、この古墳の東南方にある1号石棺墓（C1）は、位置的には3号墳との中間にあるが、この2号墳に付随する可能性が高い。

出土遺物（PL. 34・35, Fig. 11・57・60）

須恵器・土師器（Fig. 11-1～8）、陶器（同9）、鉄器、玉、砥石のほか縄文早期・晩期土器、弥生土器がある。6が前庭部、9が玄室、その他は周溝から出土した。

須恵器（1・29）　1は提瓶の破片で、図上での復原である。把手は環状にならない。口径7.8cm。2は甕の胴部片で、外面は平行タタキの上にカキ目とナデを施し、内面は同心円当具痕の上をナデ。

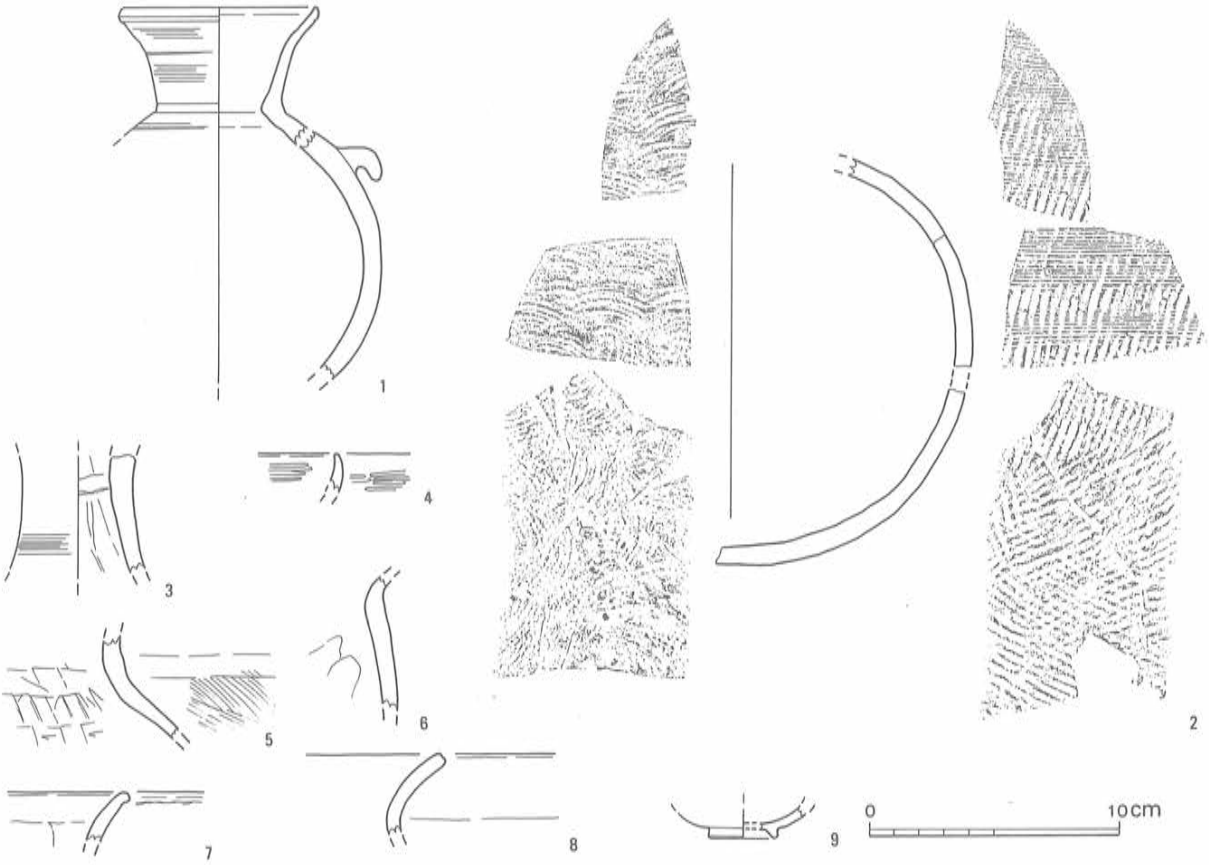


Fig. 11　2号墳出土土器等実測図（1/3）

土師器（3～8）　3は須恵器を模倣した高坏である。カキ目が残る。4の坏は精製品、5・7の甕は半精製品である。

陶器（9）　小さな碗である。磁器に近い。復原底径2.8cm。

鉄器（PL. 34, Fig. 57）

45・51・55が玄室床面、他は玄室埋土中の出土である。

鏃(41～52)　身部の残るのは41のみであり、他は茎部片である。41は片丸造で身部は柳葉形に近い三角形。51は断面が楕円形に近いので、鏃ではないかもしれない。42・50・52には桜皮の沓巻が、42・44・48～50・52には木質が認められる。

刀子(53～56)　55は茎部に木質が残る。56は鹿角装の刀子で身部を欠失する。

馬具(57～71)　57～65は轡を構成する引手金具や銜の一部である。57には鏡板の一部と思われるものが付着する。66～68は便り金である。おそらく立聞に付くものであろう。67は棒状の突起があるが、用途は不明。68は絞め金具を二重に巻き、上部を鋲で留める。69は鉸具であろうか。断面は楕円形に近い四角形。70は鏡板か杏葉であろう。71は鏡板であろう。縁金を約10㎜間隔で鋲留めしている。

装身具（PL. 35, Fig. 60-22・23）

垂飾(22)　玄室床面の玄門付近出土。先端の尖った六角柱状の水晶に、片側からの穿孔を施している。長さ34.5㎜、幅6.5～8㎜、孔径1～2㎜。

耳環(23)　玄室内出土。細片であり断定はできないが、一応耳環としておく。銅製。断面楕円形。

（吉田）

少ない資料からでは時期の判断が難しいが、6世紀前半代に比定する。

3号墳（PL. 8・9, 34・35, Fig. 12・13・58）

2号墳の東隣にあって、西に開口する石室を持つ。

周溝　外周のプランでみると東西両側が圧縮されて南北に長くなった、平面卵形のプランを呈するが、内周のプランはほぼ正円としてよい。西端部の2号墳に接近した部分は幅5.5mにわたって周溝が途切れ、2号墳の周溝とぶつからないようになっている。これは主体部の墓道が北側に屈折していることと併せみれば、先に造られていた2号墳を避けるようにしてこの3号墳が築造されたことを示しているとみてよい。南北方向は外径17.5m、内径11.5m、東西方向は西端部がもう少し膨らむものとして復原で外径14m、内径11mを測る。そのとき内径の中心は石室の中心と一致している。土器は特に土師器坏が石室の東方部分から多く出土している。ほかに須恵器、縄文早期土器、弥生土器もあった。

石室　単室で両袖の横穴式石室である。この遺跡においては遺存状態はよい方に属する。

石室掘り形　幅2.8～3.4m、長さ5.8mの長方形プランであるが、これは前庭部・墓道までをも包み込んでいる。この西北端部にさらにL字形に幅1.6m、長さ2m程の墓道を接続させている。当初は西方へ墓道を伸ばすつもりでいたのが、2号墳との関係により予定変更したものと思われる。埋土中から土師器、中世の羽釜、磁器が出土している。

玄室　奥壁5個、北側壁5個、南側壁7個を最下部に据えるが、それは腰石とするにはあまり大きくない。壁面は床面から0.55m程が残存する。壁面には赤色顔料が塗布されていた。床面プランでみ

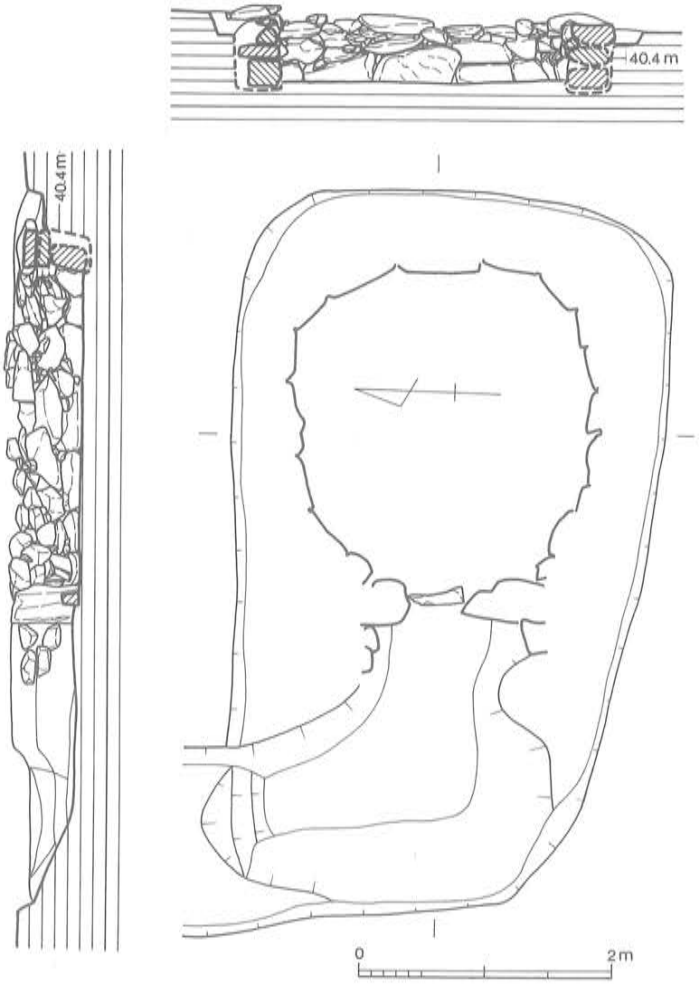


Fig.12　3号墳石室実測図（1/60）

ると、両側壁が胴張りを持つのみでなく、奥壁も外側へ張り出しており、全体にかなり丸い平面プランである。ことに奥壁と南側壁との境界は明確にしづらい。両側壁の弧線の中心を求めると、ともに玄室内に存することになり、そのカーブが急であることを示している。奥壁幅2.2m、玄門側幅1.3m、最大幅2.3m、長さ2.42mを測る。主軸方位はN-88°-E。床面には扁平河原石が敷かれていたが、攪乱されていたので除去し、図示していない。掘り形埋土中の土器が示す中世期に盗掘され、そのときに床面を踏み固めている。北側壁の東寄りに人骨片が検出され、床面・埋土中からは須恵器、土師器、鉄鏃、管玉のほかに縄文早期土器、弥生土器も出土している。

玄門　長さ44cmの框石を置くが、袖石間の最も狭い所は幅40cmである。

前庭部　僅かの貼石があるのみであった。

墓道　前述のように、西方へ延びたのち北側へL字形に屈折している。屈折してまもなく掘り形北壁ラインの西方への延長上では階段状となり、約30cm高くなって北側周溝と交わる直前までのびている。埋土中から須恵器、土師器、縄文早期土器が出土した。

なお、周溝南西側の1号石棺墓（C1）に近い部分はそれを避けるかのように上端ラインが内湾している。これはC1が先に存したためにとられた措置なのであろう。とすればC1は2号墳に伴う可能性が高い。

出土遺物（PL. 8・9, 34・35, Fig. 13, 58, 60）

須恵器・土師器（Fig. 13-1～20）のほか磁器（同21）、鉄器、玉と縄文早期土器、弥生土器、叩石などがある。2は墓道から、20は玄室埋土中、21は石室掘り形内から出土した。

須恵器（1～2）　1は瓶である。球形の胴部にやや長い頸部と開いた口縁部が付く。胴部の押圧文は頸部波状文の原体を押し当てて施文している。口径12.4cm、胴部径9.8cm、器高14.8cmで、口径が胴径を凌駕する。2は壺の破片で、もともと土師器として成形したものを窯で焼いたものとみられる。肩部外面は刷毛目である。復原口径17.8cm。

土師器（3～20）　3～11・14～16は坏である。3～11は体部に屈折のある須恵器模倣の器形で、精製品であり、4～7・10は内外に黒ウルシ状のものを塗った痕跡がある。3は内面、9は外面のみに

痕跡を見るが、他も含めて本来は全面に塗っていたものだろう。内面はヘラミガキで、外面は口頸部がヘラミガキ、底体部はヘラ削りである。7は完形で口径12cm、器高3.9cm。14～16は内湾した口縁になる器形で、14は内外に黒塗りの痕跡がある。12・13は高坏の脚部である。ともに化粧土を掛けている。13はエンタシス状に膨らみがある。17・18は甕で、17はつくりが粗く下膨れのぼってりした器形になる。外面はヘラ状工具による擦過であり、終点には粘土だまりが見られる。口径12.4cm、器高15.6cm。18は復原口径17.7cm。19は把手である。20の外底面は糸切り痕の上に板目圧痕があり、口径13cm、底径11.2cm、器高2.6cmを測る。

磁器(21)　染付の碗である。

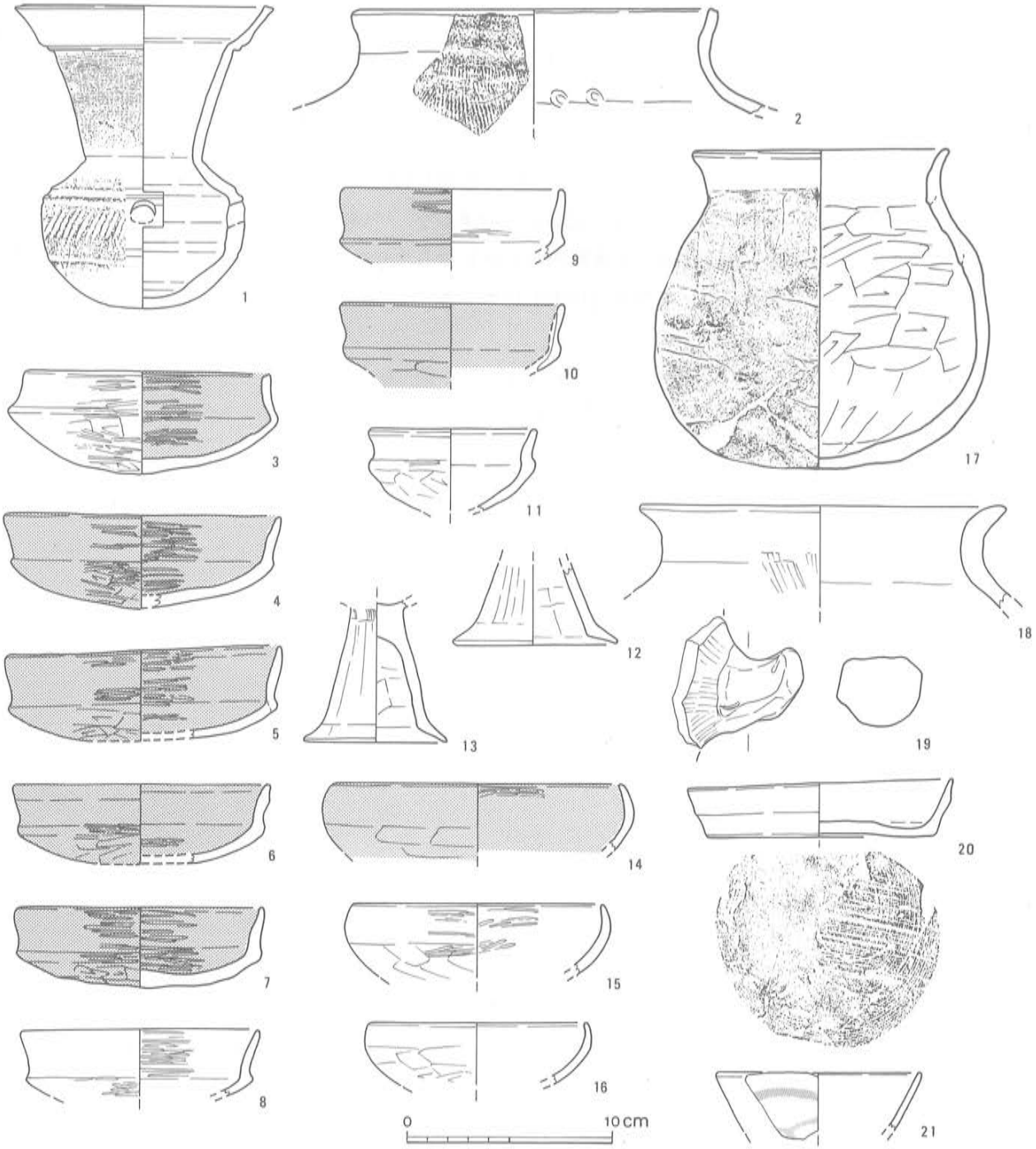


Fig. 13　3号墳出土土器等実測図（1/3）

鉄器（PL. 34, Fig. 58-72・73）

72は玄室床面、73は玄室埋土中からの出土である。

鏃(72・73）ともに鏃の頸部である。73は断面円形。

玉類（PL. 35, Fig. 60-24～28）

管玉　すべて玄室床面出土。図示した５点を含め、計14点出土している。大小二種類ある。

（吉田）

１の須恵器からみて、６世紀中頃に比定されよう。

４号墳（PL. 9, Fig. 14・15）

２・３号墳の南方にあり、周溝の一部は調査区外にかかっているが全体をうかがうのに支障はない。西に開口する石室を持つ。位置関係からみて北西方にある２号石棺墓（Ｃ２）はこの古墳に付属するものであろう。

周溝　ほぼ円形に巡るものとみてよいだろう。南北方向は復原で外径11m、内径８m、東西方向に外径10.5m、内径8.1mほどを測る。石室の北側がやや深くなっているが総体に浅い。内周の中心は石室中心とほぼ一致するとみてよい。土師器の多くが石室の北方部分から出土し、須恵器は石室東方にあった。その他に縄文早期・晩期土器が出土している。

石室　西に開口する竪穴系横口式石室である。

石室掘り形　西南隅が鍵形に屈折した長方形プランをなし、幅2.1m、長さ3.5mを測る。

玄室　ほとんど腰石しか残っていないが、それは丸みをもった片岩を使用し、奥壁２個、南北両側壁とも４個を据え、その上に同様の石材を小口積みする。奥壁幅0.88m、玄門側幅0.82m、最大幅１m、長さ1.77mを測る小規模のもので、長方形ながら若干の胴張りプランである。奥壁幅に対する玄室長の比は2.01である。主軸方位はN-91°-E。床面の敷石は北壁側に空白地をおいて幅0.65～0.7m、長さ1.7mの間に扁平河原石が置かれる。この上面に棺を置いたことも考えられる。鉄鏃が出土している。

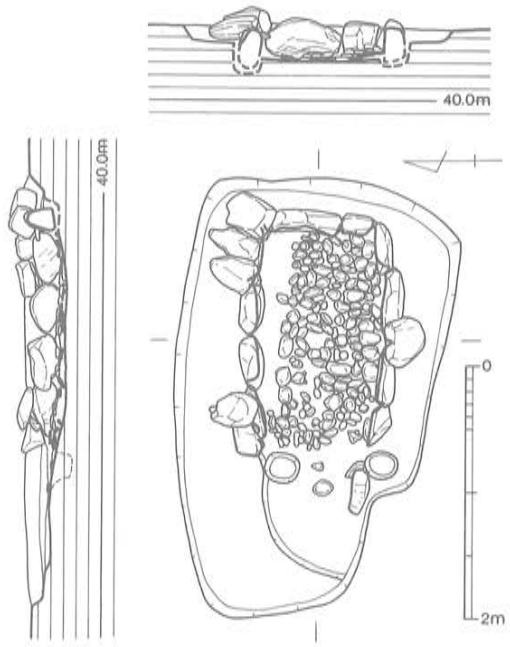


Fig. 14　４号墳石室実測図（1/60）

玄門　袖石は抜かれていてすでになかったが、抜き跡からみて両袖となり、復原で玄門幅は45cmほどであったろう。

前庭部　南側には１個の石が置かれているが、それは玄室南側壁の延長上にあると捉えてよく、竪穴系の名残とみられる。

墓道　本来は斜めに階段状にしつらえてあったものと思われる。

出土遺物（PL. 34, Fig. 15, 18）

須恵器・土師器（Fig. 15-１～６）のほか鉄器、縄文早期・晩期土器などがある。

須恵器（１）　壺か瓶であろう。胴の下半部は削りを施す。

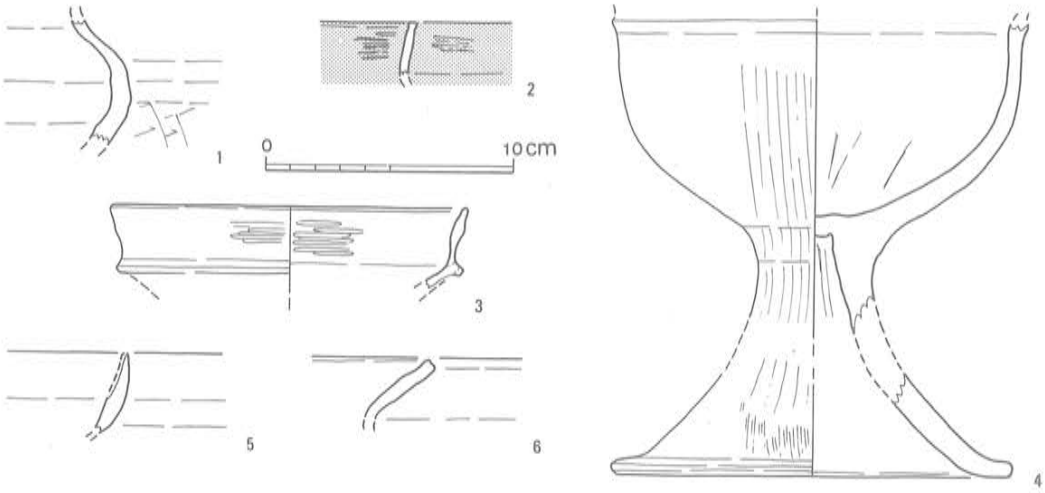


Fig. 15　4号墳出土土器実測図（1/3）

土師器（2～6）　2ははっきりしないが坏であろう。内外とも黒塗りの痕跡がある。3の坏は化粧土を掛け、口唇部内側がつまみだされたようになっている。4は高坏で2個体が接合しないが同一個体と判断した。厚手のつくりである。5は碗の破片。外面に黒斑がある。6は甕の口縁部で口唇部の内端は少しつまみあげている。

鉄器（PL. 35, Fig. 58-74・75）

鏃　ともに玄室内出土の鏃の頸部である。75には木質が残る。　（吉田）

1の須恵器は古い様相をとどめているようで、5世紀後半～末に比定したい。

5号墳（PL. 10, Fig. 16～18, 22）

I区南半の東端部にあり、既設の道路等により東側が削りとられていた古墳である。調査前は田の畦の所に角張った立石があって、その回りには礫群が積まれ、灌木・茨の藪となっていた。そして周辺からするとそこは若干の高まりを持っていた。礫等を除去していく中で、立石は石室の袖石であることがわかり、この古墳群を発見する端緒となったものである。西に開口する石室を持つ。

墳丘　北壁の外に僅かに遺存していたが、茶色系の砂質土を積んでいたことが知られる程度であった。上面から中世期以降の瓦質土器・陶器等が出土している。

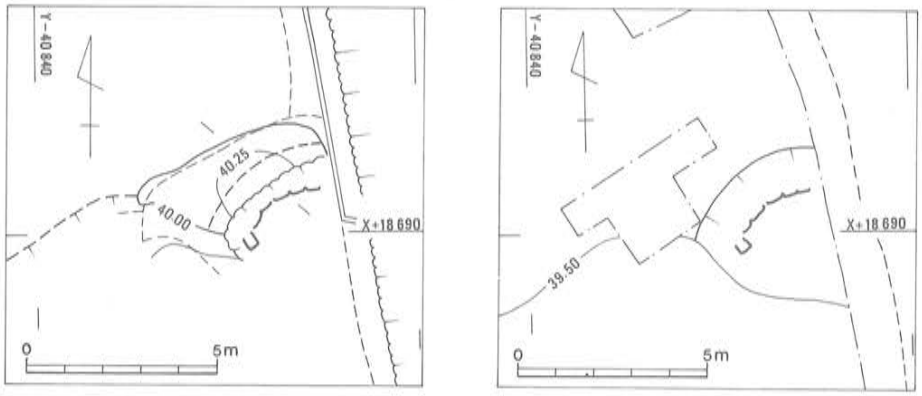


Fig. 16　5号墳地形図（1/200）

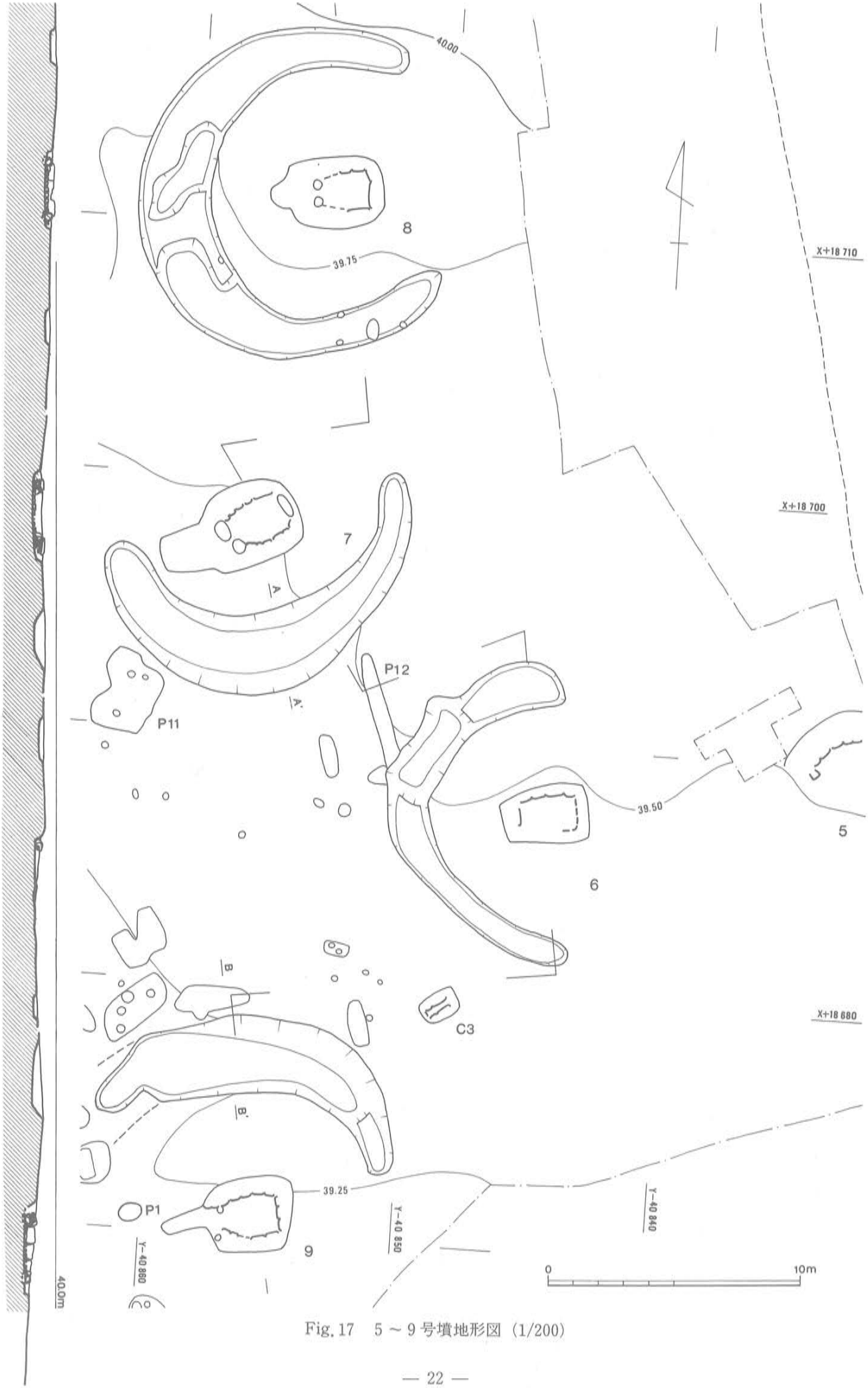


Fig. 17　5 ～ 9 号墳地形図（1/200）

周溝　石室の周辺には周溝は検出されなかった。東側の削平された所に一部が巡っていた可能性もあるが、この古墳群では16号墳とともに周溝を検出していない。よって規模については不明であるが、6号墳との位置関係からしても直径12mを越すものではなかろう。

石室　単室で両袖の西に開口する横穴式石室であるとしてよい。削平により玄室の奥壁・南側壁、墓道等は全くわからない。

石室掘り形　北側壁ラインに沿ってやや丸みを帯びたプランのようであるが、これも一部のみの検出である。

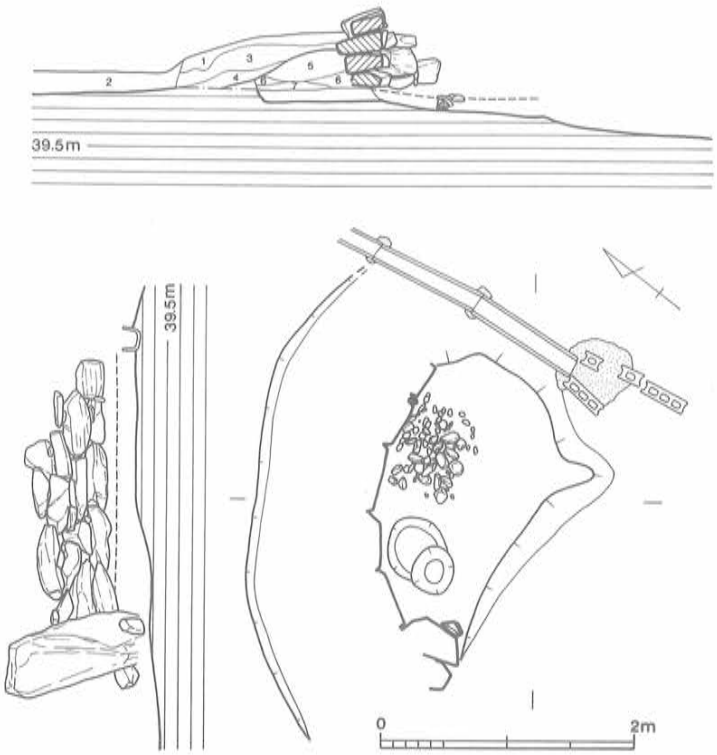


Fig. 18　5号墳石室実測図（1/60）

玄室　北側壁は同じような大きさの片岩を平積みにし4段まで遺存しているが、床面プランはかなりの胴張りとなる。胴張りの弧線の半径は1.75mである。床面は本来は敷石がなされていたのであるが、いまはごく僅かしか残らない。また攪乱穴もあった。主軸方位は図の断面ラインではN-52°-Eをさすが、実際はもっと東に偏るものと思われる。

玄門　袖石は北側のもののみ高さ1.15mほどが西に傾いて立っていた。

前庭部・墓道　ともに不明である。

なお、この石室内および石室の北西部（1トレンチ）から縄文早期の条痕文土器が出土している。

出土遺物（PL. 10, Fig. 22, 85）

古墳に直接関係する遺物はなく、縄文早期と中世期以降のものしかない。

瓦質土器（1）　火鉢と思われる小破片である。

陶器（2）　碗か皿の底部で、褐色釉がかかるが、内面見込みは同心円状にかきとりがあり、高台部分のやや上までは露胎である。

1・2とも墳丘内出土であるが、盗掘が中世期以降になされていることはわかっても古墳の築造時期はわからない。石室の形態等からみると6世紀中葉以降であろう。

石器（Fig. 85-42）　墳丘内出土の硬砂岩と思われる石材で、石斧の蛤刃に似た刃部らしき部分を擦ってつくりだすが、おそらく砥石に使用されたものだろう。長さ5㎝、最大幅2.2㎝。後世の混入品と思われる。

6号墳（PL. 11, Fig. 17, 19, 22）

5号墳のすぐ西にあり、西に開口する石室を持つ。

周溝　西半部のみにみられるが、これは東半部が削平されたというのではなく、当初よりこの部分

のみに巡らされていたものと捉えられる。石室入口側のみに巡らせるというのも異様ではある。石室からみて北西部に一段深くなった所があるが、これが何を意味するのかわからない。復原すれば外径12.2m、内径9.4mほどとなるが、外径の中心はほぼ石室の中心と一致するとしてよい。石室入口側のあたりに須恵器・土師器が多かった。他に縄文早期土器、陶器なども出土している。

石室　奥壁・南側壁の石材はなく遺存状況はよくない。推定奥壁幅に対する玄室長の比は1.48であって幅広いが、竪穴系横口式石室の系譜を引くものと捉えたい。

石室掘り形　石室がすっぽり納まるだけの長方形プランをなす。幅1.6～2.2m、長さ3.45m。

玄室　北壁は片岩の腰石のみ4個が据えられて残るが、奥壁、南側壁は一切遺存しない。ただ腰石を据える掘り込みと根石が一部にあり、それから類推すると奥壁は2個、南側壁は5個が据えられていた可能性が高い。復原すると床面プランは奥壁幅1.35m、玄門側幅1.15m、最大幅1.45m、長さ2.2mほどとなろう。主軸方位はN-81°-E。北側壁は緩やかなカーブの胴張りをなしている。床面には扁平河原石と片岩の小礫屑を敷いていたが、いまは玄門側にしか残らない。赤色顔料の痕跡をとどめるものがあった。

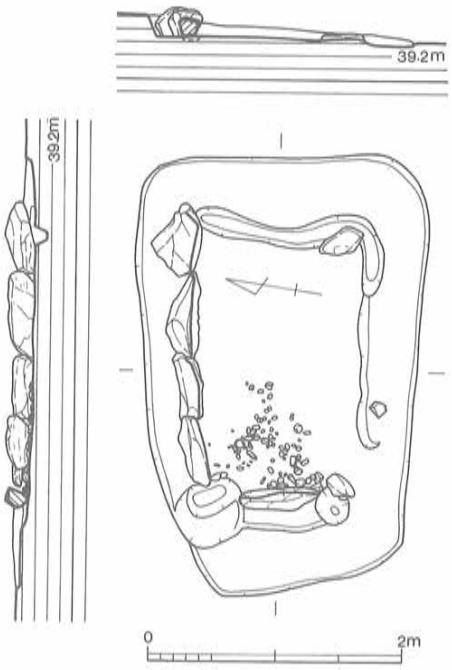


Fig.19　6号墳石室実測図（1/60）

玄門　長さ65cmの框石は残るが、袖石は2個とも抜き跡しかない。

前庭部・墓道　貼石等の置かれた痕跡もなく、石室の掘り形ラインがやや出っ張る程度なので、墓道は階段状に造られていたものと推測される。

なお、南西側にある3号石棺墓（C3）は9号墳周溝との中間にあるが、僅かに6号墳の方に近いので、この6号墳に伴う可能性を考えておきたい。

出土遺物（PL. 11, Fig. 22）

須恵器・土師器（PL.　, Fig.　-3～7）のほか縄文早期土器、陶器などがある。

須恵器（3・4）　3は瓶で、肩部以下は完形であるが頸部より上は1／5ほどの破片となっている。頸部と胴部に波状文を施し、整美なプロポーションをなす。胴部は波状文のあとに沈線と穿孔がなされる。口径11.1cm、胴部径10.9cm、器高13.3cmを測り、口径と胴部径はほぼ等しい。4は甕で、肩部から胴部の外面は擬格子タタキの上にカキ目とナデを施し、内面は同心円の当具痕がある。口径17.4cm、胴部径24.2cm。

土師器（5～8）　5は内湾する口縁部で甕であろうか。6・7の甕は精製品であり、7は化粧土を掛けている。口径12.8cm。8は手捏ねのミニチュア土器で、口径3.5cm、器高2.9cm。

陶器（9）　鉢になろうか。無釉である。

全て周溝内からの出土であるが、9は石室南方からである。3・4の須恵器からみて6世紀初頭～前半の築造にかかるものであろう。

7号墳（PL. 12, Fig. 17, 20, 22）

6号墳の北西方にある。西に開口する石室を持つ。

周溝　低い方の南側に平面三日月状プランで遺存していた。内周の上端ラインに比べて外周のそれはやや外側へ張り出しており、各々の弧線の中心点は一致しない。見かけ上は内周ラインが石室掘り形に近接しすぎているきらいがある。復原で外径12.5m、内径10.2mほどである。北側に周溝がみられないのは、北方にある8号墳が先に築造されていてそれに影響されてのことかもしれない。深さ30cmほどしかないが、上層に黒色系の、下層に黄色系の砂質土が堆積していた。土師器・須恵器のほかに、縄文早期土器、陶器鉢が出土している。

石室　単室で両袖の横穴式石室である。遺存状態はあまりよくなく、奥壁は抜き跡のみで、両側壁は腰石の上に1～2段の石積みしか残らない。

石室掘り形　幅2.7～2.9m、長さ3.6mの長方形プランをなし、これに長さ約2mの墓道が取り付く。しかし墓道については後述のように本来のものかどうかわからない。

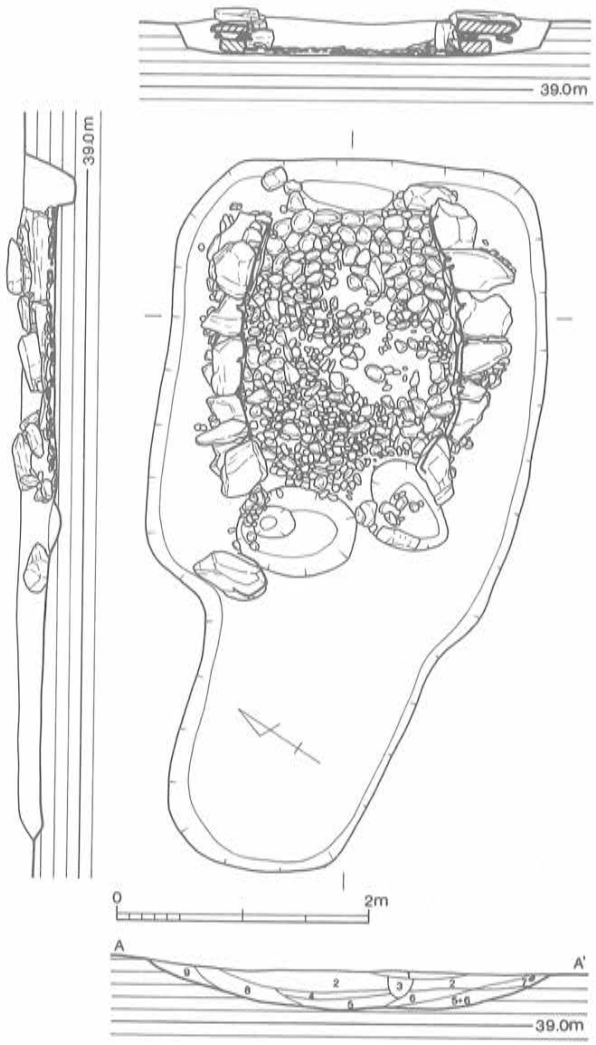


Fig. 20　7号墳石室実測図・周溝土層図（1/60）

玄室　北側壁はあまり大きくない腰石4個が据えられて残るが、本来は5個であろう。南側壁は6個が据えられている。壁材は雲母片岩と石英片岩である。床面は奥壁側に大きめの、玄門側に小さめの扁平河原石を敷いている。床面規模は一部推定も含めて、奥壁幅1.28m、玄門側幅1.2m、最大幅1.72m、長さ2.2mを測る。主軸方位はN-57.5°-E。床面プランは胴張りをなすが、両側壁の弧線の中心は掘り形内に収まり、ほぼ左右対称に近いプランである。埋土中から土師器、鉄器のほか縄文早期土器が出土している。

玄門　袖石は両方とも抜かれているが、復原すると玄門幅50cmほどであろう。北側の抜き穴が大きいのは抜き取る際に動かしたためと思われる。

前庭部　北側に1個だけ置かれた石が遺存するのみである。

墓道　石室掘り形の主軸に対してやや北偏して接続した墓道を図示しているが、ここは黄褐色土を呈して周辺の土と微妙に違うことより掘ったものであって、石室周辺から縄文早期土器片や黒曜石製鏃4点などが検出されていることよりすると、あるいは古い時期のものの可能性もある。

出土遺物（PL. 34, Fig. 22, 58）

土師器（Fig. 22-10～14）のほか縄文早期土器、陶器、鉄器、石鏃などがある。

土師器(10～14)　10～12は坏でともに精製品である。10は外面に黒塗りの痕跡がある。11は体部から口縁部への屈曲度が大きい。12は内外のミガキが著しい。13は坏でなければ壺になろう。復原口径12cm。

陶器(9)　内外に鉄釉の掛かった鉢である。

鉄器（PL. 34, Fig. 58-76～78）

鏃(76･77) ともに玄室埋土中からの出土である。76は圭頭形となる。77の箆被は頸部端で緩やかに広がり、急にすぼまる。

刀子(78)　鋒と柄部端を欠失する。推定身部長17.3cmの大型品である。　（吉田）

14は盗掘時を示すものであり、6世紀前半～中頃の築造であろう。

8号墳（PL. 13, Fig. 17, 21・22）

7号墳の北にあり、西に開口する石室を持つ。

周溝　主体部の東側、つまり石室奥壁側の部分を除いて巡らされており、平面形は馬蹄形をなす。石室入り口側の部分が広くなっている。内周の中心は石室中心に近いが、外周のそれは玄門付近にある。復原で外径13.4m、内径10.4mを測る。土師器･須恵器の若干量が石室前面よりやや北に偏したあたりから、そして縄文早期土器、弥生土器が出土している。

石室　遺存状態は良好とはいえず、石材も奥壁に近い方のみ遺存する。竪穴系横口式石室の系譜に近い構造であったと考えるが、奥壁幅に対する推定玄室長の比が1.33とかなり幅広いので横穴式石室としておく。

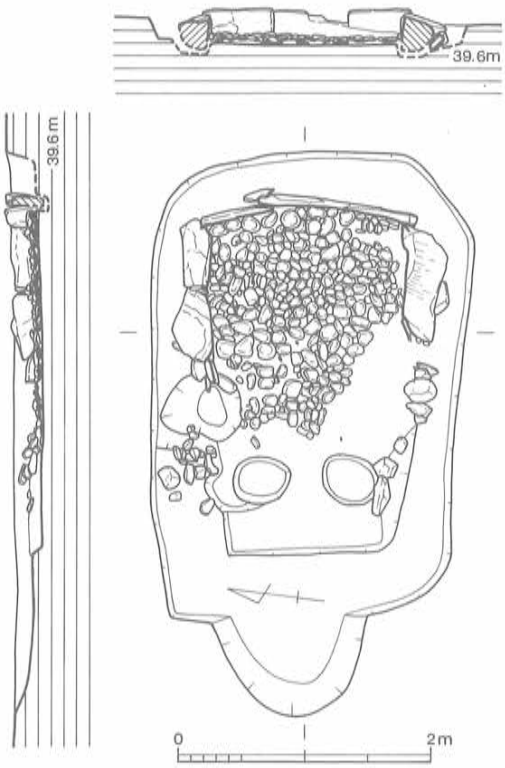


Fig.21　8号墳石室実測図（1/60）

石室掘り形　幅2.25～2.5m、長さ3.65mの長方形プランである。

玄室　腰石は奥壁には扁平片岩2枚を横位置に立てる。両側壁は石英片岩を用い、北側壁は本来5個であろうか。3個が遺存する。南側壁は1個のみ残るが、もとは3個であろう。欠失した部分には腰石を安定させる根石が置かれている。床面規模は一部推定も含めて、奥壁幅1.5m、玄門側幅1.3m、最大幅1.5m、長さ2.0mを測る。主軸方位はN-83°-E。床面プランは長方形としてよい。敷石は扁平河原石である。奥壁の北側石材と敷石の一部に赤色顔料塗布の痕跡がみられる。床面から鉄器（鏃・刀子）と管玉3個が、埋土中から黒曜石製鏃、縄文早期土器片が出土している。

玄門　袖石は両方とも抜き取られているが、復原すると玄門幅40cmほどであった

と思われる。

前庭部　玄門前面に段がつくが、これは調査時において明確なものではなかった。

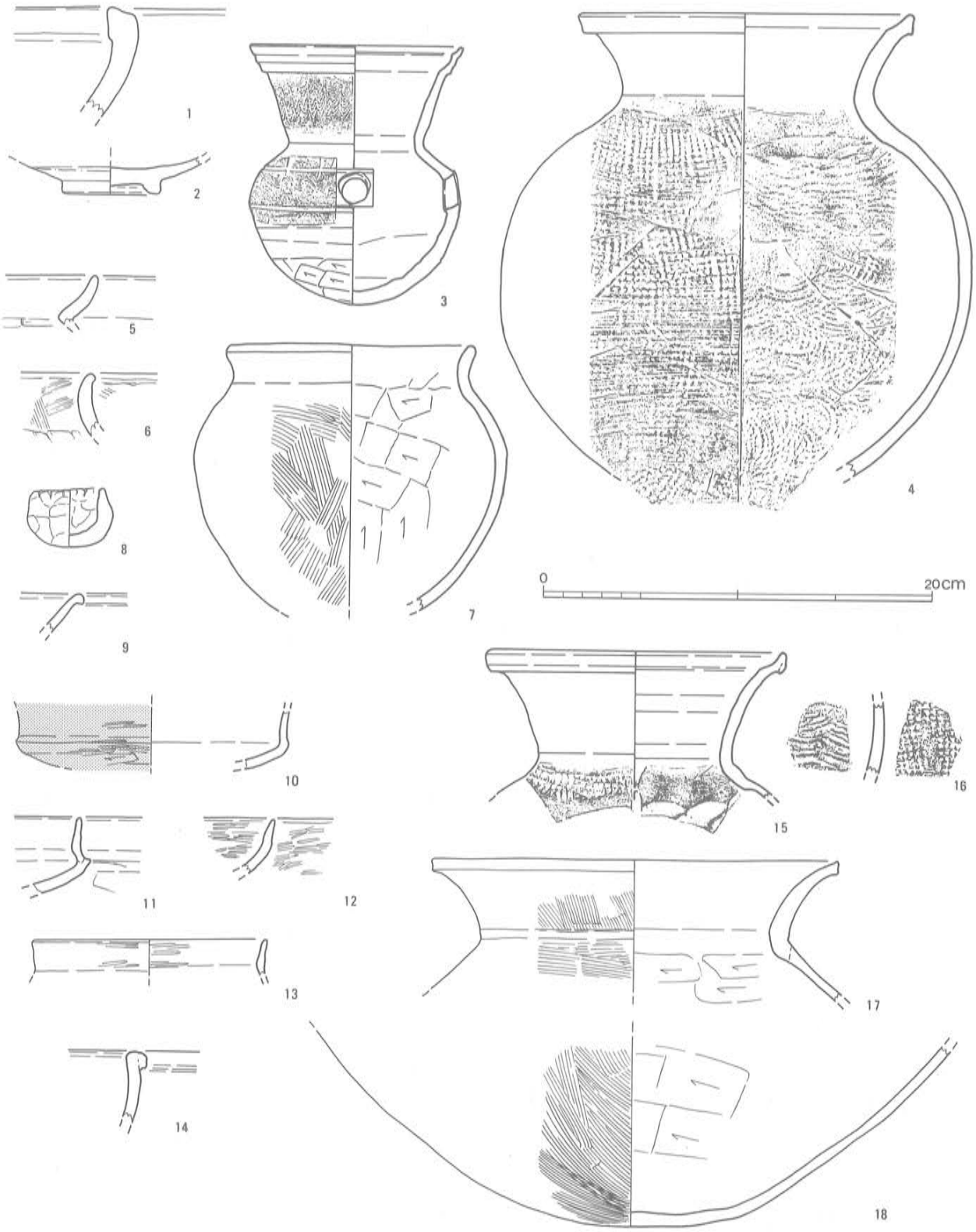


Fig. 22　5～8号墳出土土器等実測図（1/3）

墓道　石室掘り形から西側へ約0.8m突出して斜めに取り付く。本来は緩やかな傾斜を持つものであったろう。

出土遺物（PL. 13, 34, 35, Fig. 22, 58, 60）

須恵器・土師器（PL. 13, Fig. 22-15～18）のほか鉄器、玉、縄文早期土器、弥生土器、打製石鏃、叩石等がある。

須恵器(15・16)　15は壺になろうか。内面の当具痕は彫りが深い。復原口径15.6cm。16は甕の胴部片である。

土師器(17・18)　同一個体の口頸部と底部である。胴部の接合する資料がない。復原口径21cm。

鉄器（PL. 34, Fig. 58-79～82）

79・80・82は玄室床面、81は玄室埋土中の出土である。

鏃(79・80)ともに頸部端である。断面四角形となる。

不明品(81)　現存長2.5cm。断面四角形。新しいものか。

刀子(82)　鹿角装の刀子である。研ぎ減りにより身部が極端に細くなっている。身部には布が銹着している。

玉類（PL. 35, Fig. 60-29～31）

管玉　碧玉製で、表面が風化し白緑色を呈す。29は長さ22mm、径8.5mm、孔径2～3mm、重さ2.5g。30は長さ27mm、径8.5mm、孔径3～4.5mm、重さ5.5gで中央部が若干膨らみエンタシス状となる。31は長さ25.5mm、径7mm、孔径1～2mm、重さ2.1g。30・31は両側から穿孔を行っており、また表面に面取りの際の稜を残す。（吉田）

出土土器よりみて6世紀初頭～前半頃の築造であろう。

9号墳（PL. 14, Fig. 17, 23, 30, 58）

6号墳の南西にあり、西に開口する石室を持つ。

周溝　主体部の東側、つまり地盤の高い方にのみ巡らされており、平面は三日月形をなすが、やや角張っている観もある。総体に幅広いが深くはない。弧状溝が途切れたその西側に不規則な浅い掘込みがあり、そこから須恵器・土師器等が出土している。これも周溝の続きとするにはやや違和感もあるが、一応周溝の一部として捉えておきたい。外周の弧の中心を求めるとその中心は石室の掘り形外の北側にある。復原で径12.4m。他に黒曜石製鏃も出土している。

石室　西に開口する横穴式石室である。検出した面の傾斜に従うように北側の方が遺存状態がよく、南側はよろしくない。

石室掘り形　幅2.5～3.0m、長さ3.5mの隅円長方形プランをなし、前庭部までを包み込む。

玄室　奥壁に3個、南北両側壁に各5個の石英片岩のあまり大きくない腰石を据え、胴張りプランの玄室を造っている。南側壁は中央の腰石が除かれているが、その胴張りの弧線は北壁のそれよりもカーブがやや強い。そのため両側壁の弧線の延長上における交点同士を結ぶ線は、石室中心線よりもやや北側を通り、左右対称にならない。床面規模は一部推定も含めて、奥壁幅1.45m、玄門側幅0.9m、最大幅1.7m、長さ2.27mを測る。主軸方位はN-80°-E。床面には扁平河原石を敷き詰めており、一部に赤色顔料を塗布した痕跡が見られた。北側壁に近い床面から鉄器が出土した。

玄門　北側は抜跡のピットがあるが南側には見られない。これを以て片袖であったとは考えにくい。推定で玄門幅50cmほどであろう。

前庭部　北側に貼石２個がある。

墓道　石室掘り形に接続して長さ1.8mの細く浅い溝状のものが取り付くが、墓道とするにはやや躊躇するところもあった。

出土遺物（PL. 14,34, Fig. 30,58）

須恵器・土師器（PL. 14, Fig. 30-1～8）のほか鉄器、縄文土器、弥生土器、打製石鏃がある。

須恵器（1）　やや厚手のつくりの坏蓋である。外天井部にヘ字状のヘラ記号があり、内天井部には同心円の当具痕がある。口径14cm、器高5.1cm。

土師器（2～8）　2～6の坏のうち2・3は須恵器模倣のもので、2は内外とも黒塗りである。4～6の外面体部下半は削りのちミガキ、5・6は削りである。7・8は甕で、8は精製品。

鉄器（PL. 34, Fig. 58-83～86）

すべて玄室床面からの出土である。

鏃(83～85) 83は深い逆刺を有す。84は片刃で逆刺を有す。

不明品(86)　銹膨れのため詳細は不明。刀子の茎部か。

（吉田）

出土土器からみて６世紀中葉頃の築造であろう。

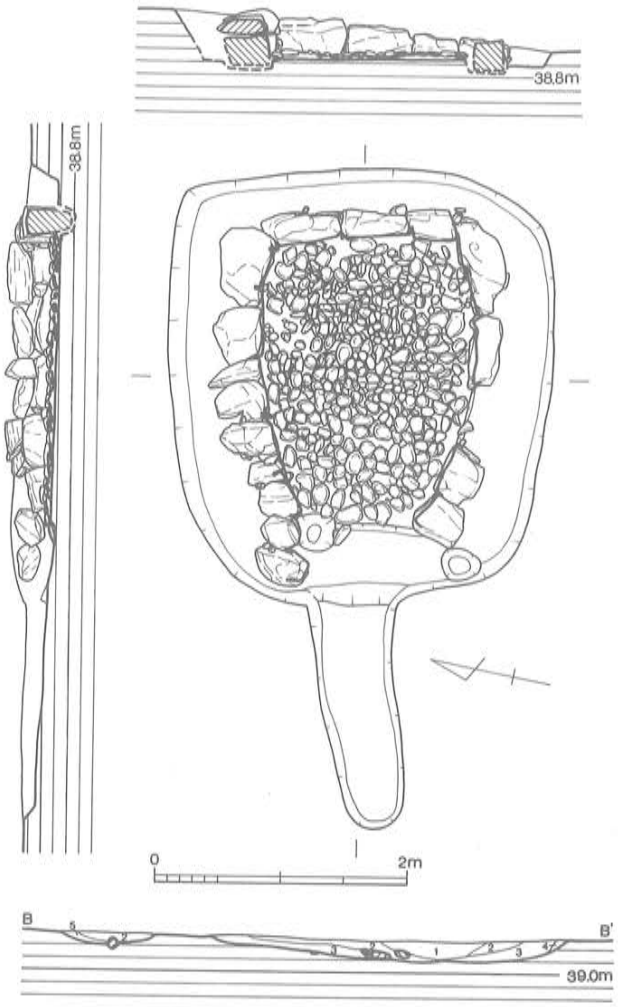


Fig. 23　9号墳石室実測図・周溝土層図（1/60）

10号墳（PL. 15, Fig. 24・25, 30）

この白木西原古墳群の中で５号墳の次に'発見'した古墳である。まず５号墳を古墳と確認したのち、11号墳もおそらく古墳であるとの目ぼしをつけ、そのちょうど中間あたりにもう１基あるのではないかと推測して重機にて表土を剝いだところで確認したものであった。結果的には９号墳の西方にあって、11号墳との間には古墳は見られなかった。西に開口する横穴式石室を主体部におく。

周溝　主体部の北側に平面三日月状に巡っているが、ややいびつな形状である。主体部の東方部分は幅広くなり、また北方部分は一段深くなっている。弧状ラインがよく捉えられる部分をもとに復原すると外径20.5m、内径14.4mほどとなってこの数値のみ見れば、この古墳群の中では最も大きな規模を有することになる。しかしそれは外径・内径ともにその中心点が石室の掘り形外の南方に求められ、石室が墳丘中心にこなくなる。ただ石室中心から外周までの距離は7.5～9.5mであって、そ

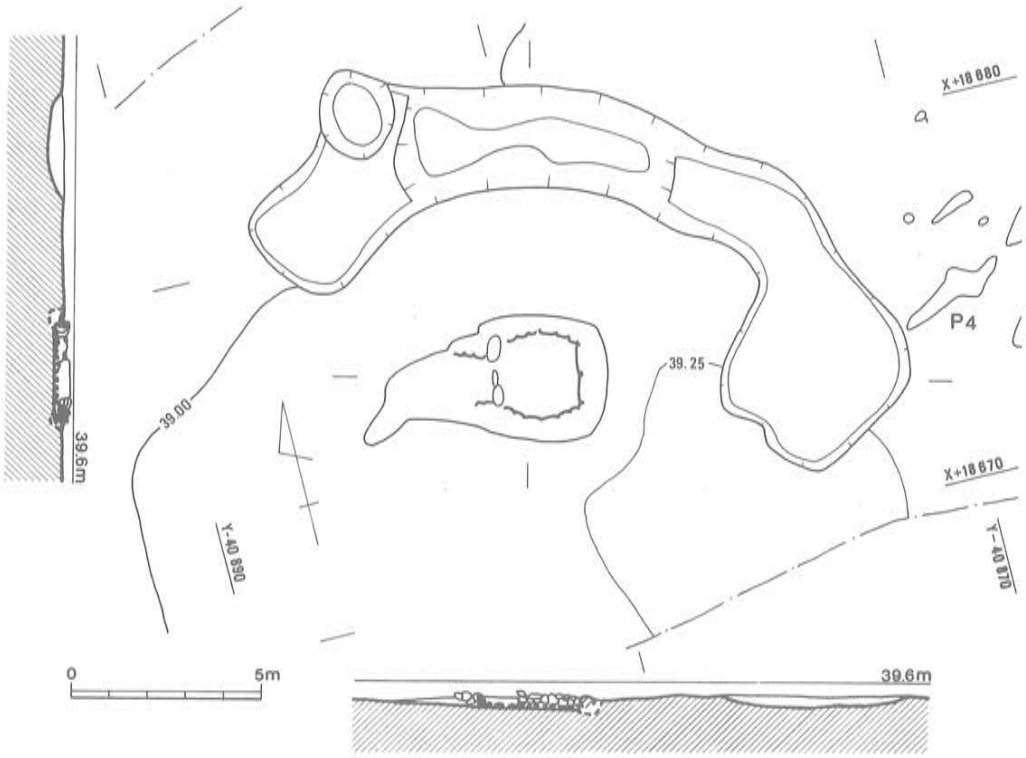


Fig. 24　10号墳地形図（1/200）

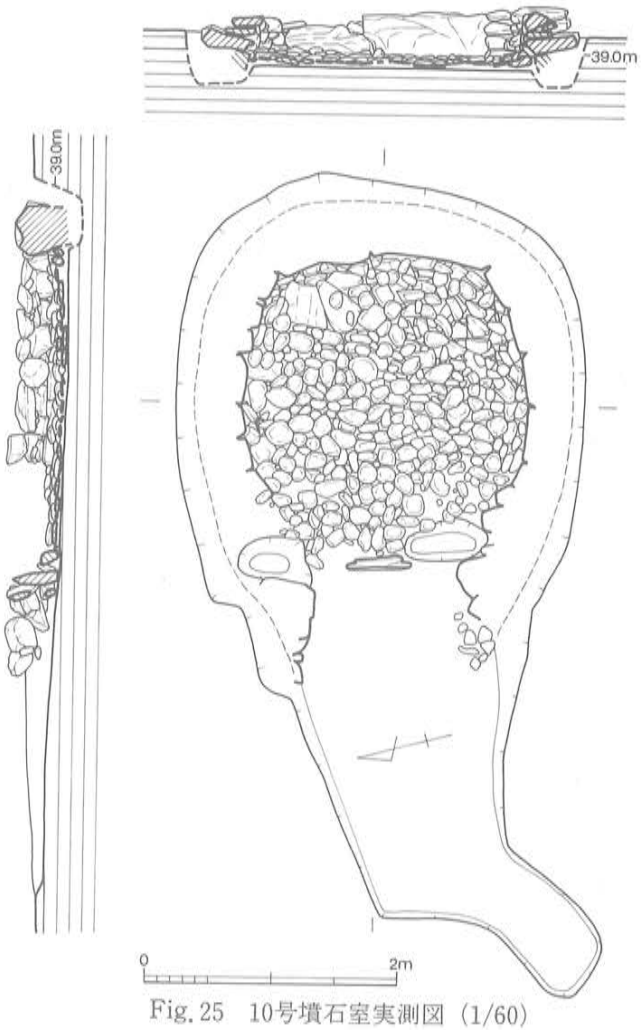


Fig. 25　10号墳石室実測図（1/60）

れを単純に２倍すると最大19mであり、これを採用しても最大規模であることには変わりない。深い所で約40cmの深さがあった。埋土は主として黒色土であり、須恵器・土師器のほかに土錘、糸切り底の土師器も出土している。

石室　西に開口する単室両袖の横穴式石室である。もとは北袖石として65×100cm、厚さ20cmの石英片岩が立っていたが検出時に除去してしまった。またその東側に80×100cmで厚さ25cmほどの片岩が倒れて側壁の一部を覆っていたが、これは天井石であったとするには不自然であり、南袖石を倒してのち搬出できずに少し動かしたままで置き去りにしたものか、あるいはやや大きすぎるきらいはあるものの閉塞石の一枚であったと考えられた。

石室掘り形　幅2.6～3.15m、長さ3.4mで石室を包み込み、さらに長さ0.6mを延長して羨道を取り込んでのち墓道を連結している。

玄室　床面はかなり丸みをもった胴張りプランをなす。壁体は雲母片岩と石英片岩を使い、奥壁には２個を腰石として据えるが、両側壁は基底部から平積み、もしくは小口積みである。最大４段までが遺存する。一部推定も含めて床面規模は、奥壁幅1.6m、玄門側幅1.5m、最大幅2.25m、長さ2.4mを測る。主軸方位はN-104.5°-E。西側壁の胴張り弧線の中心点はいずれも石室内に求められ、その交点を結んだラインは大略石室中心線と一致する。床面には奥壁側に片岩扁平石を敷いたあと丸みのある石英片岩の河原石を置き、中央から玄門寄りは河原石のみを敷いている。床面から鉄器と青銅製の針金のような製品の一部が出土した。埋土中には土師器、陶器、白磁があった。

玄門　北側袖石は先述のように検出時に除去してしまい、南袖石はすでに抜きとられていた。框石は遺存しており、その長さ55cmが玄門幅であったろう。

閉塞　あまり大きくない２枚の片岩が框石にせき止められるようにして立てかけて遺存していた。先述の北袖石近くに置かれていた石が閉塞に用いられていたものであったとすれば、玄門の上部に石はなかったのかも知れない。

前庭部　玄門の前面は南北両側ともに貼石状に石が置かれ、その平面形は緩やかなハの字状をなす。

墓道　前庭部の延長で西へ1.7m延びたあと西南方へ１mほど折れ曲がった掘り込みがみられた。この底面は玄室床面からすれば10cmほど高くなっているにすぎない。

出土遺物（PL. 15, 34, Fig. 30, 58, 61）

須恵器・土師器（PL. 15, Fig. 30-９～16）のほか鉄器、縄文土器、陶器、磁器、土錘等がある。

須恵器（９・10）　９の方が大きく、口縁の立ち上がりも高い。９は復原口径13.6cm、器高4.2cm。10は復原口径10.4cm、器高2.8cm。

土師器（11～15）　11・12は同一個体の可能性もあるが、高坏の坏部になるものと思われる。13・14は高坏の脚部である。13は裾径11.6cm。14は外面が縦削りのちミガキで、裾径10.4cm。15は中世の坏である。

須恵質土器（16）　東播系のこね鉢である。外底面は糸切り痕がある。底径８cm。

鉄器（PL. 34, Fig. 58-87～89）

87・88は玄室床面からの出土であるが、89は石室外周の出土であり新しいものかもしれない。

鏃（87・88）　ともに箆被部は緩やかに広がってのち緩やかにすぼまる。88は箆被下に桜皮の沓巻が認められる。

不明品（89）　一部に刷毛目のような十数条の平行沈線が認められる。　（吉田）

土製品（PL. 35, Fig. 61-２・３）　ともに石室北側の周溝内から出土した土錘である。同じ所から中世の土器も出土しているので、古墳に伴うものではないだろう。２は長さ37.7mm、最大径11.2mm、孔径2.8mm、重さ4.4g。化粧土を掛けた痕跡がある。３は一部を欠損し、現存長33.3mm、最大径10mm、孔径2.7mm。重さ2.4g。

土器は全て周溝内からの出土であるが、15・16など中世の遺物が混入している。６世紀後半の築造であろう。

11号墳（PL. 16・17, Fig. 26～30）

10号墳の西方にあり、西に開口する横穴式石室を主体部におく。

墳丘　調査前は約60cmの段差のある水田を区画した畦畔の所に、低い方の田面から高さ約１mの高

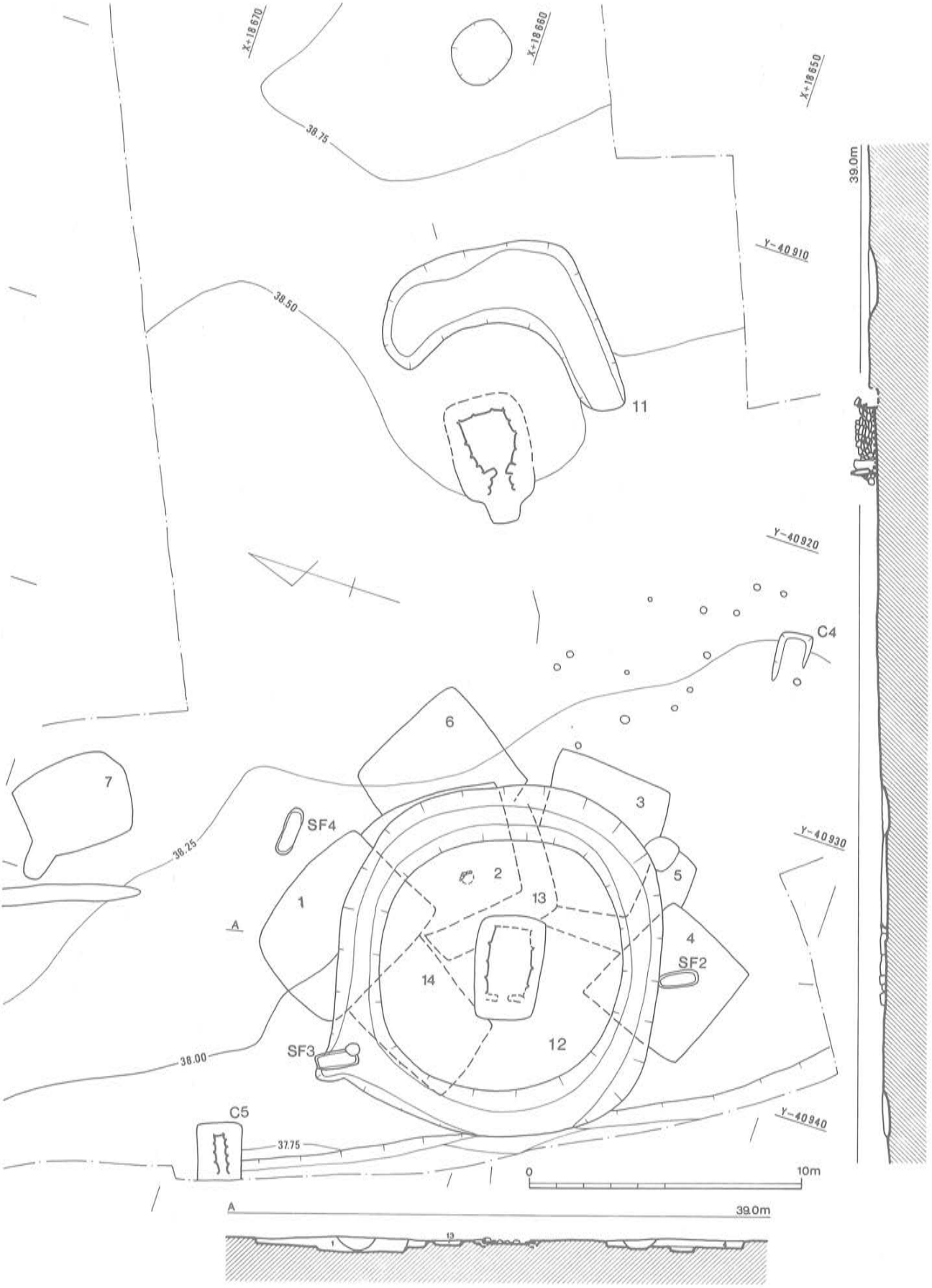


Fig. 26　11・12号墳地形図（1/200）

まりが長径8.5mの半円状に残されていた。横断面でみると、旧表土の上に残る茶灰褐色の砂質土のみが本来の墳丘の一部であり、その上は二次的に積まれたものである。墳丘上層からは陶器・磁器・瓦質土器や近時の鉄鎌、硯などが採集されている。

周溝　高い方の東側にL字形に検出された。これをもって方形墳と捉えることも可能ではあるが円墳とすべきであろう。本来の墳丘規模は把握しにくいが、直径10～12m前後とするのが妥当と思われる。土師器のほかに縄文晩期土器片が出土している。

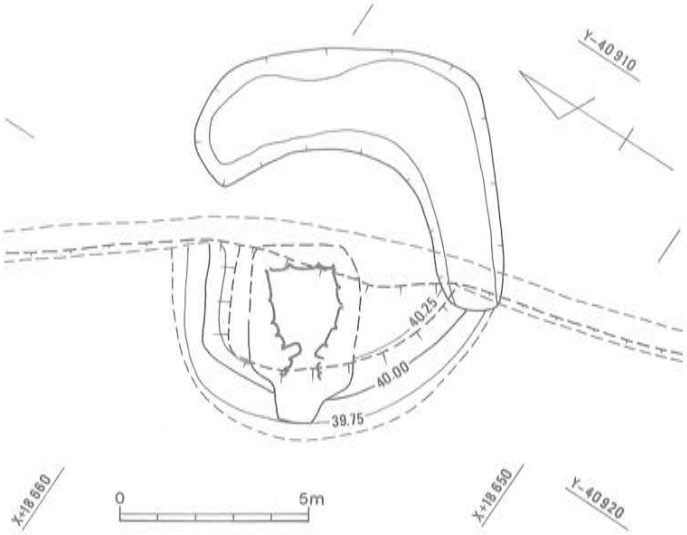


Fig. 27　11号墳墳丘測量図（1/200）

石室　西に開口する単室両袖の横穴式石室である。

石室掘り形　幅2.4～2.95m、長さ4.05mの長方形プランになるものと思われる。これに少しだけ張り出した墓道が取り付く。

玄室　奥壁に3個、両側壁に4個ずつの腰石を据え、その上に緑泥片岩または石英片岩を平積みにしている。床面から最高0.9mまで遺存しているので、この古墳群中では最も残りのよい石室である。床面プランは胴張りを持つが、北側壁の方が張りが弱いのと、玄門の南袖石が南側壁の続きの

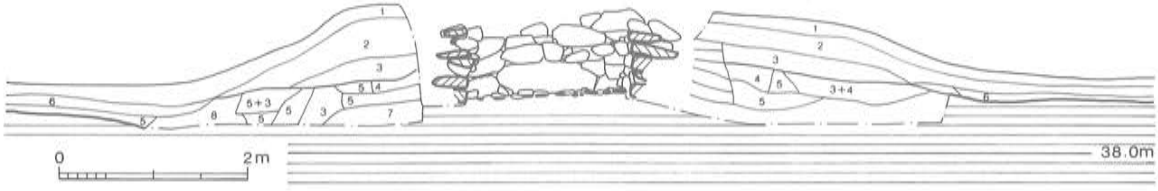


Fig. 28　11号墳墳丘土層図（1/80）

photo.1　11号墳調査風景

如くに置かれているためややアンバランスな観がある。床面規模は、奥壁幅1.65m、玄門側幅1.0m、最大幅1.75m、長さ2.15mを測る。主軸方位はN-56°-E。床面の敷石はいくつかは取り除かれていたが、中央付近に大きめのものを敷いている。鉄器が出土した。

玄門　前述のように、南側の袖石は側壁の延長として据えられた格好になるが、北袖石は突出するように置かれている。長さ45cmの框石が置かれ、これがすなわち玄門幅である。

閉塞　框石前面で大きな扁平石を縦に使って閉塞がなされていた。この扁平石の下には別の扁平石が二段に置かれて根石の役割を果たしている。その下端部は床面に接しておらず、框石上面と同じ高さになっている。これはあるいは追葬の存在を示しているのかもしれない。

前庭部　左右ヘハの字状に開いて石が置かれる。

墓道　約70cmが突出するもので、斜めにつくられていたものの下端部であろうか。

なお、前庭部とその北側に集中して、下層から縄文晩期土器・石器が出土している。西方の12号墳の下から住居群が検出されているので、ここにも住居が存したのかも知れない。また石室後方の周溝との間からはプロピライト製の礫器が出土している。

出土遺物（PL. 17, 34, Fig. 30, 58）

鉄器のほか、古墳とは直接関係のない縄文晩期土器・石器そして陶器・磁器、瓦質土器等がある。

土師器(17)　甕の底部に近い破片であるが、外面に小動物が爪で引っかいたような条がある。

瓦質土器(18)　摺鉢である。内面は条痕風刷毛目の上に摺目がある。

陶器(19)　無釉の鉢である。

磁器(20)　染付の深皿である。外底部は蛇ノ目高台になり、畳付は釉をかきとっている。内面に鳥居と林らしい絵柄が群青色に発色している。口径12.3cm、底径6.7cm、器高3.4cm。

鉄器（PL. 34, Fig. 58-90）

鏃　細片であるが、両方ともおそらく鏃の茎であろう。玄室床面からの出土。

（吉田）

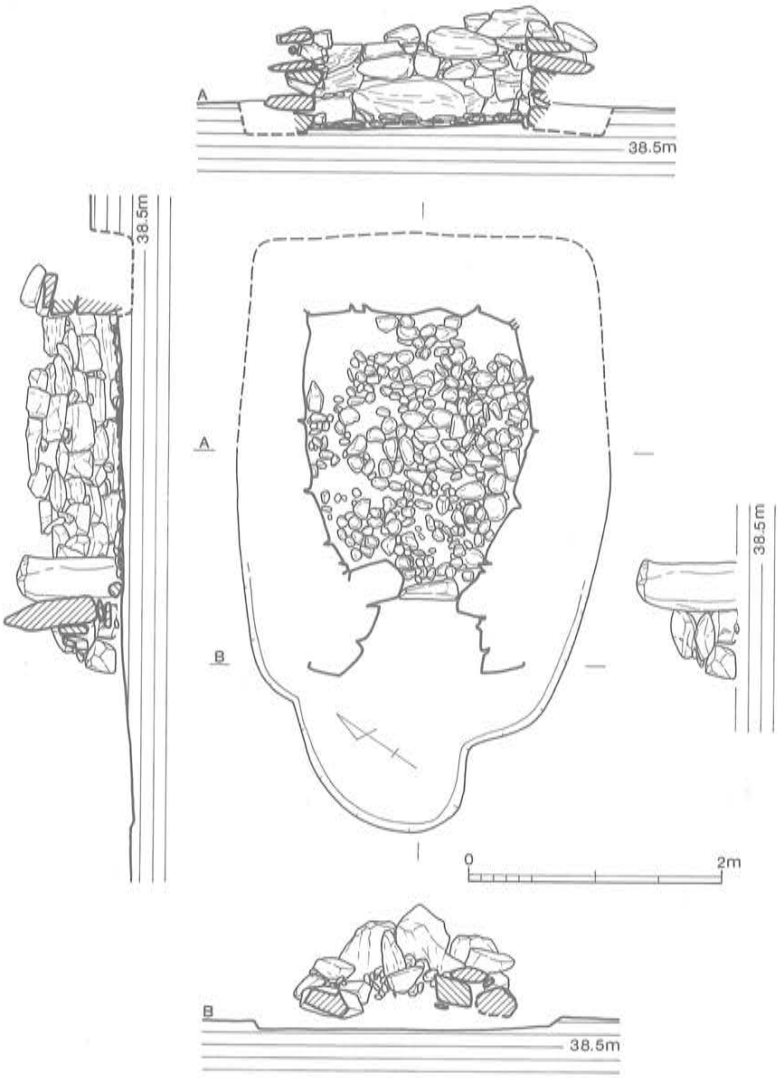


Fig. 29　11号墳石室実測図（1/60）

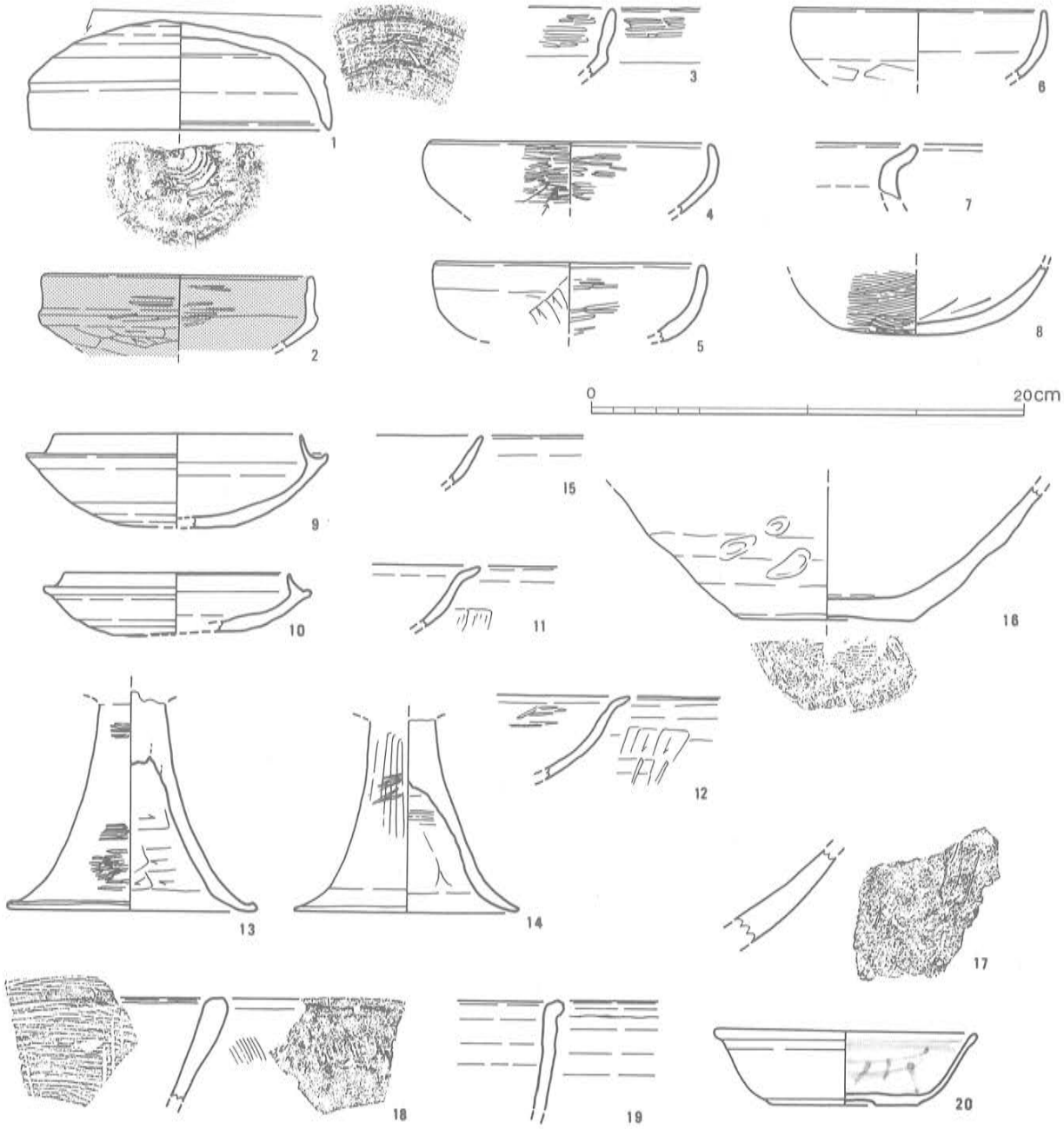


Fig. 30　9～11号墳出土土器等実測図（1/3）

17は前庭部埋土中、その他は墳丘中から出土した。17のみでは時期比定は難しいが、石室構造等も勘案すると6世紀中葉前後の築造であろう。

12号墳（PL. 18, Fig. 31・32）

11号墳の西方にあり、西に開口する主体部をもつ。この古墳の東南方にある4号石棺墓（C 4）、そして北西にある5号石棺墓（C 5）とはその位置関係から見て、この12号墳に従属するものと考えられる。なお、この古墳の西側調査区外には近世墓地がまだ残っていた。

周溝　きれいに全周する円形プランをなすが、少し角張った所もある。外径は南北12m、東西13m、

内径は南北9.0m、東西9.2mで、東西方向にやや長い。石室中心がほぼ周溝の中心と一致する。北西部の周溝内にはＳＦ３が掘り込まれていた。周溝との先後関係が不明であったが、埋土等は同じであったので同一時期の可能性が高いと考えた。とすれば南側にあるＳＦ２、北側のＳＦ４もこの12号墳に従属するものと考えられる。主に南側より須恵器・土師器が出土しており、下層の縄文晩期の土器・石器も混入している。

石室　西に開口する竪穴系横口式石室である。遺存状態はよくない。

石室掘り形　幅1.9～2.5m、長さ4.0mの長方形プランをなす。埋土中から須恵器のほか縄文晩期土器が出土している。

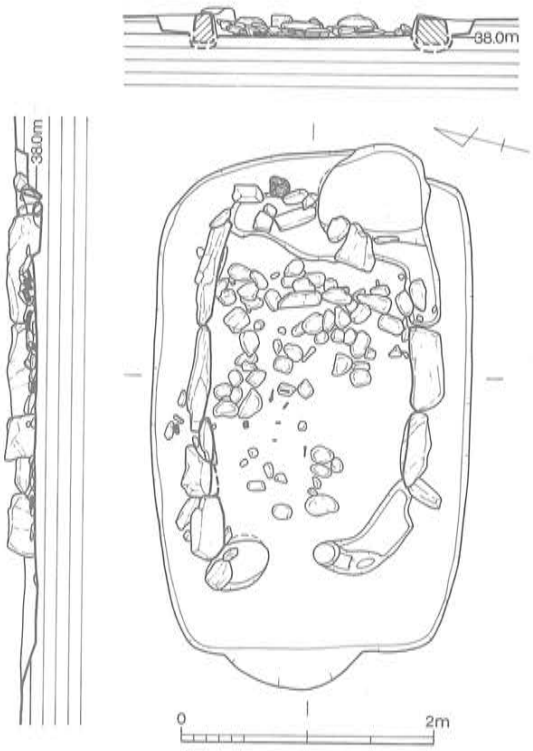


Fig.31　12号墳石室実測図（1/60）

玄室　北側壁に４個、南側壁に２個の腰石が残るのみで、他は抜き取られている。奥壁はおそらく２個の腰石を据えていたものと思われる。北側の腰石抜取り跡には根石材が数個残されていたが、その中にはサヌカイト原石も含まれていた。また南側の大きめの抜取り穴からもサヌカイト原石が出土している。北側壁は遺存している４個が腰石であったとしてよい。南側壁もおそらくは４個であったろう。両側壁の平面プランは少し胴張り気味となる。床面規模は推定を含めて、奥壁幅1.3m、玄門側幅1.3m、最大幅1.58m、長さ2.45mを測る。主軸方位はＮ-76.5°-Ｅ。床面の敷石はやや大きめの扁平石のいくつかが残されている。床面中央付近にて鉄器が出土した。また埋土中には須恵器・土師器のほかに縄文晩期土器があった。

玄門　両袖石とも抜き跡のみである。復原で50cmほどの幅があったものと捉えたい。

前庭部・墓道　袖石の外に貼石等はなく、掘り形に接続して斜めの墓道の一部が検出されたのみである。

出土遺物（PL. 18, Fig. 32・58）

須恵器・土師器（PL. 18, Fig. 32-１～16）のほか鉄器、縄文晩期土器、石器等がある。

須恵器（１～５）　１・２は接合しないが有蓋高坏になろう。脚部に透しが入るかどうかわからない。３・４は甕である。４は肩部の張りの強いもので、体部外面は平行タタキののちカキ目とナデを施し、内面は同心円当具痕をナデ消している。また内底面にはイネ科植物様のもので押さえた痕跡がある。口径15.8cm、胴径18.8cm、器高20.5cm。５は壺の完形品である。体部外面はカキ目を施し、底部付近は手持ちのヘラ削りである。粘土の継ぎ目が見える。口径13.7cm、胴径12.9cm、器高12.8cm。

土師器（６～16）　６～13は坏で全て精製品である。６・７は内外面とも黒塗りで、とくに７はウルシを塗っているように見える。８・９は同一個体かもしれない。10・12は内湾度が強い。12は内面に黒斑がある。口径12.7cm。13は平底に近い形状になるようだ。14は高坏の脚部で、外面と僅かに残る坏部内面に黒塗りの痕跡がある。15・16は甕であり、16は復原口径10.1cm。

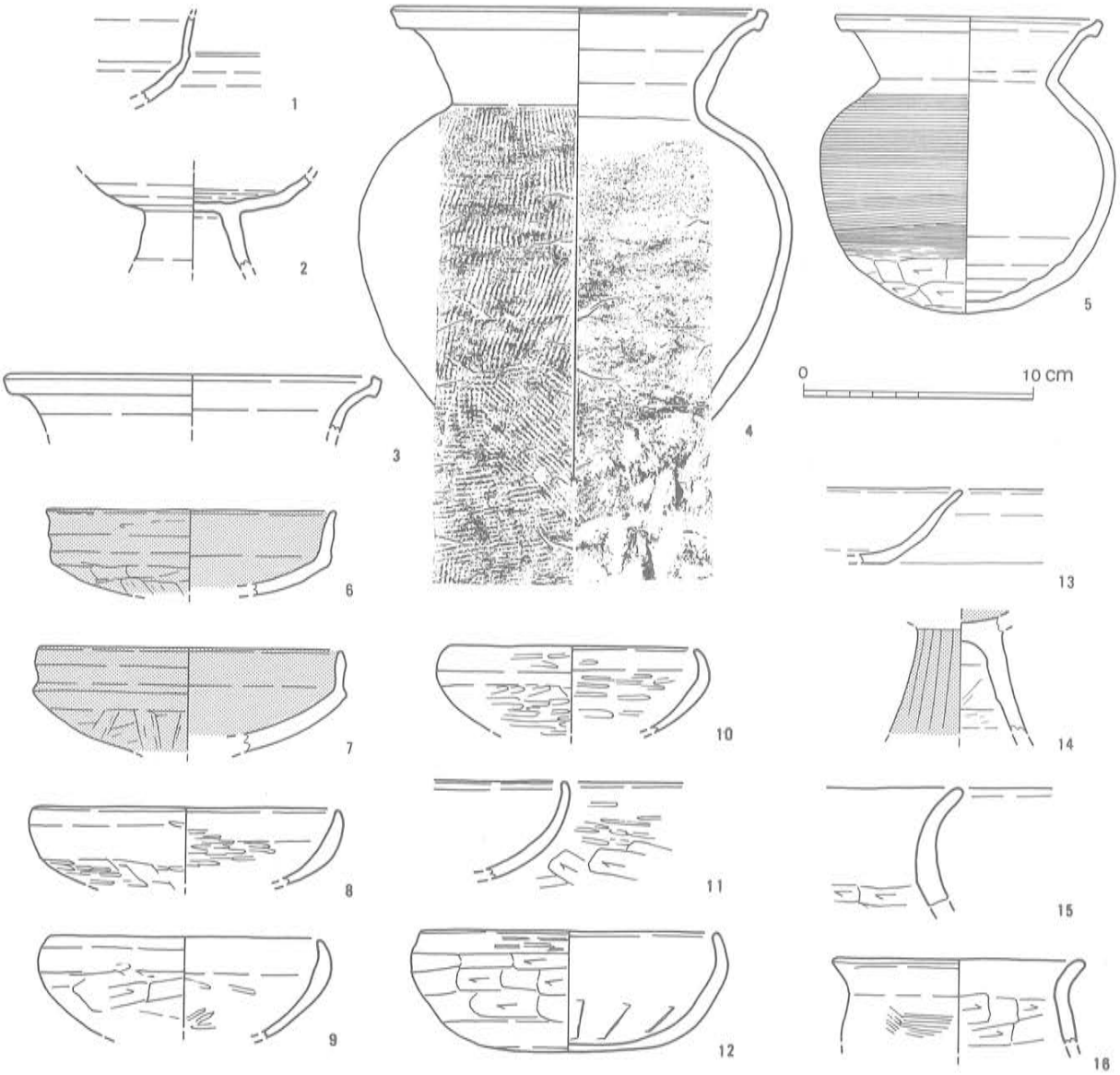


Fig. 32　12号墳出土土器実測図（1/3）

鉄器（PL. 34, Fig. 58-91～102）

すべて玄室床面からの出土である。

鏃(91～100)　91の身部は三角形。92の身部は鋒長のやや長い圭頭形で、箆被は頸部から斜めに細くなる。93は片刃で逆刺を有す。94～100は茎部で、箆被が頸部端からやや広がったのち細くなるものと、頸部から直角あるいは斜めに細くなるものと2つのタイプがある。100には木質がよく残る。

刀子(101)　細片で断定はできないが、刀子の茎部であろう。木質が認められる。

不明品(102)　二方向に刃部が認められる。鎌のようなものかも知れないが不明。　（吉田）

土器は1・2が石室掘り形内、7・14が玄室内で、他は周溝内からの出土である。須恵器に古い特徴が認められ、5世紀後半～末の築造と考えてよかろう。

13号墳（PL. 19, Fig. 33～35, 39, 85）

12号墳の北方にあり、西に開口する主体部をもつ。Fig. 33に示すように、調査前の13･14号墳の周辺は前方後円形に削り出されており、その一部に小高い部分が残存するという状況であった。果たして前方後円形は後世に造作されての結果であることがわかった。

なお、この南東にある６・７号石棺墓（Ｃ６・７）はその位置関係から見て、この13号墳に従属するものと考えられる。

周溝　主体部の東南部分にのみ巡らされており、西端部は調査区外にかかっているが、その延長はそれほど延びないであろう。外周・内周の弧線の中心を求めると石室の周辺にはくるが、石室中心と一致はしない。復原径は外径12.8m、内径12.5mとなる。土師器のほかに縄文晩期の土器が出土し

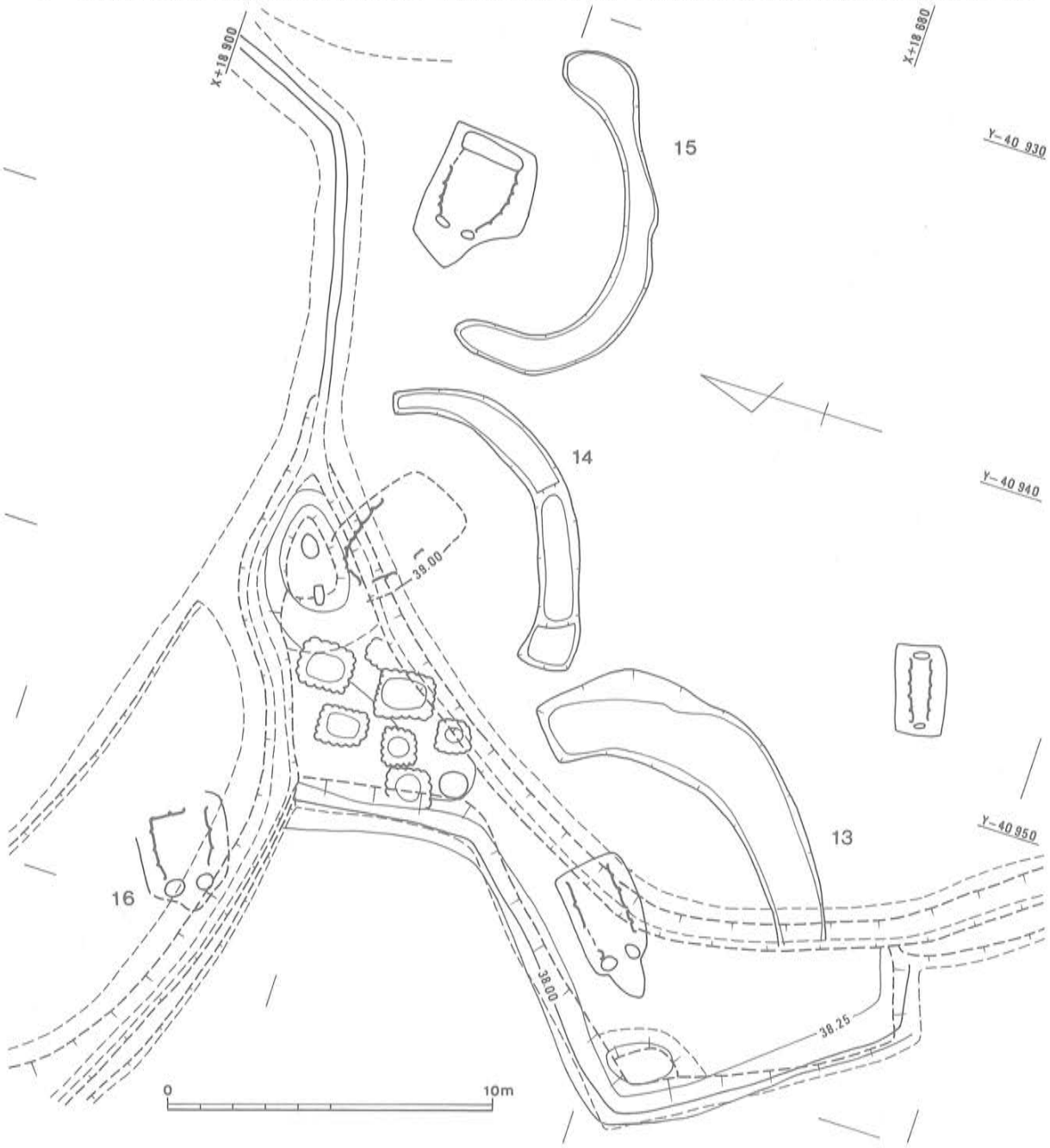


Fig. 33　13～16号墳原況地形測量図（1/200）

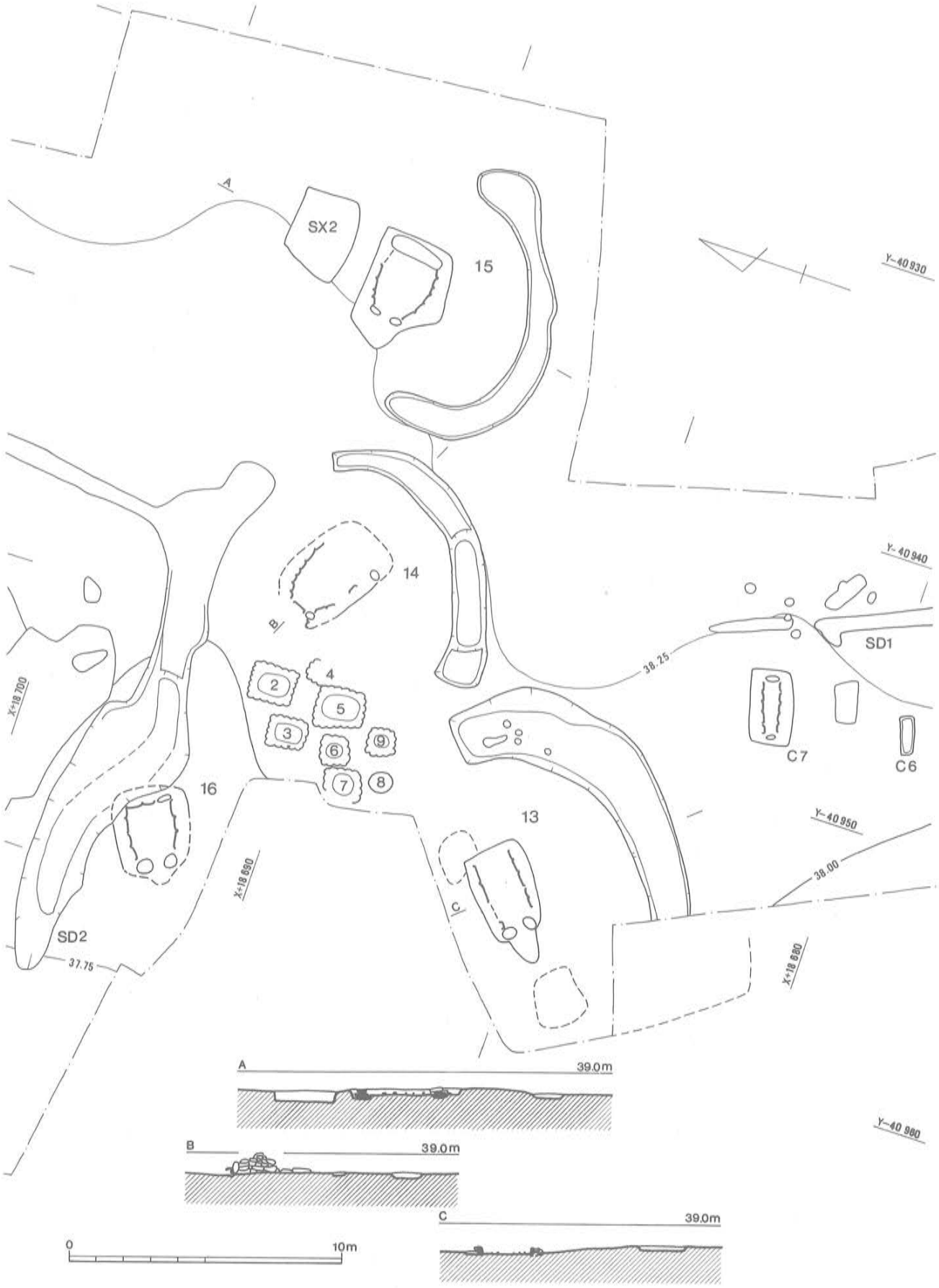


Fig. 34　13～16号墳地形図（1/200）

ている。

石室　西に開口する横穴式石室であるが、竪穴系横口式石室の可能性もある。遺存状態は不良。

石室掘り形　幅1.8～2.3m、長さ3.4mの長方形プランをなす。

玄室　腰石を北側壁に3個、南側壁に5個残しており、その他の石材は抜き取られている。奥壁はおそらく2個か3個を腰石に据えていたものと思われる。床面規模は推定を含めて、奥壁幅1.4m、玄門側幅1.06m、最大幅1.4m、長さ2.5mを測り、羽子板状のプランになる。奥壁幅に対する玄室長の比が1.79と狭長なプランなので竪穴系横口式石室とみてもおかしくない。主軸方位はN-48°-E。床面には小さな扁平河原石を敷きつめている。玄室の北東部と西北部そして西方に片岩石材が集積されていたが、これは石室に使われていた石材であったものと思われる。周辺から中世の摺鉢・羽釜・土鍋等の破片が出土している。

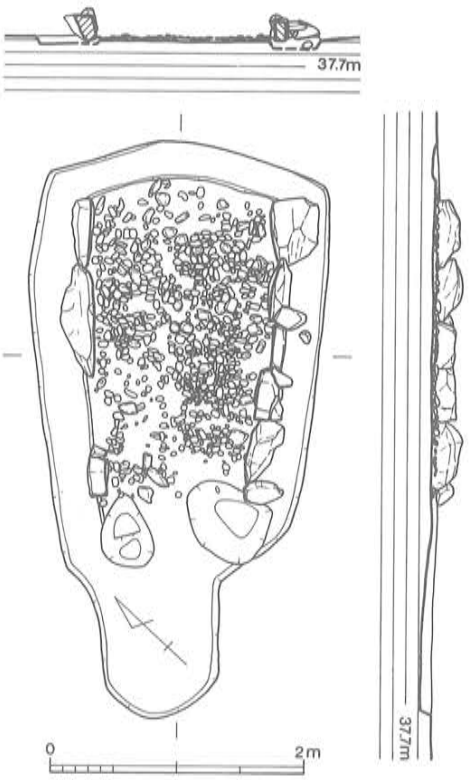


Fig. 35　13号墳石室実測図（1/60）

玄門　袖石は両方とも抜き跡しか残らない。復原で幅60cmほどであったろう。

前庭部・墓道　前庭部の石材はない。墓道は石室掘り形に長さ1.1mが取り付く。

出土遺物（PL. 19, Fig. 39, 85）

土師器（PL. 19, Fig. 39-1～4）のほか、縄文晩期土器や中世の土鍋・羽釜などがある。

土師器（1～4）　1・2はともに高坏であり、1の坏部は接合部分の外面が突帯状になる。2の脚部は須恵器を模倣しており、裾部径12.4cm。透しはない。3は土鍋の玉縁状になった口縁部の破片。4は羽釜の鍔部分で下面には煤が付着する。

石器（Fig. 85-43）　周溝出土の砂岩製砥石である。荒砥としてよいだろう。赤茶色を呈し、厚さ1cm。

土器は1・2は周溝内、3・4は石室周辺から出土した。6世紀前半～中頃の築造であろう。

14号墳（PL. 20, Fig. 33・34, 36）

13号墳の北東にあり、北西に開口する主体部をもつ。調査前は石室の北西部から西方にかけて小高くなっており、そこに近世墓の墓標が転がっているという状況であった。残存の小高い所に墳丘の一部が遺存していたのかもしれないが、そこには砂利や近世の陶磁器類が多数含まれていた。結果的に石室の西方には近世墓7基が検出された。

周溝　主体部の背後の東方から南方にかけて三日月状に巡らされている。幅はあまり広くなく浅い。南西端は13号墳の周溝と0.5mしか離れていない。外周は径が11.3m、内周は9.0mに復原されるが、その中心は石室のやや南西にある。土師器の破片が出土したのみである。

石室　北西に開口する単室で両袖の横穴式石室である。遺存状態はよくない。

石室掘り形　特に北側については不明点が多いが、幅2.7m、長さ3.5mの長方形プランであったと思われる。

玄室　奥壁は抜き取られているが、もとは2～3個が立ててあったものと思われる。側壁は両方とも扁平石の平積みで、北側壁は最下段に5個を置き、壁体の玄門側は床面より高さ0.5mまで遺存する。南側壁は最下段4個のみ遺存し、壁体はほとんど除去されている。両側壁とも胴張りが著しい。床面規模は推定を含めて、奥壁幅1.8m、玄門側幅0.9m、最大幅1.85m、長さ2.95mを測る。主軸方位はN-114.5°-E。床面には大小の扁平石が敷かれていたが、多くはすでに除去されていた。南側壁に近い玄門寄りの所で鉄斧が出土している。埋土中には土師器、瓦質土器、縄文晩期土器片があった。

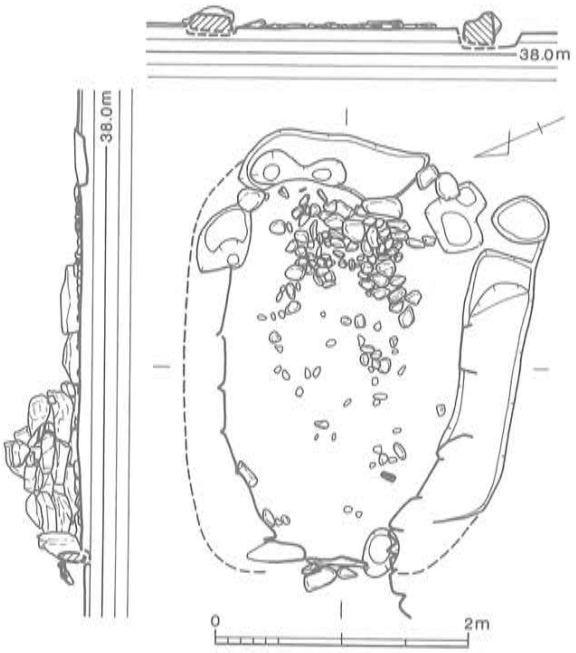


Fig.36　14号墳石室実測図（1/60）

玄門　北側の袖石は据えたまま残るが、南側は抜き跡があった。長さ50cmの框石が置かれている。

前庭部　南側に2個の石が貼石状に置かれている。北側は不明である。

墓道　玄門前面北側には石室に使われていたと思われる石材がL字形に置かれていた。墓道の構造は不明である。

出土遺物（PL. 34, 35, Fig. 39, 58, 61）

土師器、鉄器のほかに縄文晩期土器、陶器・磁器、瓦質土器、土錘等がある。

土師器（7～9）　7は甕の口縁部片である。少し肩の張る器形になるらしい。8・9は糸切り底の小皿で、8は二次熱を受けている。8の口径7.2cm、底径4cm、器高1.5cm。

須恵質土器(10)　東播系のこね鉢の口縁部である。断面三角形の外端部は黒灰色をなす。

瓦質土器(11)　器壁の厚い壺形の土器で、内外面に刷毛目を施す。少し小さいが火鉢であろうか。

陶器(12～16)　12は鉄釉の掛かった壺の肩部で、指で押さえて刻みをつけた突帯が貼り付けてある。13は無釉の甕の口縁部片。14は壺の底部で一部に露胎がある。底径4.8cm。15は玉縁状口縁の摺鉢。16は糸切り底の無釉の壺で底径7.3cm。

磁器(17～20)　17・18は龍泉窯系の青磁片で、18の底径4.9cm。19は白磁の皿。底部付近は露胎となる。20は半磁器と称すべきもので、底部は分厚い。底径3.7cm。

鉄器（PL. 34, Fig. 58-103）

斧　玄室床面からの出土。全長11.2cm、刃部幅4.6cm、袋部内径1.5×1.9cmを測る。　（吉田）

土製品（PL. 35, Fig. 61-4）　墳丘周辺から出土した土錘である。ごく一部を欠損するが全体はわかる。長さ32.5mm、最大径12mm、孔径2.9mm、重さ3.7g。齧歯目動物の歯痕が付いている。

以上のうち鉄器を除いて全てが墳丘周辺から出土したものであり、7以外は13世紀以降近世までの所産である。確実に古墳に伴うものとして周溝内出土の土師器甕の破片があるが図示できなかった。7の時期比定は難しいが、石室構造等も勘案して6世紀中葉頃の築造と考える。

15号墳（PL. 21, Fig. 33・34・37）

14号墳の北側にあり、西に開口する石室をもつ。

周溝　南側に約半分が巡らされている。これも幅は狭く浅い。復原で外径9.6m、内径9.3mとなるが、内径の中心は石室中心とほぼ一致する。土師器の小破片のほか縄文晩期土器が出土している。

石室　西に開口する単室で両袖の横穴式石室である。遺存状態はよくない。

石室掘り形　石室が納まるだけの幅最大3.0m、長さ3.5mの五角形状プランを呈する。

玄室　北側壁4個、南側壁5個の腰石が残るのみで、奥壁は全て抜き取られている。床面規模は推定を含めて、奥壁幅1.8m、玄門側幅1.05m、最大幅1.9m、長さ2.3mを測る。主軸方位はN-100°-E。床面プランは両側壁ともかなりの胴張りとなる。敷石は北東端を除いてよく残っている。出土遺物はない。

玄門　両袖石ともに抜き取られているが、幅は約50cmに復原される。

前庭部　貼石等もなく全て不明である。

墓道　石室掘り形から外へ接続する墓道は見られない。斜めに取り付いていたものだろう。

なお、この石室の北側に幅2m、長さ3mで、深さ0.4m程の長方形プランの土壙がある（ＳＸ２）。この中には片岩石材等が入っており、おそらく石室を破壊する時に石材を投入するために掘られたものであろう。

出土遺物としては周溝内に土師器甕の破片と縄文晩期土器片があったが、図示不可能である。古墳の築造時期については石室構造等から6世紀中葉前後と考えたい。

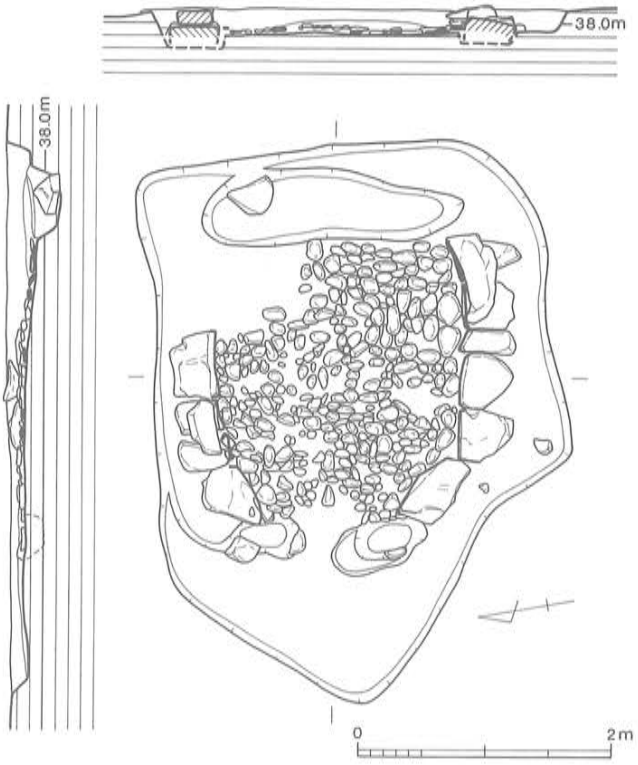


Fig. 37　15号墳石室実測図（1/60）

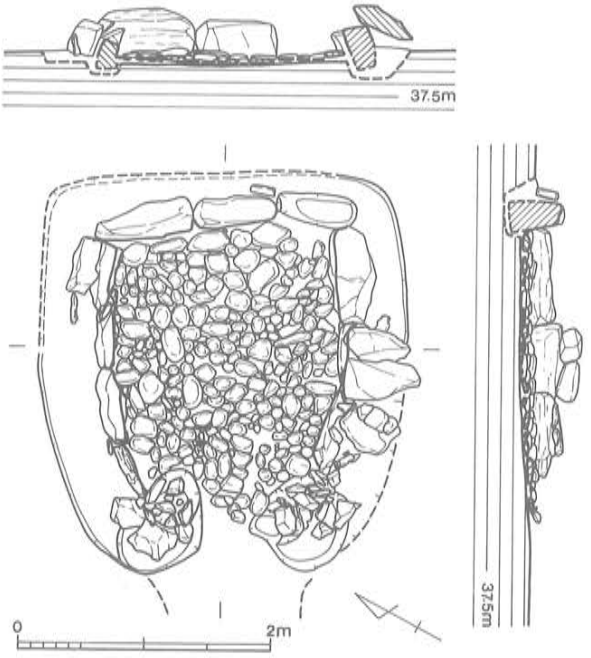


Fig. 38　16号墳石室実測図（1/60）

16号墳

（PL. 22, Fig. 33・34, 38・39）

13号墳の北方、14号墳の北西にあり、

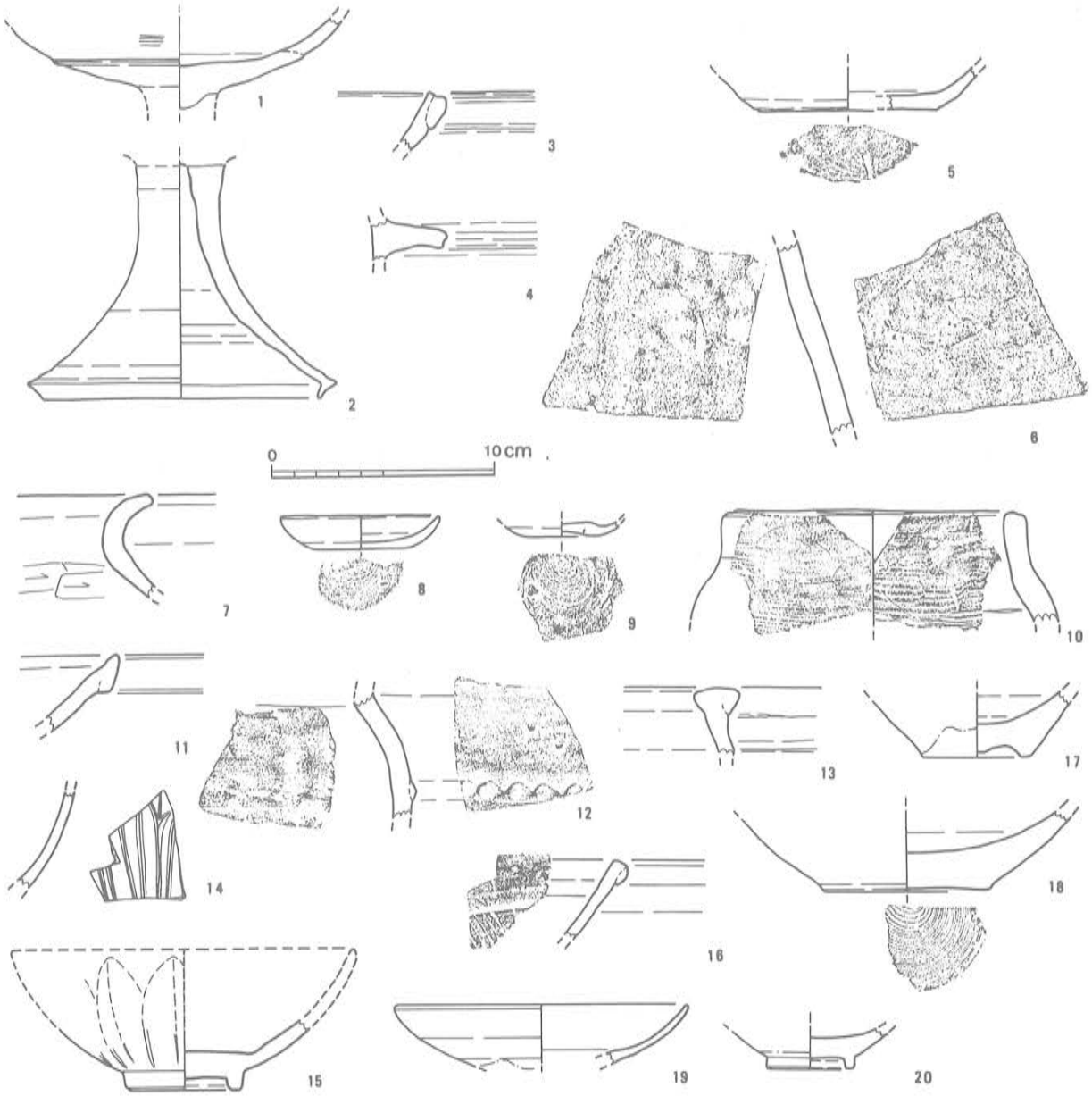


Fig.39　13～16号墳出土土器等実測図（1/3）

西に開口する石室をもつ。ＳＤ２に切られている。

周溝　調査区外の南側に巡っていた可能性もあるが、調査区内では検出されなかった。

石室　西に開口する単室両袖の横穴式石室である。

石室掘り形　幅2.9m、長さ3.7mまではわかるが、墓道側が攪乱され不明であった。

玄室　奥壁はもと３個の腰石が２個のみ残り、両側壁はいま南側が３個しかないが、本来はともに４個を据えたものと思われる。玄門寄りの１個は内側へ急に入り込んでいるが、これは検出時に動いたものである。床面規模は奥壁幅1.7m、玄門側幅1.35m、最大幅1.83m、長さ2.15mに復原されるものの玄門側の幅は明確ではない。主軸方位はN-62°-E。両側壁の床面プランの弧線の交点を結ぶと石室の中軸線とほぼ一致している。床面にはやや大きめの扁平安山岩・頁岩を敷いており、南側の方の床面レベルが高い。石室周辺から土師器のほか縄文晩期土器、中世陶器が出土している。

玄門　袖石は抜き取られているが、抜き穴内には根石が入っている。幅は約60cmに復原される。
前庭部・墓道　ともに不明である。

なお、奥壁より東側のＳＤ２内には石材多数が入っており、壊した石室のものであろう。

出土遺物（PL. 22, Fig. 39）

土師器（５）　糸切り底の坏で復原底径7.8cm。

陶器（６）　内外茶色～茶褐色をなす常滑産の甕胴部片である。

古墳の築造時期にかかる遺物はなかったが、石室構造等も勘案して６世紀中葉頃と捉えたい。

17号墳（PL. 23. 24, Fig. 40）

Ｉ区の北東端に検出した古墳である。西に開口する石室をもつ。調査前には田圃の中に南北90cm、東西100cmで、高さ25cmの方形石組みがあり、その中央には高さ20数cmの石が西向きに立ててあった

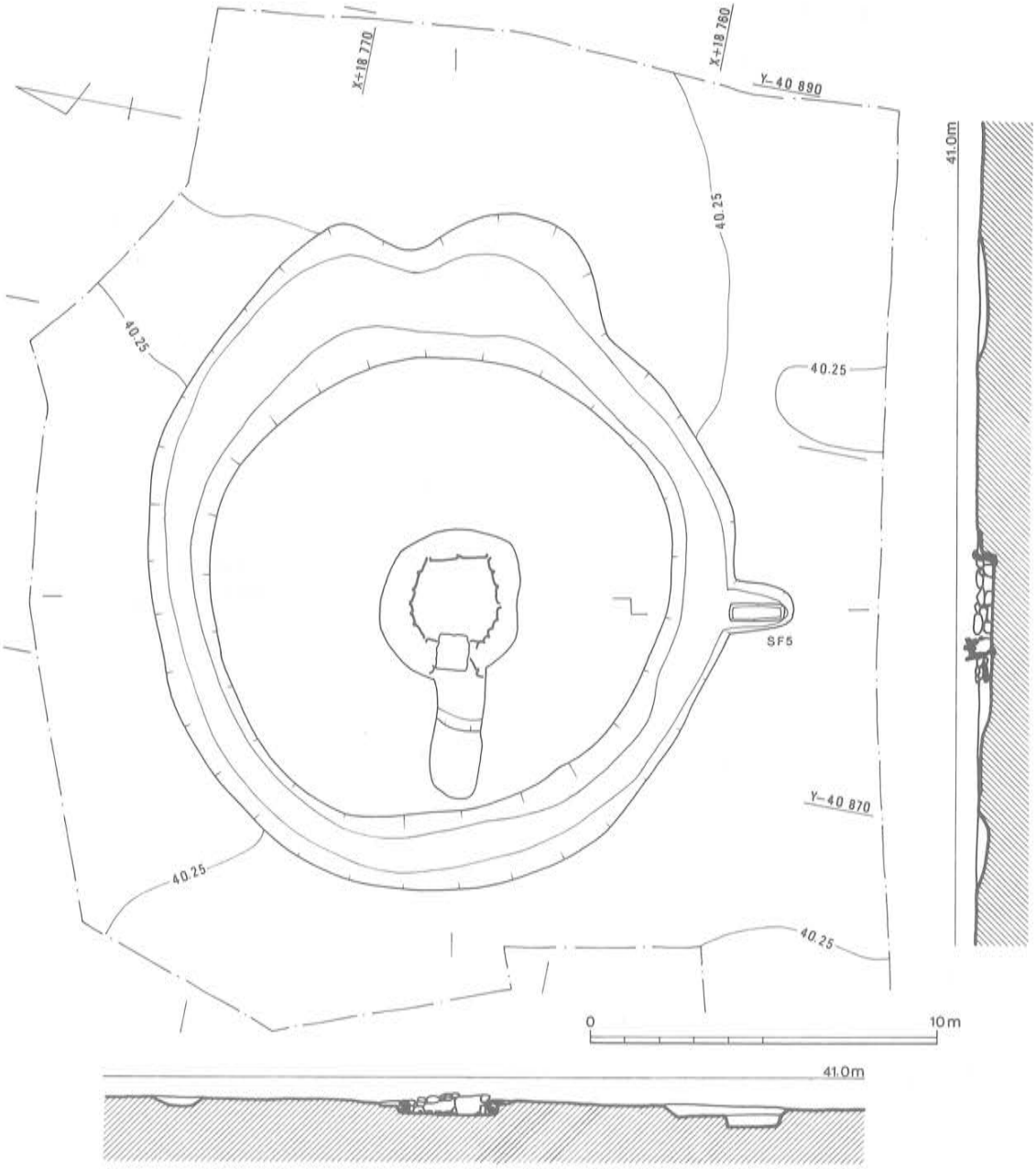


Fig. 40　17号墳地形図（1/200）

（ＳＳ１）。文字こそ刻んではないが、何かを祀ってあったのは確かであった。地元の人たちから“このあたりに塚があったが壊してしまった”と聞いていたが、果たしてこの石組みを除去するとその下から石室が現れたのであった。ＳＳ１は玄門から前庭部の直上に築かれていたものである。

周溝　全周しているが、東側が波状になったりしている。外径は南北16.8m、東西18.4m、内径は

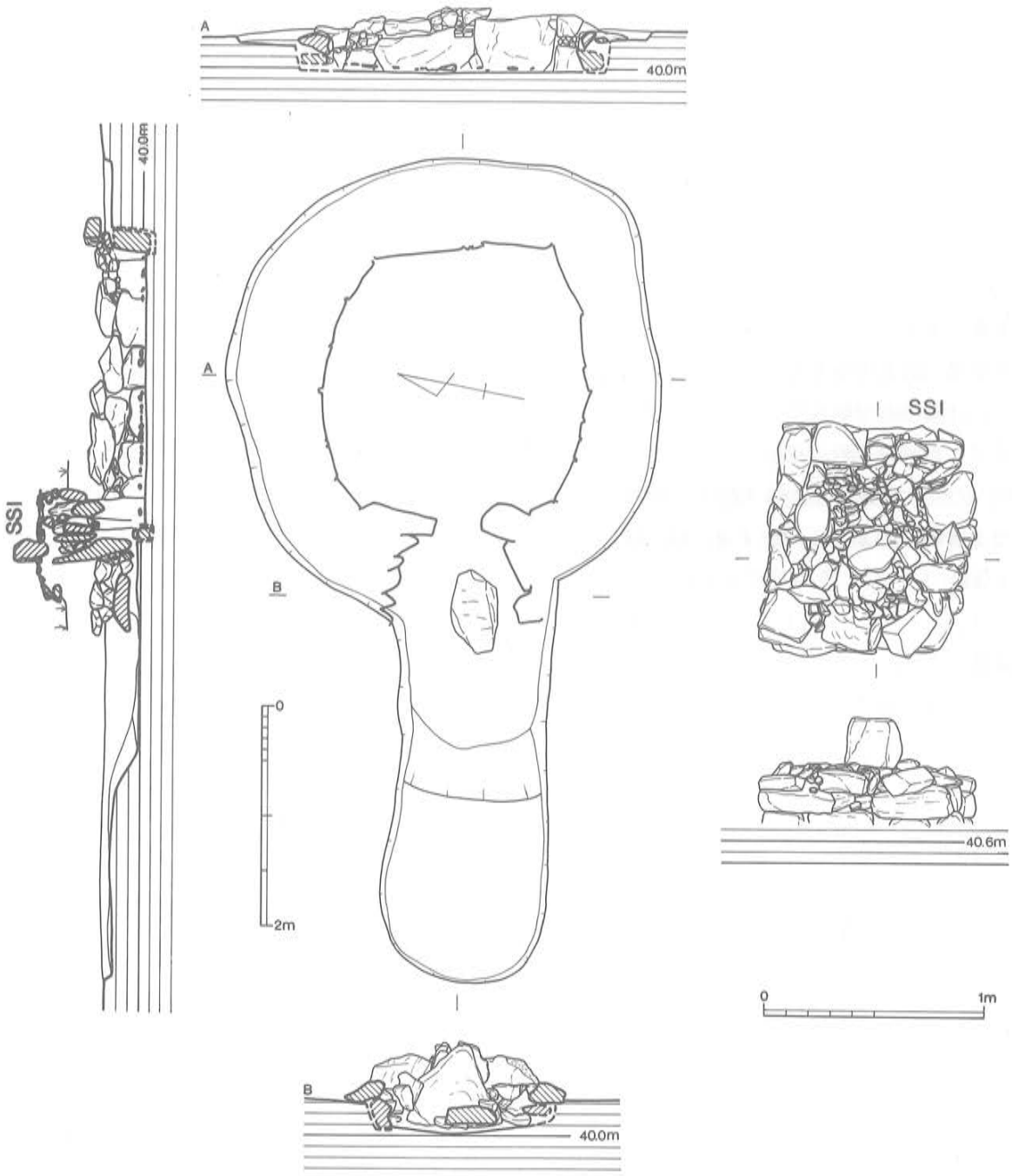


Fig.41　17号墳石室・ＳＳ１実測図（1/60・1/30）

13mを測る。内周・外周ともその円の中心は石室の北東隅に近い所に求められる。また、南側には外周を突起させてそこにＳＦ５が造られている。土師器のほかに中世の土師器と弥生後期土器が出土している。

石室　西に開口する単室両袖の横穴式石室である。

石室掘り形　玄室のプランにあわせるように幅3.9m、長さ4.2mの隅円方形のプランをなし、それに墓道が取り付く。

玄室　奥壁２個、北側壁６個、南側壁８個を腰石に据え、その上に片岩を平積みもしくは小口積みする。壁面は床から50cmほどが残るのみである。床面プランは胴張りが著しく、とくに北側壁は強く張り出す。床面規模は奥壁幅1.6m、玄門側幅1.55m、最大幅2.35m、長さ2.45mを測り、主軸方位はN-80°-E。床面には敷石があったが、かなり動かされており、青磁碗の破片が出土していることからすると、その頃に盗掘されたのであろう。壁面も敷石も赤色顔料が塗られていた。

玄門　両袖石が立っており、その幅は40cmを測る。框石は前庭部に近い方に置かれていた。この袖石を除去しきれなかったことから、この直上に石組みを祀ったのであろう。

閉塞　大きな扁平片岩を立てて閉塞が行われていた。

前庭部　南北両側ともに貼石状に石が置かれ、残存する最上段の石は墓道上面にかかっている。床面には扁平石が倒れていた。

墓道　石室掘り形に接続して幅1.3～1.5m、長さ3.5mの墓道が取り付いている。途中に20cmほどの段がつく。石室周辺から土師器、青磁、陶器、土錘、渡来銭などが出土している。

出土遺物（PL. 24, 35, Fig. 42, 61）

土師器（１～３）　１は坏で外底部は糸切りらしい。２は瓦質に近いものであるが器形不詳。３も器形不詳。

磁器（４～６）　４は陶器質の碗で、内面見込みの砂目あとからして高麗青磁と思われる。底径４cm。５・６は龍泉窯系の青磁片で、６の復原口径16.4cm。５も鎬連弁が入るらしい。

１は周溝内、２～４は石室周辺、５は石室上位にあったＳＳ１内、６は石室内から出土した。

土製品（PL. 35, Fig. 61-５）　石室周辺から出土した土錘で欠損している。現存長35.4mm、最大径11.3mm、孔径４mm、重さ3.8g。

渡来銭（PL. 35, Fig. 61-７）　石室周辺出土の北宋銭「明道元寶」である。初鋳年は1032年。少し歪んでいるが径22.5mm、孔の一辺6.2mm。

古墳の築造時期にかかわる遺物はないが、石室構造等からみて６世紀中葉～後半と考えられる。

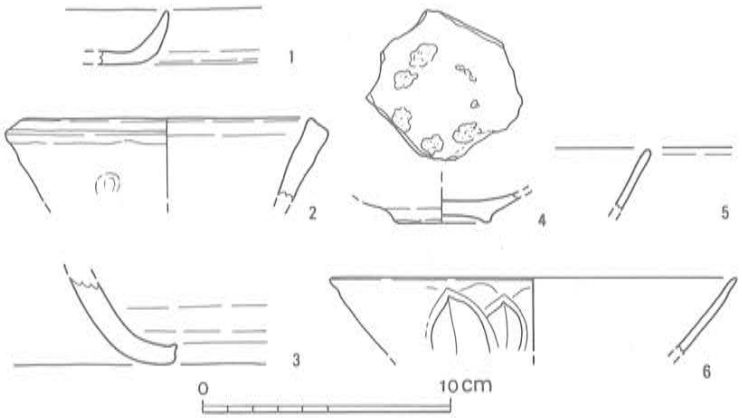


Fig. 42　17号墳出土土器等実測図（1/3）

2 石棺墓

古墳に従属するものとしてⅠ・Ⅱ区に7基の石棺墓があった。石棺というよりは竪穴式石室の下部にあたるものもあるようだが、ここでは石棺として報告する。

1号石棺墓〈C 1〉(PL. 25, Fig. 43)

2・3号墳の中間の南側にある。掘り形は幅155～175cm、長さ305cm長方形プランで、その中に両小口石として1個ずつの石材を立て、側壁は4個ずつを置いてその上にも壁体としての石材を積んでいるので石棺系の竪穴式石室とも捉えられるが、いまは石棺としておく。西小口部の南側は小口石の幅の足りない分を別の石材の小口部分で補っている。石材は全て丸みのある石英片岩である。床面は小口幅55～58cmで東側がやや広いので頭位は東であろう。長さは187cmで、深さは最高34cmが残る。主軸方位はN-97.5°-E。出土遺物はない。2号墳に伴うものと考えられる。

2号石棺墓〈C 2〉(PL. 25, Fig. 43)

4号墳の北西にある。掘り形は幅135cm、長さ216cmの長方形プランである。両小口石は1個ずつの石材を立て、側壁は3個ずつを置いてその上にも壁体としての石材が部分的に残っているので石棺系の竪穴式石室とも捉えられるが、これもいまは石棺としておく。C 1と同じように東小口部の南側は小口石の幅の足りない分を別の石材の小口部分で補っている。石材は全て緑泥片岩である。床面の小口幅33～50cmで東側が広い。長さは120cmで、深さは最高22cmが残る。主軸方位はN-103.5°-E。棺内からの出土遺物はないが、掘り形内に縄文早期土器があった。4号墳に従属するものと考えられる。

3号石棺墓〈C 3〉(PL. 25, Fig. 43)

6号墳と9号墳の中間、やや6号墳に近い方にある。掘り形は幅100cm、長さ150cmの長方形プランである。両小口石は1個ずつの石材を立てるが、東側のそれは抜き跡のみである。側壁は2個ずつを置く。床面は小口幅32～43cmで東側が広い。長さは105cmほどであったろう。深さは最高22cmが残る。床面には扁平石が敷きつめられていた。主軸方位はN-52.5°-E。位置関係から6号墳に従属するものと考えられる。

4号石棺墓〈C 4〉(PL. 26, Fig. 43)

12号墳の南東にある。幅18～30cmほどの溝状の掘り込みがコの字状に検出され、南側壁にあたる所に片岩の小石材片があったので、これを石棺石材の抜き跡として捉えた。掘り形プランは検出できていない。西側小口石の抜き跡も見られないが、復原すると床面の幅65～70cm、長さ180cmほどであったと思われる。主軸方位はN-85°-E。出土遺物はない。12号墳に伴うものと考えられる。

5号石棺墓〈C 5〉(PL. 26, Fig. 43)

12号墳の北西にあり、掘り形の一部は調査区外にかかる。掘り形は幅155～170cm、長さ200cm以上の長方形プランである。両小口石は1個ずつの石材を立てていたはずであるが、西側のそれは除去されていた。側壁は北側4個、南側5個が残る。北側壁はその上にも壁体としての石材が積まれた

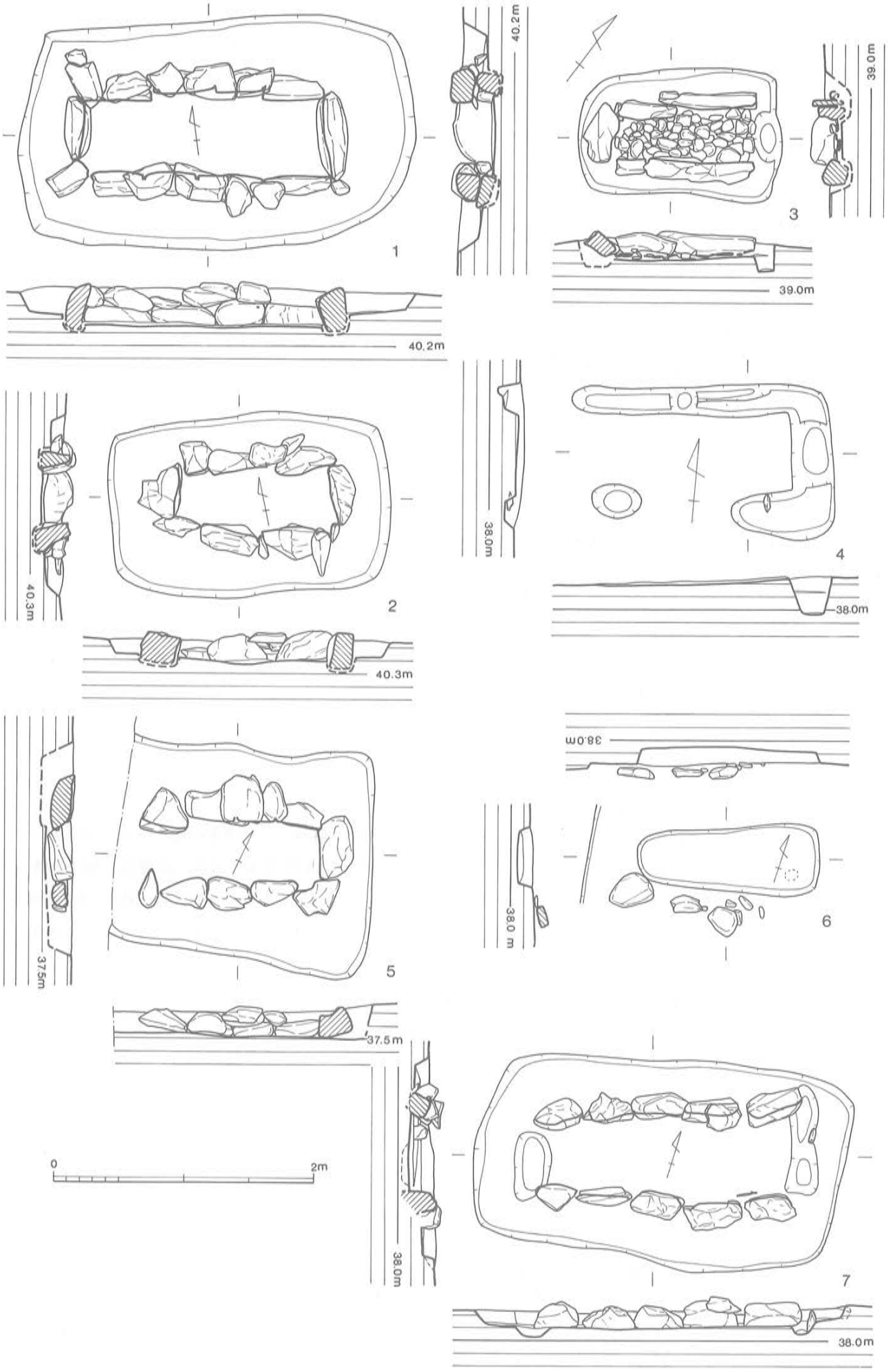


Fig.43　1～7号石棺（C 1～7）実測図（1/40）

部分があるので石棺系の竪穴式石室とも捉えられるが、これもいまは石棺としておく。石材は片岩と安山岩・玄武岩が使われている。床面の幅40～45cm、長さは138cm以上で、深さは最高22cmが残る。主軸方位はN-65°-E。出土遺物はない。12号墳に従属するものと考えられる。

6号石棺墓〈C 6〉（PL. 26, Fig. 43）

13号墳の南西、7号石棺墓の南にある。石棺墓とするよりは土壙墓とした方が正しいかもしれない。本体以外に掘り形ラインは明確には見えない。土壙の床面は小口幅30～47cmで東側が広く、レベルも東側が高い。長さは134cm、深さは最高14cmが残る。東小口部付近には黒色土が、それ以外には淡茶褐色土が埋土としてあった。この南側に河原石等が数個散在しており、これが石棺石材の名残りの可能性があるとして石棺墓としたが、断定できるものではない。主軸方位はN-72°-E。床面東端に近く鉄鏃が、周辺から土師器、縄文晩期土器等が出土している。所在場所からして13号墳に従属するものと考えられる。

出土遺物（PL. 34, Fig. 59-104～107）

鉄鏃　104の身部は縦長の三角形で、深い逆刺を有する。箆被はやや広がり、鋭角に細くなる。頸部に樹皮の沓巻・木質が認められる。105・106はほぼ同じタイプである。身部は鋒長の長い圭頭形で箆被は付かない。頸部に幅5mm程度の樹皮の沓巻・木質が残る。107は片刃で逆刺を有する。

（吉田）

7号石棺墓〈C 7〉（PL. 27, Fig. 43）

13号墳の南西、6号石棺墓の北にある。掘り形は幅150cm、長さ285cmの長方形プランである。両小口石はともに石材が抜き取られているが、側壁はともに5個ずつの石材を立てている。北側壁の一部にはその上にも壁体としての石材を積んだ所があり、石棺系の竪穴式石室とも捉えられるが、いまは石棺としておこう。床面の小口幅46～62cmで東側が広い。長さは約200cmに復原され、深さは最高23cmが残る。主軸方位はN-73°-E。床面東端に近い南壁寄りにく鉄刀子が出土している。所在の場所からして13号墳に従属するものと考えられる。

出土遺物（PL. 34, Fig. 59-108）

鉄刀子　鞘口金具が装着された状態で出土した。刃部は研ぎ減りのため細くなる。　（吉田）

3 焼土壙

壁面が焼けていたり、床面にて炭化物が出土するなどした素掘りの土壙である。I区内から5基が検出された。SF 3のそばのSP 1をもって古墳に従属するものと考えているが、他に土器の出土がないので時期は断定できない。あるいは縄文時代の所産の可能性もないではない。

1号焼土壙〈SF 1〉（PL. 27, Fig. 44）

8号墳の北方、調査区境界付近にある。床面プランは整然とした形状をなさないが、最大幅57cmで北側が広くなる。長さは153cm。深さは最高25cmが残る。主軸方位はN-22°-W。床面に量は多くないが木炭がある。壁面は焼けた所もあるがそれほど顕著なものではない。所在場所からするとかなり離れてはいるが8号墳に従属するものとしておく。出土遺物はない。

2号焼土壙〈SF 2〉（PL. 27, Fig. 44）

12号墳主体部の南方、周溝と一部重複して検出された。その北端部が周溝に切られているようにも見えたが明確ではなく、先後関係は把握できなかった。縄文晩期の4号住居跡の中央付近にも位置していることになる。床面プランは丸みのある長方形としてよく、最大幅43cm、長さ140cm。深さは最高19cmが残る。主軸方位はN-27.5°-W。西壁がよく焼けていた。ごく一部の重複関係があるにしても12号墳に従属するものとしておく。出土遺物はない。

3号焼土壙〈SF 3〉（PL. 28, Fig. 44）

12号墳主体部の北西方にて、周溝の外周線が突出した中において検出された。このSF 3の掘り形ラインは見えず、周溝埋土の黒色土を追いかけていった結果として検出されたので、切合いの見落としではなく、すなわち先後関係があるというのでなく、周溝を拡張した中に築いているものと捉えたのであった。長方形プランの南西コーナーは甕を埋置した小ピットのSP 1に切られた状態であ

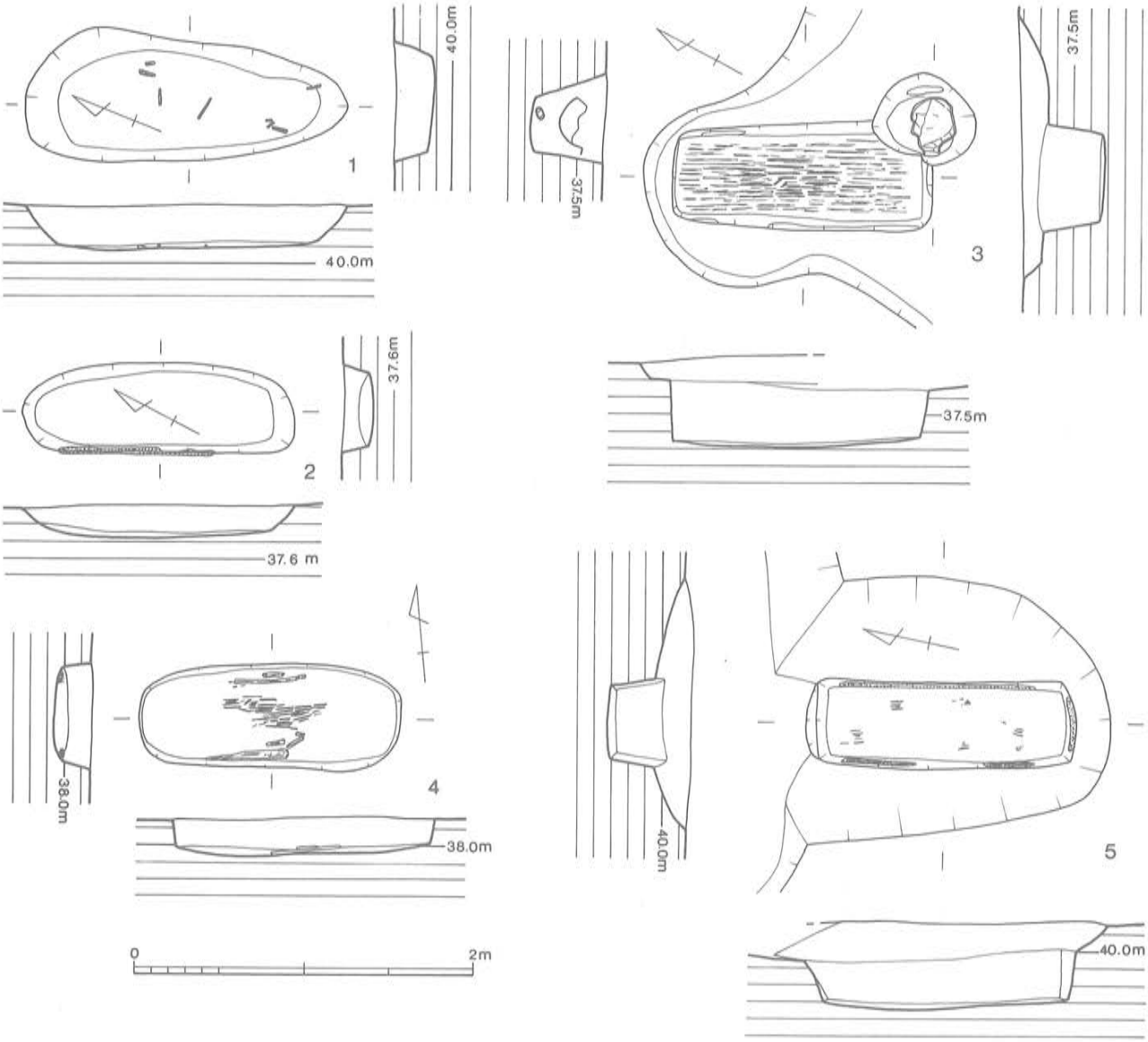


Fig. 44　1～5号焼土壙（ＳＦ１～５）実測図（1/40）

るが、これも面的には先後関係を確認できなかった。床面は幅45～51cmで南側が広く、長さは144cm。床面レベルは南側の方が高い。深さは最高37cmが残る。主軸方位はN-28°-W。床面には細い竹材が炭化して残っていた。壁面は四周ともに焼けていた。すり石と黒曜石破片が出土している。

出土遺物（PL. 43, Fig. 85-39）

すり石で幅8.2cm、長さ5.5cm以上の半欠品である。中央にごく僅かに窪む所がある。

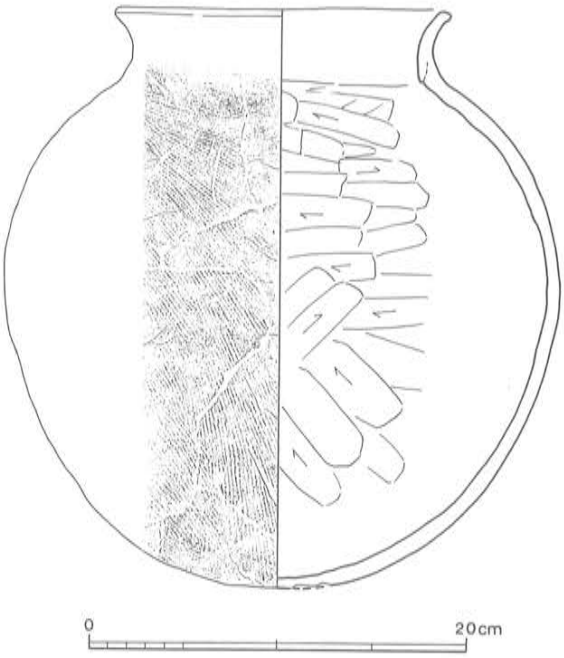


Fig.45　3号焼土壙（ＳＦ３）出土土器実測図（1/4）

SP 1

上述のようにSF 3を切るような格好になるが面的には確認できなかった。上面径52～58cm、底面径33～39cmの小ピットの中に片岩の河原石を置き、その上にそれとは接することなく土師器甕が横位置に埋置してあった。茶褐色土を埋土とする。東側壁面が焼けているので、これをみてもＳＦ３との同時性が推定される。

出土遺物（PL. 28, Fig. 45）

土師器の甕である。胴部は球形をなし、最大径はほぼ中位にある。胴部の外面は刷毛目、内面はヘラ削りである。口径18cm、胴部径29.5cm、器高35cmを測る。全体に二次熱を受け、外面には黒斑があり、また煤が付着している。

4号焼土壙〈SF 4〉（PL. 28, Fig. 44）

8号墳の北方にある。平面プランは丸みのある長方形で、床面で最大幅54cmを測り、東側が少し広くなる。長さは151cm、深さは最高21cmが残る。主軸方位はN-85°-W。床面の両側壁に沿って炭化した大きめの木材があり、中央には木の小枝と竹材があった。壁面は焼けていた。台石と縄文晩期土器片3点が出土している。

出土遺物（Fig. 85-38）

幅12cm以上、長さ12.8cm以上の硬砂岩の台石または砥石である。一側面には擦過痕がよく残っている。二次熱を受けた所、黒ずんだ所もある。

5号焼土壙〈SF 5〉（PL. 28, Fig. 44）

17号墳主体部の南方にて、周溝の外周線が突出した中において検出された。このSF 5と周溝との重複関係はつかめなかったので周溝を拡張した中に築いているものと捉えた。本体は長方形プランをなし、床面は幅38～40cm、長さは142cm。床面レベルは南側の方がごく僅かに高い。深さは最高30cmが残る。主軸方位はN-12°-W。床面には木及び竹材の炭化物があった。壁面は焼けている。出土遺物はない。

Fig. 46　8～12号住居跡・1～3号建物跡等周辺遺構図（1/200）

4 竪穴住居跡

Ⅰ区西北部に竪穴住居跡4軒と掘立柱建物跡3棟が検出された。

8号住居跡（PL. 29,30, Fig. 46～48）

12号墳の北西方にある。カマドを西壁中央に造りつけた方形プランの住居である。東西4～4.1m、南北4.3～4.65mを測り、カマドの中心を通る主軸はN-113.5°-Wを示す。四周壁の外側に浅い掘り込みラインが見られるが、これは検出時にみえていたものであるけれども、住居に付帯したものとは考えがたい。埋土は黒灰色土であった。床面には20個ほどの柱穴があるが、主柱穴はいずれとも決しがたく、いまは2案を示しておく。P1～P4は3×1.9m、P1′～P4′は2.2×2.3mの柱間距離となる。カマドを除いての床面積は16.4m²。東壁に近く台石らしい自然石があった。カマドは両袖下部が残り、支脚は遺存しない。須恵器、土師器、鉄鏃が出土している。6世紀後半代であろう。

出土遺物（PL. 30, Fig. 48,59）

須恵器(1～19) 1は坏蓋の破片。2～4は坏身で3のみ筥形に近い。2・3は口唇部に面をとる。口径は順に11.2cm、11.3cm、11.5cm。5は高坏の脚部で裾に近く円形透孔がある。5カ所に入るらしい。6～9は甕で、6は7の口縁部になるのかもしれない。7は肩部にヘラ記号を持つ。

土師器(10～19) 10・13・14は坏で精製品である。10の内面には籾圧痕がある。復原口径13cm。11の高坏は須恵器を模倣したもので、裾径11.5cm。12も須恵器を模倣したもので瓶の器形になるようだ。口径9cm。15・17～19は甕で、18・19は外面の粗々しい刷毛目など、つくり、調整等が同じであるが、胴部形態が異なることより別個体としておく。口径は18が17.4cm、19が19.8cm。16は甑の口縁部であろうか。

鉄器（PL. 34, Fig. 59-109）

鏃　頸部であり、篦被は膨らまず斜めに細くなる。　（吉田）

9号住居跡（PL. 29,30, Fig. 46～48）

8号住居跡の北西方にある。検出面では淡茶色土の入った長方形プランが見えて、それを掘り下げていくと須恵器・土師器の破片がいくつか出土したのでカマドが現れるかと思っていたところその痕跡もなかった。結果的には東壁から南壁にかけてL字形に段違いのベッド状の高まりがあり、南壁側には茶灰色土の入った不規則な落ち込みが見られたのであった。これは下層に古い時期の遺構があり、その上層に古墳時代の住居跡があったのをまとめて掘ってしまったものと思われた。東西両辺は3.2～4.2m、南北両辺は4.3～4.5mを測り、台形プランとなる。カマドはなく、主柱穴もはっきりしない。須恵器・土師器片以外に縄文早期・晩期土器、黒曜石・サヌカイト剝片が出土している。床面積は16.6m²。時期は特定しにくいが6世紀後半代に比定しておこう。

出土遺物（Fig. 48-20）

須恵器　甕の底部近くの破片である。内面の同心円当具痕は粗々しい。

10号住居跡（PL. 29,31, Fig. 46,49）

8号住居跡の北東方にあり、当遺跡では最も規模の大きい住居である。埋土は自然堆積の様相を示し、大きく2層に分かれて上層は黒色系、下層は黄色系の土であった。北辺中央と南西コーナー

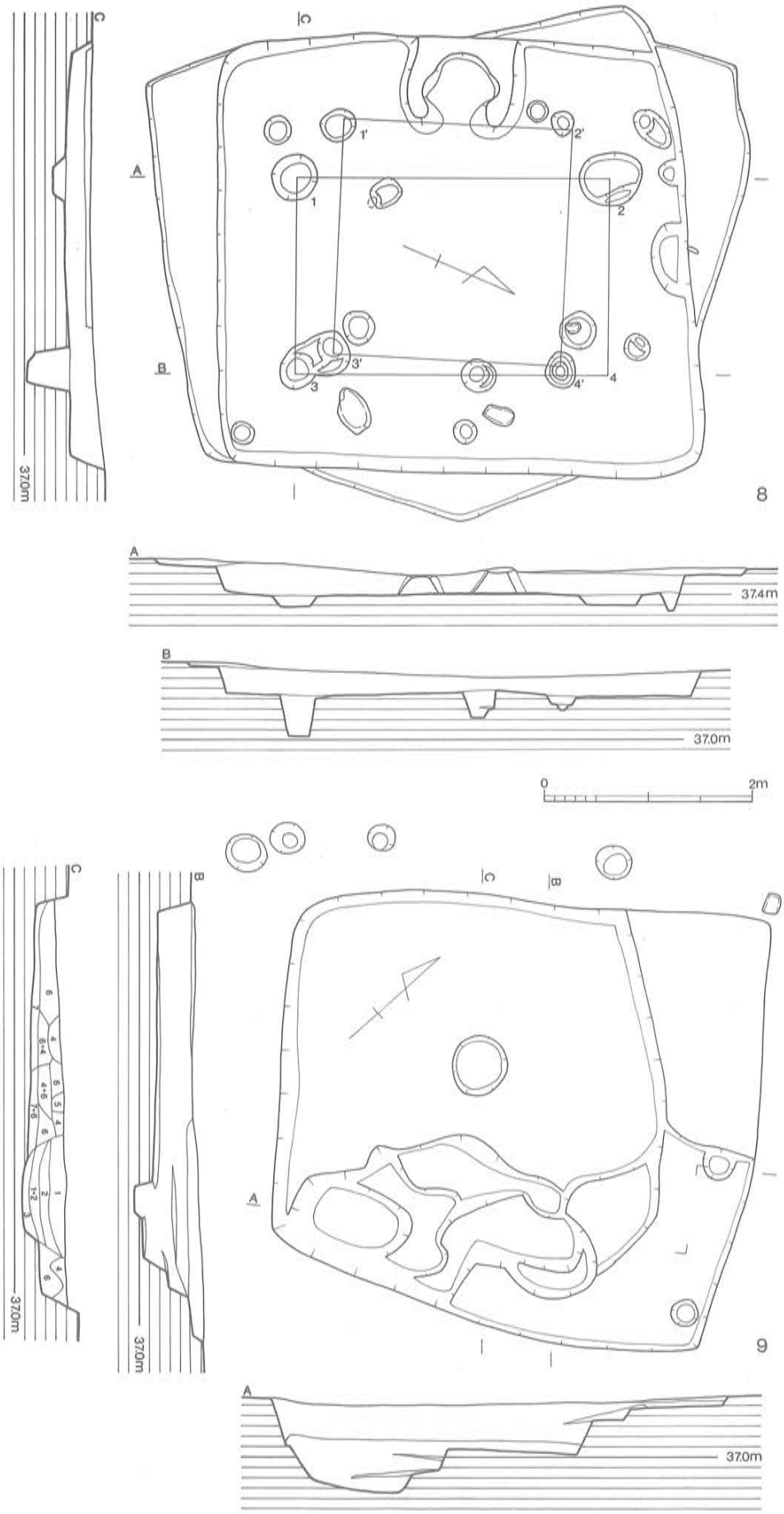


Fig. 47　8・9号住居跡実測図（1/60）

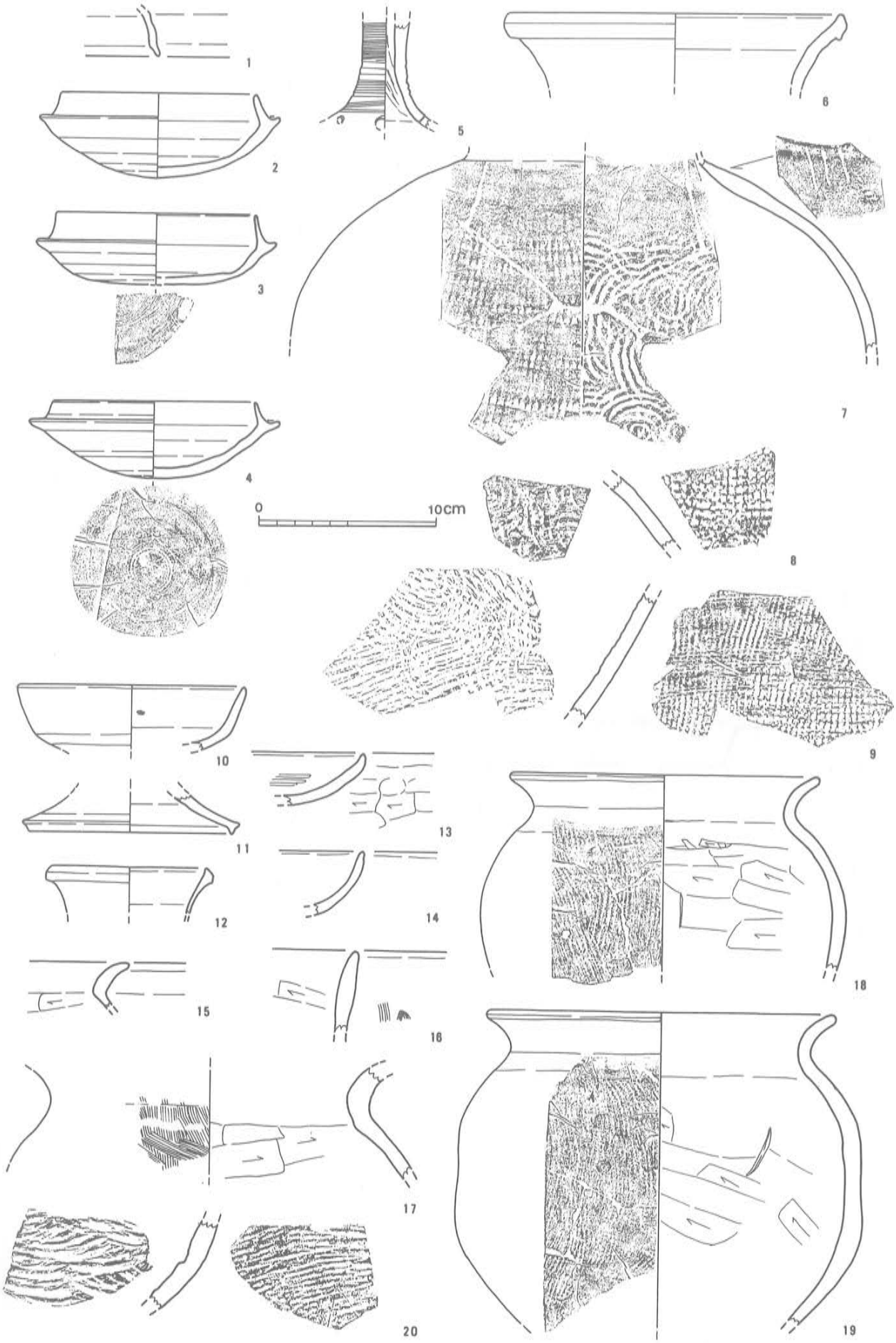


Fig. 48　8・9号住居跡出土土器実測図（1/3）

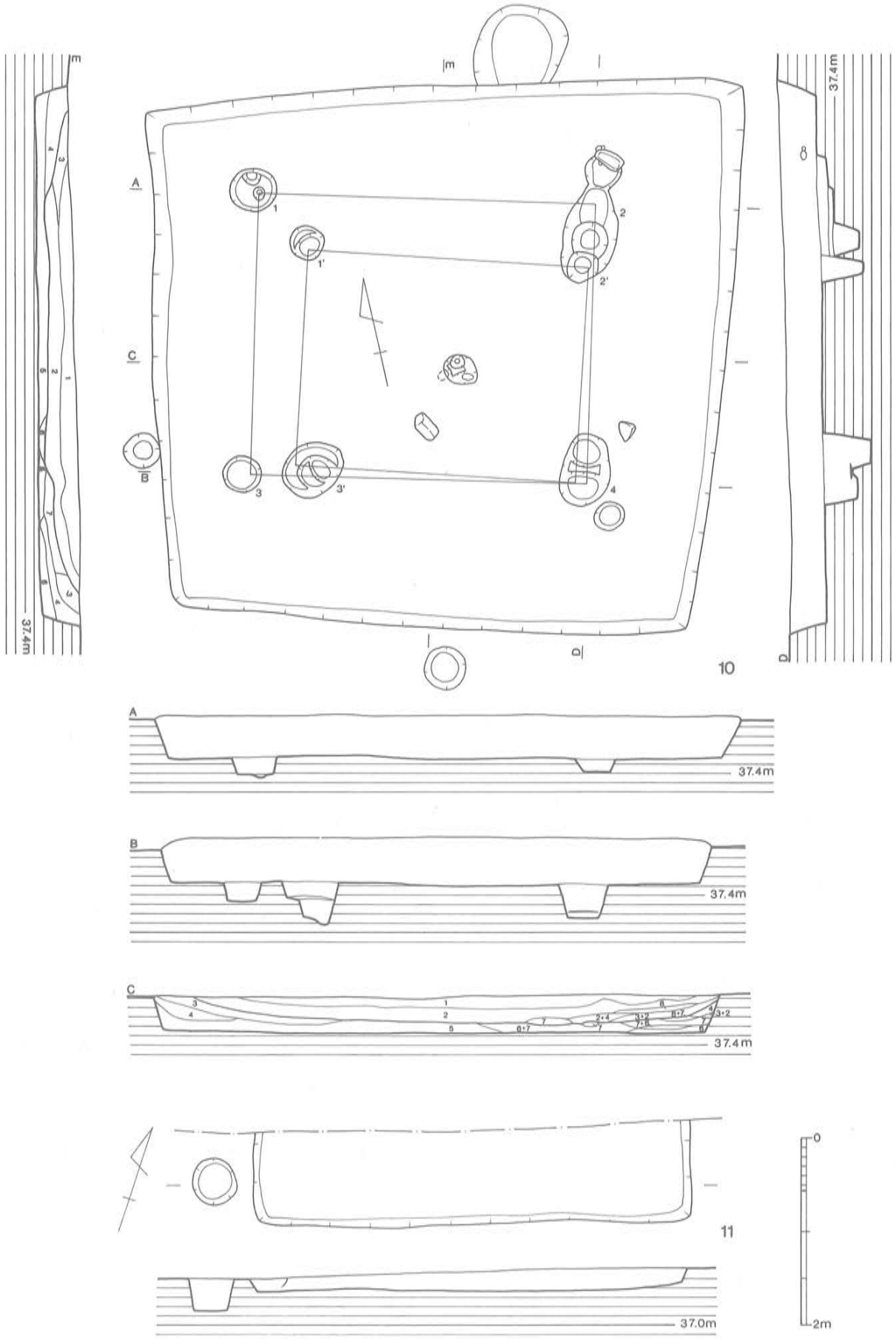


Fig. 49　10・11号住居跡実測図（1/60）

に焼土があったがそれはカマドではなかった。結果的にカマドは見られない。上面で東壁5.9m、西壁5.3m、南壁5.5m、北壁6.35mを測る方形プランをなす。床面の柱穴から4本主柱であることは間違いないが、2.3×3.0mと3.0×3.6mという最低でも二通りの主柱穴プランが捉えられるので、建て直しがなされているのだろう。主柱穴に囲まれた床面の中央に小ピットがあり、その中には焼土が入っていた。すぐ近くに作業台に使用したらしい石があるので、ここで何らかの作業がなされていたと考えられる。床面積は31.3m²。須恵器、土師器、鉄器、石器が出土している。6世紀後半代であろう。

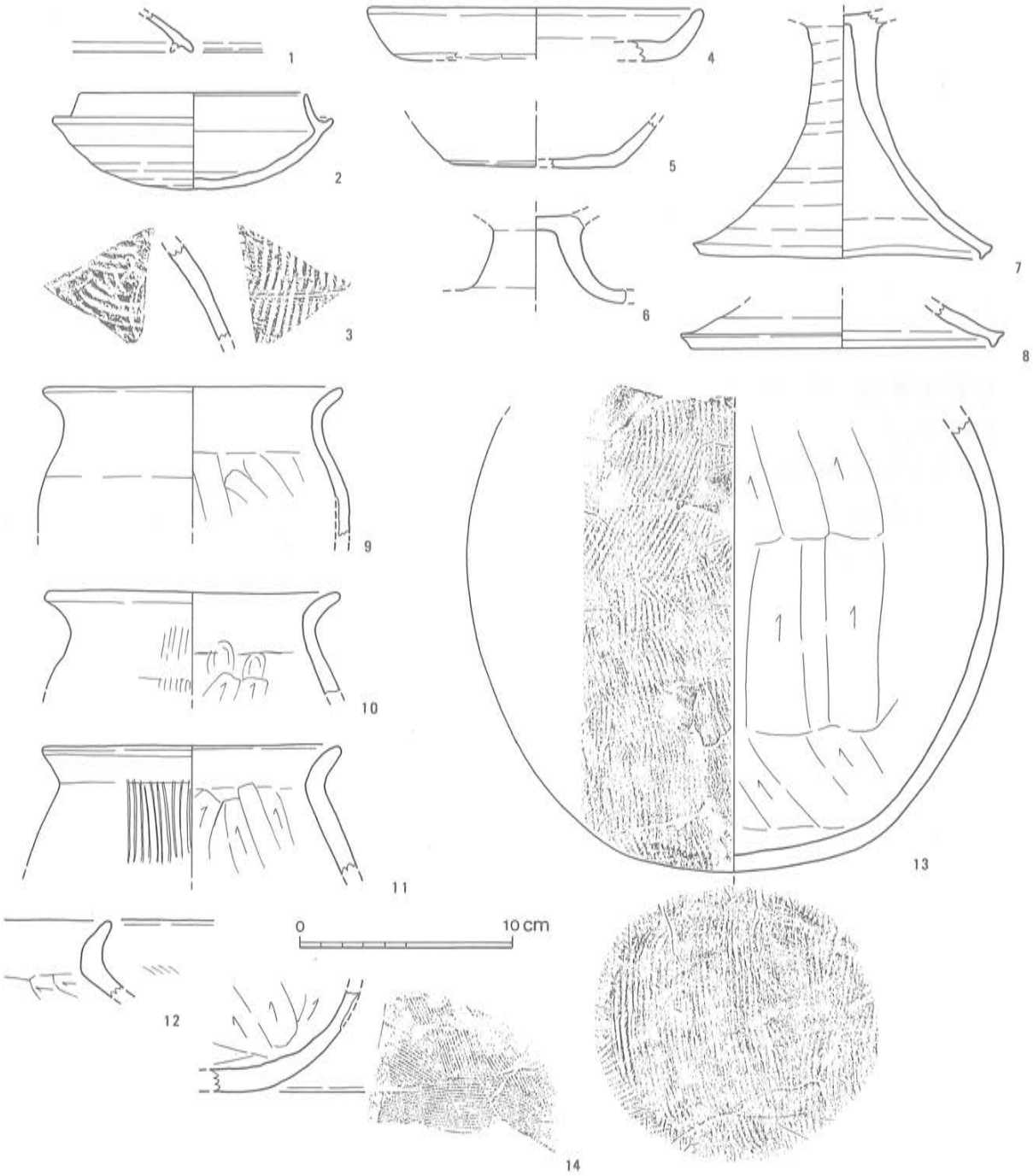


Fig.50　10号住居跡出土土器実測図（1/3）

出土遺物（PL. 31, Fig. 50）

須恵器（1～3） 1は身受けの付く坏蓋で生焼けである。2の坏身は口唇部に面をとる。口径10.8cm、器高4.5cm。3は甕の胴部片。

土師器（4～14） 4・5は坏で精製品である。6～8の高坏のうち7・8は須恵器を模倣したもので、7の裾径は14cm。6は脚台とすべきか。9～14の甕は12を除いて強い二次熱を受けている。13・14は底部がそれとわかるほどに平らな部分がある。11・13の外面の刷毛目は粗々しい。

鉄器（PL. 34, Fig. 59-110）

刀子 関は片側のみで、角をなさず緩やかなカーブを描く。埋土上層からの出土。（吉田）

石器（Fig. 85-45） 片岩の扁平な板状品で、四側面は自然面を残すが、短辺の端部は擦って面をとる。また長辺、短辺ともに紐をかけてすり切れた部分がある。長さ6.5cm、幅4.6cm、厚さ0.9cm、重さ49.3g。用途不明。

11号住居跡（PL. 29,31, Fig. 46,49）

9号住居跡の北にある。大半は調査区外にかかっており、南辺の4.7mがわかるのみである。方形プランであろう。主柱穴も不明である。出土遺物はない。

12号住居跡（PL. 29,32, Fig. 46,51）

8号住居跡の東北方にある。カマドを西壁中央に造りつけた、南北に長い長方形プランの住居であるが、カマドの外側に一段高い張り出し部がある。東西両辺は3.6～3.85m、南北は2.9～3.0mを測り、これに幅約1.2mの張り出しが付く。張り出し部のさらに西側にはやや深くなった土壙があり、住居に切られている。カマドの中心を通る主軸はN-127°-Wを示す。床面の主柱穴は4個であり、P3にあたる柱穴が少しずれているけれども1.4×1.7mの柱間距離になる。この主柱穴間から東壁にかけては礫群が見られたが、その意味はわからなかった。

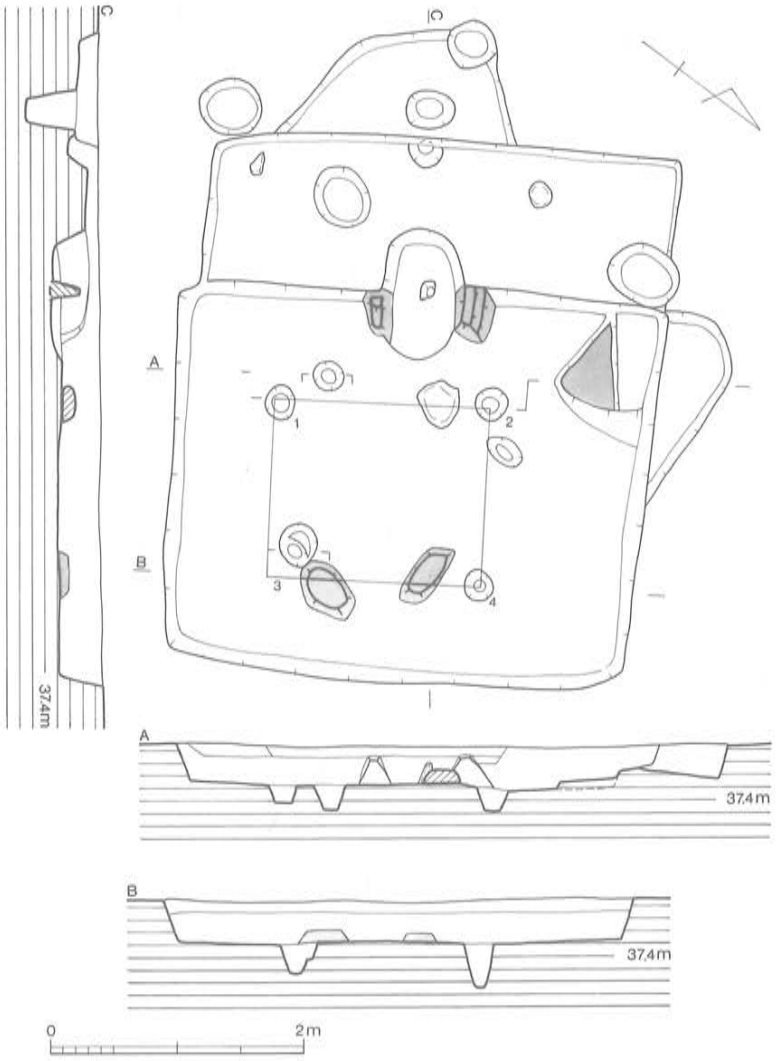


Fig. 51 12号住居跡実測図（1/60）

またＰ３・Ｐ４間には黄灰色粘土の塊があった。北西コーナー部には一部に粘土を使った段があり、住居への出入口となる階段であろう。カマドを除いての床面積は14.6m²。カマド前面に台石らしい自然石があった。カマド内には石の支脚が残り、その焼成部から先を突出させている。カマド内の崩落土中と支脚周辺には自然石の小石が多数あったが、この小石の意味もわからない。両袖は粘土にて造られる。須恵器、土師器、鉄器のほかに縄文晩期土器、弥生土器が出土している。６世紀後半代である。

出土遺物（PL. 32,34, Fig. 52,59）

須恵器(1)　この坏身も口唇部に面をとる。口径12.2cm。

土師器(2～10) 2は皿に近い。３・４の坏は精製品でともに化粧土を掛けている。４は口径12.6cm、器高4.7cm。５は高坏の坏部で、体部に低い突帯を持つ。口径18.1cm。６～８の甕のうち６はかなりひずみがあり、同一個体として底部付近の破片があるが、それは径8.5cmほどの穿孔があるらしい。

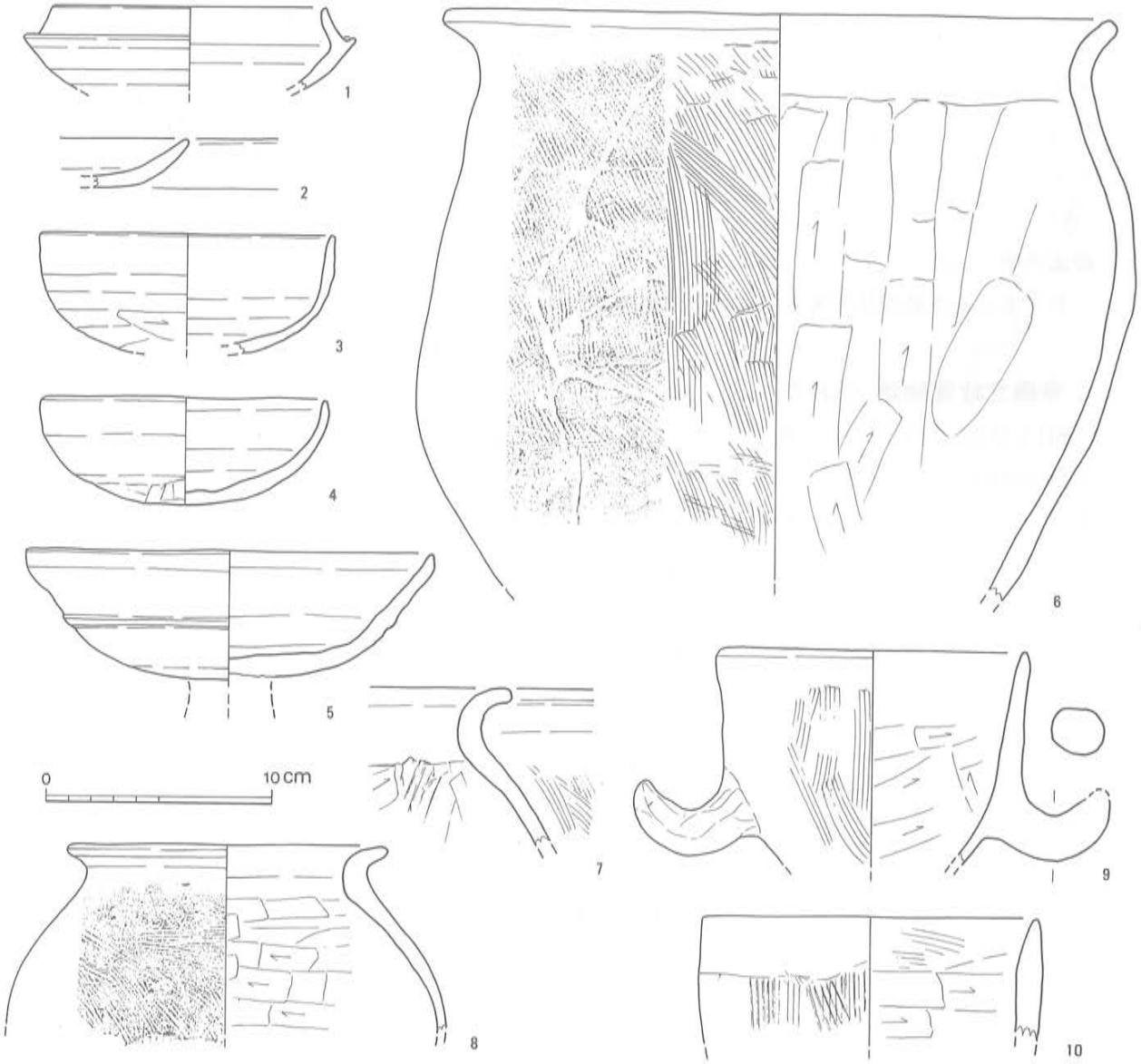


Fig. 52　12号住居跡出土土器実測図（1/3）

この土器はカマド内からの出土なので甑の役目を負っていたのかもしれない。口径30cm。8は復原口径13.7cm。9・10は甑であろうか。9には煤が付着している。

鉄器（PL. 34, Fig. 59-111）

不明品　刃部を有し、基部が曲がっている。茎部の曲がった刀子とも考えられる。床面出土。

（吉田）

5　掘立柱建物跡

竪穴住居群に囲まれたような状況で3棟を確認した。柱穴から弥生土器の出土したものもあり、またその位置関係からして2時期以上にわたることも確かであって、必ずしも古墳時代以降と限定できるわけではないが、ここで報告する。

1号掘立柱建物跡〈SB 1〉（PL. 29,33, Fig. 46,53）

12号住居跡の西北にある。2×2間の総柱建物で、南側と西側には幅25～30cmの区画用の浅い溝を巡らせる。柱穴のあり方からみて2棟の重複と考えられるので、それをA・Bとすると、ともに南北にやや長い建物である。Aは梁行3.4m、桁行3.2mで、梁行柱間は等間隔であるがP 9にあたる柱穴がずれている。Bは梁行3.0m、桁行2.9mで、P 4が少しずれることになる。この建て方で正しいかどうかわからないが、建物が立っていたことはまちがいない。主軸方位はA・BともにN-37°-Wになる。P 2から弥生土器、P 3から土師器が出土した。6～7世紀代であろう。

出土遺物（Fig. 55-1）

P 3出土の土師器坏である。精製品で化粧土が掛かる。外面には小さな段がつく。

2号掘立柱建物跡〈SB 2〉（PL. 29,33, Fig. 46,53）

SB 1の北、11号住居跡の東にある。北側が調査区外にかかるが、南北に長い建物であろう。桁行3間は550cmで、梁行は3間以上となる。桁行（妻）側に120cm幅で庇もしくは縁が付く。P 3・5・8には石が入っている。主軸方位はN-3°-E。P 6から弥生土器と土師器、P11から土師器が出土したが、土師器は図示できない。6～7世紀代と思われる。

3号掘立柱建物跡〈SB 3〉（PL. 29,33, Fig. 46,54）

SB 2の東、10号住居跡の西にある。柱穴がやや規則的でないところもあるが、2×3間の東西棟である。桁行は410cm、梁行は530cmで、梁行の北側柱列はP 4の所が足りないけれども、桁行がもう少し狭くて庇が付くのかもしれない。主軸方位はN-2°-W。P 5・9・11から土師器が出土した。9世紀代であろうか。

出土遺物（Fig. 55-2・3）

ともに土師器の坏で、2はP 5から出土した。底部は平底だが少し丸みがある。復原口径12.8cm。3はP11の出土で、瓦質に近い焼成である。外面は回転横ナデ時の凹凸があり、その上に火だすきのあとがある。復原口径13.6cm、底径8.8cm、器高3.4cm。

6　その他

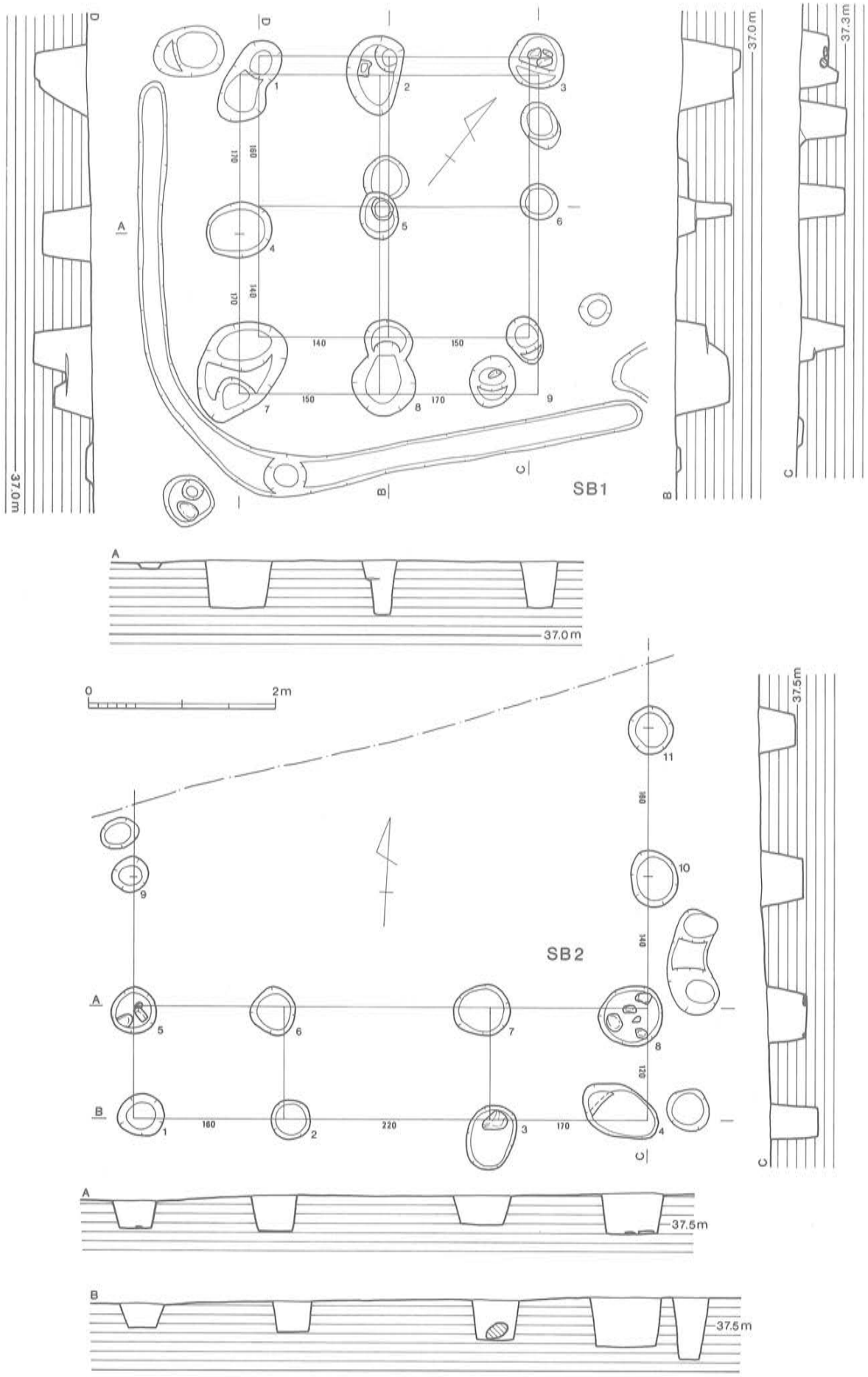


Fig.53　Ⅰ区1・2号建物跡（SB１・２）実測図（1/60）

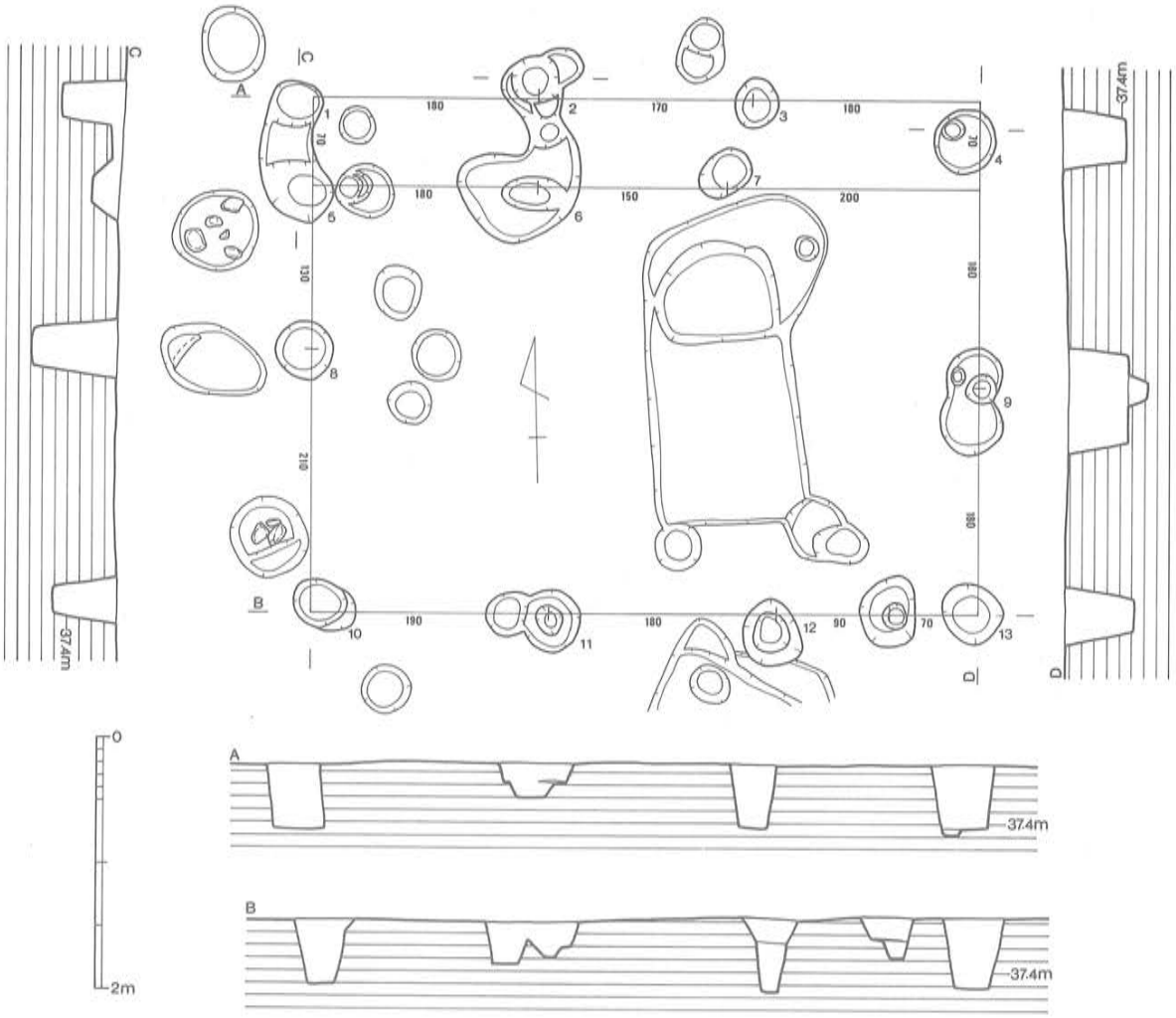


Fig. 54　Ⅰ区3号建物跡（SB３）実測図（1/60）

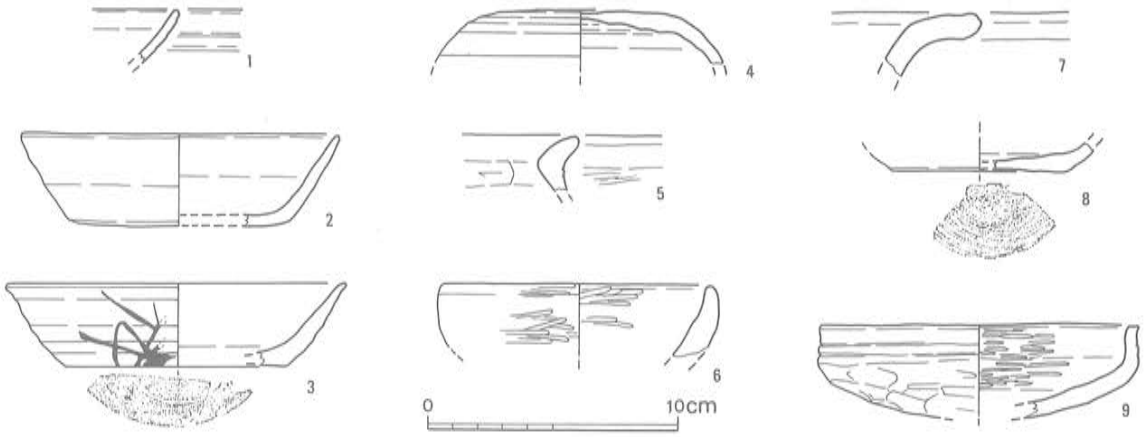


Fig. 55　Ⅰ区建物跡等出土土器実測図（1/3）

１号溝〈ＳＤ１〉（PL. 1,18, Fig. 3）

６・７号石棺墓の東側にある細い溝である。性格は不明。土師器、縄文晩期土器、陶器、鉄滓などが出土しているが、おそらく新しいものであろう。

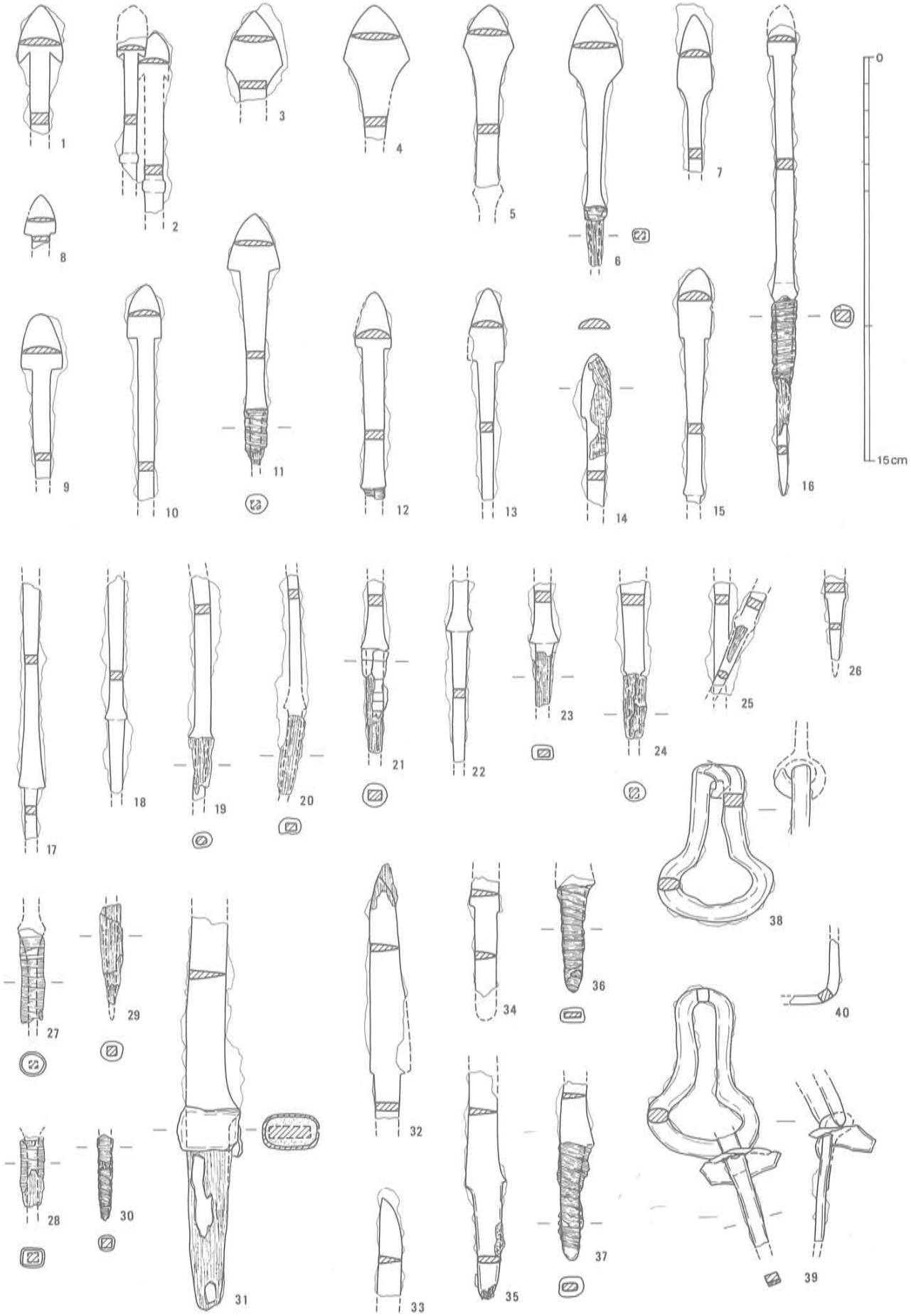


Fig. 56　Ⅰ・Ⅱ区出土鉄製品実測図1（1/2）

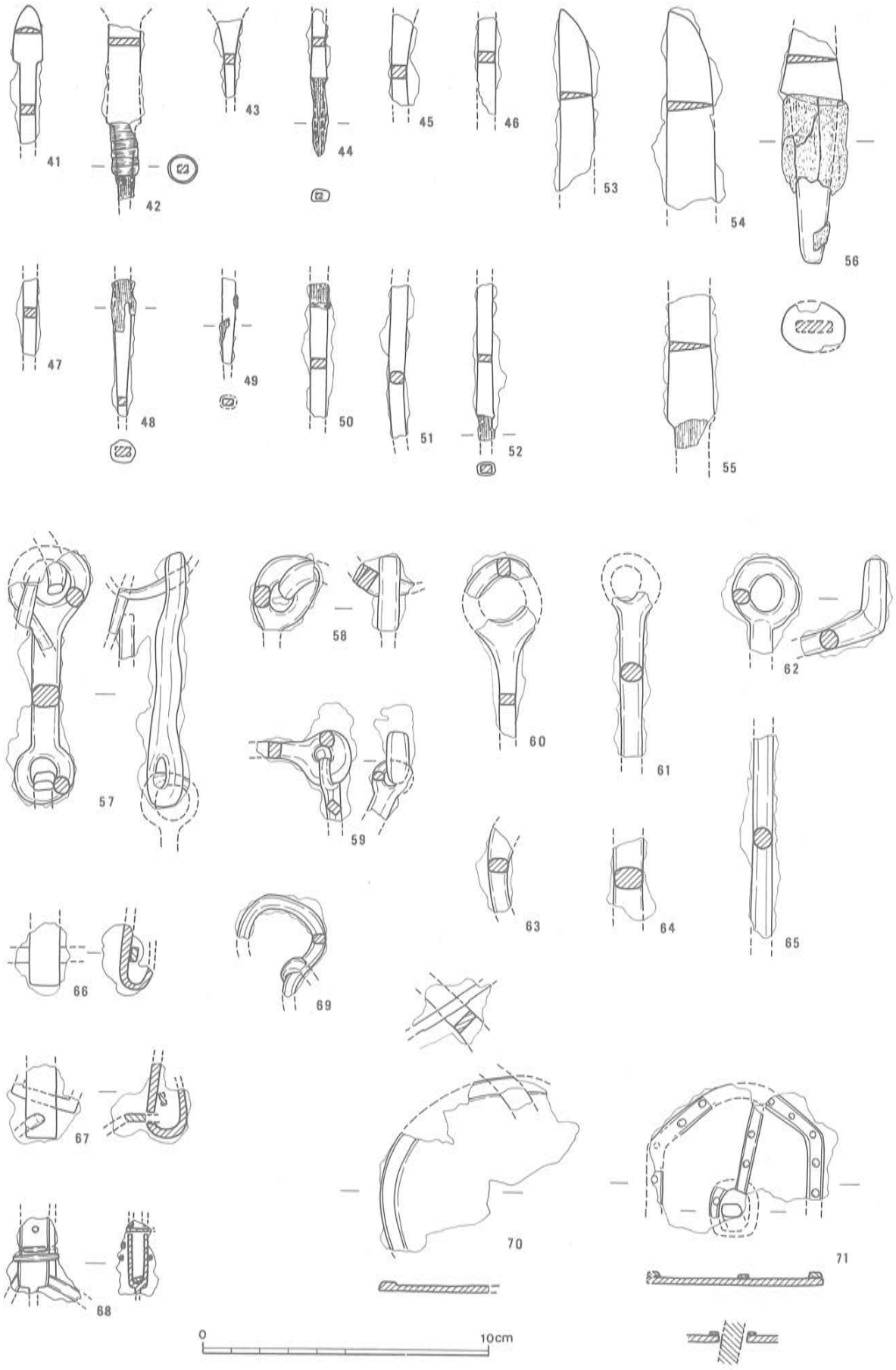


Fig. 57　Ⅰ・Ⅱ区出土鉄製品実測図2（1/2）

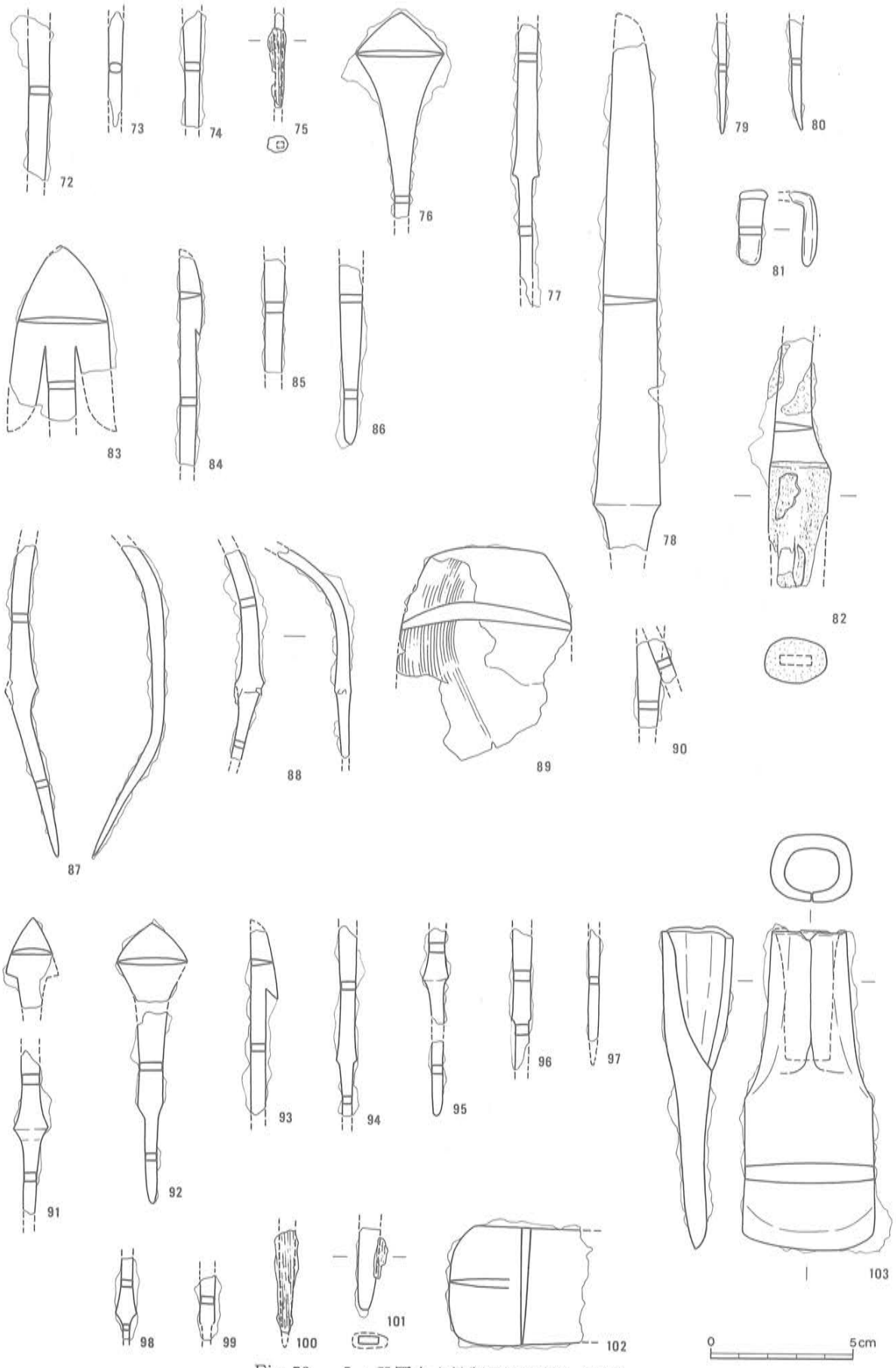


Fig. 58　Ⅰ・Ⅱ区出土鉄製品実測図3 (1/2)

出土遺物（Fig. 55-6）

器肉のかなり分厚い土師器坏である。精製とはいえない。復原口径11cm。

2号溝〈SD 2〉（PL. 22,29, Fig. 3,46）

14・16号墳の北にあって16号墳を切っている。これも性格は不明。土師器、縄文晩期土器、陶器、磁器、土錘などが出土している。おそらく近時のものであろう。

出土遺物（PL. 35, Fig. 55,59）

土師器（Fig. 55-7・8）7は甕の口縁部片。8は外底面に糸切り痕のある坏で底径7.2cm。

鉄器（PL. 34, Fig. 59-112）　現存長9.2cmで、断面円形の不明品。　（吉田）

土製品（Fig. 61-6）　欠損した土錘で現存長26.7mm、最大径7.6mm、孔径1.8mm、1.5g。

ピット

柱穴らしき小さな穴、浅い土壙状のものなどが、6・7～9・10号墳や12号墳、8～12号住居跡周辺に見られたが、遺物の出土したものは全てPを冠して取り上げた。また遺構検出面での採集品もある。以下にそれらの遺物で実測しえたものを示す。

・P40（Fig. 55-4）9号住居跡の西にあるやや大きめの土壙出土の須恵器坏蓋である。口縁部は欠失し、体部外面は灰被りとなっている。

・P34（Fig. 55-5）10号住居跡の東にある小ピット出土の土師器甕で、外面に煤が付着する。

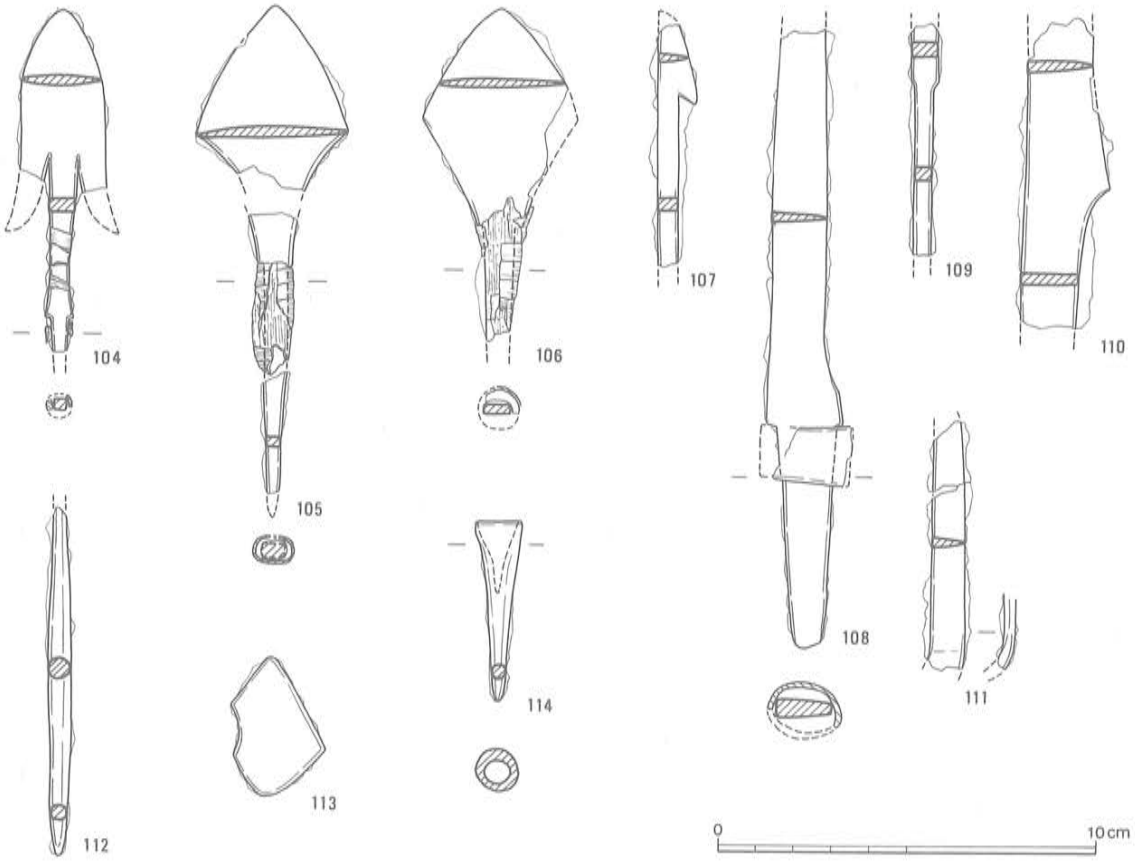


Fig. 59　I・II区出土鉄製品実測図4（1/2）

その他（Fig. 55-9）Fig. 55-9は6号墳南方の遺構検出面にて採集された土師器坏である。化粧土を掛け、口縁外面に沈線が入る。復原口径12.6cm。

・P 4（Fig. 59-113）P 4は10号墳の周溝東側にある細長いピットである。断面四角形を呈する鉄片で、何であるか不明。

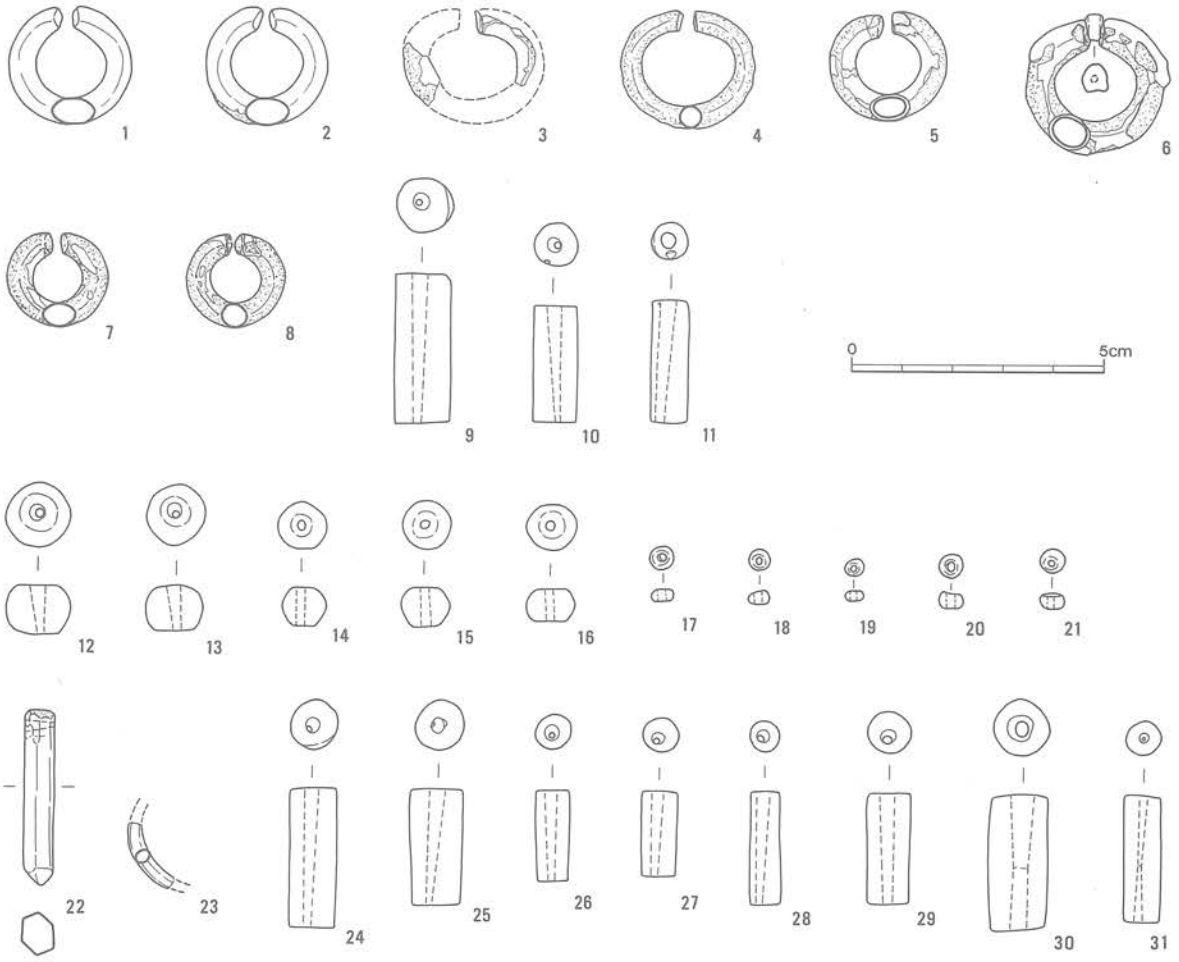


Fig. 60　Ⅰ・Ⅱ区出土装身具実測図（2/3）

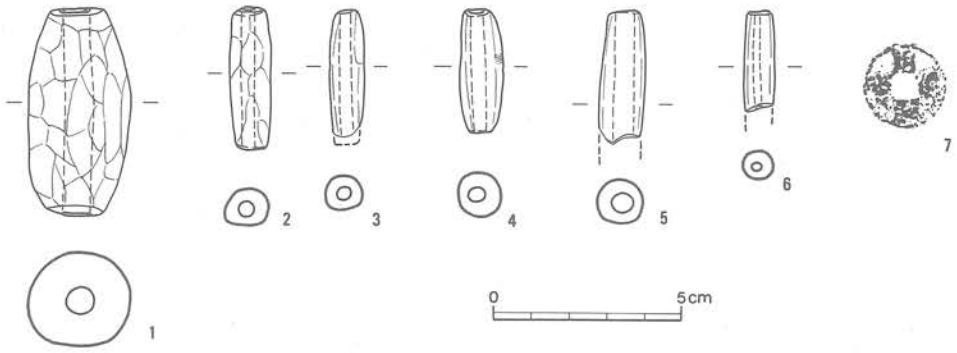


Fig. 61　Ⅰ・Ⅱ区出土土錘・銭実測図（1/2）

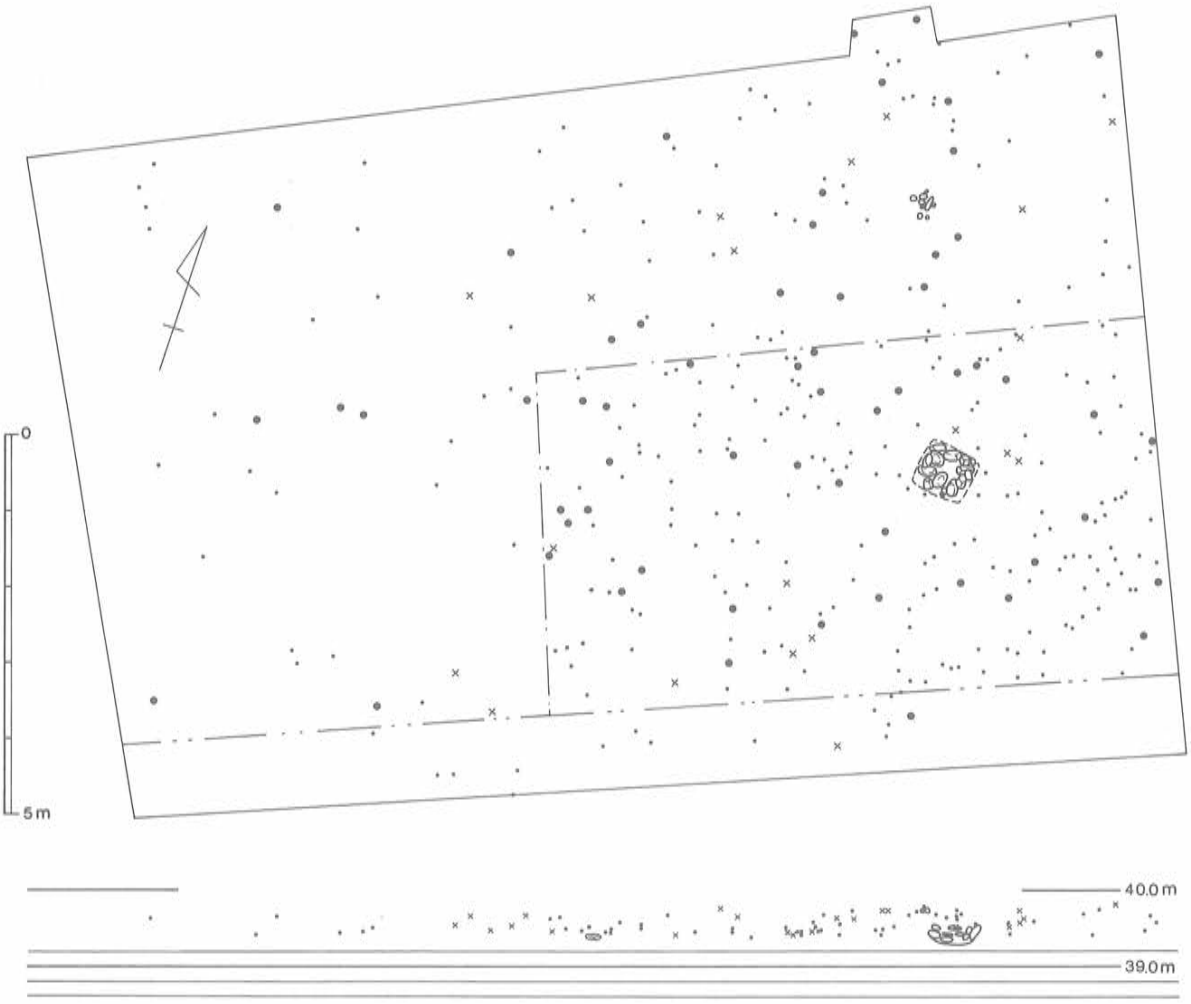


Fig. 62　縄文J区遺物出土分布図（1/100）

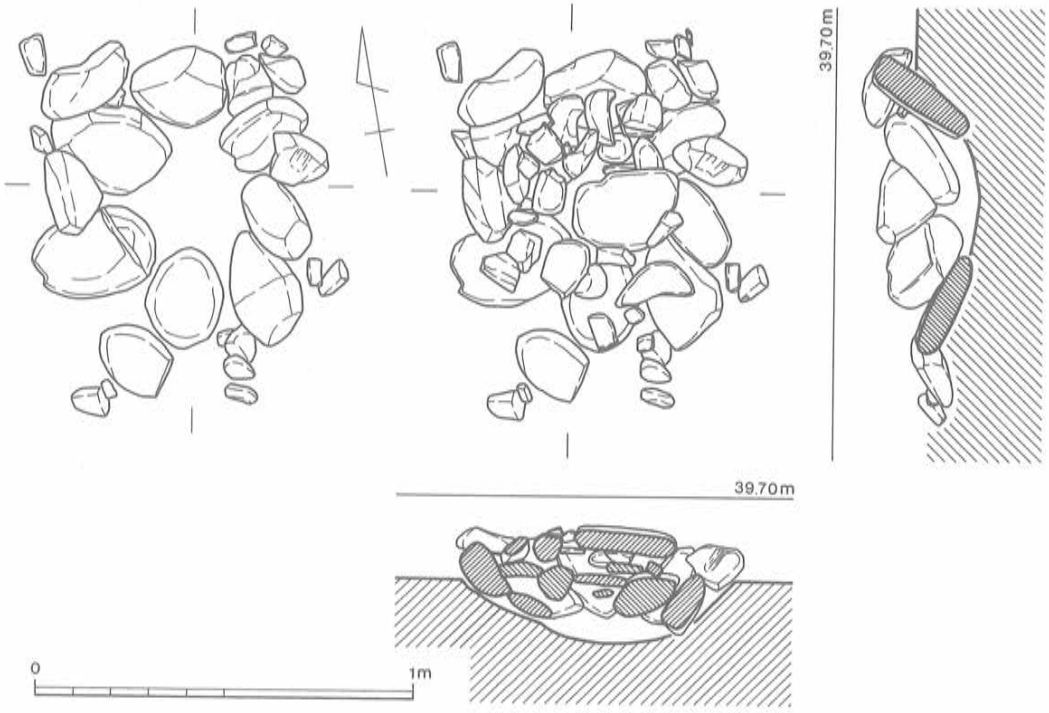


Fig. 63　縄文J区石組炉実測図（1/20）

1 早期

17号墳の西南方に押型文土器が集中して散布していたので、そこの一画をＪ区として掘り下げた。また、５号墳石室の西北にも早期土器が見られたのでそこに区画を設けて１トレンチとした。それ以外では１～10号墳の周溝埋土や石室内外、さらにはやや離れて９号住居跡内やSD２からも早期土器の破片が検出された。特に７・８号墳の周辺から多くが採集されており、調査区内ではＪ区から７・８号墳、１トレンチのあたりが最も集中していることになる。

a Ｊ区（PL. 36, Fig. 3,62～64）

一部変則的なところもあるが、南北９～9.7m、東西14～14.5mの範囲を約30cmの深さまで掘り下げ、さらにその中の東南部に検出された石組炉のまわりの南北4.5m、東西８mの部分をもう10cmほど掘り下げた。そして南壁際については土層を見るためもあって、トレンチ状に幅１mを現地表面から約１mの深さまで掘り下げた。

層位は基本的に水平の堆積であり、大半の遺物が⑥・⑦・⑧層に含まれている。東端部から４mの所までは落ち込みがあるようで、これはあるいは住居跡等の遺構になるのかもしれない。

上記の範囲で、番号をNo.350まで付して遺物を取り上げたが、最も多かったのは黒曜石の剥片であった。一つの番号に複数点が含まれるものもあるが、土器は約257点を数えた。石器には玄武岩質の叩石・すり石・台石が39点、黒曜石製の鏃６点、同使用剥片３点、瑪瑙質スクレイパー２点などとともに多数の黒曜石剥片とごく僅かのサヌカイト剥片、瑪瑙質剥片がある。上層での出土であったが黒曜石とサヌカイトの原石もあった。

なお、土器、石器ともに少ないながら接合する例も存する。

石組炉（PL. 36,37, Fig. 63）

調査区内の東端から2.8m、南壁から4mの所にて検出された。径0.7mほどの円形で、深さ約0.2mの土壙を掘り、その周壁に扁平河原石の礫を置き並べ、中には大小の礫が入っていた。壙底部分にも３個ほどの礫があったが、敷いたような感じではなかった。投げ込まれた礫で明確に熱を受けたようなものはなかった。また内部から土器は出土していない。

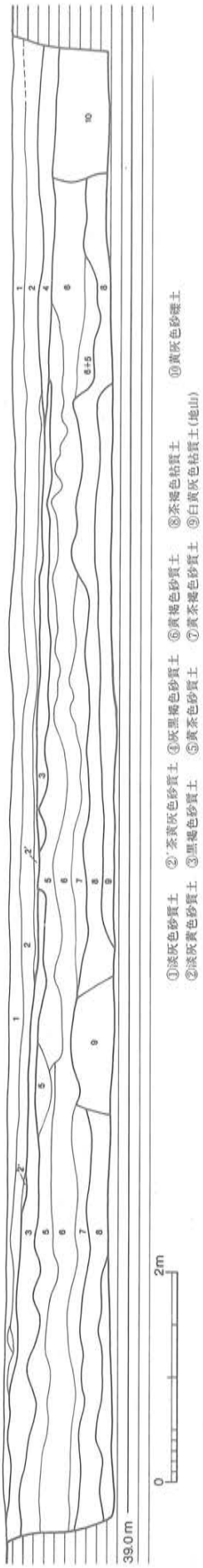


Fig. 64　縄文Ｊ区南壁土層図（1/60）

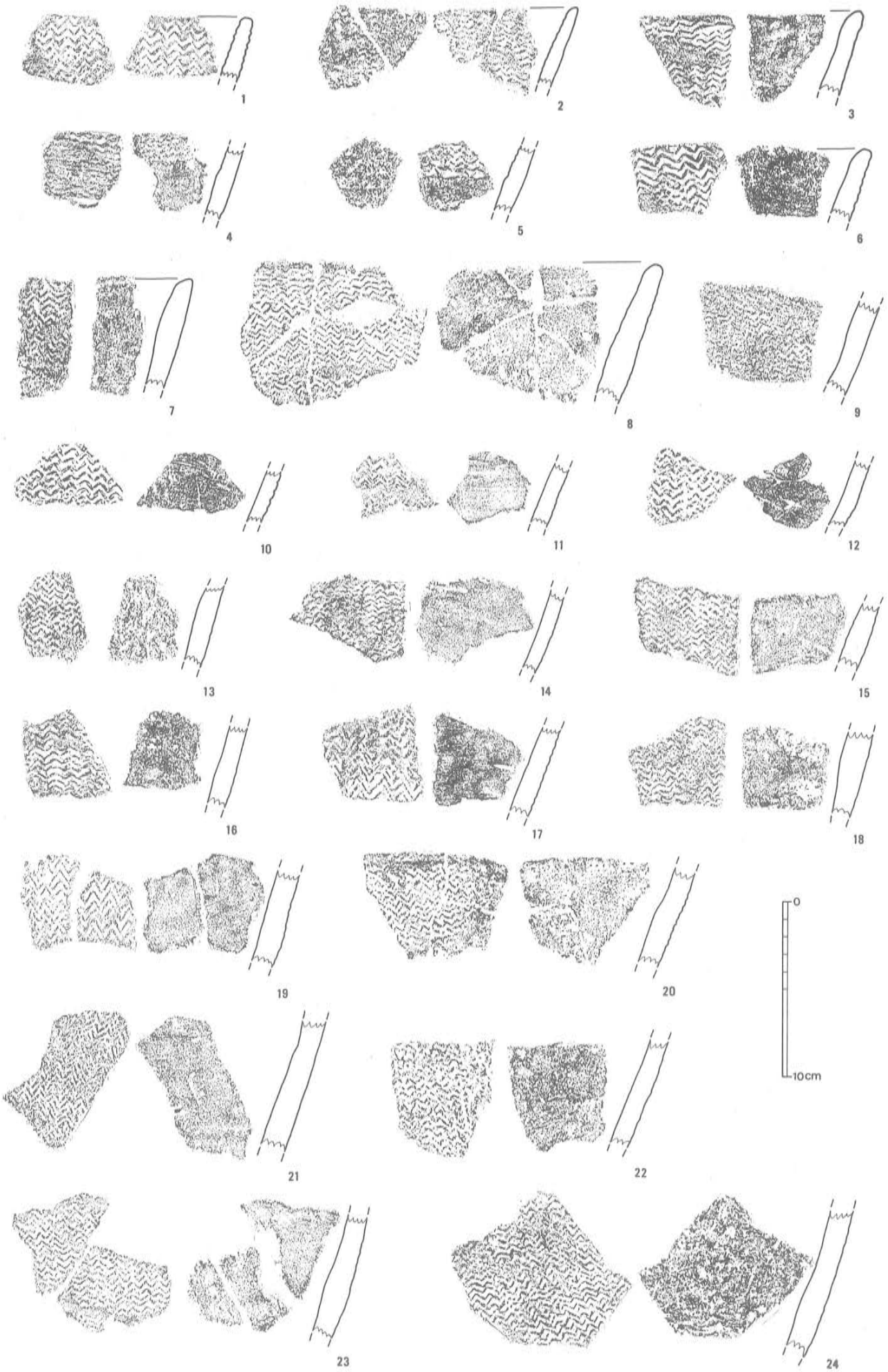


Fig. 65　縄文J区出土土器実測図1 (1/3)

土器（PL. 38,39, Fig. 65～68）

縄文早期に属する土器は、主にＪ区包含層、８号墳周溝埋土、９号住居跡埋土、５号墳下から纏まって出土した。Ｊ区包含層および８号墳周溝埋土からはほぼ同じ様相の押型文土器が量的にかなり纏まって出土したが、９号住居跡埋土からは口縁部に二枚貝による刺突文が施される一群、５号墳下からは二枚貝による条痕文様の一群がそれぞれ単独で出土しており、これら３種類の早期土器が年代差をそれぞれに有していることを示唆している。

１～73はＪ区出土の早期土器で押型文土器が中心である。胎土に角閃石が多量に含まれるのが特徴的。底部は平底で、器形はほぼ直線的に立ち上がり僅かに開き、口縁部は外反することなく端部は比較的丸く仕上げられる。内面はナデられ、器壁厚は９～11㎜と厚い。１から24は振幅の小さい山形文で、施文方向は全て横位。口縁部の破片は８点あるが、内面に文様のある４点については全て外面と同じ原体による山形の押型文が施される。施文原体の長さは３㎝程度である。25～54は粒の小さい楕円文で、施文方向については大半が横位であるが、やや斜位になるものもある。口縁部の破片は12点で、そのうち内面にも文様のある５点については全て外面と同じ原体による楕円文が施される。37のように無施文部を有するものもあるが、例外的で僅かにこの１点だけである。55～58は格子目の押型文土器である。55の口縁部については、外面の格子目文原体と同じ原体によって施文される。59～64は無文土器で、内外面ともにナデが器面調整として施される。口縁部の資料については、いずれもごく僅かではあるが外反している。66～68は縦位の条痕文が施された一群であるが、押型文原体によるものではなく、もっと先端の尖った原体によるものである。69は口縁部付近の破片で、外面には沈線文と刺突文とが組合わさる文様であるが、内面には振幅の小さい山形押型文が施される珍しい資料である。内面の山形文については、本遺跡出土の山形押型文とほぼ同じものである。70は二枚貝による押引状の刺突文で、内面にはやはり二枚貝による条痕が施される。９号住居跡から出土した資料(87)とほぼ同種である。71～73は平底の底部で、胎土は押型文土器とほぼ同じであるが、これらの資料に関してはいずれも無文である。ただ、73については対象物不明の圧痕が残る。（水ノ江）

石器（PL. 40,41, Fig. 69,70）

1は黒曜石製、平基式の石鏃である。両側縁を中心に加工されており、背腹両面に素材面を大きく残す。長さ22.5㎜、幅16㎜、重さ1.8g。２は黒曜石製、凹基式の石鏃であるが、基端部は一脚しか作出されていない。長さ22.5㎜、幅17.5㎜、重さ1.9g。3も同じく黒曜石製、凹基式の石鏃で両側縁は平行に近く加工されている。脚を一部欠損する。長さ27.5㎜、幅12.5㎜、重さ0.9g。

4･5は黒曜石製のスクレイパーである。4は両側縁に刃部加工が施されている。使用痕は刃部を中心に先端にも認められる。長さ22.5㎜、幅31㎜、厚さ10㎜、重さ7.5g。5は先端部を中心に背腹両面に刃部加工が施され、使用痕は先端の刃部に集中している。長さ21.0㎜、幅35.5㎜、厚さ8.0㎜、重さ6.6g。

６・７は黒曜石製の使用痕のある剥片で、６は両側縁に集中して微細剥離痕が認められる。長さ42.5㎜、幅26.5㎜、厚さ10.5㎜、重さ9.1g。7は厚みのある剥片で、側縁端部に微細剥離痕が認められる。長さ70.5㎜、幅28.0㎜、厚さ13.5㎜。（杉原）

8～15は玄武岩質石材のすり石である。８は表裏面、側面ともに面取りされている。９は四側面に敲打痕があり、表裏ともに黒ずんだ所がある。長さ10㎝、幅8.4㎝、厚さ3.8㎝。10は側面が擦れて

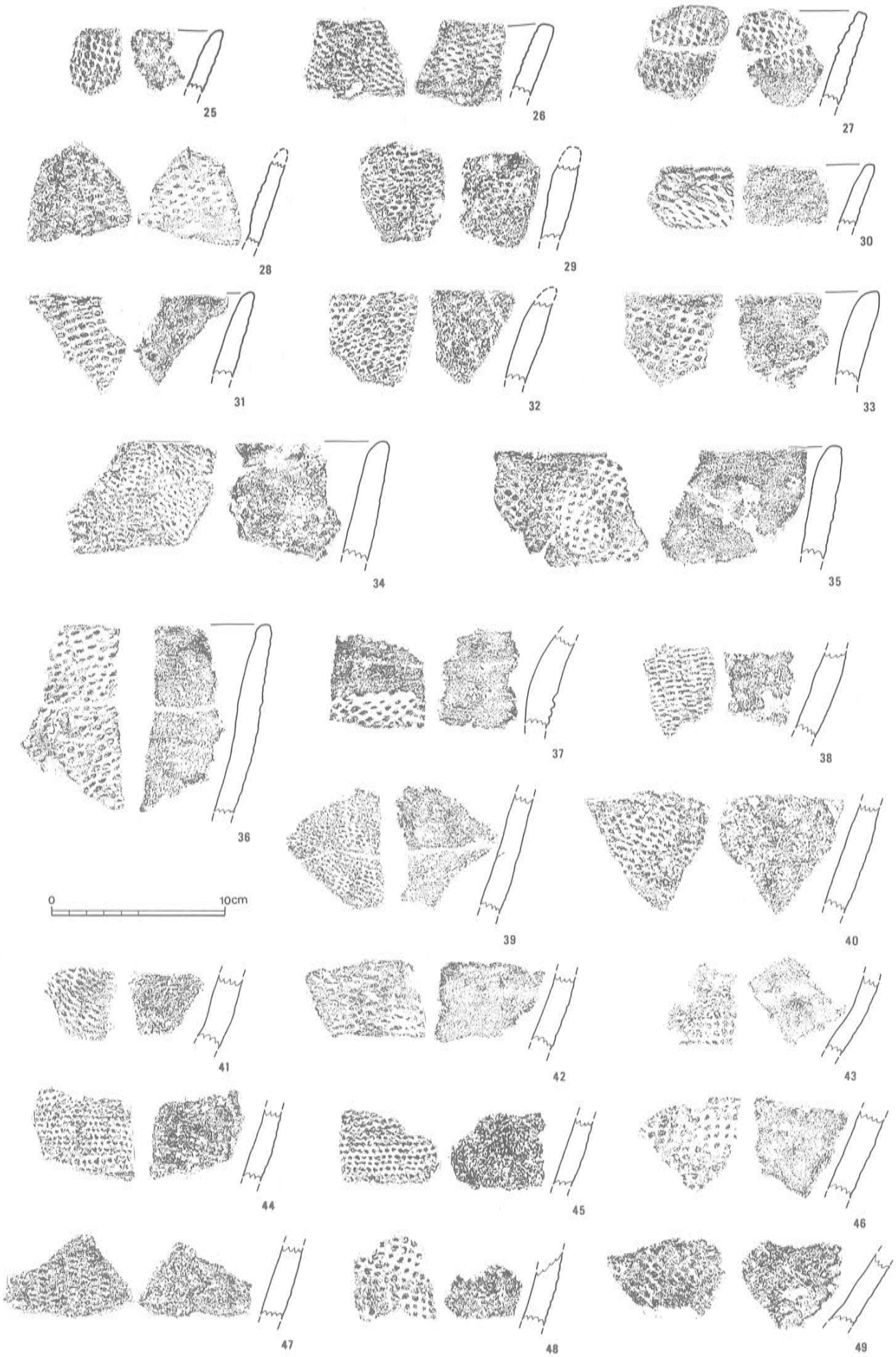


Fig. 66　縄文J区出土土器実測図2 (1/3)

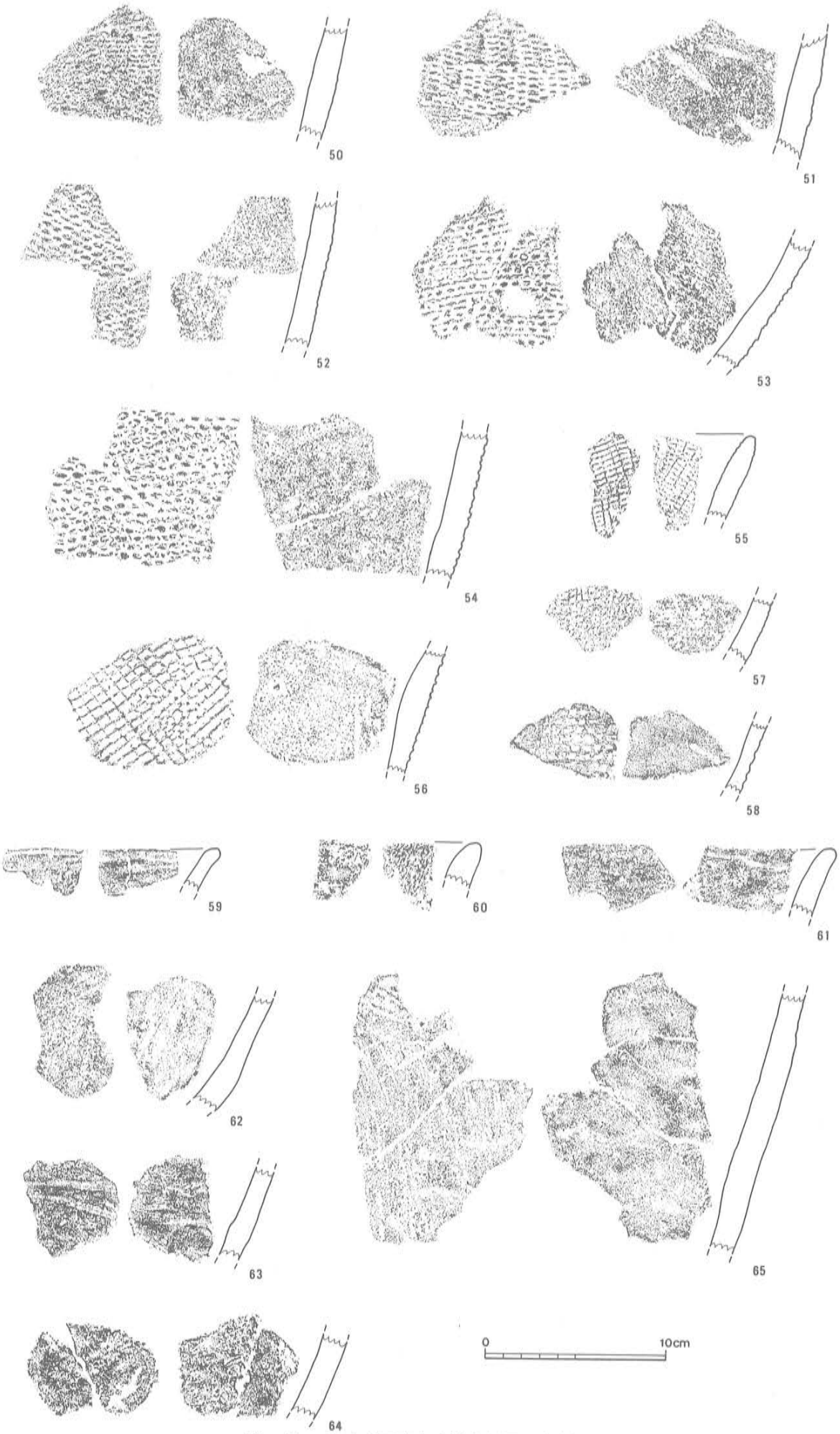


Fig. 67　縄文J区出土土器実測図3 (1/3)

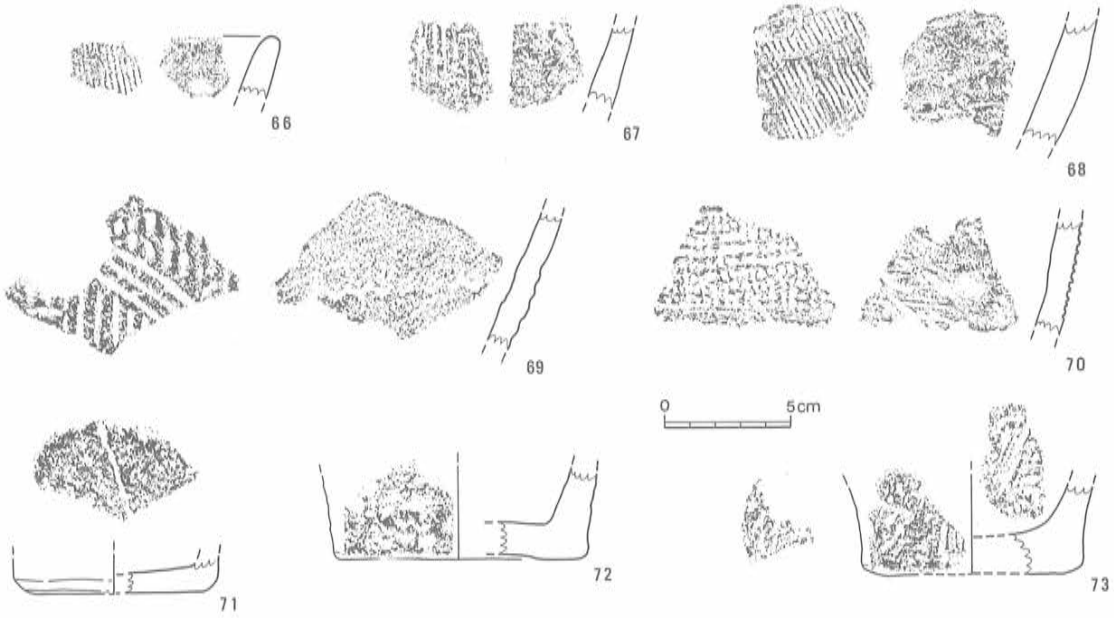


Fig. 68　縄文J区出土土器実測図4（1/3）

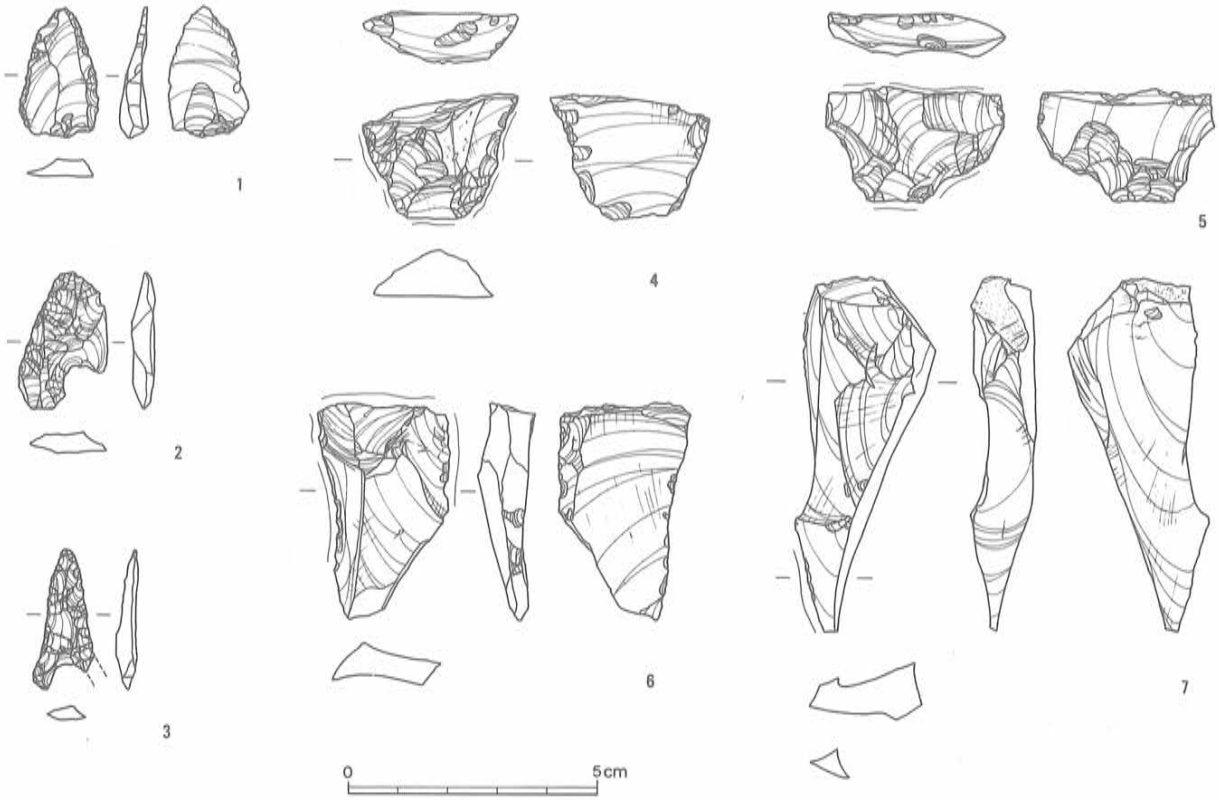


Fig. 69　縄文J区出土石器実測図1（2/3）

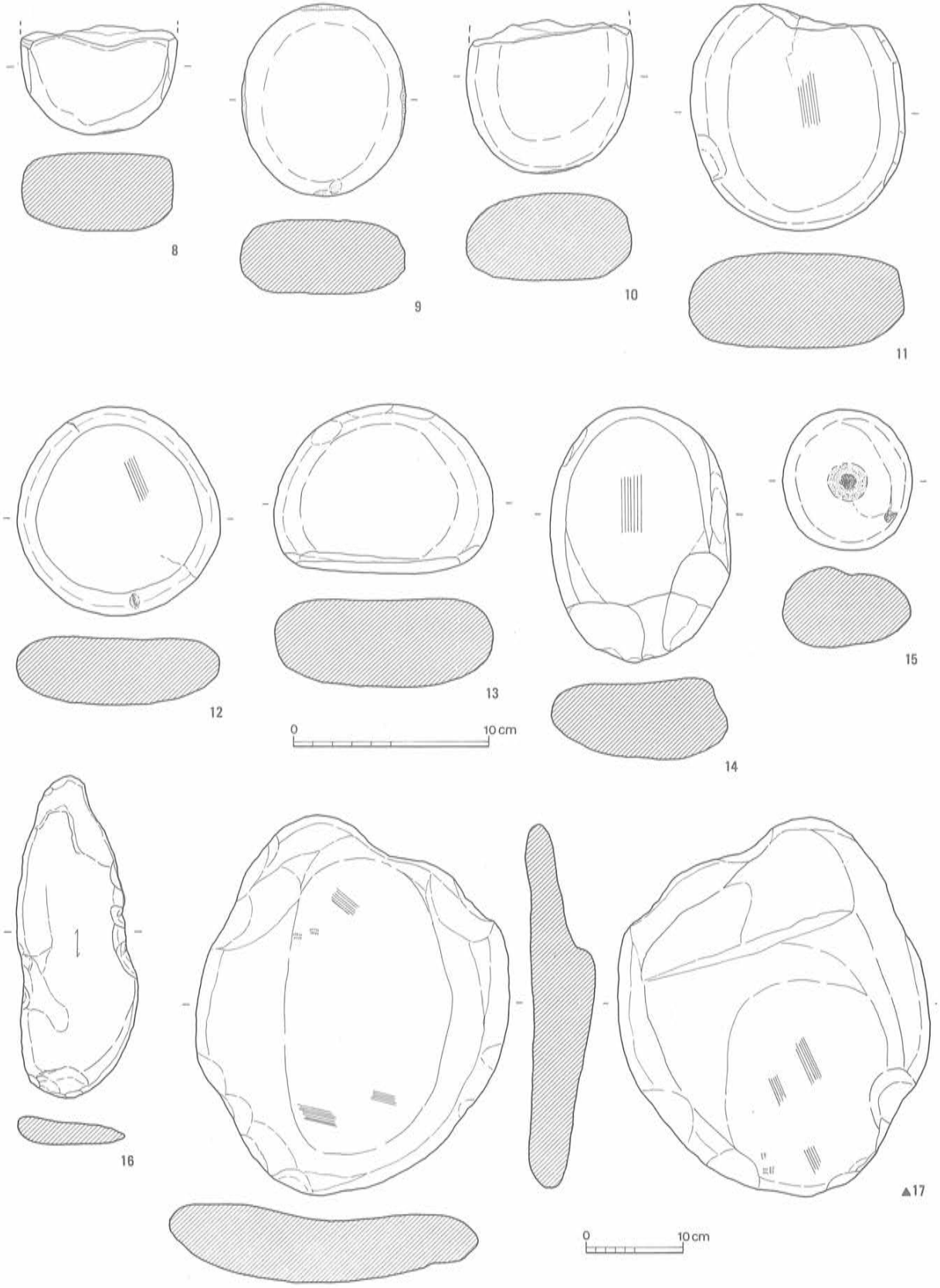


Fig. 70　縄文J区出土石器実測図2（1/3・1/6）

一部に敲打痕を見る。11は側面に面を取り、また二次熱を受けて黒ずんだ所がある。12は長さ10.7cm、幅10.5cm、厚さ3.4cm。13は扁平円礫の一側面を擦り切ったような形状であり、片面はごく僅かにくぼんでいる。14も一面がくぼむ。15はくぼみ石で、長さ7.2cm、幅6.6cm、厚さ4.1cm。

16は側面に打欠きのある扁平石で、台石とすべきであろうか。長さ16.6cm、幅5.9cm、厚さ1.5cm。17は台石で一面がよく使われてくぼんでいる。長さ39.2cm、幅32cm、厚さ7cm。

b その他の早期土器（PL. 39･40, Fig. 71･72）

74～85は8号墳の周溝埋土から出土した早期土器で、全て押型文土器である。J区出土の押型文土器とほぼ同じもので、両者に年代的な差は存在しない。

86･87は9号住居跡の埋土から出土した縄文土器。いずれも口縁部の資料で、外面には二枚貝による刺突文が、内面には二枚貝による条痕文が施される。ただし、86は3段の刺突文であるのに対し、87では押引文に近い刺突文がかなり近接して施され、一見しただけでは両者は系統の異なった資料のような印象を受ける。

88～91は5号墳の下位もしくはその近辺のピットから出土した資料である。内面は丁寧にナデられ、外面については二枚貝による縦位の条痕文を施した後に、口縁部に横位の条痕文を施す。器壁は13mm前後とかなり分厚く、ほぼ直線的に立ち上がる口縁部の端部は平坦になる。

92～95は縄文時代以降の遺構や小ピットから出土した早期の資料である。92の内面はナデ、外面には原体は不明であるが2単位の押引文に近い刺突文が施される。94はRの撚糸文であろうか。内面

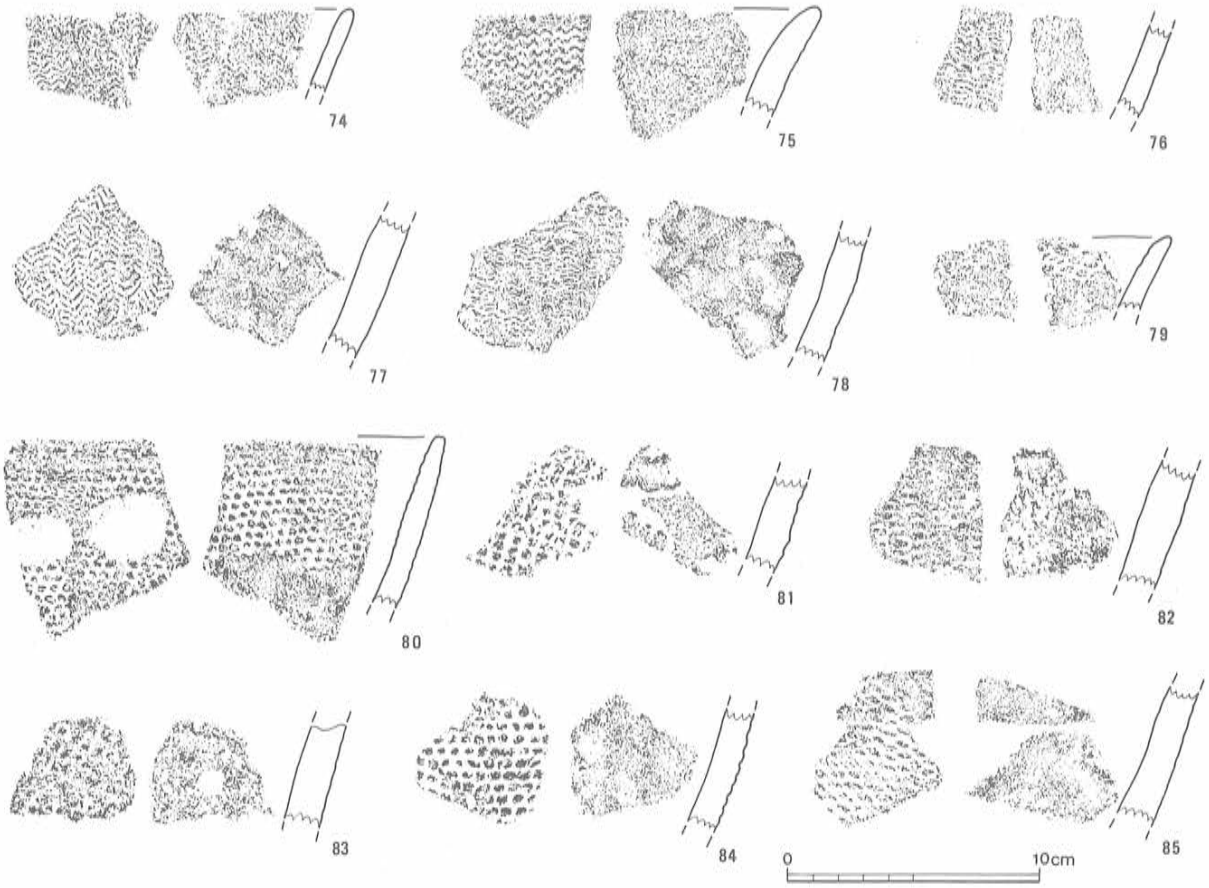


Fig. 71　その他縄文早期土器実測図1（1/3）

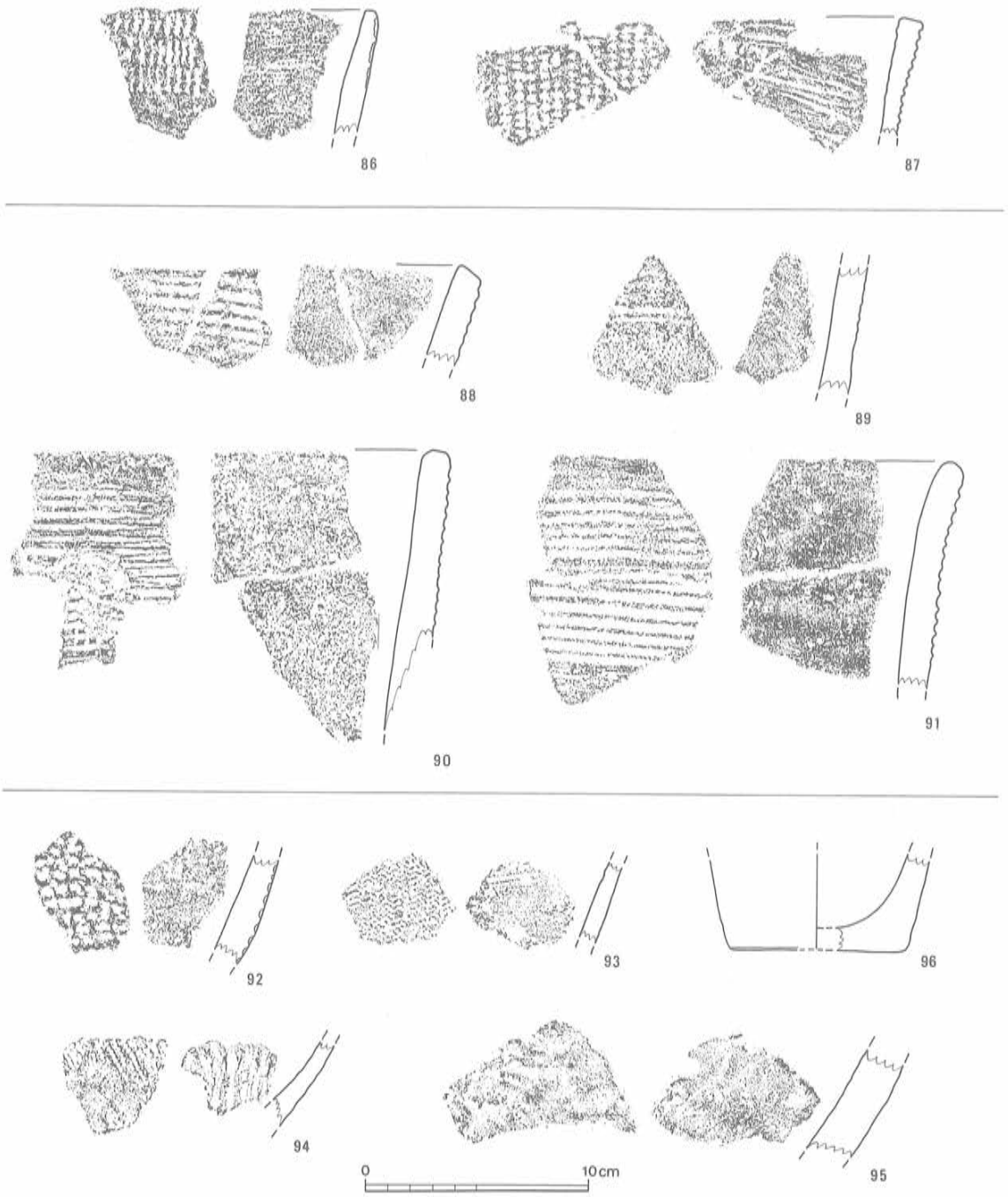


Fig. 72　その他縄文早期土器実測図2（1/3）

は粗いナデ。95は無文土器であるが、本遺跡から出土する無文土器の中では大きい方の破片である。

（水ノ江）

2　晩期

12号墳の下層に1～6・13・14号住居跡が、やや離れて北方に7号住居跡が検出され、11号墳下層からも住居跡の確認はできなかったけれどもわりと多くの土器等が出土している。また、13～16号墳や9・12号住居跡などからも晩期土器が検出されており、Ⅰ区の西端部に晩期の中心のあることが

わかる。ただ、ごく僅かながらも2・4・10号墳周溝からも晩期土器片が検出されている。以下、出土遺物のうち土器については最後にまとめる。

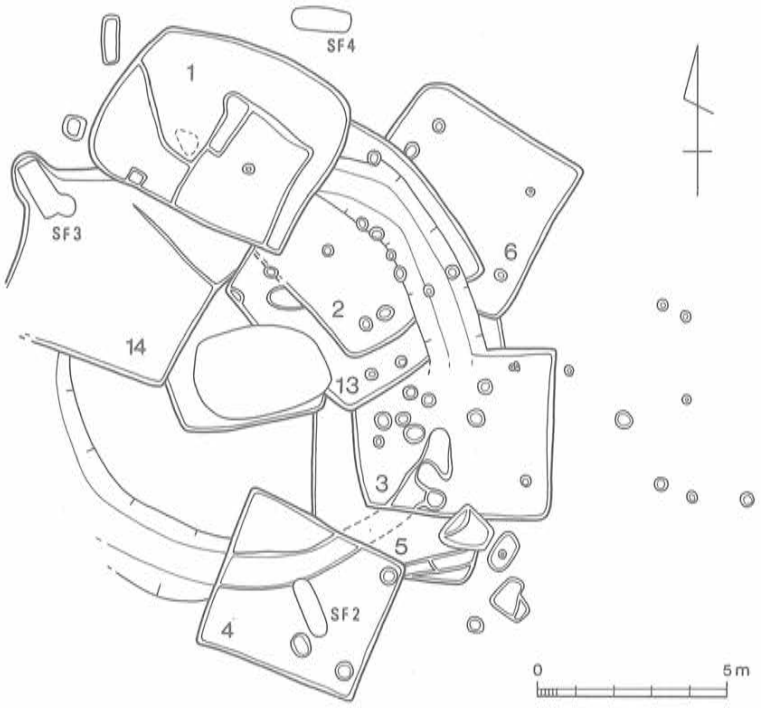


Fig. 73　縄文晩期竪穴住居跡群（1/200）

a　住居跡

1号住居跡

（PL. 18・41, Fig. 73,75）

2・13・14号住居跡を切っている。4.8×5.9mほどの東西に長い長方形プランで、床面の南側は二段階に深くなっているがこれは下層を掘りすぎた結果と捉えられる。中央よりやや南側に50×70cmの範囲で焼土があったが石組はなかった。面積は24.8m²。多くの土器のほかに台石、すり石、黒曜石・サヌカイトの剥片等が出土している。

石器（PL. 42, Fig. 84-20・23～25）20は台石であろう。表裏両面ともに滑らかであり、この上で何かを擦ったりしたのだろう。三側縁に敲打したあとらしい打ち欠きがある。玄武岩質で22×25cmに厚さ5cm。23～25はすり石でともに玄武岩質である。25は擦った面に黒ずんだ所がある。23は幅10.1cm、厚さ4.6cm、24は長さ10.6cm、最大幅8.3cm、25は長さ11.7cm、幅10cm、厚さ6.3cm。

2号住居跡（PL. 18,41, Fig. 73・74,76）

6・13号住居跡を切り、1号住居跡に切られている。4.5×5m以上の南北に長い長方形プランになるものと思われる。床面の東側は12号墳周溝が残っている。床面に柱穴が10個ほど検出されたが、主柱穴は特定しにくい。四隅に近い所のものがそれにあたるかもしれない。中央より西に偏して石囲炉が検出された。

石囲炉は径45cmほどの浅い掘り込みの壁際に石を縦長に置き並べるが、いまは北側の6個の石が残るのみで南側は抜かれたものであろう。ただし抜き跡は判然としなかった。石は1個が玄武岩で他は石英片岩である。石に焼けたような痕跡は見えなかった。また炉内には茶黄色砂質土の中に僅かに焼土が混じっていた。僅かの土器と黒曜石剥片が出土している。

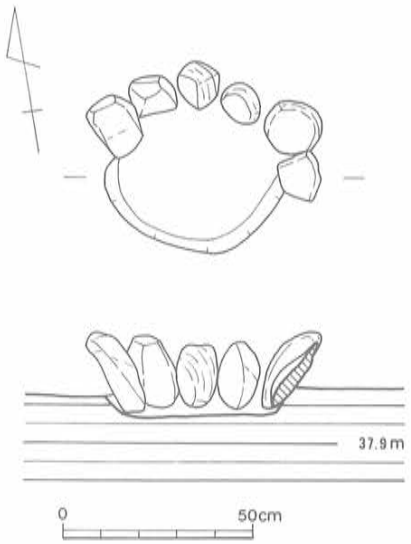


Fig. 74　2号住居跡炉跡実測図（1/20）

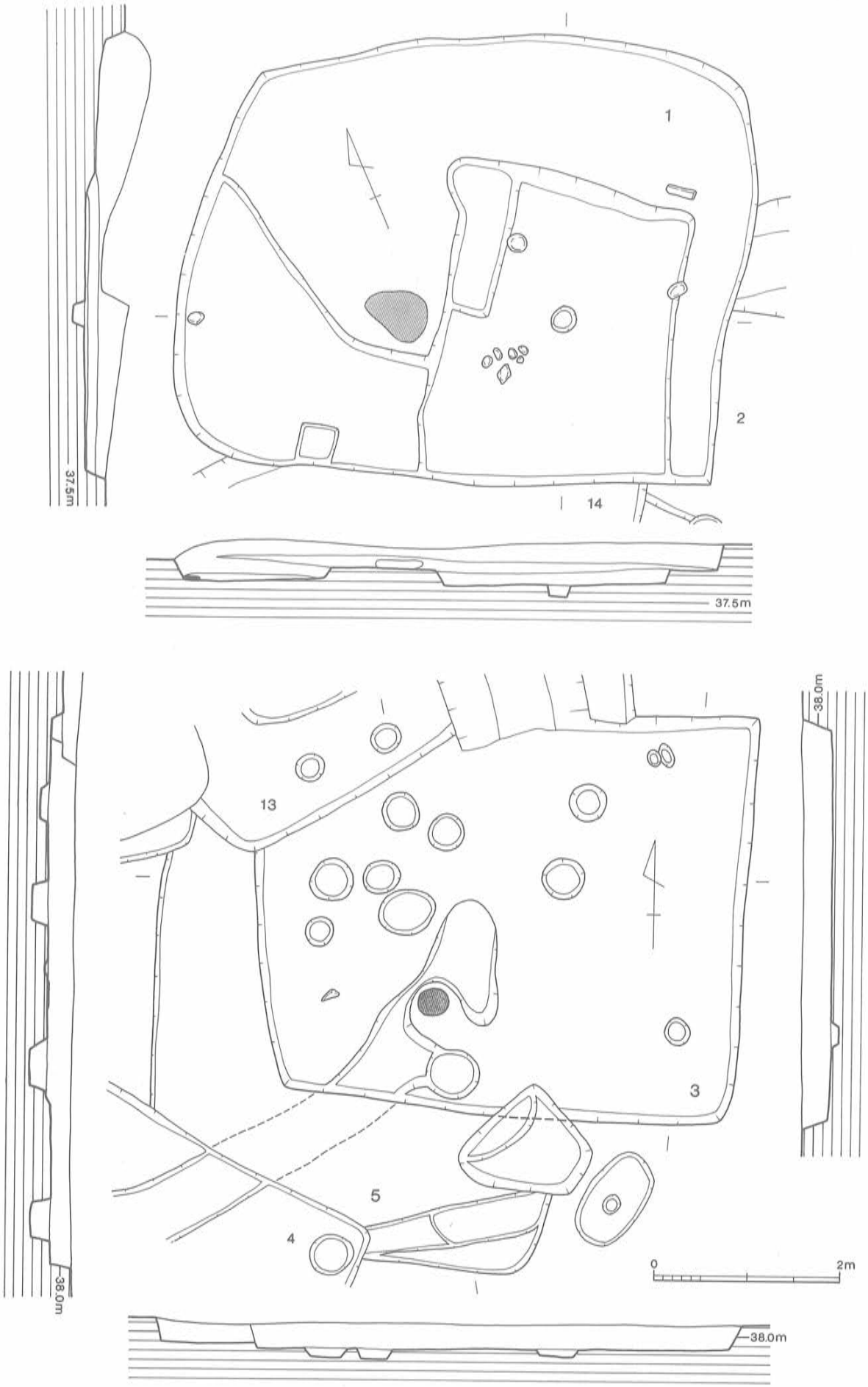


Fig. 75　1・3・5号住居跡実測図（1/60）

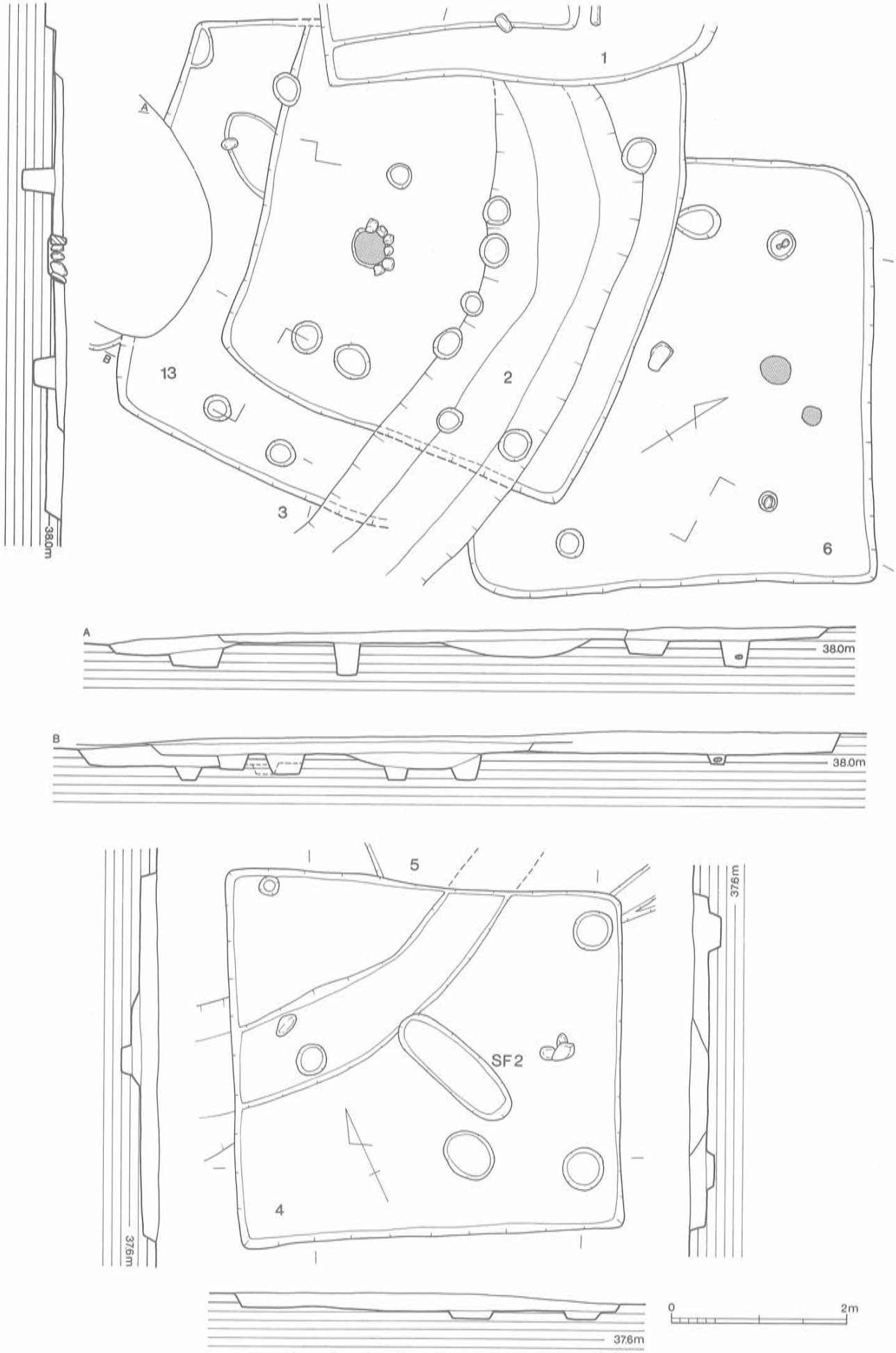


Fig. 76　2・4・6・13号住居跡実測図（1/60）

3号住居跡（PL. 18,41, Fig. 73,75）

5号住居跡を切り、13号住居跡に切られている。4.4×5.3mほどの東西に長い長方形プランになる。床面に10数個の柱穴が検出されたが主柱穴は特定しにくい。中央より西に偏した南壁に近い所に径40cmほどの範囲で焼土が検出された。炉であろう。土器のほかに黒曜石剥片と縄文早期土器片も出土している。なお、炉の近くの床面に十字形石器が出土していたが、調査中に紛失してしまった。

4号住居跡（PL. 18,41･42, Fig. 73,76）

5号住居跡を切って営まれている。また12号墳の周溝に切られていてその溝底部分は住居の床面以下まで達している。東辺3.8m、西辺4.3m、南辺4.4m、北辺4.5mの台形に近いプランになる。東辺壁際のコーナーに浅い柱穴があるが、これと対になる所には見られない。また床面の中央よりやや東寄りにＳＦ２が検出された。これと住居跡との先後関係は把握できなかったがＳＦ２が切っているものとみられる。面積16.7m²。土器、石器と縄文早期土器１点もあった。

石器（PL. 42, Fig. 84-26）玄武岩質のすり石である。表裏面は平らになり、一面には擦過痕があるとともに少し黒ずんでいる。長さ10.8cm、厚さ3.4cm。

5号住居跡（PL. 18,41, Fig. 73,75）

3・4・13号住居跡に切られていて、東西幅4.4mと、南北が5m以上になることはわかるが、それ以外は柱穴も不明である。土器の量は少ない。黒曜石の鏃が出土している。

石器（PL. 41, Fig. 83-6）剥片鏃である。背面左側縁には微細剥離痕が認められる。長さ27mm、幅22mm、厚さ4mm、重さ1.6g。（杉原）

6号住居跡（PL. 18,41, Fig. 73,76）

2号住居跡に切られているが、南辺4.6m、東辺4.7mの二辺がわかるので方形プランになるのであろう。4本柱になるのであろうか。床面の東壁寄りの2カ所に焼土が見られたがこれが炉かどうかわからない。土器のほかに黒曜石剥片2点があった。

7号住居跡（PL. 18, Fig. 77）

1号住居跡の北方に1軒のみ単独で営まれている。平面プランは五角形に近い形状で、それに突出部が付く。主柱穴はわからない。面積11.7m²。土器のほかに黒曜石・サヌカイト剥片があり、また糸切り底の土師器が混入していた。

13号住居跡（PL. 18,41, Fig. 73･76）

1・2号住居跡に切られ、3・5号住居跡を切っている。南辺の東端部は6号住居跡と重複していたはずであるが、12号墳の周溝に切られていて先後関係は不明である。西辺は長さ4.5m。遺物は僅かであったがすり石がある。

石器（PL. 42, Fig. 84-21）平面長楕円形で長さ24.7cm、幅16.1cm、厚さ5.9cmのすり石である。

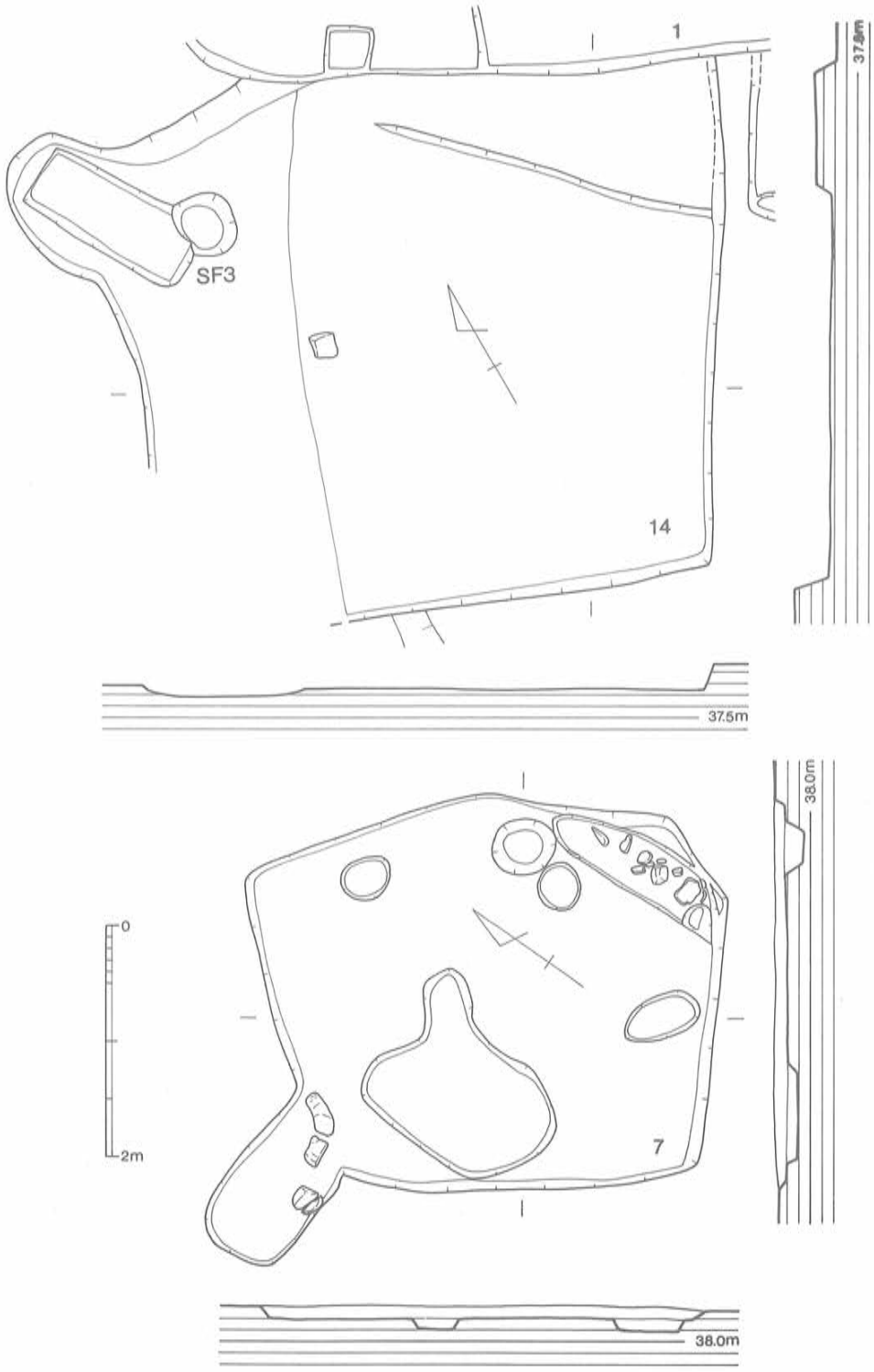


Fig. 77　7・14号住居跡実測図（1/60）

14号住居跡（PL. 18,41, Fig. 73,77）

1号住居跡に切られていて南辺と東辺の一部がわかるのみである。出土遺物はごく僅かであった。

石器(PL. 42, Fig. 84-22) 硬砂岩の砥石状の台石であり、一辺の一部を残して割れている。表裏ともに使用面がある。

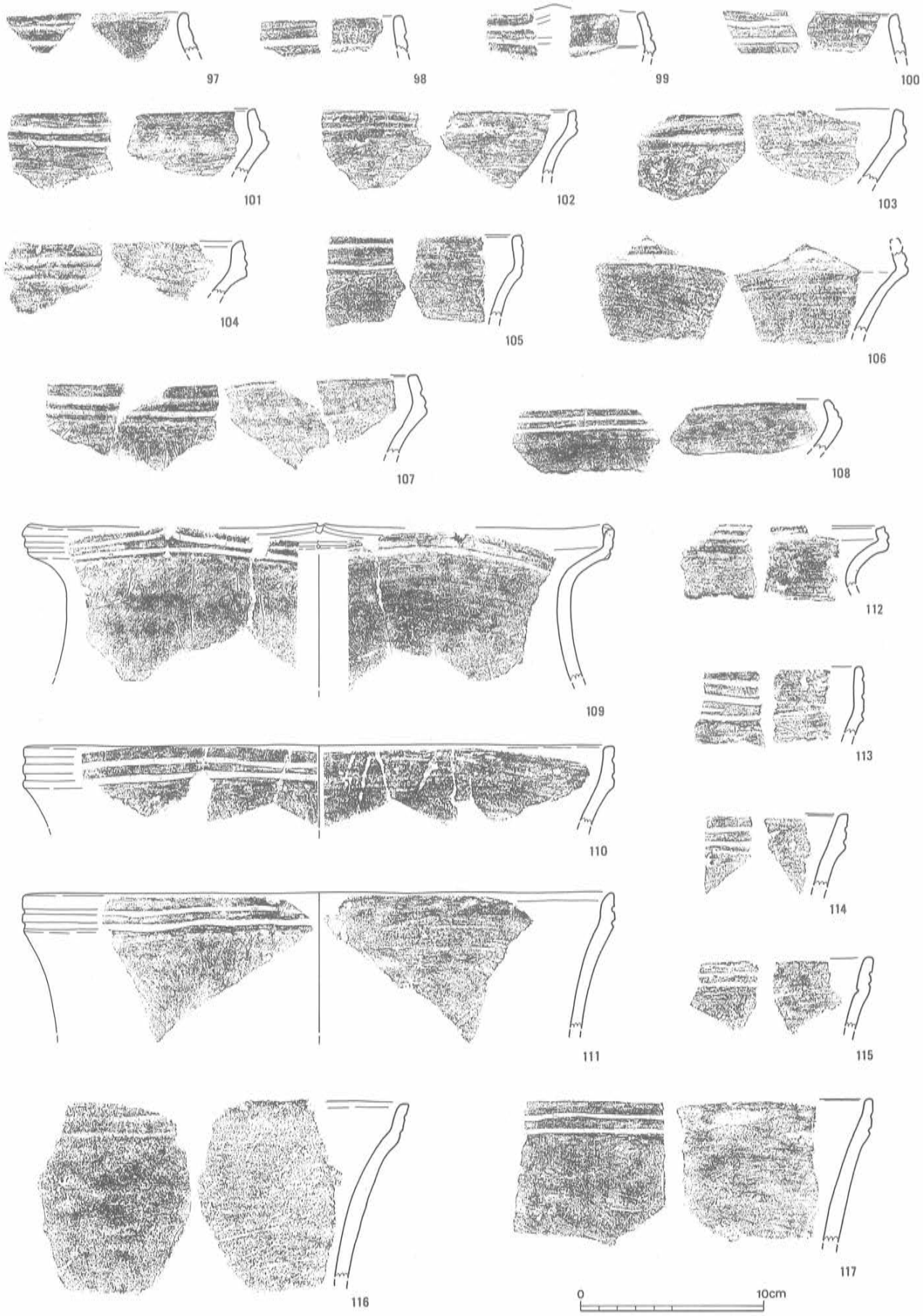


Fig. 78　縄文晩期住居跡等出土土器実測図1 (1/3)

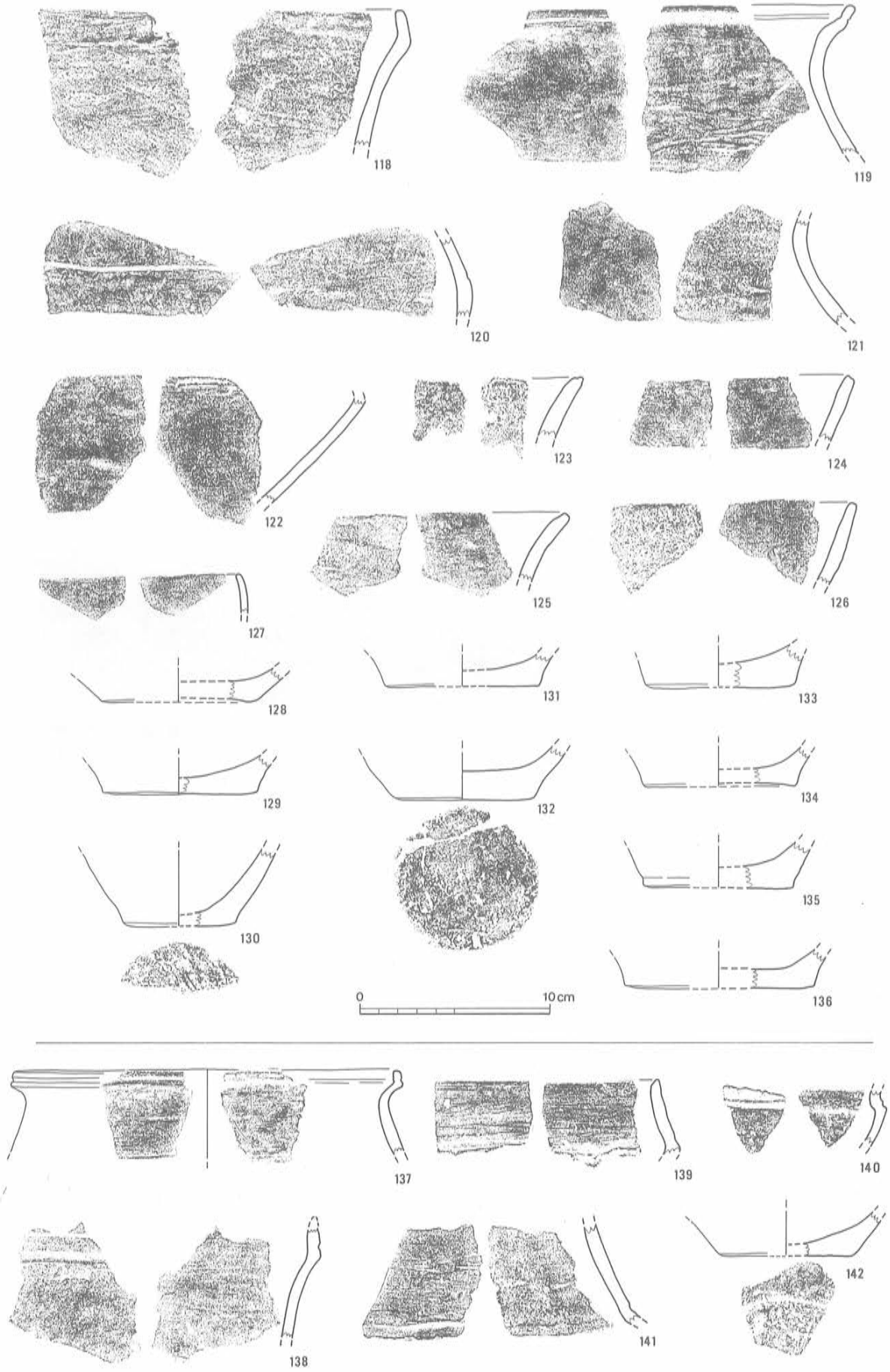


Fig. 79　縄文晩期住居跡等出土土器実測図2 (1/3)

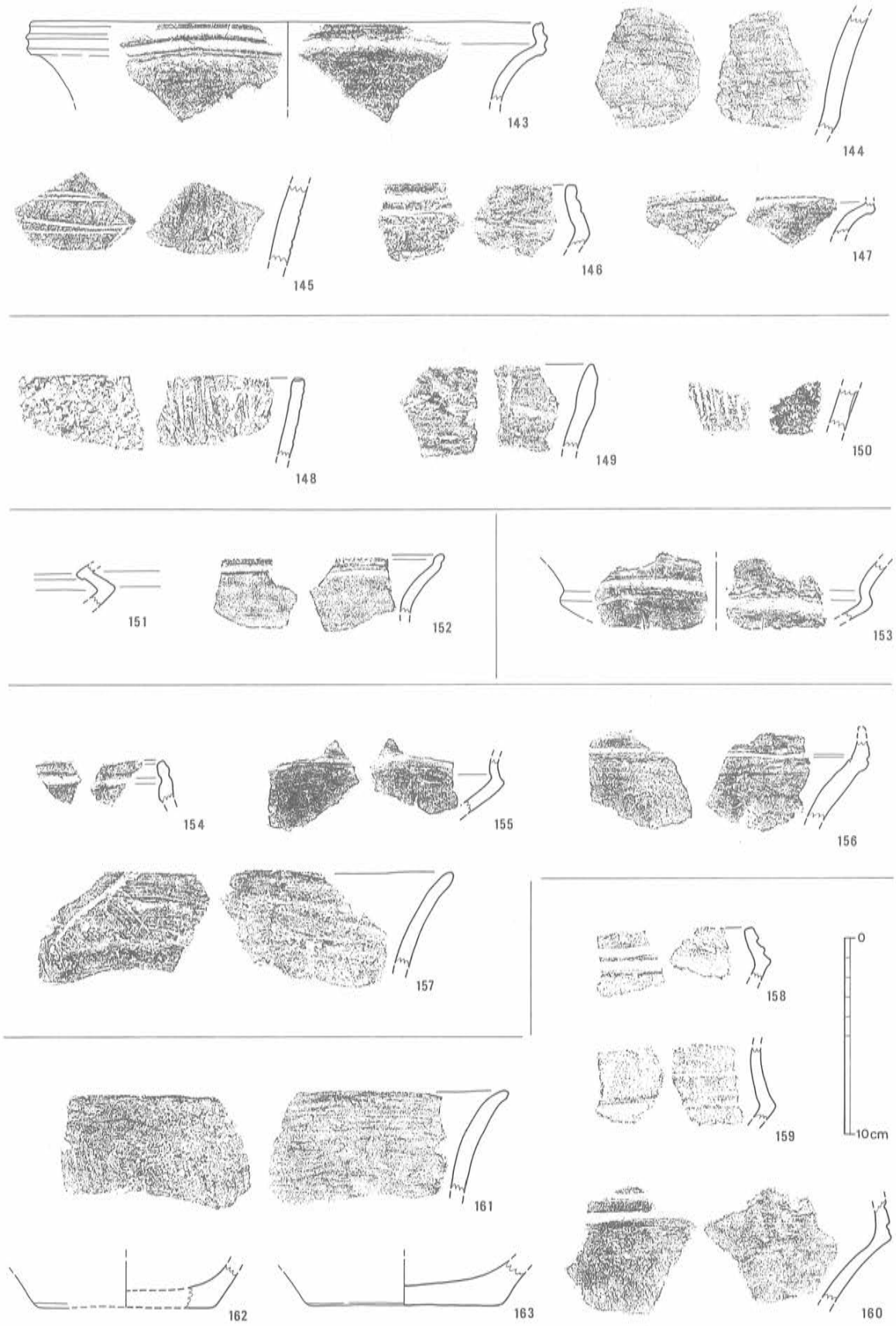


Fig. 80　縄文晩期住居跡等出土土器実測図3 (1/3)

出土土器（PL. 42, Fig. 78～81）

97～181は縄文晩期に属する縄文土器である。大半は晩期前葉の広田式の範疇に納まるが、7号住居跡や包含層出土土器の中には黒川式も若干含まれる。小さな破片資料がほとんどで、口径の推定できるものは6点と少ない。また、器形の復原も困難ではあるが、口縁部の多くは深鉢で鉢や浅鉢は少ない。器面調整は有文土器についてはナデもしくはミガキで、無文土器についてはナデが中心で条痕文も若干見られる。

97～136は1号住居跡から出土した一群で、量的には最も纏まっている。口縁部は「く」の字状に屈折して、その外面に主に2本の沈線文を施す。この口縁部は屈折してほぼ直線的に立ち上がるものと、やや内側へ傾くものとがある。頸部は緩やかに開いて立ち上がるのがほとんどであるが、109・119のように強く外反するものもある。確実に波状口縁を形成するのは99と109で、復原口径32cmの109の波頂部とその下の屈折部は刻まれる。110・111の復原口径はともに32cmを測る。底部は上げ底

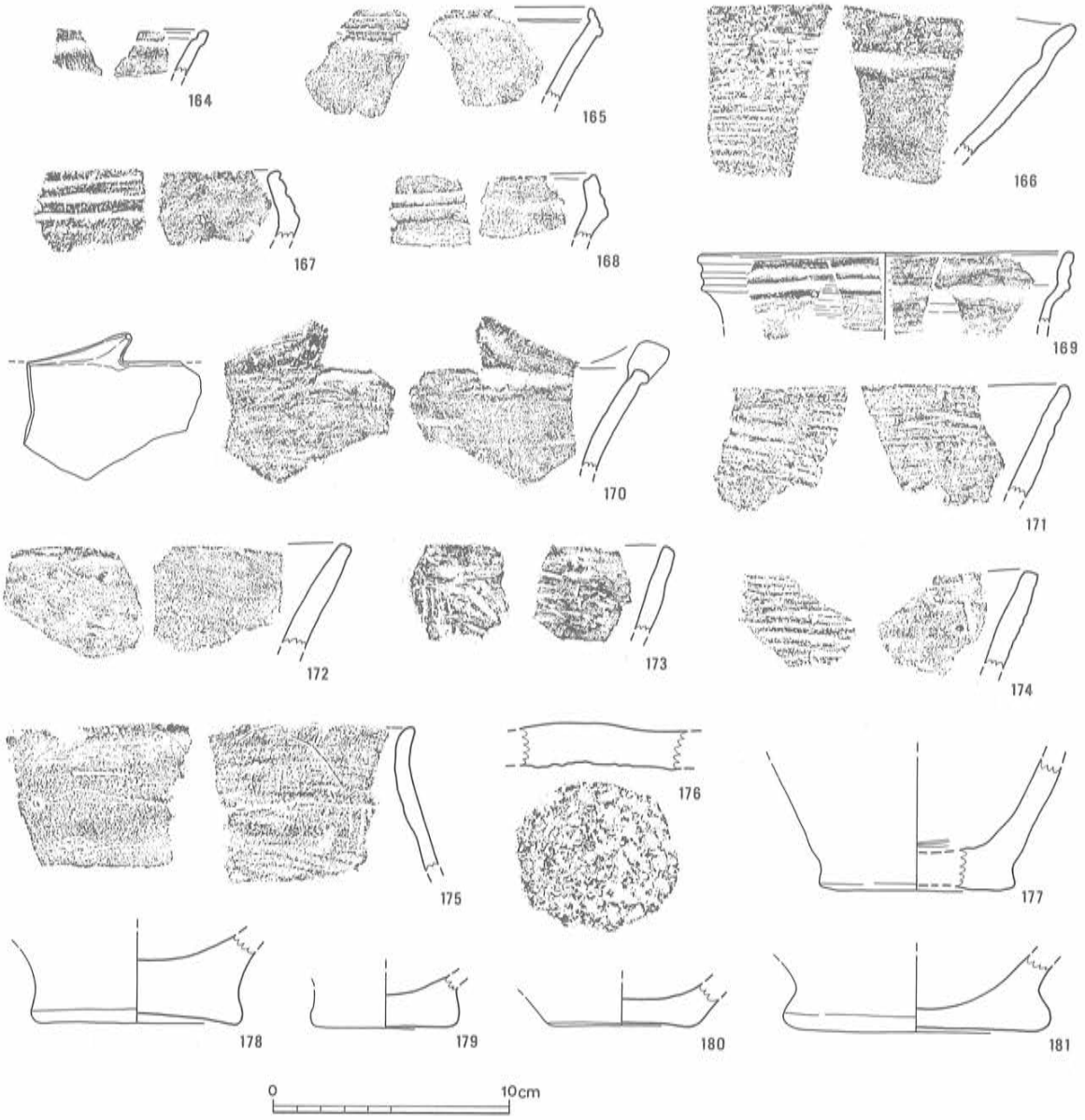


Fig. 81　縄文晩期住居跡等出土土器実測図4（1/3）

状になるものはなく、全て平坦である。130には圧痕が観察されるが、その対象物は不明。

137～142は２号住居跡出土の縄文土器。137については復原口径21cmを測る。141には沈線文が１本施される。142の底部には圧痕が観察されるが対象物不明。

143～147は3号住居跡出土。143は復原口径29cmを測る。145については分厚い器壁と沈線文の特徴から早期の塞ノ神式に属する可能性が高いが、本遺跡の縄文早期土器には塞ノ神式土器が１点も含まれていないので検討を要する。

148～150は4号住居跡出土土器。148の外面には圧痕が観察されるが、その原体は不明。内面にはやはり原体不明の縦位の条痕文が施される。口縁端部に施される刻み目といい、晩期土器の中ではあまり類例の認められない資料である。150の外面には縦位の条痕文が施され、あるいは早期に含まれるのかもしれない。

151・152は晩期中葉の黒川式で、他の晩期土器とは年代が異なりやや新しい。

154～157は13号住居跡出土、153は14号住居跡出土、158～163は3号墳墳丘内からの出土であるが、いずれも磨滅が著しい。

164～181は縄文時代以降の遺構やピット等から出土した縄文晩期土器である。166・170のように晩期中葉の黒川式も若干含まれるが、大半は晩期前葉の広田式である。176の底部には竹管状の圧痕が観察される。（水ノ江）

3　その他の石器（PL. 42,43, Fig. 82-1～5、83-7～19、84-27～33、85-34～41・44）

礫石器（PL. 43, Fig. 82-1～5）

ふつう「礫器」と呼称されているものであるが、これからは「礫石器」との名称を使用することとする。１・５は８号墳周溝、２は４号墳周溝、３は３号墳周溝、４は11号墳墳丘下層から出土した。

白木西原遺跡では５個見つかっており、それらは古墳の周溝などでの発見であり、おそらく原位置状態から何らかの事情により移動しているものと考えてよい。これはその出土地点を含む調査地一帯に顕著な生活遺構がないこと、出土品にある程度の生活的な種類としての器種の一括品がないこと、また礫石器それぞれにおける風化面（いわゆる剥離面における「パティナ」）での顕著な変化がないことは、時代的な差異も少ないことをうかがわせる。しかし、剥片石器のうちでFig. 106-71（黒曜石）は剥離面のパティナが他の黒曜石片と完全に異なるものがあり、これらからすれば、時代的に旧石器か縄文時代かという問題も検討せざるを得ないのかもしれない。

石質は５を除き全て荒い砂岩的な印象の強い均質的なもので、現状では暗黄褐色を呈している。

１はやや小型の大半加工のディスク状礫石器である。この形状の石器は当白木西原遺跡では唯一の出土品である。扁平礫を素材とし、剥離面稜線のごく一部に若干磨滅した刃部が残されており、他の大半の表裏両面を構成している剥離面の接面または接点はきわめて新鮮な鋭い刃線が残されているのが特長である。はじめの段階でおおまかにＢ面を形成したものと考えられ、次にＡ面を作り出したものと考えられる。先端部での剥離は一部分にきわめて集中的であり、それも一面側に対して行われている。

２は、礫を片面側にごく粗く、大きく３回打ち剥がし、反対面にやや細かく６回以上の剥離をしている。これらによって明らかに1と異なり、先端部から片側面部にかけての使用目的がうかがわれ

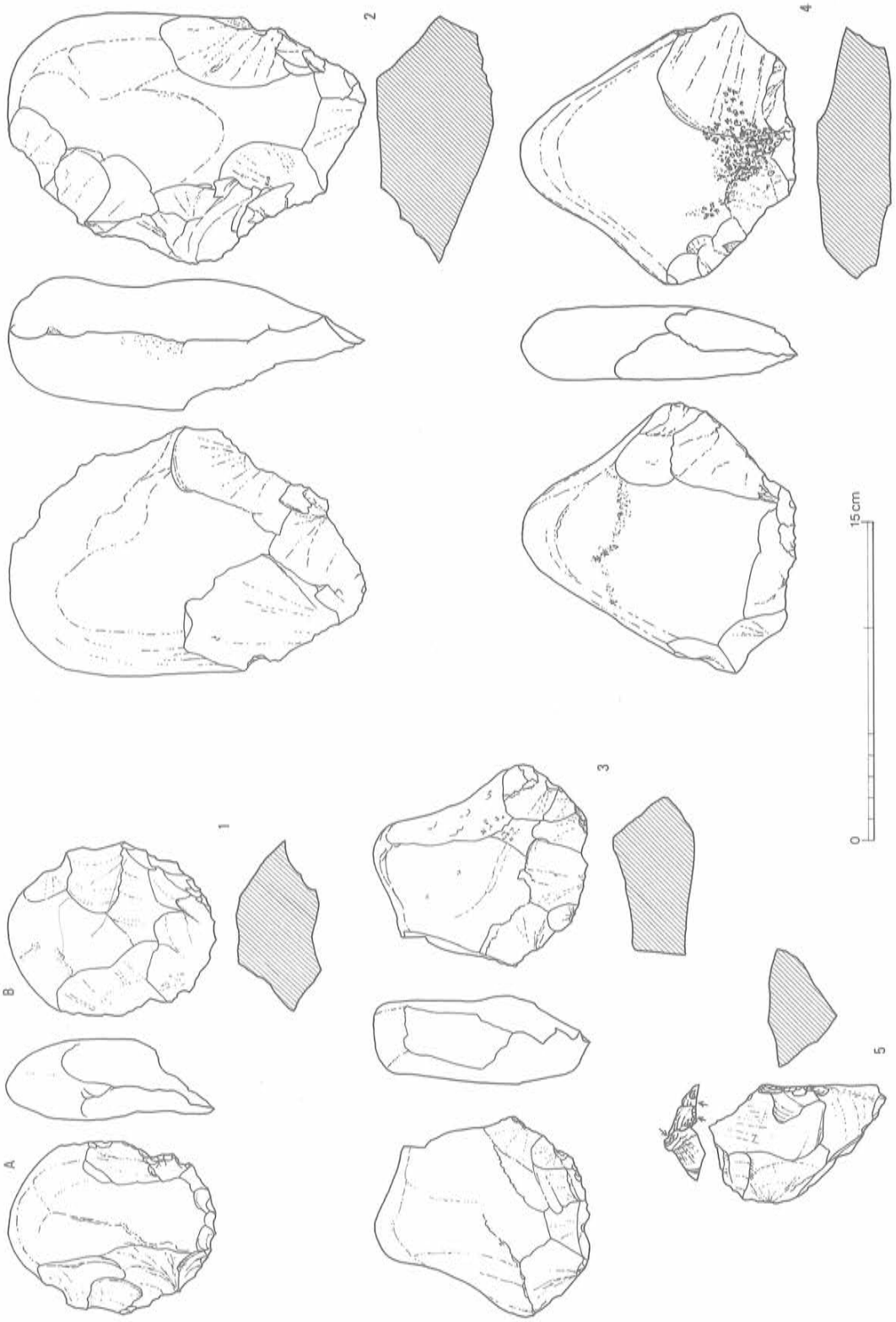


Fig. 82　白木西原遺跡住居跡その他出土石器実測図1（1/3）

る。石器の剥離部分を上下に分割して考えれば、上半部にstep flakingが少なく、下半部にそれが多いようにもみられる。このことはこの石器の断面形にも見られる形態から、上・下で剥離目的が異なるのかと推測もできる。この石器自体は「尖頭状」礫石器ではあるが、必ずしも尖頭石器とは表現しがたく、むしろ下半部と一部側縁を使用する用途であろうと考えるのが妥当なのであろう。剥離面で構成される刃線はかなり鋭利な状態が残されている。

3は、礫の全周の下部4分の1ほどのなだらかな山形状の部分の表裏に対して、計10回前後の整形剥離痕が残されている礫石器である。扁平な原石を利用しているのは他の礫石器と同様である。しかし、この石器は特に人工の調整剥離が原礫の一部（先端部の4分の1程度）に限られていることである。しかも、1・2に比して剥離面で構成される刃部角（表裏の両面調整の形成する角度）は印象的にではあるが鈍である。したがって、前二者とは明らかに異なる用途を想起させるに足る石器であると言い得る。これは4にも共通する。

4は刃角は3よりも鋭であるが、刃部の範囲や、刃部として調整剥離された部分の様相はきわめて近似している。素材の扁平な状況や、刃部として加工されたと推測される加工痕の位置やその範囲・程度は3とほぼ共通している。

5は、安山岩を使った不定形の石器である。表面に大きな剥離痕を残す面がある。その面と直交する一側面に2条と1条の相対する剥離がある。2条を剥離した後に1条の剥離をしており、その間の稜線を彫刻器の刃部と見ることができる。この稜線と、正面の下部にあたる裏の自然面とでつくる稜線がやや磨耗しており、この石器だけが他の4点と異種である。

以上が白木西原遺跡での礫石器のごく大まかな観察である。以前、本町での礫石器の1個について報告したことがある。その際にも記しておいたことではあるが、ここでも記したような礫石器は、これまで時代的な位置づけが判然となされていなかった。出土遺跡がわかっていても伴出遺物の不足・不明という事情や、また発掘調査例ではなかったというようなことによっている（山門郡清水山遺跡群)。しかしながら近年八女市立山山遺跡、立花町北山小学校遺跡などや、今回報告の本遺跡などにより、次第に本来の位置づけがなされつつあるように思われる。清水山遺跡群での発見品も含めて、筑後地方に多量に見出される礫石器の資料についての姿が浮かび上がるのはほど近いかもしれない。当該地方での発見例に旧石器的要素が少ないことや、裏腹に縄文時代早期の押型文土器関係の資料が多いことなどがヒントになろう。がそれでもなおかつ、決定的に証明するものをつかむのはきわめて困難であることは言をまたない。（横田）

8～11は黒曜石製の石鏃で7号墳の玄室周辺より出土した。8は凹基式で先端部と基端の一部を欠損している。基部の抉りは深い。残存部の計測値は長さ35.5㎜、幅18.5㎜、重さ2.2g。9の側縁は平行に近く、先端部ですぼまるように加工されている。腹面には素材面を大きく残している。残存計測値は長さ25㎜、幅13㎜、重さ0.8g。10は基部に大きな抉りの入る凹基式で、縄文時代早期に盛行する鍬形鏃の典型であろう。長さ23.5㎜、幅17.5㎜、重さ1.2g。11も10と同様の鍬形鏃である。長さ22.5㎜、幅17㎜、重さ1.3g。

12は黒曜石製の鍬形鏃で長さ21㎜、幅15㎜、重さ0.85g。8号墳玄室内出土。13は刃部を意識したと思われる二次加工が施されており、かつ使用痕が認められることから不定形のスクレイパーとする。使用痕は両側縁に認められる。長さ43.5㎜、幅31.5㎜、厚さ13㎜、重さ12.7g。黒曜石製。8号

墳玄室前面の出土。14は黒曜石製のラウンドスクレイパーである。長さ29㎜、幅27.5㎜、厚さ8.5㎜、重さ6.1g。8号墳周溝の出土。

15はサヌカイト製の石槍で先端部を大きく欠損している。基部加工が貧弱なのに対し両側縁の加工は入念である。残存計測値は長さ100㎜、幅23.5㎜、厚さ9㎜、重さ24.3g。5号墳墳丘内出土。

7は黒曜石製のつまみ形石器である。端部並びに側縁部に微細剥離痕が認められる。長さ25.5㎜、幅20.5㎜、厚さ5㎜、重さ2.7g。

16～19は表採資料である。16はサヌカイト製の石匙で、背面に礫面を残す横長剥片を素材に用いている。腹面側の刃部加工が特に入念である。長さ45㎜、幅101.5㎜、厚さ16.5㎜、重さ55.8g。17は

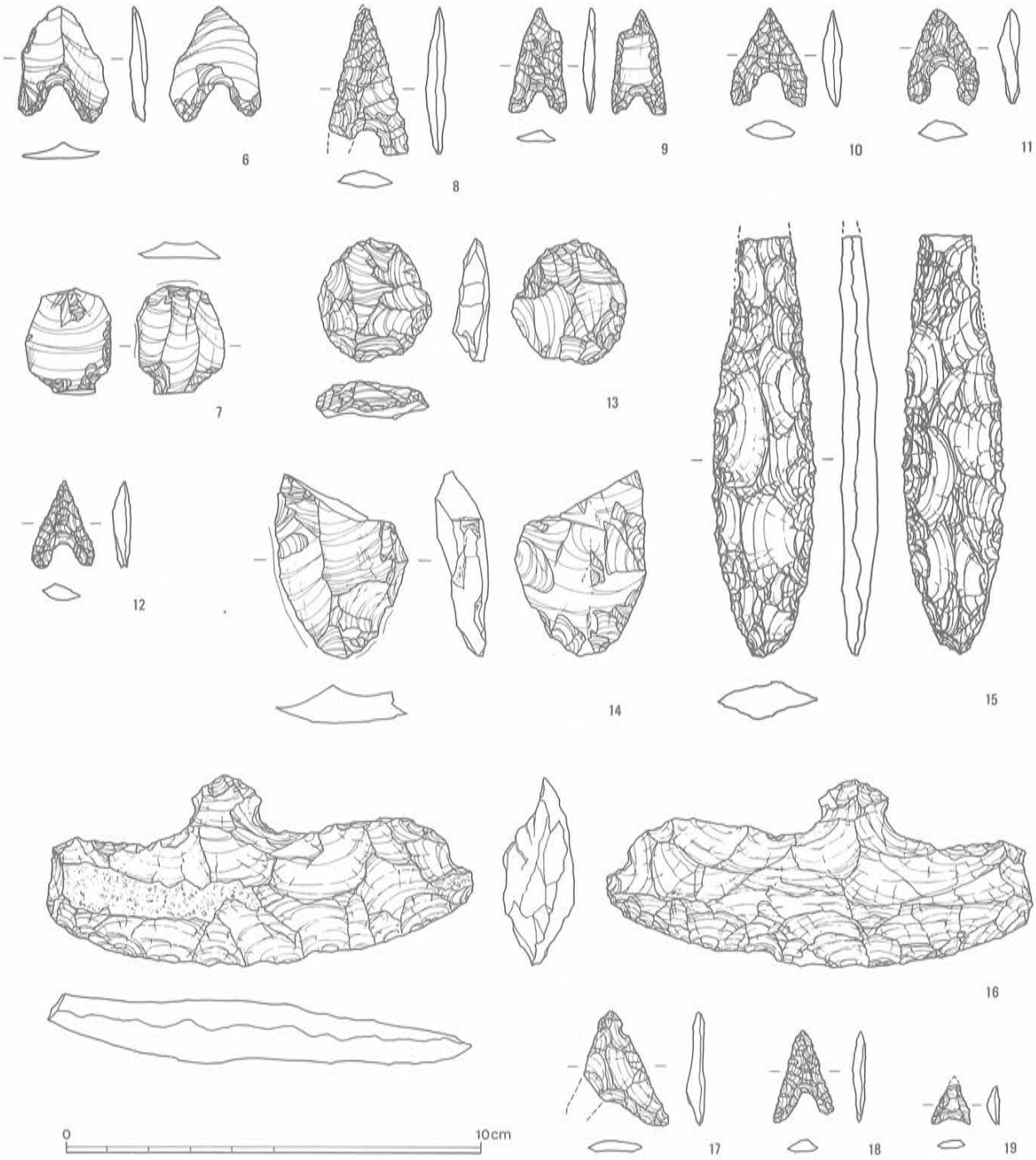


Fig. 83　白木西原遺跡住居跡その他出土石器実測図2（2/3）

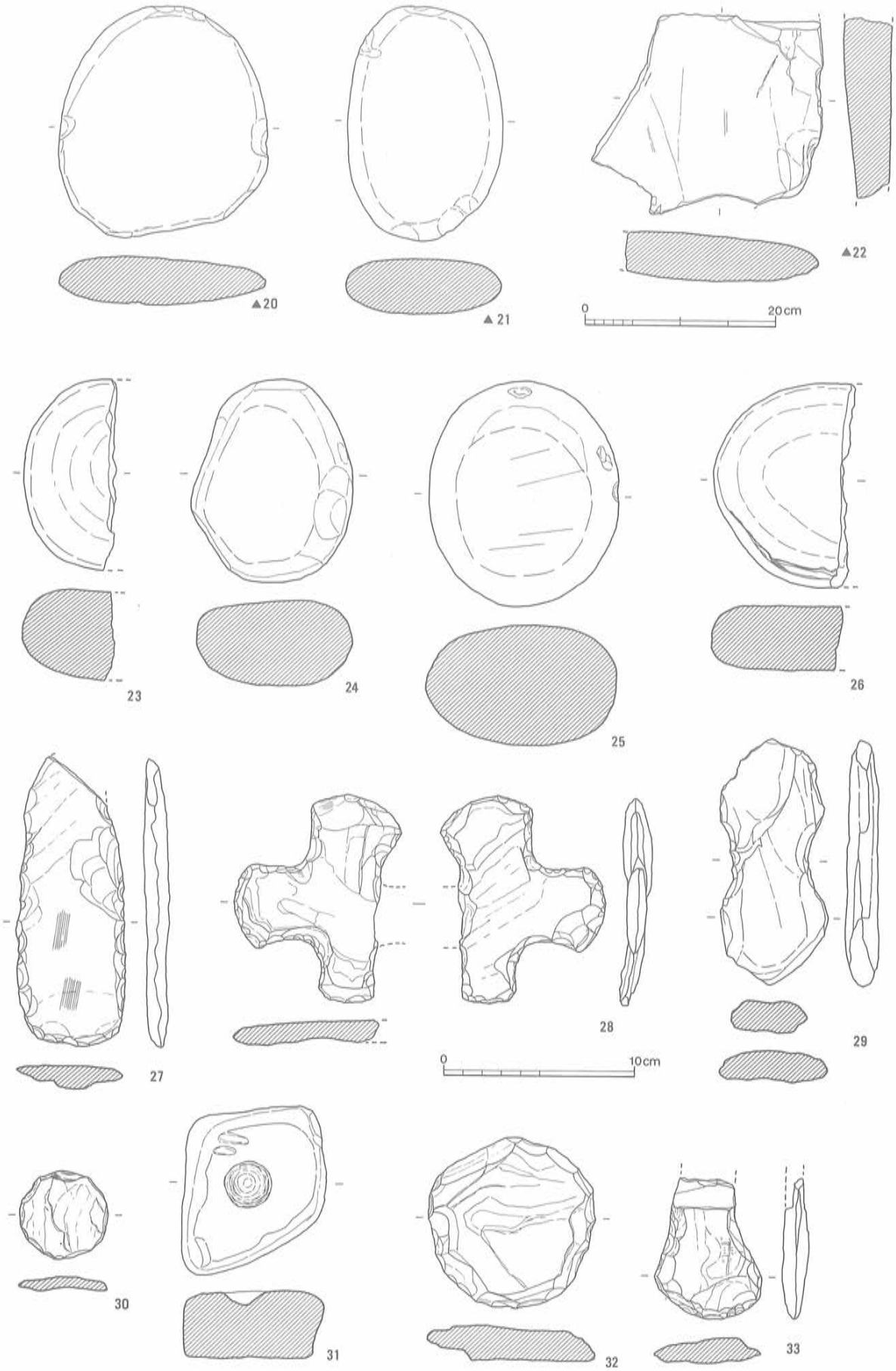


Fig. 84　白木西原遺跡住居跡その他出土石器実測図3（1/3・1/6）

いわゆる赤チャート製、凹基式の石鏃で、一脚を大きく欠損している。背面の一部には素材面が残っている。長さ27㎜、幅20㎜、重さ1.7g。18は左右の脚の長さは違うが基部の抉りは大きい。長さ22.5㎜、幅14.5㎜、重さ0.6g。黒曜石製。19は姫島産黒曜石製で先端部を欠損する。残存計測値は長さ9.5㎜、幅9.5㎜、重さ0.2g。（杉原）

27～31のうち27・28は11号墳の墳丘下層、29～31は墳丘最上層から出土した。27・28は縄文晩期に伴うとみてほぼ間違いないが他は新しい時期の可能性がある。27は片岩製の扁平打製石斧で頭部を少し欠損する。擦過痕は明瞭ではないが斜めに走っているように見える。現存長15cm、幅5.7cm、厚さ1.2cm。28は一突起部を欠失した石英片岩の十字形石器である。残存する３突起のうち２個は幅広いがもう１つは細身であり、欠失した部分もあまり幅広くないと推定できる。突起先端に刃部を形成している所があり、また抉り部分には擦れた痕跡があるので、柄を着装して使用したものかと考えられる。長さは残存部で11cm、厚さは1.5cm。29は分銅形に抉りの入った片岩製品で、錘としてよいのかもしれない。長さ12.8cmで、幅は最大5.7cm、抉り部で4cm、厚さ1.6cm。30は片岩製の円盤

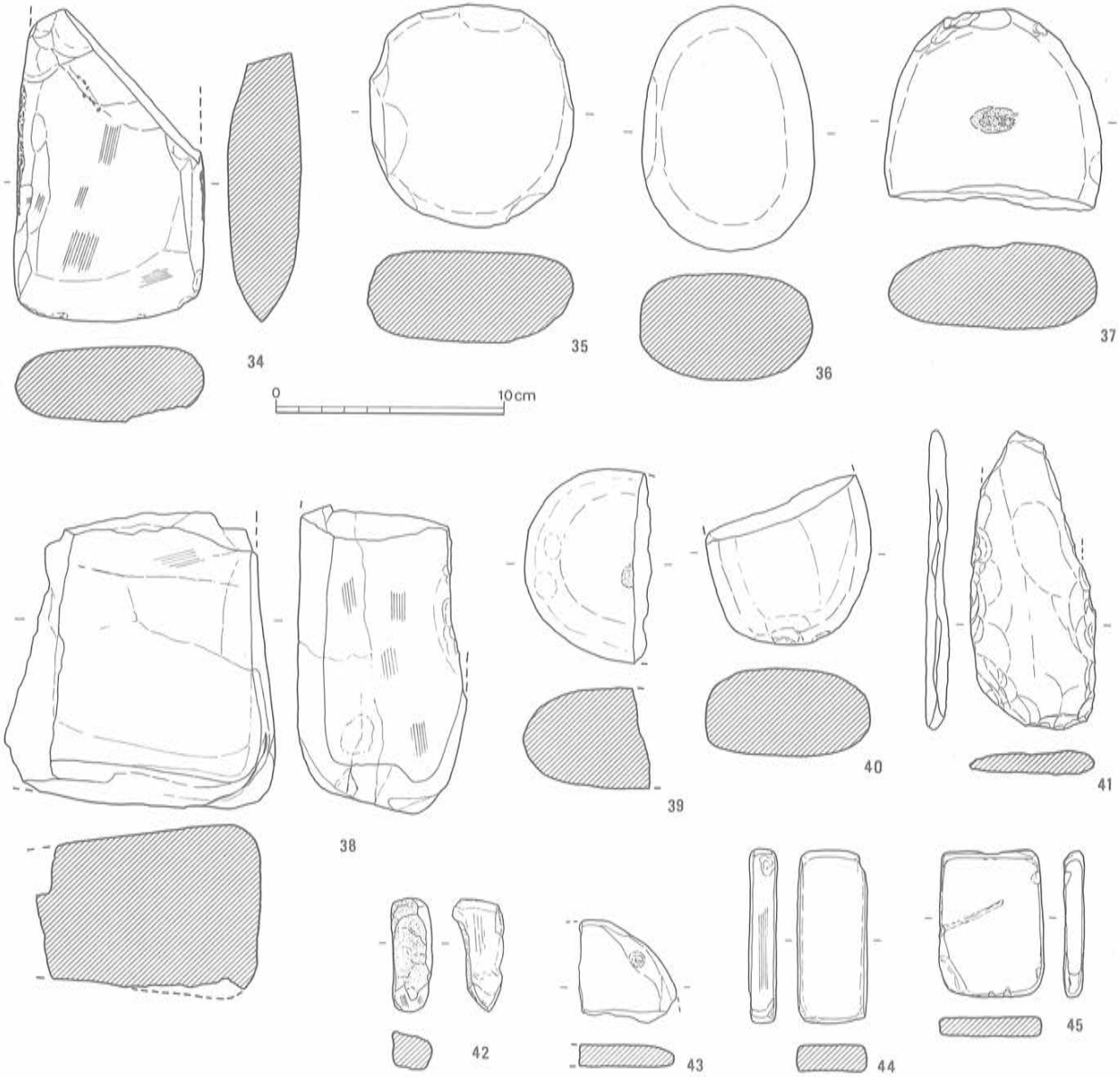


Fig.85　白木西原遺跡住居跡その他出土石器実測図4（1/3）

である。薄い片岩の周縁を打ち欠いて形を整え、一部には擦ったあとがある。径46㎜、厚さ６㎜、重さ18.7g。用途不明。31は片岩の凹石である。くぼみ部分は穿孔しようとしたような感じを受ける。

32･33は12号墳の周溝出土である。32は片岩の周縁を打ち欠いて円盤としたものであるが、表裏･周縁とも擦ったような痕跡はみえない。径8.7～9cm、厚さ1.8cm、重さ173.3g。33は片岩の扁平打製石器で、大振りの十字形石器の可能性もないではないが別物と考えたほうがよかろう。一部に齧歯目動物の歯痕が印されている。現存長7.3cm、最大幅5.7cm。

34･35は1号墳の石室北西部の周溝内出土。34は頁岩質石材の磨製石斧である。表面には擦過痕が見られ、側面には敲打痕がある。現存長13.5cm、幅8.3cm、厚さ3.2cm。35は自然円礫であるが周縁に剥離があり、叩石として用いたものらしい。径9～9.7cm、厚さ4cm。

36は３号墳墓道出土の磨石である。一側面は面をとっているようだ。長さ10.6cm、幅7.6cm、厚さ4.6cm。

37は８～12号住居跡周辺の遺構検出面採集のすり石で、片面の中央に窪みが、側面の一部には敲打痕がある。幅9.5cm、厚さ3.7cm。

40は６号石棺墓とＳＤ１との間にて採集のすり石で、片面は平らに面をとり、一端部には敲打痕がある。幅7.2cm、厚さ3.8cm。

41はＳＤ２の北、不整形の浅い掘り込み内にある小ピットＰ32出土の打製石斧である。片岩製で現存長13cm、幅5.5cm、厚さ１cm。

44は２号墳の玄室床面から出土した扁平な片岩で、四側面は擦った痕跡があるが表裏面はよくわからない。砥石とは考えにくい。幅３cm、長さ7.7cm、厚さ1.1cm。重さ53.5g。

C　弥生時代

弥生時代の遺構で明確に捉えられたものはなかったが、2・3号墳の北方で１号墳の東方にあたる付近の遺構検出面から割と多くの土器片が採集されたので、この周辺に住居跡等があるのかもしれない。1～3・8・9・14・16・17号墳の周溝や石室内外、９・12号住居跡、ＳＢ１・２、そして10・11号墳の北方からも土器片が採集されている。以下に採集された土器について説明するが、大半は弥生後期中頃～後半の時期であり、一部に同末頃のものもあるようだ。なおはっきりと弥生時代の石器といえるものはなかった。

土器（Fig. 86）

１～５は1号墳の周溝と墓道で出土した甕である。１と３はもと丹塗りらしい。５はあるいは壺の底部かもしれない。凸レンズ状になる。

６～10は２号墳の周溝から出土した。６の肩部には櫛描き風の横刷毛目が入る。７は脚台で裾径10.2cm。８は突出度の強いレンズ底になる。９・10は大型の壺になろう。

11は３号墳周溝の出土、12は２・３号墳北方からの出土で、ともに口唇部に刻みを施す。

13・14は8号墳周溝からの出土。13の裾径9.4cmで、内底面は黒変している。

15は壺の底部で、12号住居跡埋土中の出土。

16はＳＢ１のＰ２から出土した。外面肩部はタタキののち刷毛目を施している。復原口径23cm。

17はＳＢ２のＰ６からの出土である。外面のタタキは粗い。

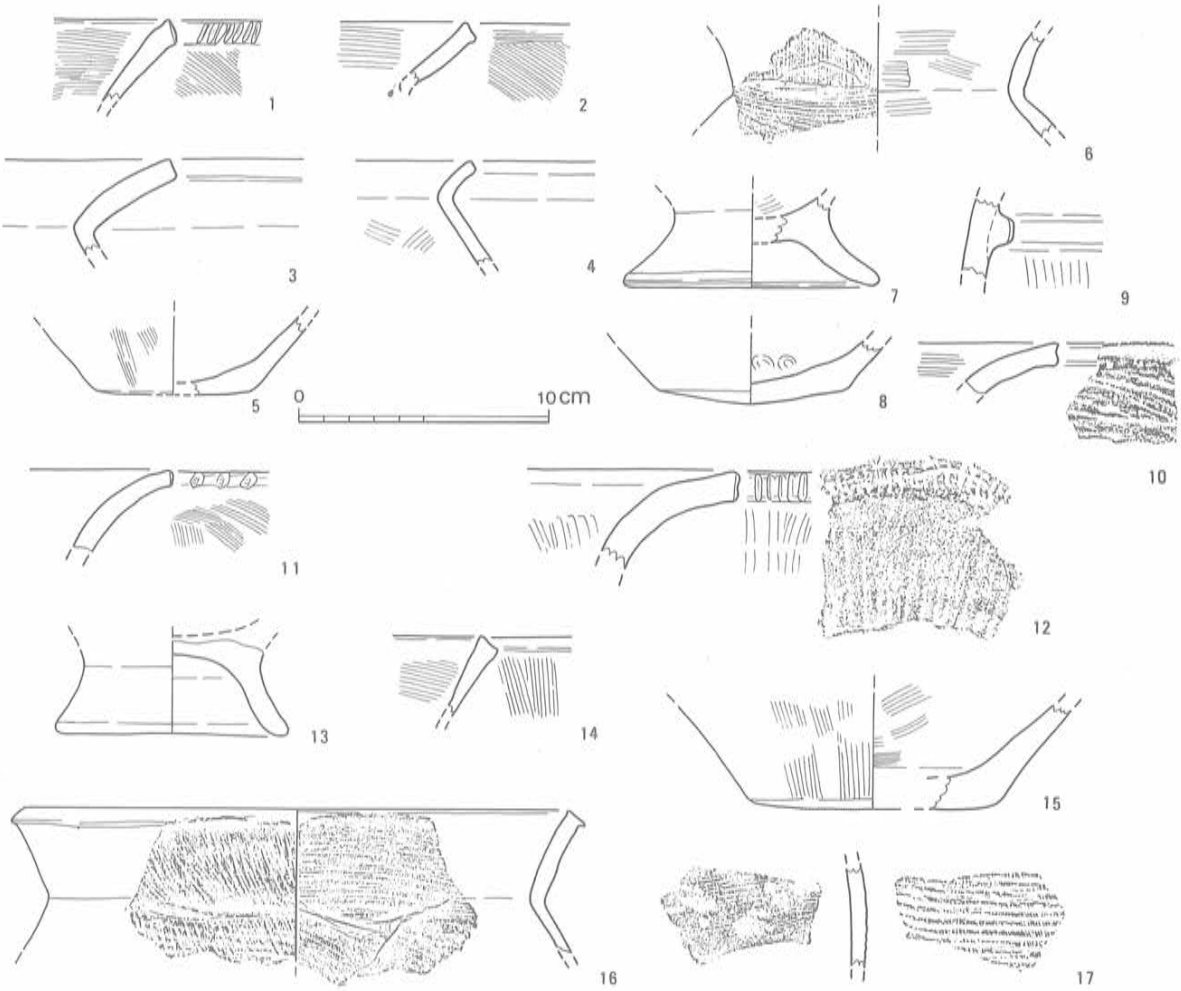


Fig. 86　白木西原遺跡出土弥生土器実測図（1/3）

D　近世墓　(PL. 20,44, Fig. 34,87)

14号墳の西で、13号墳の北にあたる所に７基を検出した。調査時には番号を12まで付していたけれども1・4・10～12は墓とは認められないので除外する。14号墳の墳丘を切り崩してのちに墓を営んでいるが、７基は密集しており、東西方向に２・３、５～７、８・９と並んでいるようにも見えるし、逆に南北方向に２・５、３・６・９、７・８と並んでいるようにも見える。

棺を納めた壙の平面プランは隅円の方形または長楕円形としてよく、その上面周縁に礫を置いて墓標の基礎としている。棺はおそらく桶であったと思われる。

２号墓〈SC２〉(PL. 44, Fig. 87)

平面145×110cmの長楕円形墓壙で二段掘りとなり、深い方で約100cmの深さがある。周縁の礫群は大半が片岩であり、外側に面を向けて立てかけた状態のものもある。出土遺物はない。

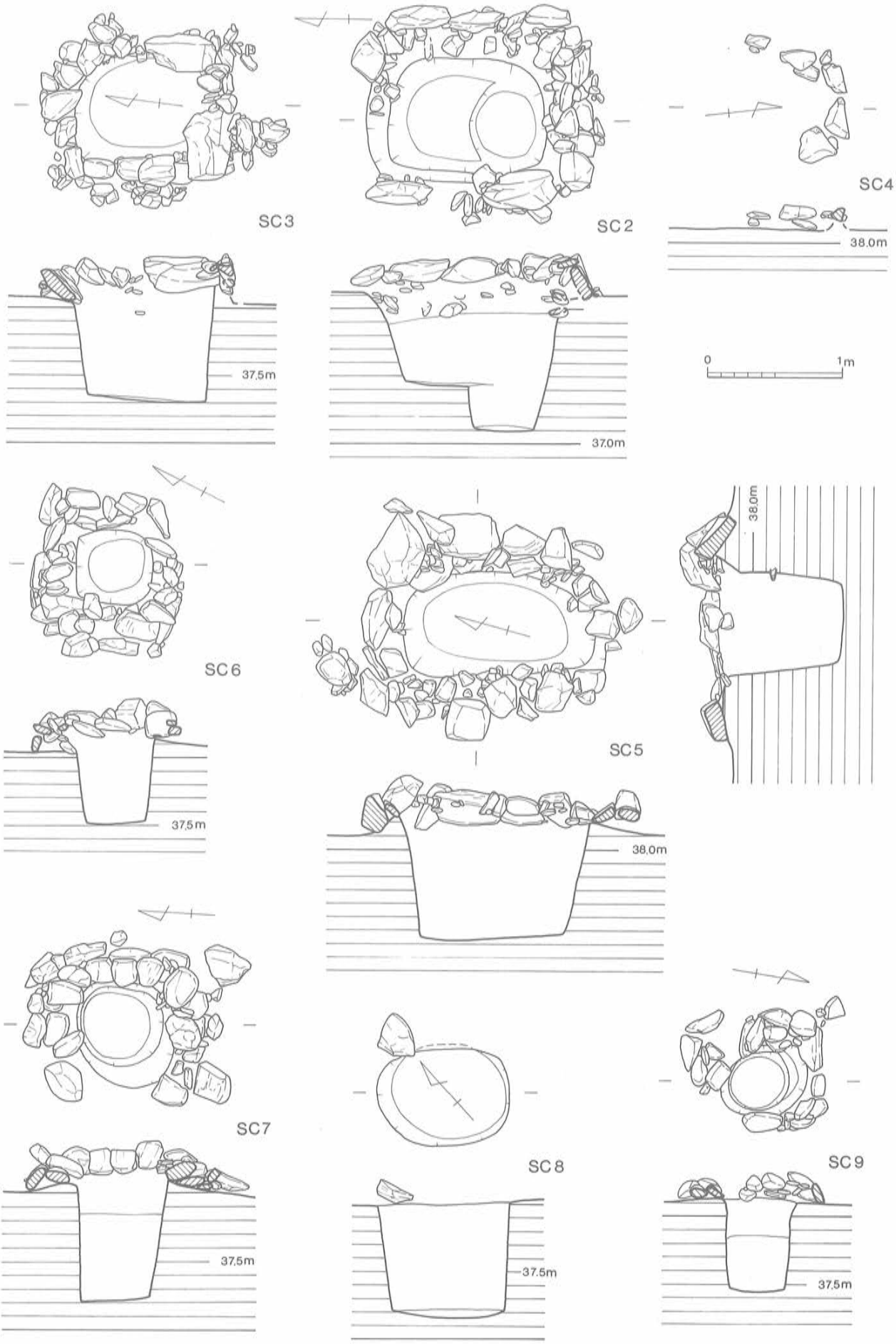


Fig. 87　近世墓（ＳＣ２～９）実測図（1/40）

3号墓〈SC 3〉（PL. 44, Fig. 87）

平面100×80cmの長楕円形墓壙で深さ約85cm。周縁の礫群は片岩であるが石英質のものが多い。この上面にて墓標の台座が出土し、埋土中と周辺には土師器、磁器があった。

出土遺物（Fig. 88-1・14）

1は糸切り底の土師器小皿で、復原口径7.2cm、底径4.3cm、器高1.8cm。14は有田系の磁器染付碗で、高台畳付と見込みの一部が露胎である。復原口径12.5cm、底径4.6cm、器高3.9cm。

4号墓〈SC 4〉（PL. 44, Fig. 87）

北側をコの字に画するように石が置かれていたが墓壙はみられなかった。よってこれは墓とは認めていない。

5号墓〈SC 5〉（PL. 44, Fig. 87）

平面140×75cmの長楕円形墓壙で深さ約85cm。周縁の礫群は片岩ばかりではない。熱を受けたものもあった。埋土中から土師器が出土しているが図示できない。

6号墓〈SC 6〉（PL. 44, Fig. 87）

平面の一辺が55cmの隅円方形墓壙で深さ約60cm。この上面に墓標とその台座があった。埋土中から土師器・陶器が出土している。

出土遺物（Fig. 88-2・3）

2は糸切り底の土師器小皿で復原底径4.2cm。3は陶器で皿になろう。底径4.8cm。

7号墓〈SC 7〉（PL. 44, Fig. 87）

平面が70×80cmの円形墓壙で深さ約90cm。周縁の礫群は片岩・石英片岩と安山岩が用いられている。出土遺物はなかった。

8号墓〈SC 8〉（PL. 44, Fig. 87）

平面97×70cmの楕円形墓壙で深さ82cm。周縁の礫はもともとは存したのであろうがいまは1個しかない。陶器が出土している。

出土遺物（Fig. 88-10）

摺鉢である。内面の摺り目部分はよく摺れた痕跡がある。口縁周辺には黄色くなった褐釉が薄くかかっている。

9号墓〈SC 9〉（PL. 44, Fig. 87）

平面55×60cmの楕円形墓壙で深さ約70cm。周縁の礫群は緑泥片岩・石英片岩・頁岩・玄武岩などが用いられている。白磁が出土した。

出土遺物（Fig. 88-13）

小さな紅皿である。外面の口縁から下は釉が掛からない。復原口径4.6cm、底径1.2cm、器高1.4cm。つくりがやや粗い。

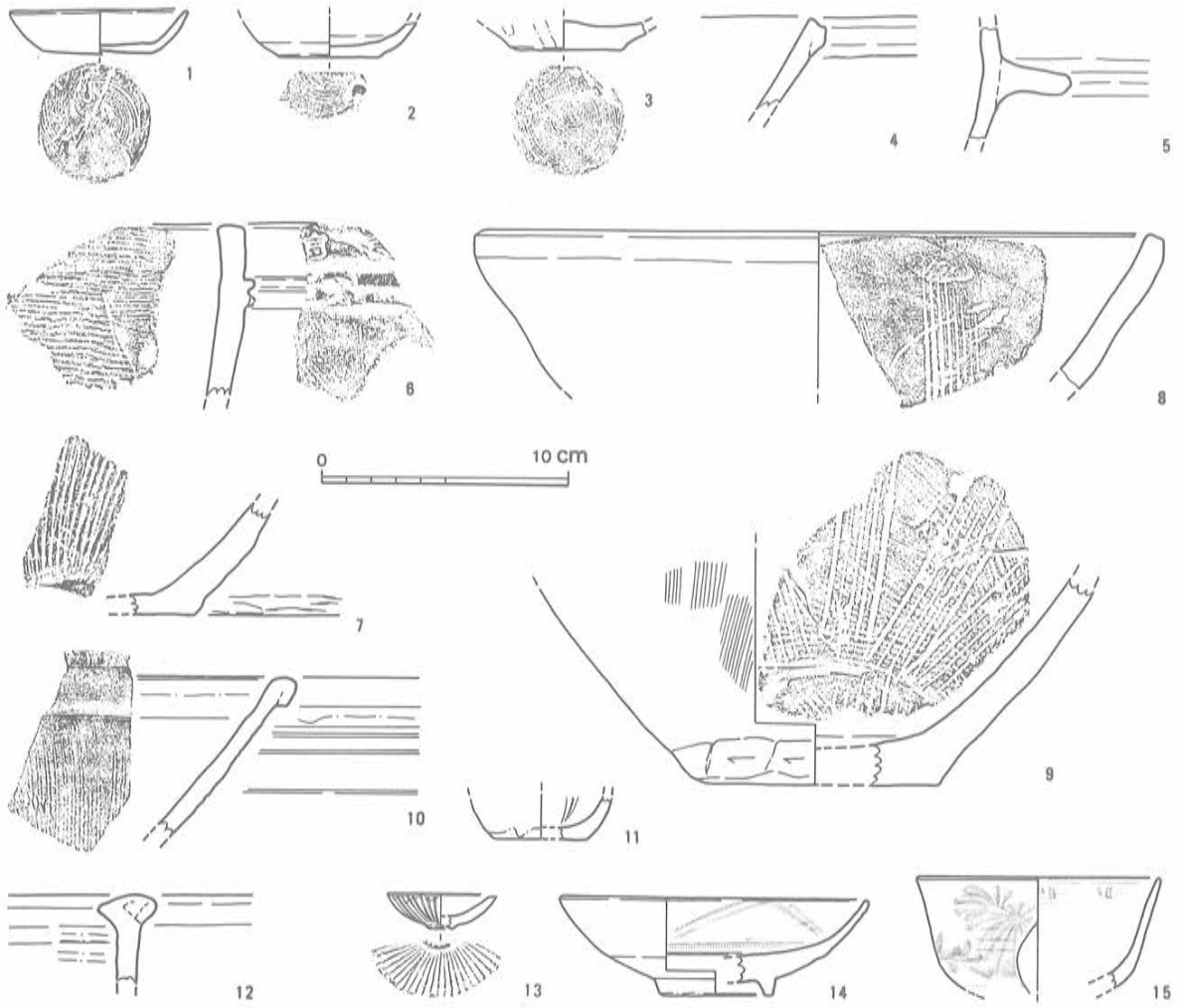


Fig. 88　近世墓出土遺物実測図（1/3）

その他出土遺物（Fig. 88-4～9・11・12・15）

当初SC 1としていた14号墳石室前庭部付近(11)と、SC10・11としていた13号墳石室の西側の所(4～9・12・15)から出土した遺物がある。

11は陶器の小壺で型づくりである。

4は瓦質に近い土師器の鍋。5は羽釜の鍔部分で下面には煤が付着している。6は瓦質の火鉢であろう。口縁直下に「吉」字のスタンプがある。7～9は摺鉢で、7・9は瓦質、8は土師質である。12は陶器の甕で鉄釉が掛かる。15は磁器染付碗で外面に花文をあしらう。

なお、墓石には元禄2年(1689)と享保18年(1733)の年号を刻んだものがあった。元禄2年の墓石にはその側面に「白木村 施主 上妻 儀右衛門　俗名 山口六助」とある（PL. 44)。

ちなみに、12号墳西側の調査区外にもまだ墓石が立っており、年号の確認できたものは承応元年(1652)、万治3年(1660)、寛文11年(1671)、貞享元年(1684)、享保7年(1722)であった。

Ⅴ．Ⅲ区の調査

(PL. 45, Fig. 89・90)

Ⅰ区の北方にあり、カットされる部分の約600m²を調査した。遺構としては溝のSD１・２があり、

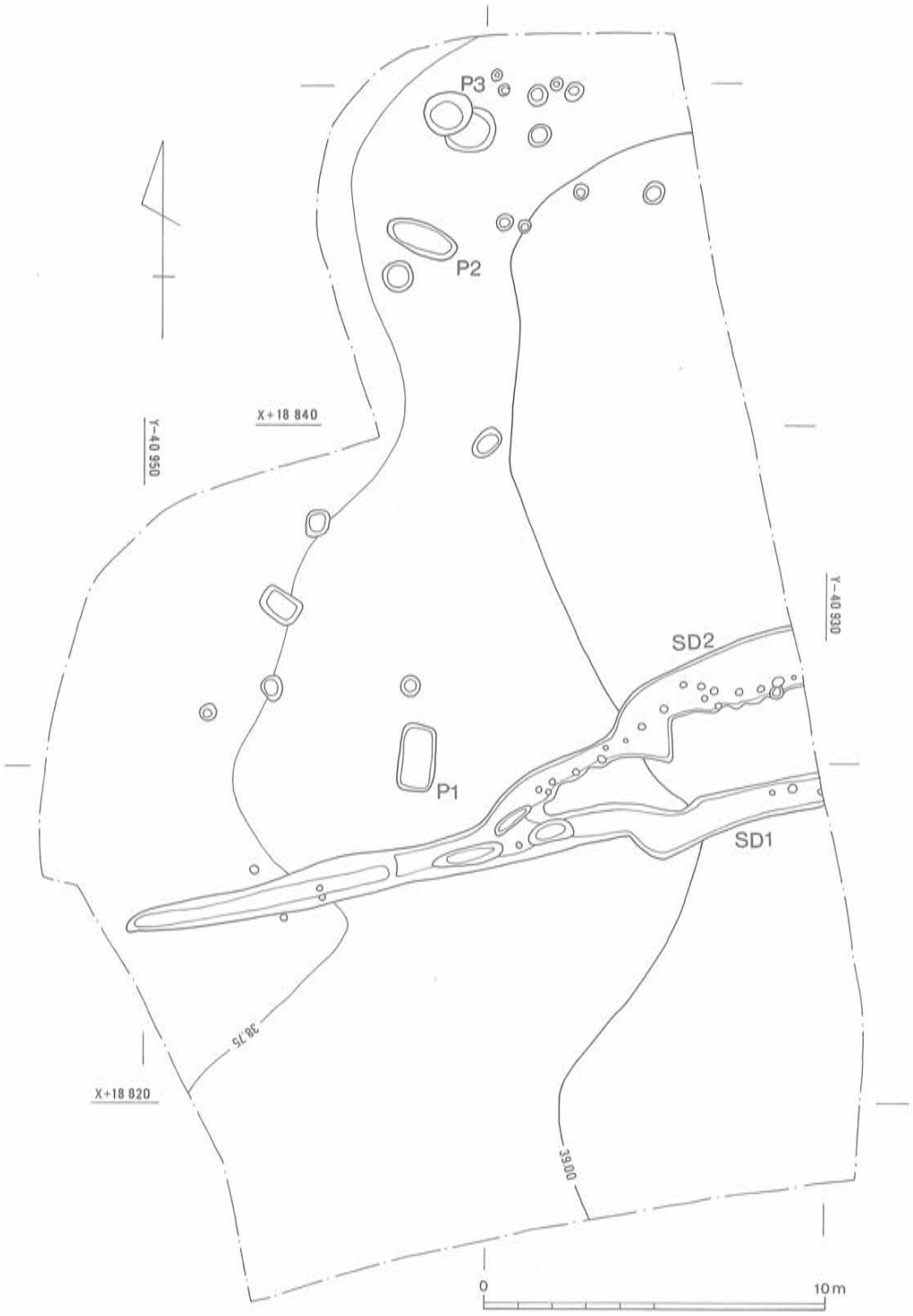


Fig. 89　Ⅲ区遺構配置図 (1/200)

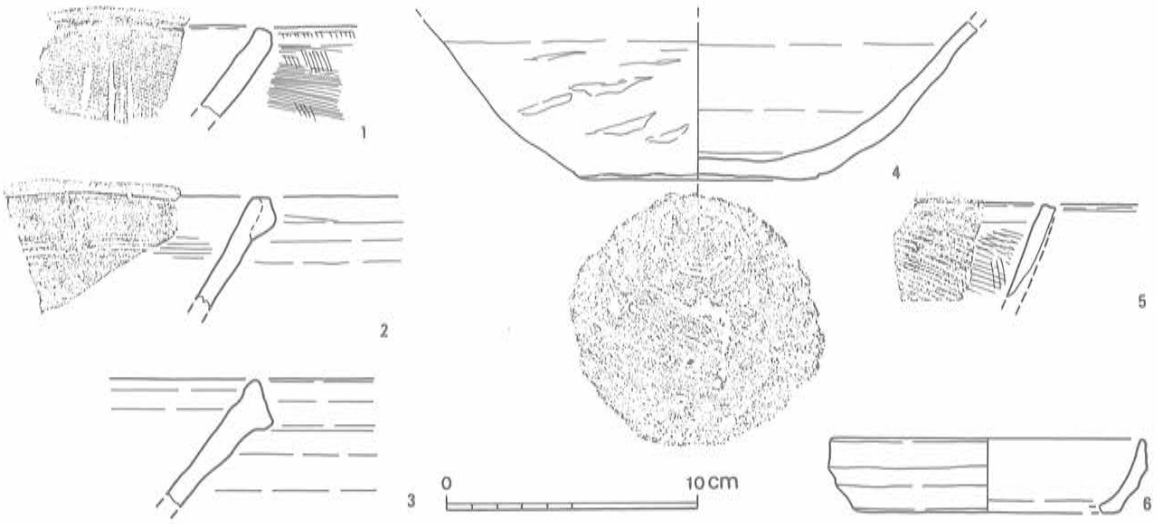


Fig. 90　Ⅲ区出土土器実測図（1/3）

それより北にあまり大きくない土壙、柱穴等が存したのみである。

ここは遺構全体図を作成したのみで、個別図は作成しなかった。

SD１・２　SD１は略東西にはしる溝で、幅は1m前後、深さは10～30cmであって西側が深い。西端部は途切れるが東端は調査区外へと延びていく。調査区の中央あたりから浅いＳＤ２が分岐している。SD２の底面には小ピットが多数穿たれている。

出土遺物　（PL. 45, Fig. 90-1・2）　1は瓦質の摺鉢、２は瓦質に近い土師器の鍋である。

Ｐ１　SD１のすぐ北にある。２×１ｍの長方形プランで深さは約10cm。

出土遺物　（PL. 45, Fig. 90-3）　須恵質の東播系こね鉢である。

Ｐ２　調査区の北端に近い所にある。2.1×0.9mの隅円長方形プランで深さは約30cm。

出土遺物　（PL. 45, Fig. 90-4･5）　4は須恵質のこね鉢で外底面には糸切り痕とその上に板圧痕がある。底径10cm。5は瓦質の摺鉢片。

Ｐ３　調査区の最北端にある。径1.4mの円形プランで深さは約40cm。

出土遺物　（PL. 45, Fig. 90-6）　土師器の坏で復原口径12.6cm、底径10.8cm、器高３cm。

以上の遺構出土遺物をみると、13世紀前葉を中心とする時期に属するものと捉えてよいだろう。

Ⅵ．Ⅳ区の調査

（PL. 45, Fig. 91～95）

Ⅲ区の東方に設定した調査区である。全域に土壙と柱穴が多数検出され、東北部において建物の建つことが確認できた。南端部は柱穴の密度が少しうすくなる。調査面積約223m²。

１号掘立柱建物〈SB１〉（PL. 45, Fig. 91･92）

２棟の重複と捉えられるのでＡ・Ｂに分ける。ともに梁行２間、桁行２間以上の南北棟である。Ａは梁行4.4m、桁行4.2m以上となり、主軸方位はＮ-9.5°-Ｗ。Ｂは梁行4.0m、桁行4.2m以上で主軸方位はＮ-13°-Ｗ。ＡのＰ３とＢのＰ８から中世の土師器片が、またＢのＰ６から鉄滓が出土しているが図示できない。

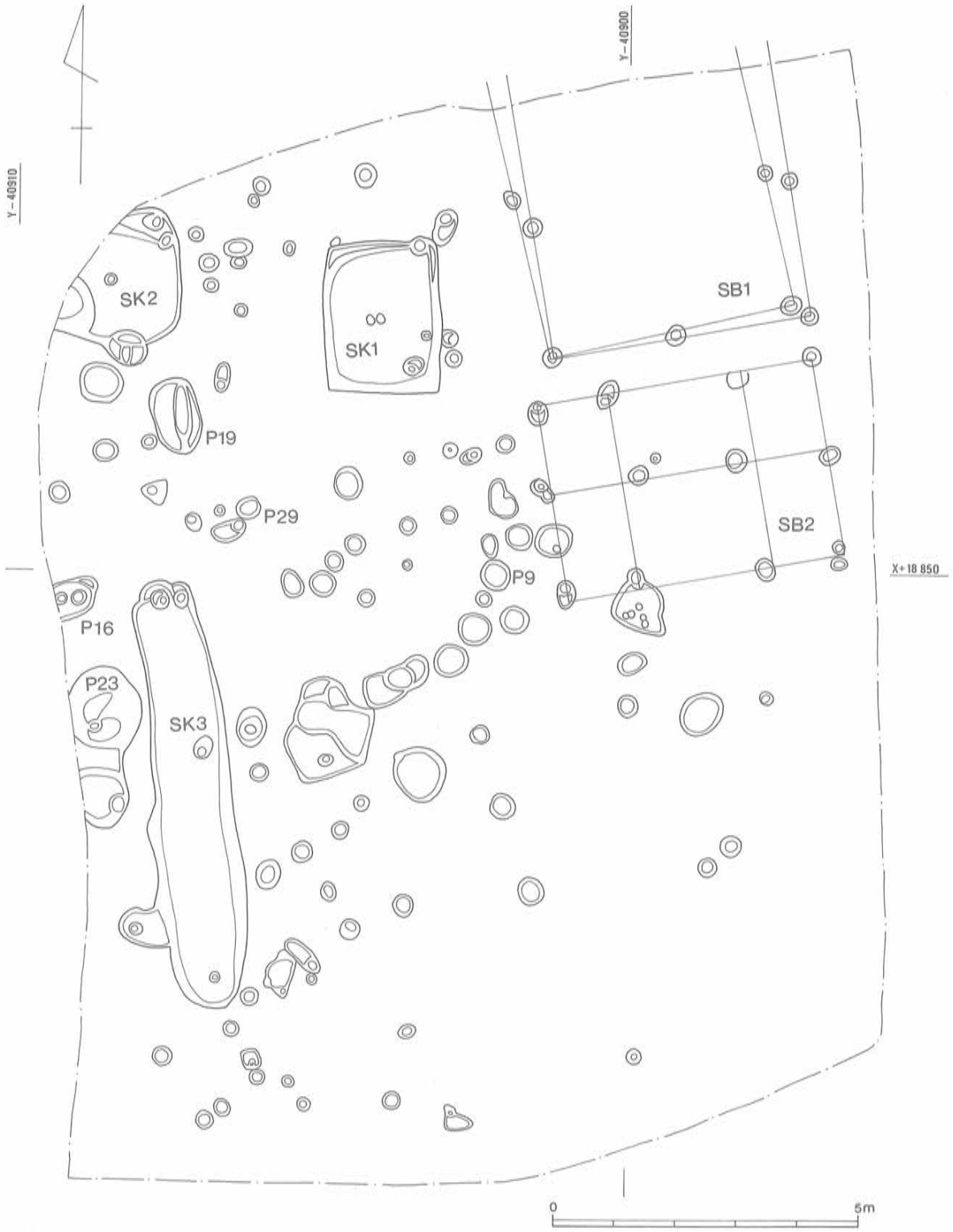


Fig. 91　IV区遺構配置図（1/100）

2号掘立柱建物〈SB 2〉(PL. 45, Fig. 91･92)

2×3間の総柱の東西棟である。梁行3.2m、桁行4.6mであるが、P 6とP 7はともに内側に位置し、その間は1.6mである。主軸方位はN-81°-Eで、SB 1のAとほとんど直行するかたちとなる。P 3・6・9・13から中世の土師器片が出土している。

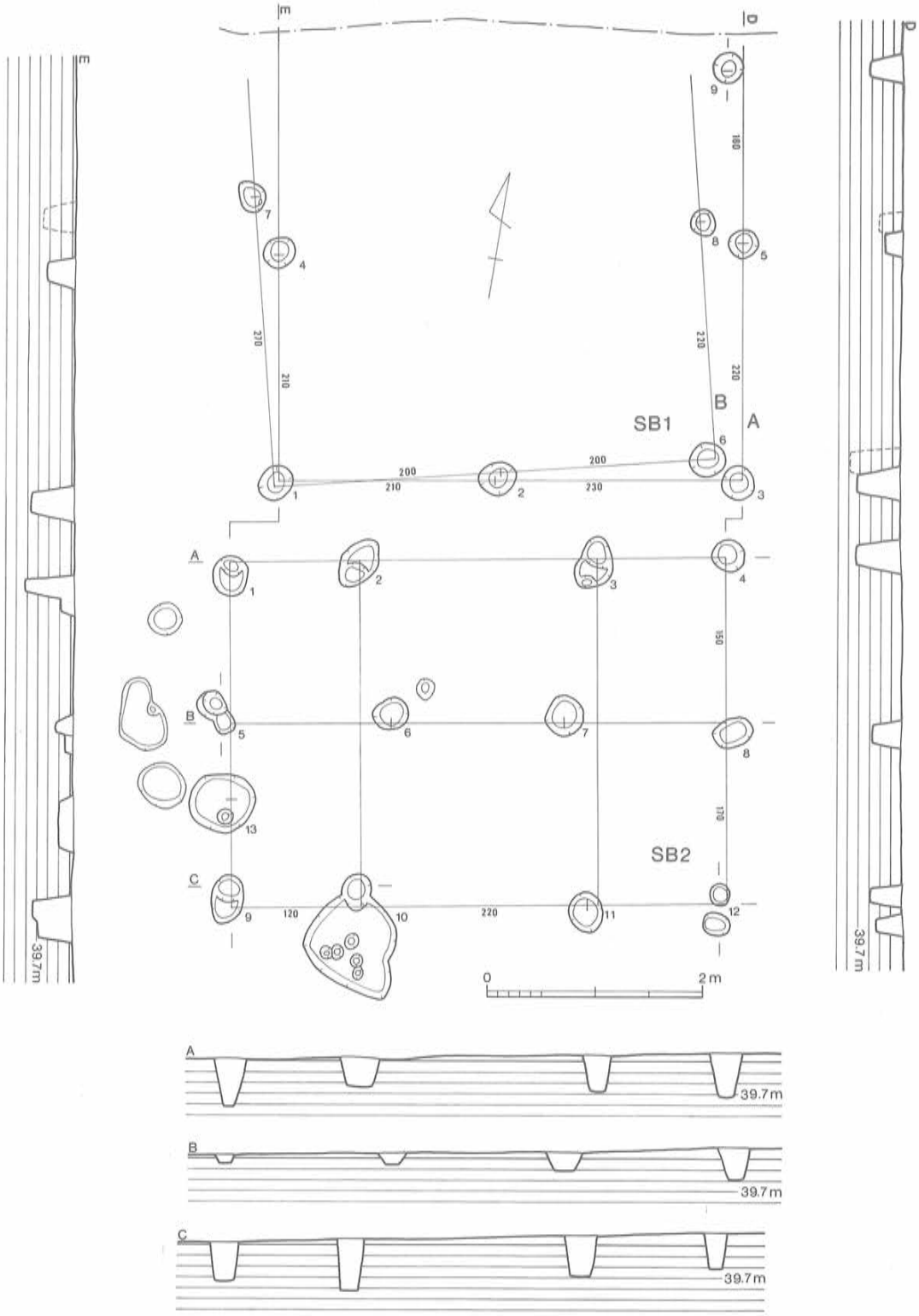


Fig. 92　IV区SB 1・2実測図 (1/60)

出土遺物（PL. 45, Fig. 94-1･2） 1はＰ9出土の土師器坏。2はＰ9･13出土の土鍋で内外面に煤が付着し、二次火熱を受けている。口径29cm。ＳＫ１の3は同一個体かもしれない。

１号土壙〈SK１〉（PL. 45, Fig. 91～93）

ＳＢ１の西にある。平面形は1.8×2.5mの長方形プランで、深さは27cm。北壁と東壁の北端には段が付く。底面に小ピットがある。主軸方位はN-1.5°-W。

出土遺物（PL. 45, Fig. 94-3･4） 3は土鍋の破片で外面にはコゲが付着する。4は龍泉窯系の青磁

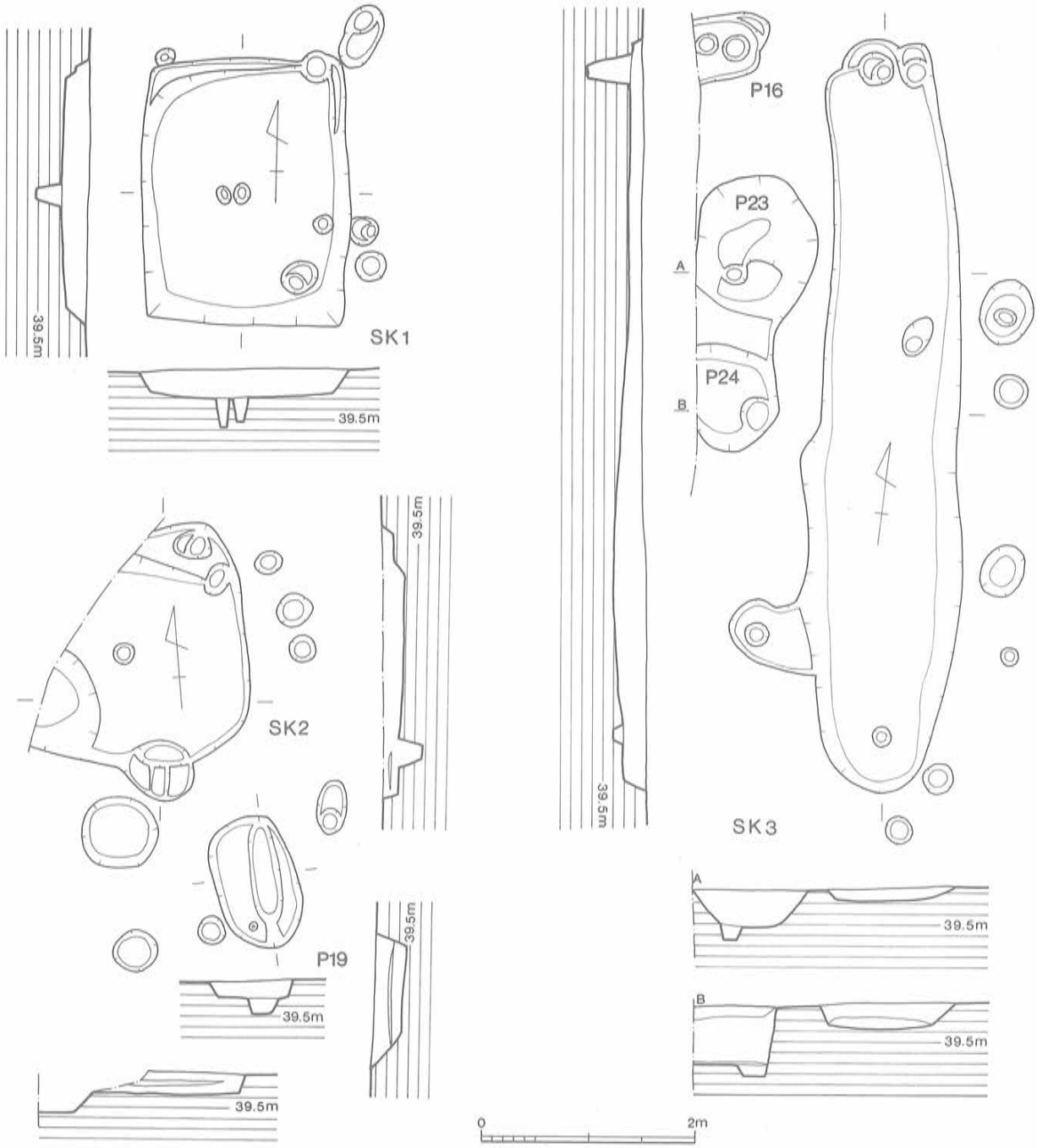


Fig. 93　Ⅳ区ＳＫ１～３、Ｐ19・23実測図（1/60）

2号土壙〈SK 2〉（PL. 45, Fig. 91,93）

SK 1の西にあり、西半は調査区外にかかる。平面形は南北2.2m、東西2m以上の長方形プランであろう。深さは約20cm。北壁には段が付く。

出土遺物（PL. 45, Fig. 94-5～11） 5は糸切り底の土師器小皿の完形品で口径8.8cm、底径7.6cm、器高1.3cm。6～8は土師器坏。6の口径11cm、底径8cm、器高3.6cm、7の口径11.8cm、底径8cm、器高3.8cm。9～11は東播系の須恵質こね鉢。別に龍泉窯系の青磁碗の破片がある。

鉄器（PL. 59, Fig. 59-114） 床面出土で、ゴルフで使うティーに似る。

3号土壙〈SK 3〉（PL. 45, Fig. 91,93）

SK 2の南方にある。南北の長さ7m、幅最大1.4mの溝状をなし、深さは最大で30cm。これの西

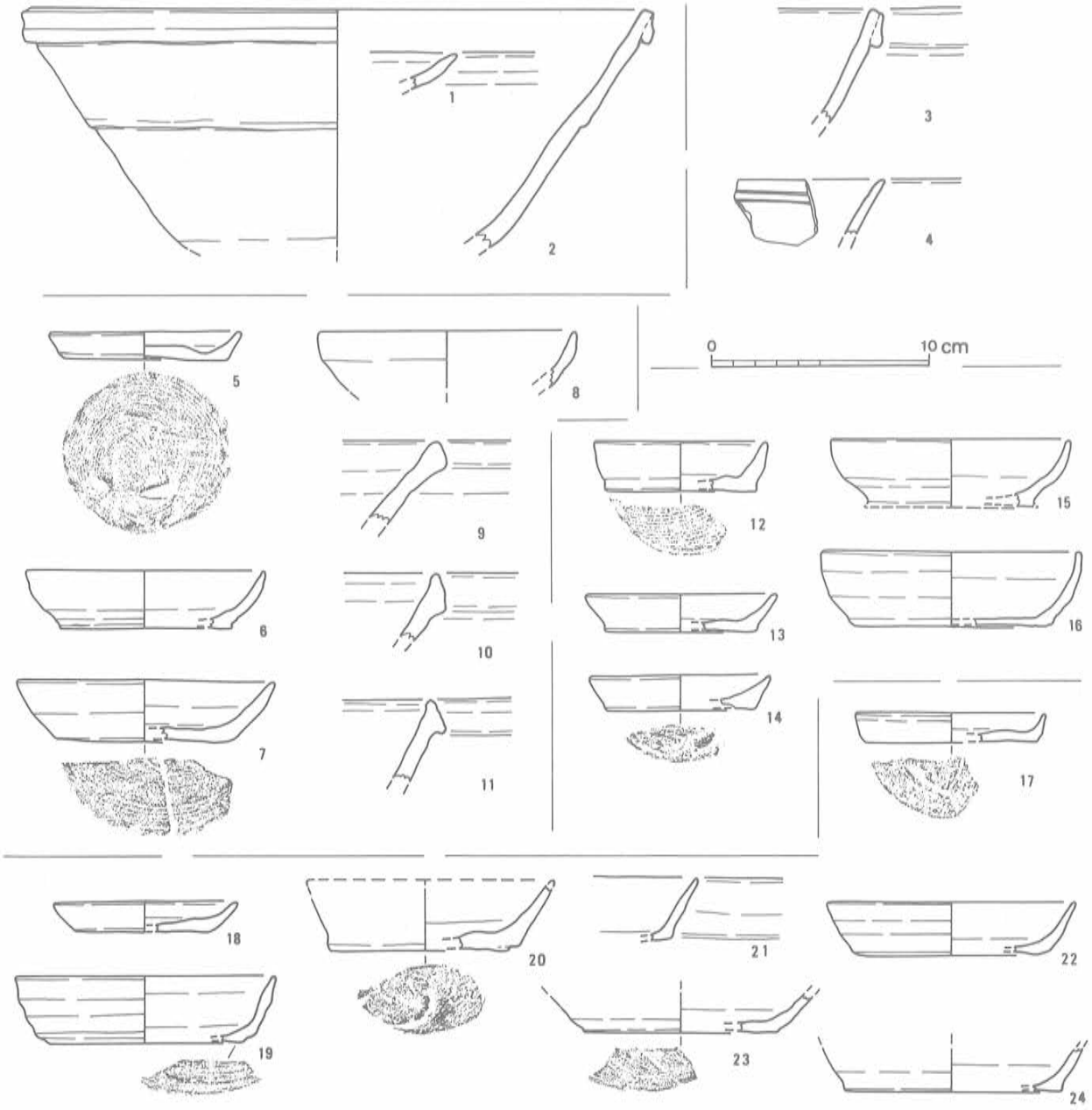


Fig. 94　IV区出土土器等実測図（1/3）

隣にP23・P24といった小土壙がある。

出土遺物(PL. 45, Fig. 94-12～16) 12～14は糸切り底の土師器小皿で、12はやや深みがある。12の口径8cm、底径7cm、器高2.3cm。13の口径8.7cm、底径7cm、器高1.7cm。14の口径8.4cm、底径7cm、器高1.6cm。15・16は土師器坏で15は内外面に煤が付着している。15の口径11cm。16の口径12cm、底径9.6cm、器高3.4cm。別に東播系の須恵質こね鉢片も出土している。

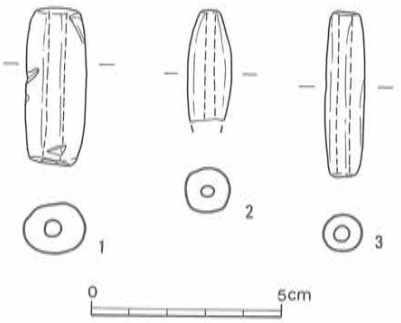


Fig. 95　IV区出土土錘実測図 (1/2)

・**P 9 出土遺物** (Fig. 94-17)　P 9はSB 2の西にある。糸切り底の土師器小皿で、口径8.8cm、底径8cm、器高1.3cm。

・**P19出土遺物** (Fig. 94-18～20)　P19はSK 2の南にある。18は糸切り底の土師器小皿で、口径8.6cm、底径6cm、器高1.4cm。19・20は糸切り底の土師器坏で19は口径12cm、底径9cm、器高3cm。20は底径9cm。

・**P23出土遺物** (Fig. 94-21～24)　P23はSK 3の西にある。4点ともに糸切り底の土師器坏で22は口径11.4cm、底径9cm、器高2.4cm。23・24の底径は9cmと10cm。

・**P12出土土錘** (PL. 45, Fig. 95-1)　P12はSB 2の南東隅のP12のすぐ横にある。全長41.9mm、最大幅16mm、孔径3.5mm、重さ9g。

・**P16出土土錘** (PL. 45, Fig. 95-2)　P16はSK 3の最北端の西にある。現存長30mm、最大幅12.2mm、孔径2.2mm、重さ3.4g。

・**P29出土土錘** (PL. 45, Fig. 95-3)　P29はSK 3の北東にある。長さ43.6mm、最大幅10.2mm、孔径3.1mm、重さ3.6g。

以上の遺構出土遺物はIII区と同じく13世紀前葉を中心とする時期に属するものであろう。

Ⅶ. Ⅵ区の調査

(PL. 46, Fig. 96)

Ⅵ区は土壙一基と多数のピットを検出した。

1号土壙 (PL. 46, Fig. 97)

1号土壙はⅥ区の東側の壁近くの北寄りに検出された浅い土壙である。不整円形で最大幅120cm。深さ最大9cm。北西に段がつく。中にピットが2個ある。土師器が2点出土したが、図示できるものは1点しかない。

出土遺物 (PL. 46, Fig. 98)

1は土師器の椀で、復原口径15.2cm、器高5.2cm。赤色粒子を含む。内面はヨコナデ。段がつく。外面はヨコナデ、ロクロは右回り。底面は回転ヘラケズリで、化粧土が掛かる。土師器であるが、形態と製作技法は須恵器に通じるものである。

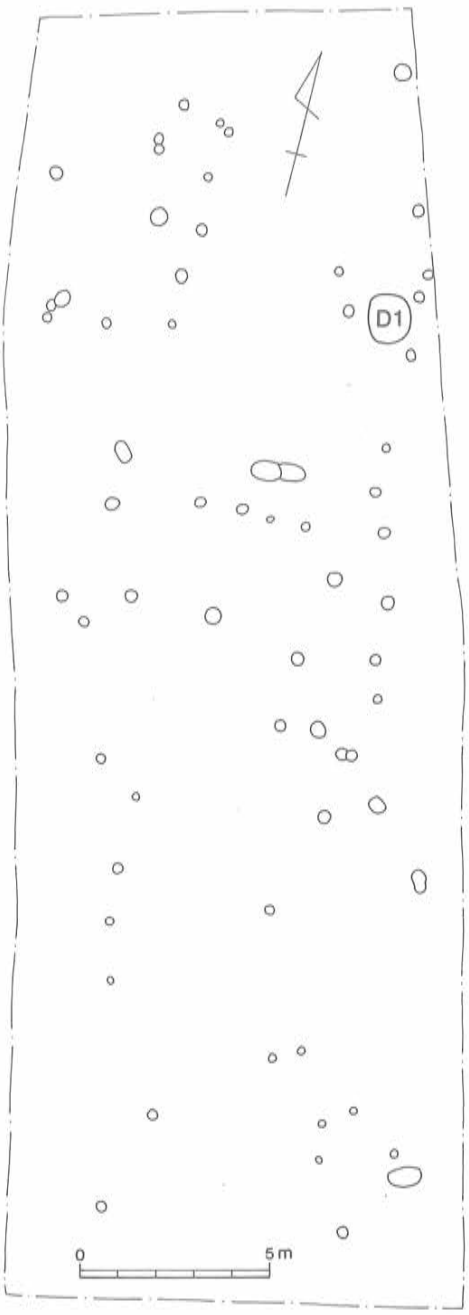


Fig. 96　VI区遺構配置図（1/200）

他にVI区から出土した遺物は以下のとおりである。

2は須恵器の蓋。復原口径は13cm。3はピット内から出土した。土師器の蓋か。復原口径は17.8cm。4は土師器の高坏。茶褐色を呈し、復原口径17.8cm、赤色粒子を含む。5はピット内から出土した土師器。復原口径28.4cm。内面はハケのちナデ、体部の内面はヘラケズリ。外面はナデ。6はピット内から出土した弥生土器。復原口径27.2cm、胎土に砂粒を多く含む。7は瓦質の土鍋であろう。茶褐色で、口縁部には突帯が付く。外面には化粧土が掛かる。

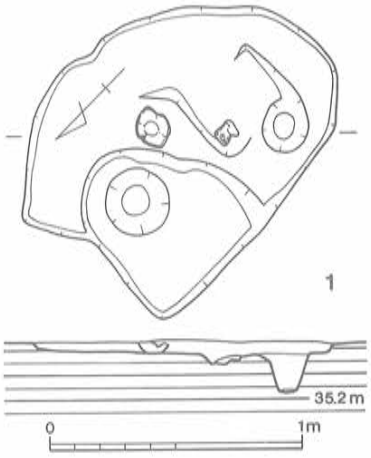


Fig. 97　VI区土壙1実測図（1/30）

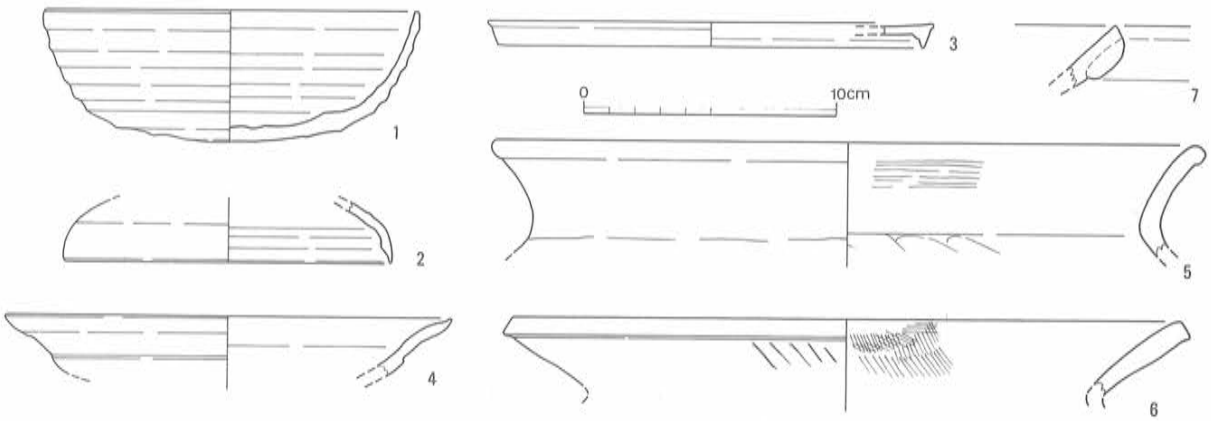


Fig. 98　VI区出土土器実測図（1/3）

Ⅷ. Ⅶ区の調査

(PL. 46, Fig. 99)

Ⅷ区の南西に位置する調査区で、このⅦ区でもピットを多数検出したが、建物跡等の明確な遺構は検出されなかった。地区内の北東で溝を検出したが、浅く、雨が降ると再び位置を確認するのに苦労するほどだった。この調査区から出土した遺物は、手に取ると形が崩れてしまうような土器片である。量もごく僅かで、図示できるものはない。

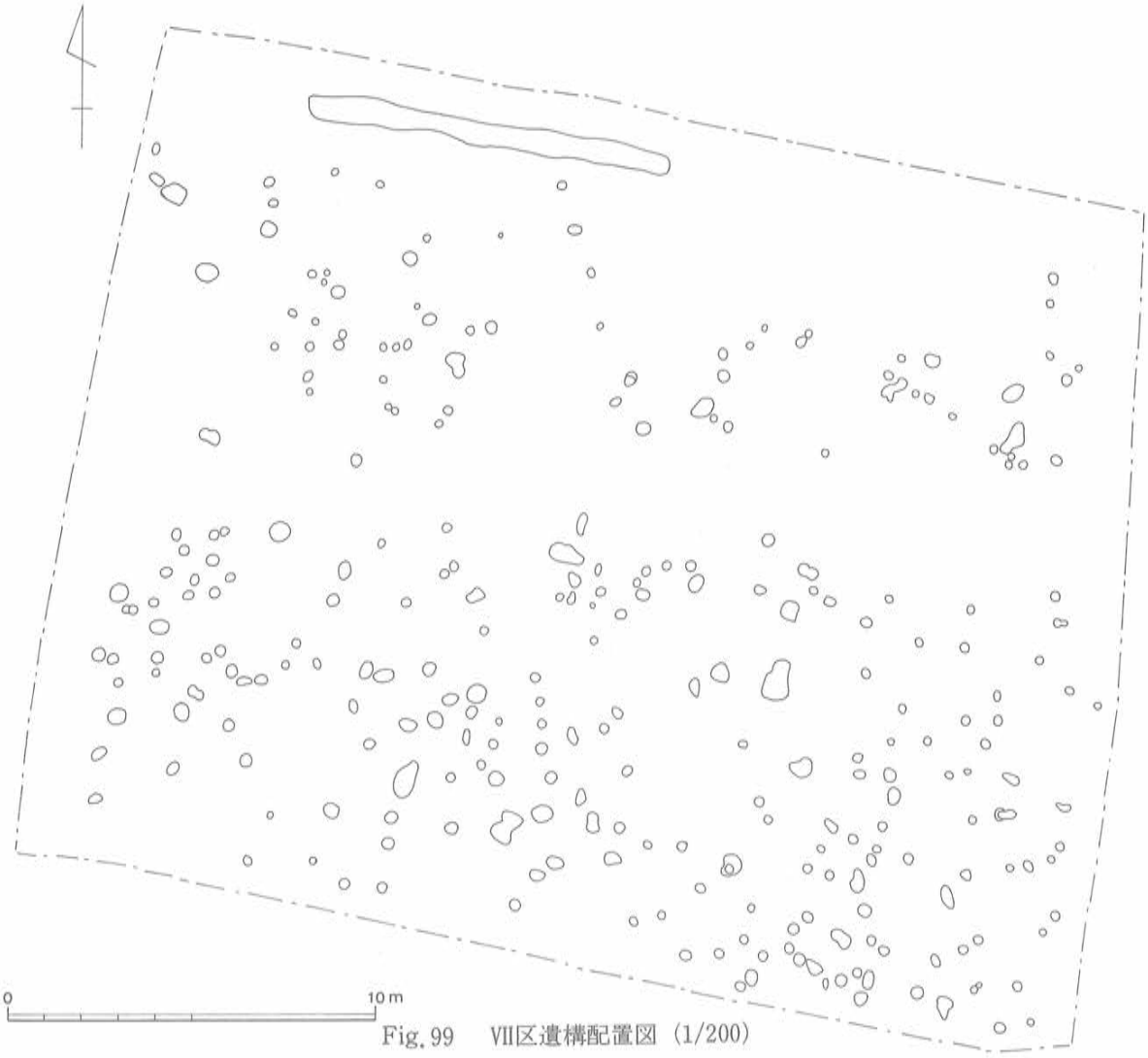


Fig. 99　Ⅶ区遺構配置図 (1/200)

Ⅸ. Ⅷ区の調査

(PL. 46・47, Fig. 100～106)

二次調査で、最も面積の大きな調査区である。土壙、多数のピット等を検出した。ピットはSX 1の東側に集中して存在している。このピットを柱穴とする建物は確認できなかった。

以下に記す土壙の他にも、方形の浅い土壙を数基検出したが、遺物は出土しておらず、用途は不明で、とくに記載するほどのものではない。

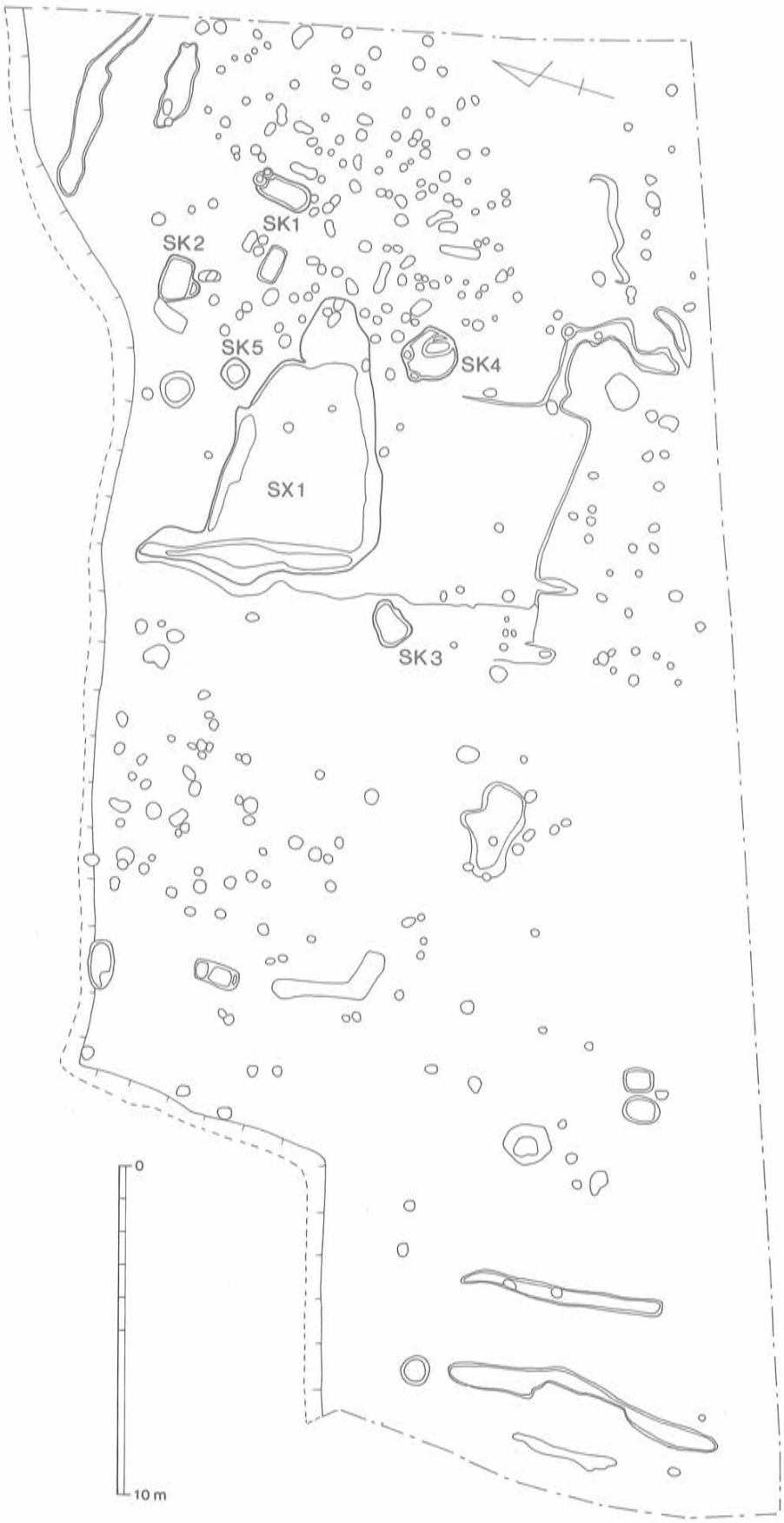


Fig. 100　Ⅷ区遺構配置図（1/200）

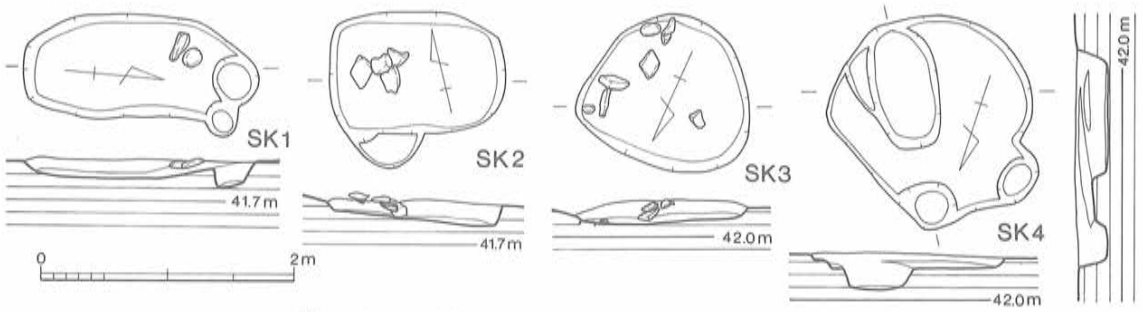


Fig.101　Ⅷ区土壙１～４（ＳＫ１～４）実測図（1/60）

１号土壙〈SK１〉（PL. 47, Fig. 100･101　）

この土壙はⅧ区の東側のピット群の中心にある。楕円形をしており、長軸185cm、幅82cm、深さ15cm。中に丸い石が数点みつかった。北側にピットが２つあるが、土壙が作られた後にできたものである。他に出土遺物はなく、性格は不明。

２号土壙〈SK２〉（Fig. 101）

この土壙はSK１の西にあり、長軸140cm、短軸95cm、深さ17cm。南側に深さ５cmの段が付く。この中にもSK１と同じように石が集まって数点みつかったが、性格は不明。

３号土壙〈SK３〉（PL. 47, Fig. 101）

この不整円形の土壙はこの遺跡の中心から少し東よりにある。長軸140cm、短軸125cm、深さ13cm。鉄滓が出土し、製鉄に関する遺構かと考えられたが、他に出土遺物もなく、性格は分からない。

４号土壙〈SK４〉（Fig. 101）

ＳＸ１の南東にある土壙で、幅155～165cm、深さ14cm。中に楕円形の落ちこみ（長軸105cm、短軸55cm、深さ25cm）があり、ピットが2つある。性格は分からない。

出土遺物（Fig. 102）

8は陶器で復原口径は12.6～11.4cm。橙褐色の釉が掛かる。焼成良好。口縁が耳皿風にゆがむ。唐津焼か。

５号土壙〈SK５〉（Fig. 103）

SX１の北にある丸い土壙で、２段に深くなる。ほぼ円形で、直径は87cm。2段目は直径55cm、深さは１段目31cm、２段目40cm。

なおこの土壙のすぐ北西から、同じような土壙がもう１基検出されているが、出土遺物はない。この土壙の性格も不明である。

出土遺物（Fig. 102）

９は土師器で、外側は黒褐色をしており、瓦質にちかい。口縁に突帯を持つ。外面に煤が付着する。10は瓦質の鍋。胎土は粗く、焼成良好。内外面は刷毛目がみられる。

不明遺構〈SX１〉（PL. 47, Fig. 103）

SK３の北東にあり、はじめそのコーナーの部分が検出されたことから、住居跡の存在を考えて

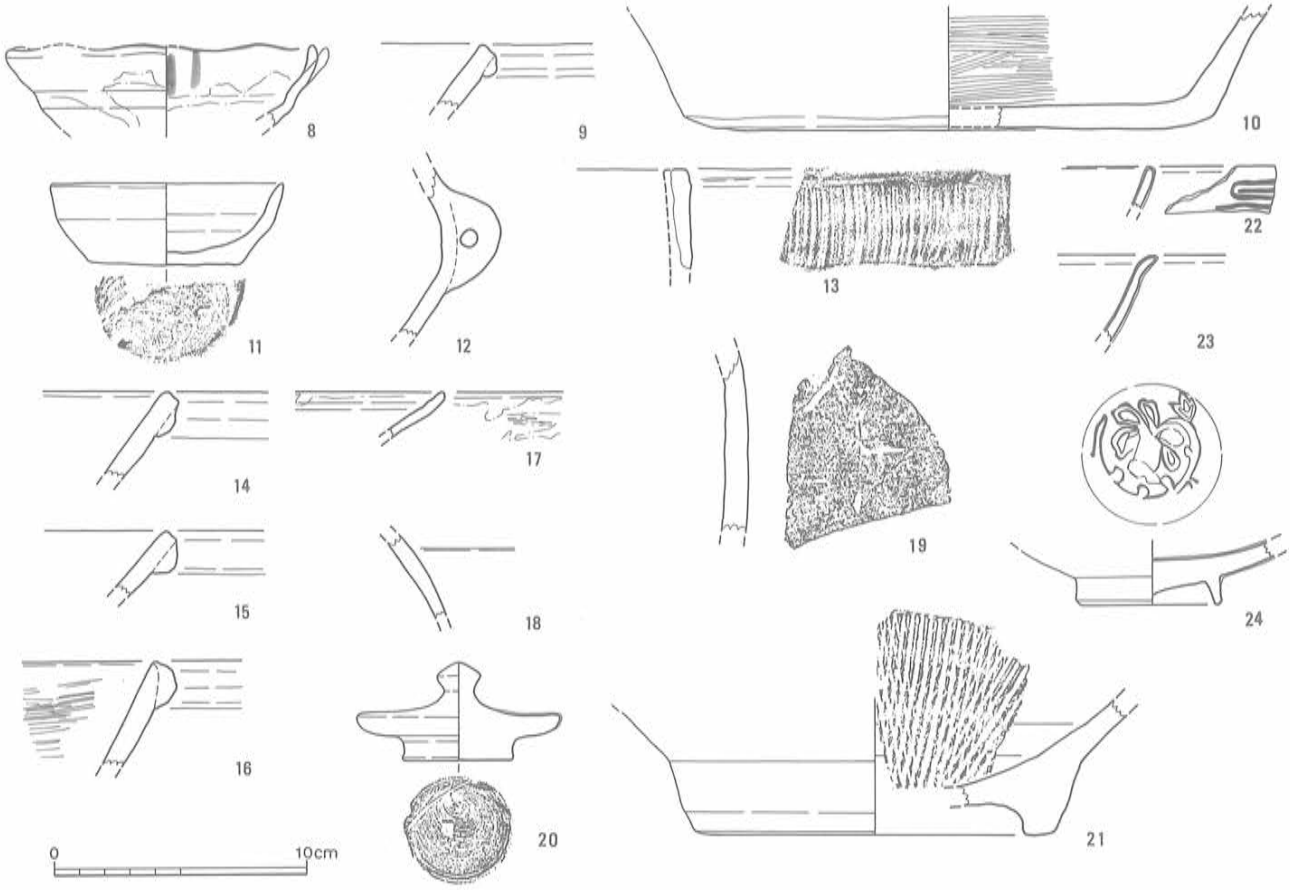


Fig. 102　Ⅷ区土壙等出土遺物実測図（1/3）

調査にあたったが、状態が悪く、住居跡と断定するに至らなかった。しかしながら、Ⅷ区において、このＳＸ１から出土する遺物の量が最も多く、陶磁器をここに投棄したという考え方もできる。

出土遺物（PL. 48, Fig. 104～106）

土師器（25～34）底部の残るものはすべて糸切り離し。25は硬質。内面はナデ、外面はミガキが施されている。27は復原底径7cm。底面に板目圧痕。28は復原底径7.4cm。29は復原底径11cm。底部隅に圧痕がみられる。30は底径5cm。内面の底部に穿孔しようとした窪みがみられる。内外面に黒斑。31は底径6.7cm。32は鉢で底径10.4cm。焼成は良好、内面はハケのちナデ。擦過痕が見られる。外面はナデ。33は手づくねの土師器で、復原口径4.0cm、器高3.55cm、底径は3.2cm。調整はナデ。34は沈線による綾杉文がみられる。

瓦質土器（35～52）35～40は摺鉢。35は内面にみられる筋を摺目と考えて摺鉢とした。36の焼成は軟質で、内面は4条1単位の摺目がつく。37は土師質に近い瓦質。内面は横の刷毛目の後4条1単位の摺目を入れる。外面には縦の刷毛目。底部に圧痕。38の内面にみえる7条1単位の摺目は内底付近でなで消されている。外面は底部付近で斜に刷毛目が施される。39は復原底径13cm、内面に8条1単位の摺目が入り、外面はナデ、指圧痕が全体につく。40は復原口径28.6cm、底径12.1cm、器高11.9cm。復原口径28.6cm。内面は口縁付近に敲打痕があり、4条1単位の摺目がみられる。外面は磨滅気味であらい刷毛目、凹凸がはげしい。41～44は鍋。41は内面が磨滅、口縁部付近で刷毛目。外面は煤が付着。42は焼成良好。外面は斜に刷毛目が入り煤が付着する。43は焼成良好。内面はナデ、指紋が

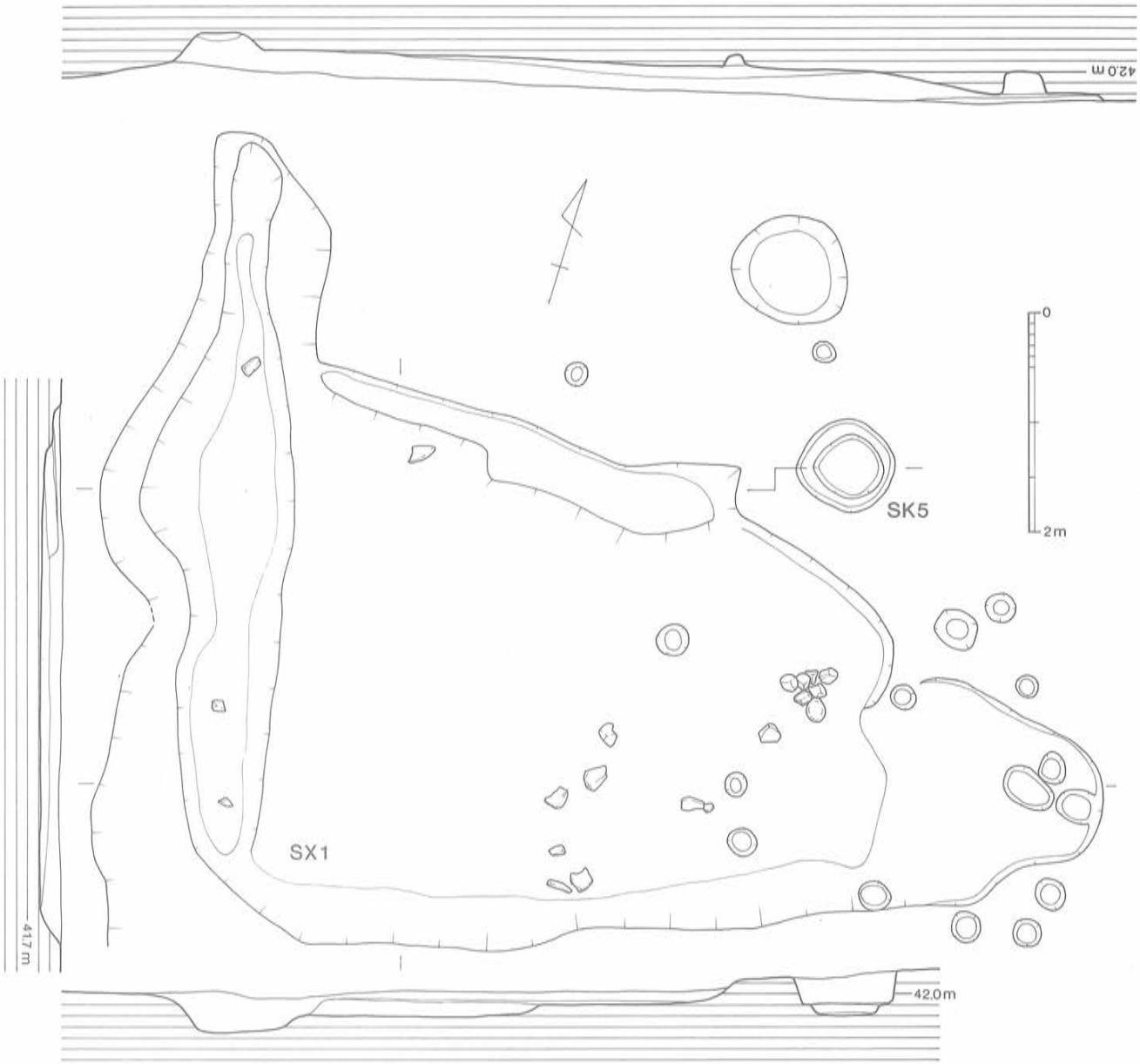


Fig.103　Ⅷ区SX１・SK５実測図（1/60）

残る。外面は斜の刷毛目後ナデ。44は軟質で、復原口径48.4cm、復原底径36.2cm、器高7.85cm。内面は斜の刷毛目をほどこしたのちナデ。外面には煤が付着。口縁部に突帯。45～50は羽釜。45は復原口縁14.4cm。焼成良好。内部はハケのちナデ。外面は口縁近くに櫛目状の工具痕が残る。46はやや軟質、焼成良好。内面はナデ、口縁はヨコナデ、外面は口縁部付近で縦に刷毛目が付く。47は鍔の一部。内部はナデ。指オサエのあとがある。外部はヨコナデ、鍔より下には煤が付着。48は焼成は良好。調整はハケのちナデ。外部には煤が付着。49は復原口径16.9cm。焼成良好。内部は横方向に刷毛目。外面はハケのちナデ。鍔の下は煤付着。50は最大胴径32.2cm。内部はナデ、指圧痕あり。外面は鍔の下に指圧痕によるきざみがあり、煤が付着。　51、52は火鉢。51は復原口径32.1cm。内面はナデ、指オサエのあとがある。口縁に突帯、その下に２cm程度の幅でイネ科植物の茎による施文がみられる。他はミガキに近いナデがほどこされている。52は復原口径36cm。外面は口縁突帯下に列点の円形文が押されている。その下の2本の突帯の間には工具痕あり。他はナデ。

陶器（53～57）53の釉調は内面が青味がかった白、外面は緑茶色。白いろう状の文様が入る。唐津焼か。54は皿で、復原口径15cm、色調は暗い黄茶。釉調はうす黄茶。胎土精良。焼成良好。外面下部は露胎である。口縁端部で釉がはがれている。55の釉調は灰黄茶色または灰黄色。胎土精良。焼成良好。内部は刷毛目模様が描かれている。絵唐津か。56の釉調は茶色。外面は露胎である。57の釉調はにぶい橙。内面はヨコナデ、釉は外面のみ。美濃焼か。

白磁（58～61）58は復原口径12.8cm。釉の厚さは0.5cmで口縁内側に特に厚くかかる。59、60は輸入白磁。59は復原口径13.6cm、釉の厚さ0.5cm。焼成精良。60は釉調黄白色。胎土精良。61は復原口径10.7cm。胎土精良。焼成良好。釉はくすんだ灰白色。

青磁（62～65）62の釉調は淡緑灰色に緑灰黄色がまだらにはいる。釉の厚さ0.3mm。63、64は龍泉窯系。63は緑がかった灰色の釉がかかる。64は復原底径5.9cm。色調灰白色。釉調灰色がかった黄緑色。65は復原口径18.2cm。

土錘（66～69）66は長さ3.7cm、直径1.0cm。3.5g。磨滅がひどい。67は長さ3.3cm、直径1.2cm。4.6g。69は長さ3.5cm、直径1.2cm、4.3g。

石器（71～73）71は黒曜石。縦長剥片で両側に押圧剥離がみられる。長さ5.3cm、幅2.5cm、厚さ1.0cm。風化がみられる。72も黒曜石の縦長剥片。使用による微細剥離がみられる。長さ4.6cm、幅2.4cm、0.9cm。73はサヌカイト。粗い剥片剥離が行われた石器素材。

砥石（74）硬砂岩。長さ67mm、幅36mm、厚さ18mm。

石臼（75～78）75は上臼。復原径34.6cmで石材は花崗岩。多くを欠損する。76は上臼、高さ10.3cm、復原最大径33.0cm。供給口の復原内径は3.5cm。下面は6分画6溝で擦り目がきざまれている。77は下臼か。回転軸の心棒用の中心部の孔は、上部ではその復原内径が2.8cm。上面から約8cmのところから外側に広がっている。碾面の磨歯は8分画11溝で、使用によりすり減っている。78は上臼。高さ13.8cm、復原最大径20.0cm、供給口が中心に位置する。茶臼か。

その他の遺物（Fig. 102）

11はⅧ区の南東隅のピットで出土した土師器。復原口径9.2cm、底径6cm、器高3.25cm。底部は糸切り離し。12、13はSX１の東側にあるピット群の中から出土した。12は瓦質の羽釜。焼成良好。内面、外面ともにナデ。13は瓦質の火鉢か。焼成良好、口縁部はヨコナデ、内面は縦の刷毛目。14～16は瓦質の鍋。いずれも突帯が付き、外面は一部、または全面に煤が付着する。14、15はSX１の東側にあるピット群から出土した。16は表採、内面は刷毛目が付く。17～21は陶器。17は皿。焼成良好。唐津焼か。18は内面はナデ、外面は暗黄茶色の灰（緑）釉が掛かる。瀬戸か。19はSX１の西側で出土した。やきしめ陶器。内面はナデ、外面は鉄釉が掛かる。常滑か。20は表採で、おとし蓋。口径8.2cm、底径4.4cm、つまみ径1.8cm、器高3.9cm。胎土精良、焼成良好。糸切り離し。21は摺鉢。復原底径14.2cm。橙褐色で、赤みがかった茶色の鉄釉が掛かる。焼成良好。13状1単位の摺目が入る。22～23は青磁。22はSX１のすぐ南側で出土した。明るい緑色がかった灰色の釉が掛かる。雷文がはいる。23、24は表採で龍泉窯系。23の釉調は灰色がかった黄緑。貫入が入る。24は明るいオリーブ灰に灰がかった黄緑の釉が掛かる。貫入が入る。70は表採の土錘。長さ3.4cm、直径1.2cm、4.9g、化粧土が掛かる。

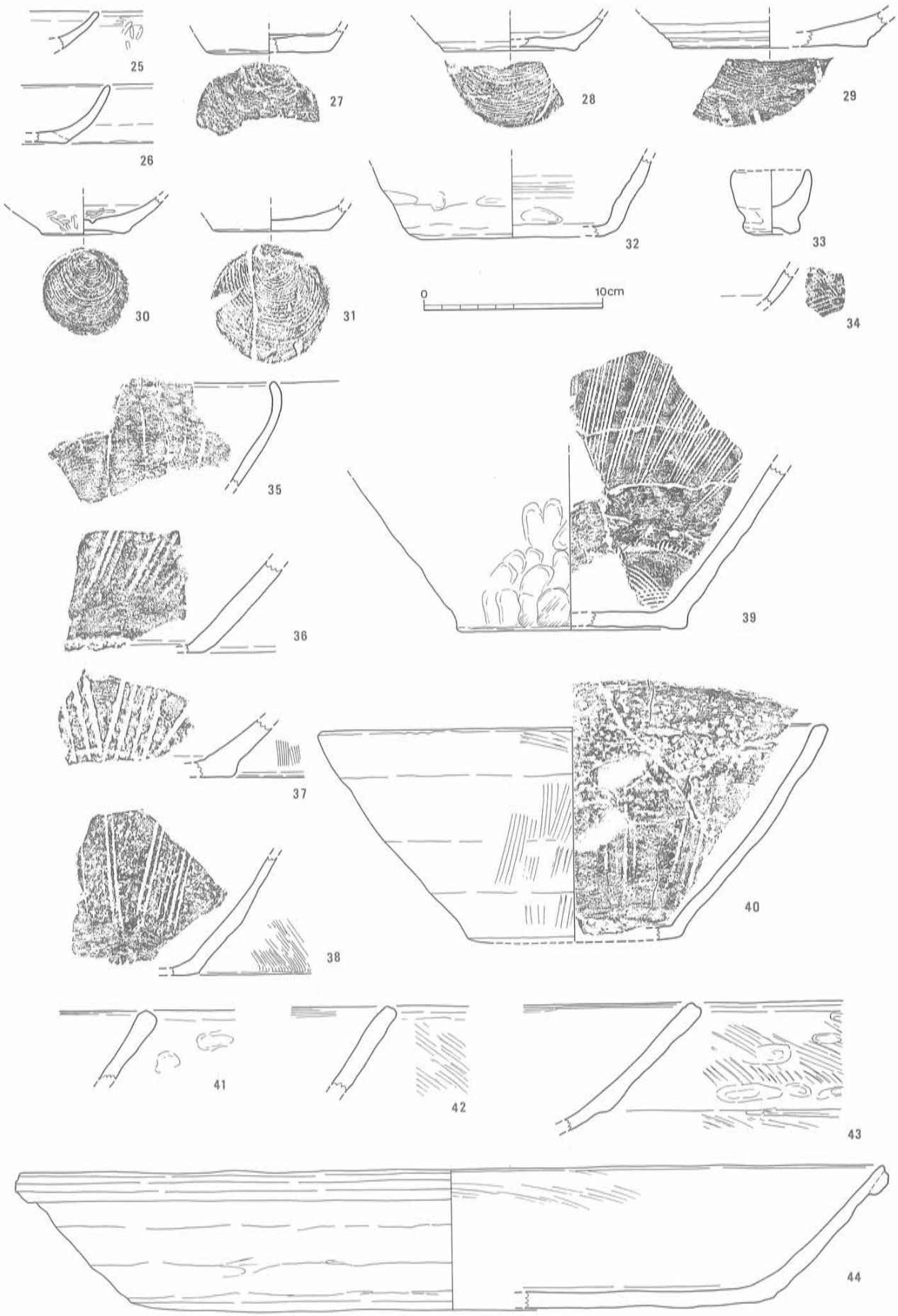


Fig. 104　Ⅷ区SX 1 出土遺物実測図 1 (1/3)

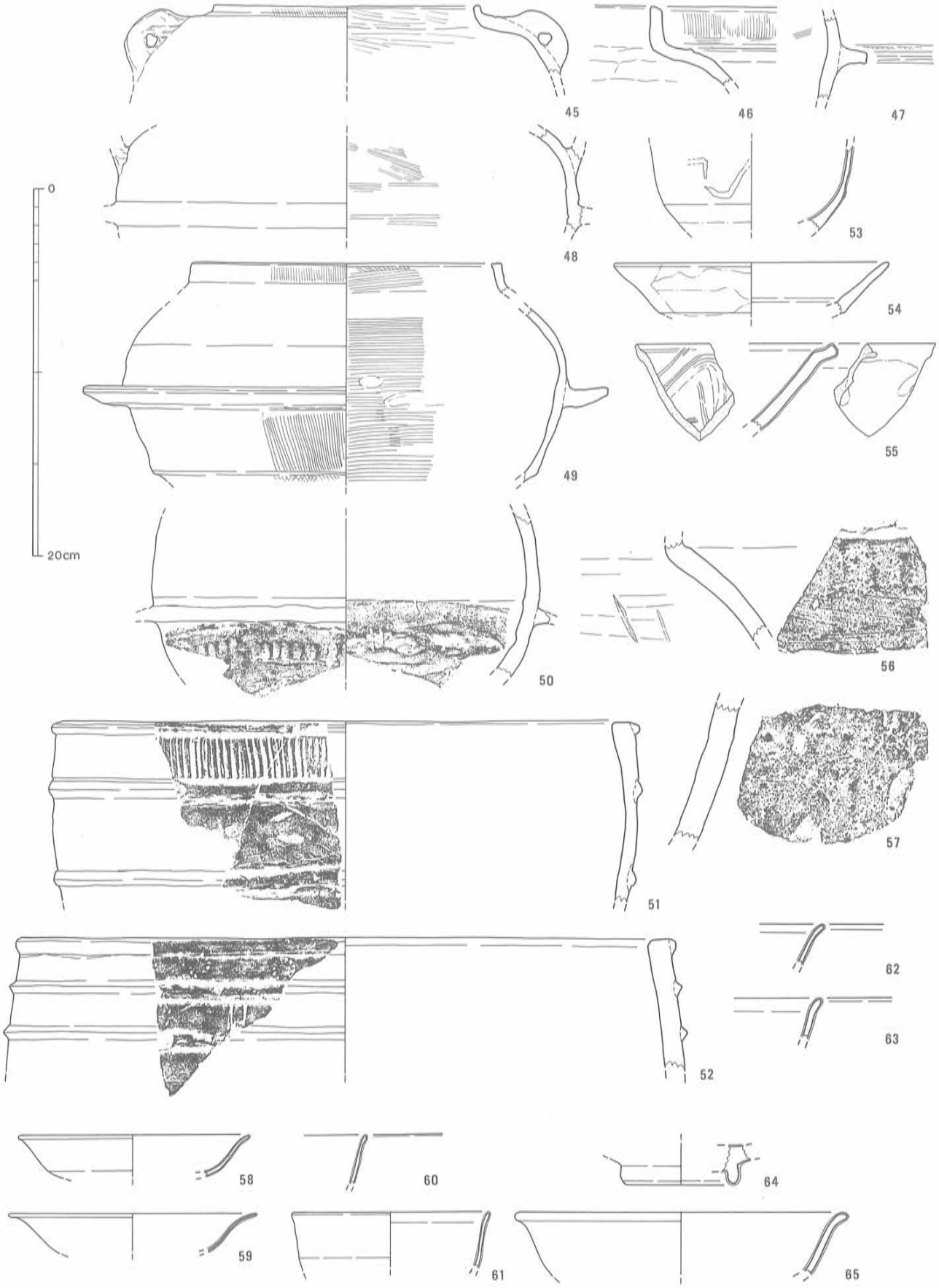


Fig. 105　Ⅷ区SX 1 出土遺物実測図 2 (1/3)

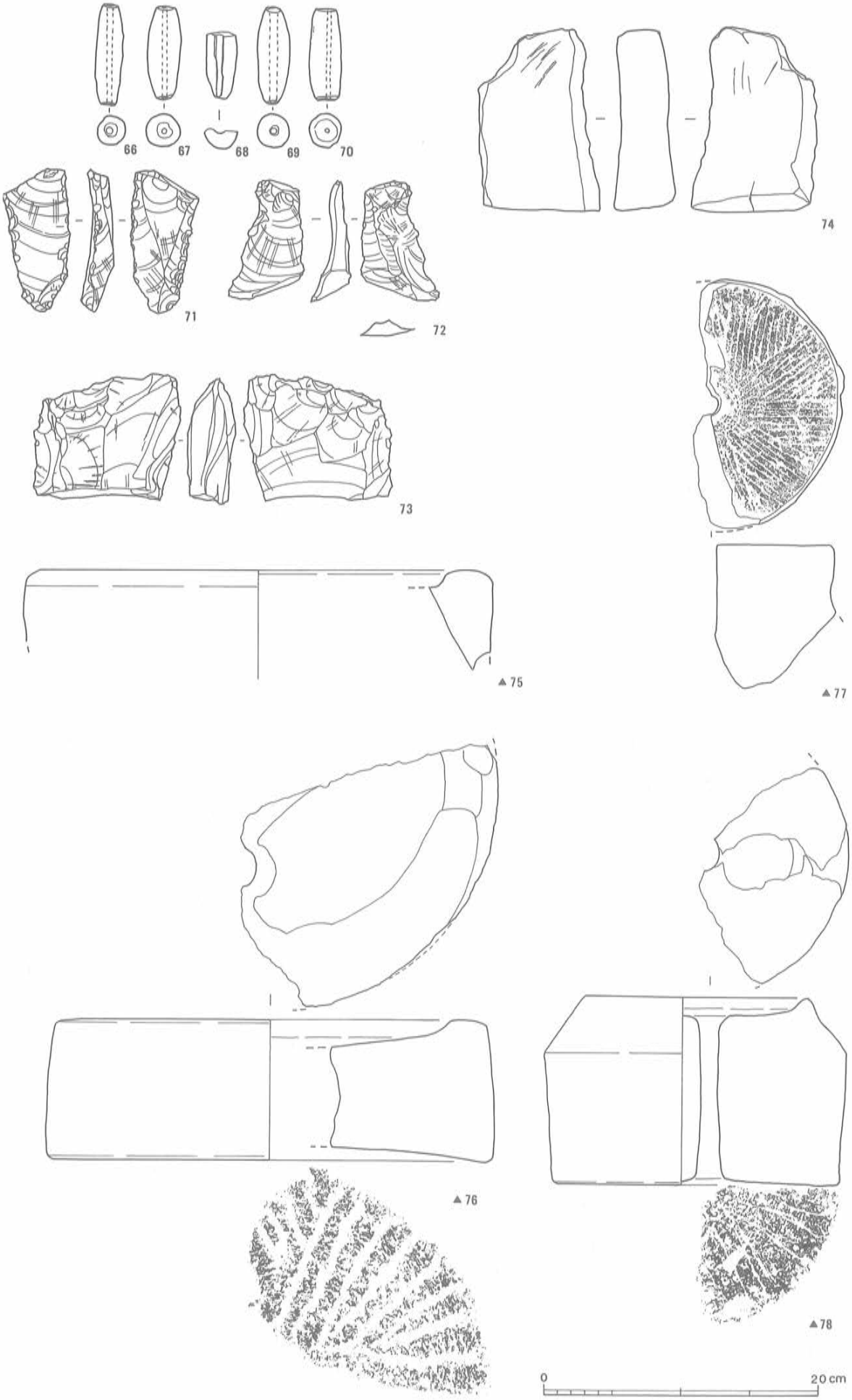


Fig. 106　Ⅷ区SX 1 等出土遺物実測図（1/2・1/4）

X．おわりに

A　縄文時代に関して

縄文時代は早期と晩期の大きく２つの時期が見られた。

早期は押型文土器を中心とするが、土器等が最も密に分布する場所をＪ区として掘り下げたところ、そこでは多数の土器と黒曜石剝片・すり石等が出土し、また石組炉が検出された。石組炉の存在はすぐ近くに住居跡があるものとみて間違いないところである。Ｊ区南端の土層断面において地山を切り込んだ落ち込みが見られたが、これは竪穴住居跡の断面にあたっている可能性が高いと考えている。黒曜石・サヌカイトの原石とともに多数の剝片があることは石器づくりを行っていた証左であり、またすり石や台石そして石組炉の存在は獲得した食料の加工を示すものとみてよいだろう。この近辺において縄文早期人たちが活動していた痕跡を確認しえたことの意義は大きい。

晩期は竪穴住居跡９軒を検出した。プランとしては方形・長方形であるが、主柱穴は明確でない。２号住居跡には石囲炉が検出され、1･3･6号住居跡には焼土があったものの、他の住居跡には見られなかった。この時期の竪穴住居跡の例はそれほど多いわけではないが、炉の存在が明確なものはむしろ少ないといってよい。ただ晩期住居跡の例は少しずつふえてきた。　（伊﨑）

縄文早期土器について

白木西原遺跡では、Ｊ区、８号墳周溝埋土、９号住居跡埋土、５号墳下の四つの地区から纏まって縄文早期土器が出土した。

Ｊ区及び８号墳周溝埋土から出土した土器はほぼ押型文土器に限られる。山形文と楕円文を中心に少量の格子目文によって構成されるが、いずれも文様自体のサイズが小さく、横位に施される。口縁部内面については無文のものが多いが、横位の山形文や楕円文が施されるものもある。口縁部の形態は直線的に僅かに開くように立ち上がり、外反することはない。以上の特徴は東九州・北九州を中心に分布する「稲荷山式」に相当するものであるが、9～13㎜ほどの器壁厚や平底の底部形態はそれとは異なる。元来、福岡県南部、佐賀県、長崎県、熊本県の九州西北･中部には「早水台式」以降の押型文時は普遍的に分布するが、尖底で器壁厚５～８㎜の「稲荷山式」は存在しない地域である。したがって、本遺跡で出土した押型文土器は、これらの地域で稲荷山式と年代的に併行関係にある押型文土器と考えられる。

本遺跡では押型文土器に伴う無文土器も点数的には押型文土器とほぼ同じ量の出土をみるが、いずれも小破片ばかりで、個体数としては押型文土器をかなり下回るものと考えられる。またFig. 68-69のように、口縁部内面には横位山形文が施されるが、外面には沈線文と刺突文が施文される特異な例も存在し注目される。

９号住居跡の埋土からは２点だけであるが、二枚貝による貝殻条痕文を地文調整とし、やはり二枚貝の腹縁で口縁部に刺突文を施した土器が出土している。北部九州では広く散発的に見られる資料ではあるが、纏まった出土はなく、未だ十分な位置づけは行われていない。

５号墳下からは、二枚貝によって縦位に条痕文様を施した後、口縁部に限って横位に同じ条痕文

様を施す一群が出土した。12～13㎜と器壁が厚く、僅かに開きながら直線的に立ち上がる器形で、長崎県一野遺跡や畑中遺跡で纏まった出土を見る資料である。

以上のように、本遺跡では大きく異なる三つのタイプの縄文早期土器がそれぞれに異なった地点から出土しており、これらが年代差として存在していることはまず間違いない。特に押型文土器と5号墳下から出土した土器は、器形や器面調整や器壁厚に類似点が認められ、また他の遺跡においても、包含層中ではあるが一遺跡内での共伴事例が多く、比較的近い年代差の関係にあったことが想定され、今後に注意の払われる土器群であろう。（水ノ江）

B　白木西原古墳群

この遺跡において古墳17基が検出された。発掘にとりかかった時点では古墳の存在すらもおぼつかなかったのが、結果的には予想だにしない数の古墳が田圃中から現れ出たのであった。

占地・分布

白木川右岸のなだらかな傾斜を持った河岸段丘上に古墳群は造られている。現道を境にⅠ・Ⅱ区としているが、この区分けは便宜的なものでしかない。Ⅱ区の東方には県道が走り、その東側にもやや高くなった田面があったので試掘を行ったが古墳は検出されなかった。古墳群の東限は3号墳とみてよい。Ⅰ区南端・西端は白木川の浸食した段落ちが迫ってきているので、この方面にもさらなる古墳の広がりは認めにくい。北方についてはⅢ・Ⅳ区に古墳が検出されていないことからすると、その間の部分が問題ではあるが、17号墳を北限とすると捉えてよいものと考えている。つまり今回の調査で検出された古墳はこの17基でほぼ完結しているのではないかと思う。

17基を時期に関係なく面的に見ると、その分布は10号墳を境に、その東側の1～10･17号墳の一群と、11～16号墳の一群とに分けられる。仮に前者を東群、後者を西群としておく。

なお、石棺墓としたＣ１からＣ７は全て竪穴系の形制を示しているが、これらはその位置からして２・４・６・12・13号の各古墳に付属するものと捉えられる。

古墳の規模

５・16号墳を除いた15基の古墳には全て周溝が巡らされていた。石室の回りに完全に囲繞するのは１・２・12・17の4基のみであったが、復原してその規模をみると外径は10号墳が最も大きく捉えられて径20.5mを測る。あと２・３・17号墳が径15mを越す大きさである。９号墳も復原値は小さくしているがやや大きめの規模であったろう。そうしてみると、東群の方が西群よりも規模の大きい古墳が多いことは明白である。

墳丘は５・11号墳に一部のみ遺存していたが、全形を知りうるものはない。石室掘り形は旧表土・地山を若干掘り下げているのみでそれほど深くはないから墳丘の大半は盛土であったとしてよい。古墳が原状で遺存している頃には高さ３～４mの小山が林立する状況であったと思われる。

石室

１号墳を除いて全て西もしくは西南方向に開口する単室の横穴式石室であるが、４・12号墳石室は奥壁幅に対する長さの比が1.8以上であり竪穴系横口式石室としてよいものである（蒲原1983、森下1987）。あと６・８・13号墳石室もその可能性があるが、やや幅広いプランであることは否めない。

追葬が認められたのは確実には1号墳のみであり、この古墳は石室の開口方向が他と異なる点にお

いてもやや異質である。

ここでは竪穴系横口式石室と横穴式石室とが混在していたが、それは前者から後者へと継起的に変遷していったと捉えてよかろう。

なお多くは田圃への開墾時かまたはそれ以前に盗掘を受けているが、中世は13世紀頃の盗掘が顕著なのは他の地域の古墳群とも通有のことである。

出土遺物

出土遺物としては、須恵器・土師器の土器、鉄器、装身具がある。

須恵器では次の時期比定の問題とも絡むが、4号墳の田、12号墳の高坏は陶邑でいうＴＫ23型式にあたると思われ、当古墳群において最も古く位置づけられる。6号墳の田はＴＫ47型式に併行するものであろう。これらの産地が問題となるところである。胎土分析は行っていないが１号墳出土の坏蓋・坏身にはその口縁部に特徴的なものがあり、６世紀中葉～後半段階でまず間違いなく八女市中尾谷・塚ノ谷窯跡群（八女市教委1969・70）から供給されたものがある。距離的にはそれほど遠くない。

土師器では3・4・7・9・12号墳に須恵器模倣の器形で黒塗りを施した坏があり、これと同様のものは筑紫野市野黒坂遺跡（福岡県教委1970）や八女郡広川町北の前遺跡（広川町教委1992・93）の住居跡出土品にも見られる。明らかに黒漆を塗ったとみてよいものがあるが、それが古墳の周溝から出土したことに意義を見いだしておこう。

鉄器としては鏃・刀子・斧のほかに馬具がある。鏃は17基のうちの10基から出土しており、きわめて普遍的である。盗掘されていることを鑑みれば実数はもっと多かろう。馬具は１・２号墳のみから出土しており、決して多いとはいえないが、出土していることに意義を持たせたい。

装身具としては耳環と玉類がある。１号墳の耳環は８個があり、２個一対とすれば４人分のものとなる。３体以上の追葬が行われたとみることもできる。２号墳の水晶製品は綺麗な逸品である。８号墳の管玉のうち中央部がやや膨らんでエンタシス状となるものは、弥生時代前期に見られるそれと形制が類似する。伝世したものの可能性もなしとしない。

時期

各古墳は多かれ少なかれ周溝や石室から土器・鉄器・玉類等が出土したが、しかし全てが築造時期にかかる遺物を有しているわけでもないので、石室の形態等をも考慮して時期を捉えてみた。但し、１～４期としたものもその中で細分できるようである。

１期‥‥５世紀後半～末	４・12
２期‥‥６世紀初頭～前半	２・６・８・13
３期‥‥６世紀中頃	３・７・９・11・14・15・16
４期‥‥６世紀中頃～後半	１・５・10・17

この時期の把握でいくと、まず１期には東西両群で１基ずつが築造される。２期には東群は３基に増えるが西群は１基のみである。３期には東群はやはり3基、西群は４基となるものの、４期は東群のみの築造となる。数からいっても個々の規模からいっても東群が優勢であることは明白である。

これをみるに、５世紀後半～末に東西両群に１基ずつの古墳が築かれ、やがて東群を中心として古墳群が展開していったことがわかる。当初は有力２家族が別々に占地していたのが、６世紀中葉段階になると東群の一族が継起的に築造するようになったのではないかと思われる。

C１～C７の石棺墓は２・４・６・12・13号墳に伴うものと捉えたが、これらは全て１・２期に含まれる。石室構造と時期とを勘案すればきわめて示唆的な配置ではある。

意義

この古墳群から北に1.5km行くと矢部川があり、それを渡って４kmほど北に行けば八女丘陵がある。筑紫君磐井がその寿墓たる岩戸山古墳を八女丘陵上に築造したのは６世紀初頭～前半代であり、大和政権の継体王朝と戦って敗れたのが528年のことであった。この白木西原古墳群の形成された時期はまさしく磐井一族の活躍していたときと一致し、時代の節目の時期にあたっている。当古墳群の被葬者たちも矢部川南岸にあるとはいえ磐井一族と無関係であったとは思われない。６世紀前半に磐井が敗れてのちも引き続き古墳の築造が行われていることは、首長墓系列に断絶がないと言われていることと符合するように、そこに大きな変化は認めがたい。

またこの遺跡の北方700mほどの所にある小倉谷横穴墓群は６世紀後半から築造が始まっているとされる。それはこの白木西原古墳群と一部重複するものの多くは後続する時期のようである。とすれば当古墳群の被葬者たちとの関係が注意されるところであるが、それは小倉谷横穴墓群の実態が明らかにされてのちでなければ言及しえない。

C　古墳時代の集落

13～16号墳の北方に５軒を確認した。９・11号は判然としないが他の３軒は出土した土器から６世紀後半でもやや古い段階には廃棄されたものとみてとれる。またその位置関係からすれば５軒ともに同時併存していて問題はない。ここの北方にはさらなる住居群の広がりがあることだろう。６世紀後半といえば、４期の古墳が機能しているときであった。この住居の住人たちは古墳の築造に関わりのある人たちであったとみて間違いない。ただ、検出された５軒の住人たちのみが古墳と関係していたとみるのは適当ではなかろう。掘立柱建物に住まう人たちが存したはずである。

掘立柱建物は３棟があったが、竪穴住居跡と同時併存するのは倉庫とされるSB１のみであろう。

D　中世の白木西原

Ⅰ・Ⅱ区では14号墳の墳丘上や17号墳の石室内外から輸入陶磁器の青磁片が、また２・３・６・７・10・12・17号墳周溝から陶器・磁器・糸切り底の土師器等が出土している。Ⅰ・Ⅱ区に中世の明確な遺構はなかったが、その北方にあるⅢ・Ⅳ区には中世の建物跡や土壙・溝があり、むしろ中世しかないという状況であった。特にⅣ区における出土遺物は13世紀前葉を中心とする時期に比定され、この時期に集落が展開していたものとみられる。Ⅰ・Ⅱ区の古墳群における中世期遺物はこの集落の人たちの活動の結果であろう。また、当該地の北西方に存した山下城はその築城年代はわかっていないが、この遺跡とも無関係というわけではないだろう。（伊崎）

二次調査のⅥ区からは、出土した遺物が少量なので何ともいい難いが、８世紀頃の土師器が出土しており、同じく二次調査地区内にあたるⅧ区よりも比較的時期は古いかもしれないが、よくわからない。Ⅷ区の出土遺物には中世の陶磁器がみられ、Ⅷ区のSX１で特に多くの遺物が出土し、何らかの遺構であったことは間違いない。時期は16世紀後半を中心とする。一次調査におけるⅢ・Ⅳ区との関係も考えられる。明確な屋敷跡等の遺構を検出できなかったことは非常に残念である。

（永田）

E　近世墓

8基の近世墓は全て桶棺であろうと考えた。棺を埋置したあとまわりに石組みを巡らせた土壇を築き、その上に墓標を建てたものと見られる。元禄2年(1689)と享保18年(1733)の墓石があったことからすれば江戸時代前期の17世紀後半から墓地が形成されたことがわかる。ただ12号墳の西方においてまだ墓標の立っている中に承応元年(1652)と読めるものがあるので、場所は少し離れているけれども17世紀中頃から営まれていたとしてもよいだろう。

埋土中から土師器・陶器・磁器などの出土したものがあるが、確実に副葬されたものであったかどうかはわからなかった。また六道銭その他の遺物もみられなかった。　(伊崎)

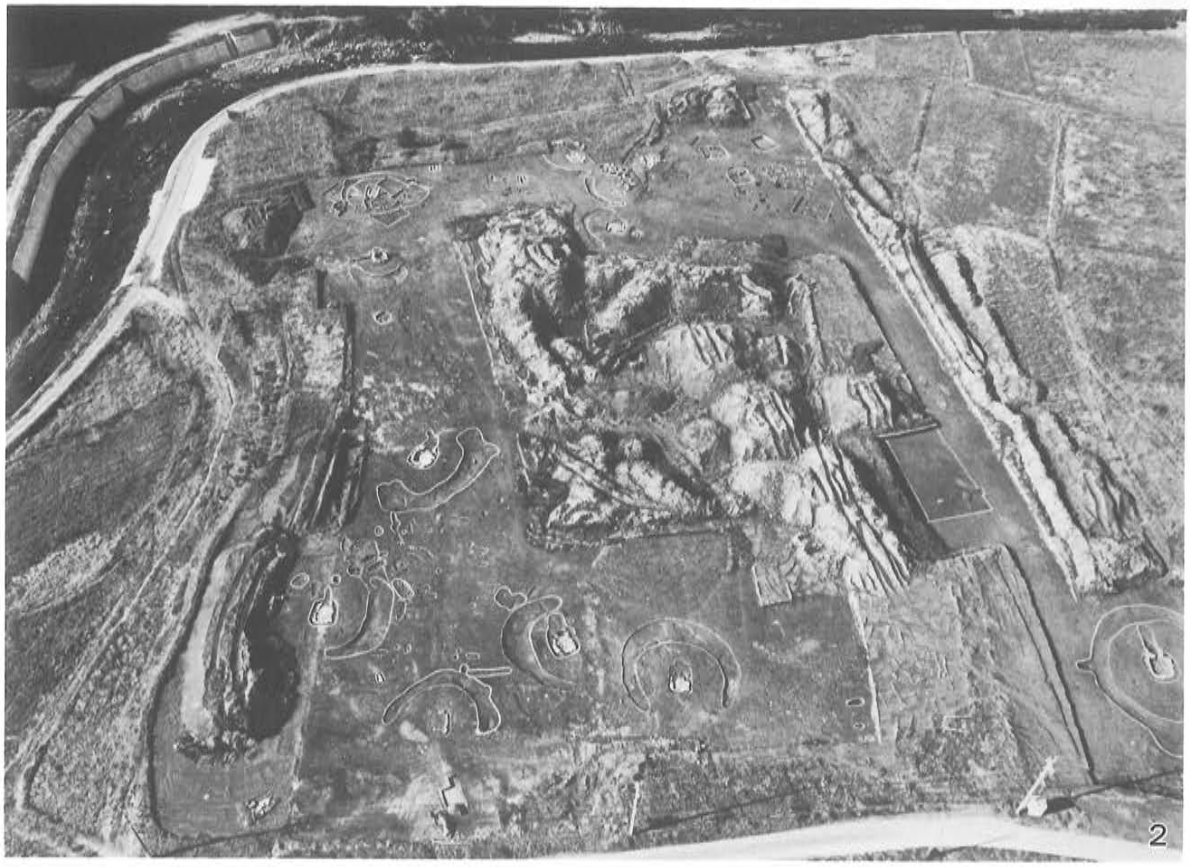
福岡県教育委員会 1970 『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第1集』
広川町教育委員会 1992 『北の前遺跡Ⅰ』　広川町文化財調査報告書　第 9集
広川町教育委員会 1993 『北の前遺跡Ⅱ』　広川町文化財調査報告書　第10集
八女市教育委員会 1969 『塚ノ谷窯跡群』　八女市文化財調査報告書　第 2集
八女市教育委員会 1970 『中尾谷窯跡群』　八女市文化財調査報告書　第 3集
蒲原宏行 1983 「竪穴系横口式石室考」　『古墳文化の新視角』　雄山閣
森下浩行 1987 「九州型横穴式石室考」　古代学研究 115

Table.1　白木西原古墳群 古墳計測表（：m）

No.	石室	周溝		石室掘り形		玄室					玄門幅	主軸方位	出土遺物等	旧No.
		外径	内径	幅	長さ	奥壁幅	玄門側幅	最大幅	長さ	長幅比				
1	横穴式	13.3 ～13.5	9	2.3 ～3.0	5.5	1.8	1.2	1.9	2.1	1.17	0.4	N-3.5°-E	須恵器・土師器、縄文・弥生、土錘 鉄器(鏃・刀子・馬具)、玉、耳環	17
2	〃	16	10.5 ～12	1.85 ～3.0	4.8	1.45	1.1	1.58	2.1	1.45	0.35	N-90°-E	須恵器・土師器、縄文・弥生、陶器 鉄器(鏃・刀子・馬具)、玉、	15
3	〃	17.5 ～(14)	11.5 ～(11)	2.8 ～3.4	5.8	2.2	1.3	2.3	2.42	1.1	0.4	N-88°-E	須恵器・土師器、縄文・弥生、磁器 玉	16
4	竪穴系横口式	(11) ～10.5	(8) ～8.1	2.1	3.5	0.88	0.82	1.0	1.77	2.01	0.45	N-91°-E	須恵器・土師器、鉄鏃、縄文	14
5	横穴式	(12)										(N-52°-E)	瓦質土器、陶器、砥石、縄文 一部に墳丘残存	1
6	〃	(12.2)	(9.4)	1.6 ～2.2	3.45	(1.35)	(1.15)	(1.45)	(2.0)	1.48	(0.65)	N-81°-E	須恵器・土師器、陶器、縄文	5
7	〃	(12.5)	(10.2)	2.7 ～2.9	3.6	1.28	(1.2)	1.72	(2.2)	1.72	(0.5)	N-57.5°-E	土師器、鉄器(鏃・刀子) 陶器、縄文、石鏃	7
8	〃	(13.4)	(10.4)	2.25 ～2.5	3.65	1.5	(1.3)	(1.5)	(2.0)	1.33	(0.4)	N-83°-E	須恵器・土師器、鉄器(鏃・刀子) 玉、縄文・弥生、石鏃	8
9	〃	(12.4)		2.5 ～3.0	3.5	1.45	0.9	1.7	2.27	1.57	(0.5)	N-80°-E	須恵器・土師器、鉄鏃 縄文・弥生、石鏃	6
10	〃	(20.5)	(14.4)	2.6 ～3.15	3.4	1.6	1.5	2.25	2.4	1.5	(0.55)	N-104.5°-E	須恵器・土師器、鉄鏃 陶器・磁器・土錘、縄文	2
11	〃	(10 ～12)		2.4 ～2.95	4.05	1.65	1.0	1.75	2.15	1.3	0.45	N-56°-E	土師器、鉄鏃、陶器・磁器、縄文 墳丘の一部残存	3
12	竪穴系横口式	12～13	9～9.2	1.9 ～2.5	4.0	(1.3)	(1.3)	1.58	(2.45)	1.88	(0.5)	N-76.5°-E	須恵器、土師器、鉄器(鏃・刀子) 縄文	9
13	〃 (?)	(12.8)	(12.5)	1.8 ～2.3	3.4	1.4	1.06	1.4	2.5	1.79	(0.6)	N-48°-E	土師器、砥石 土鍋、羽釜、縄文	10
14	横穴式	(11.3)	(9.0)	(2.65)	(3.5)	(1.8)	0.9	1.85	2.95	1.64	(0.5)	N-114.5°-E	土師器、鉄斧、瓦質土器、陶器、磁器、 土錘	4
15	〃	(9.6)	(9.3)	(3.0)	(3.5)	(1.8)	1.05	1.9	(2.3)	1.28	(0.5)	N-100°-E	土師器、縄文	11
16	〃			2.9	(3.7)	1.7	(1.35)	1.83	(2.15)	1.26	(0.6)	N-62°-E	土師器、陶器	12
17	〃	16.8 ～18.4	13.1 ～13.0	3.9	4.2	1.6	1.55	2.35	2.45	1.53	0.4	N-80°-E	土師器、磁器、土錘、渡来銭、 上部にSS1あり	13

・外径・内径は南北～東西の長さ　　・（ ）は復原値

図　　版



1．白木西原遺跡Ⅰ・Ⅱ区気球写真（北から）　　2．Ⅱ区全景（東から）

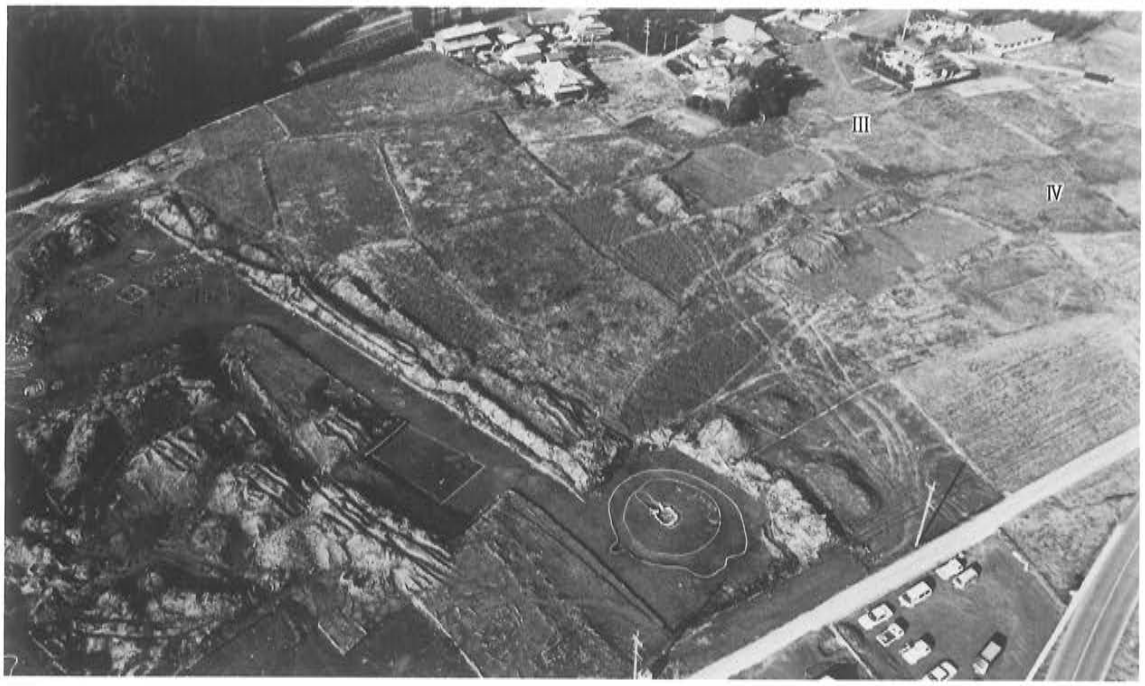
1

2

3

1．白木西原遺跡調査前全景（北から）　2．白木谷をのぞむ（北から）　3．Ⅰ・Ⅱ区全景（北から）

1

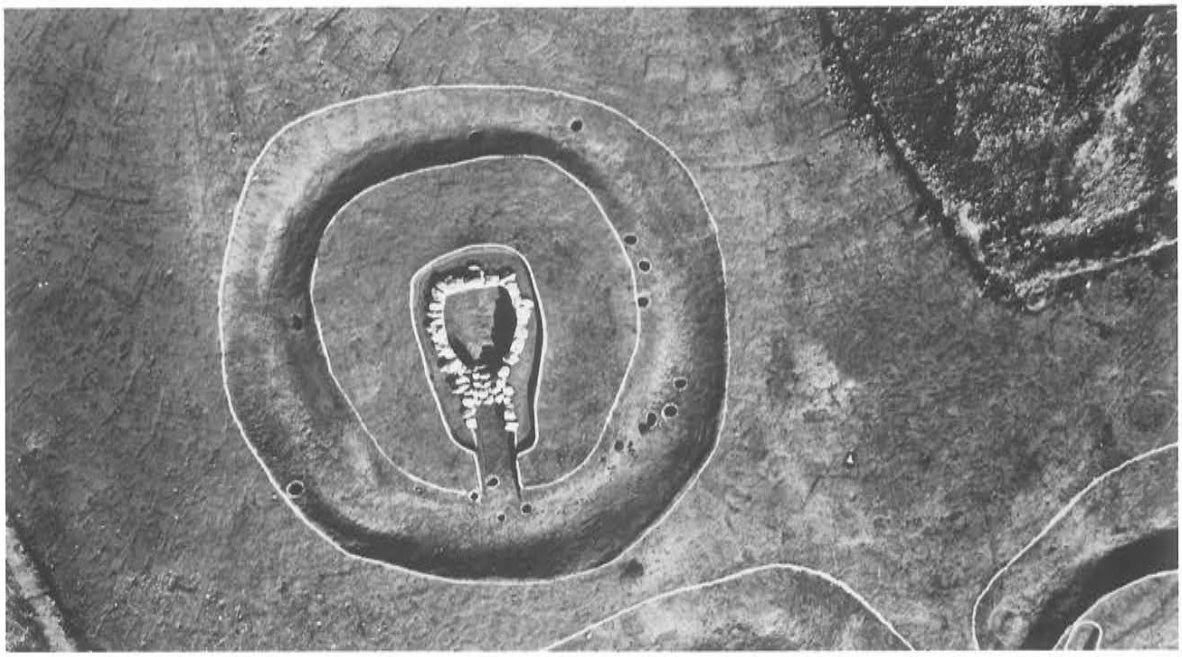


2

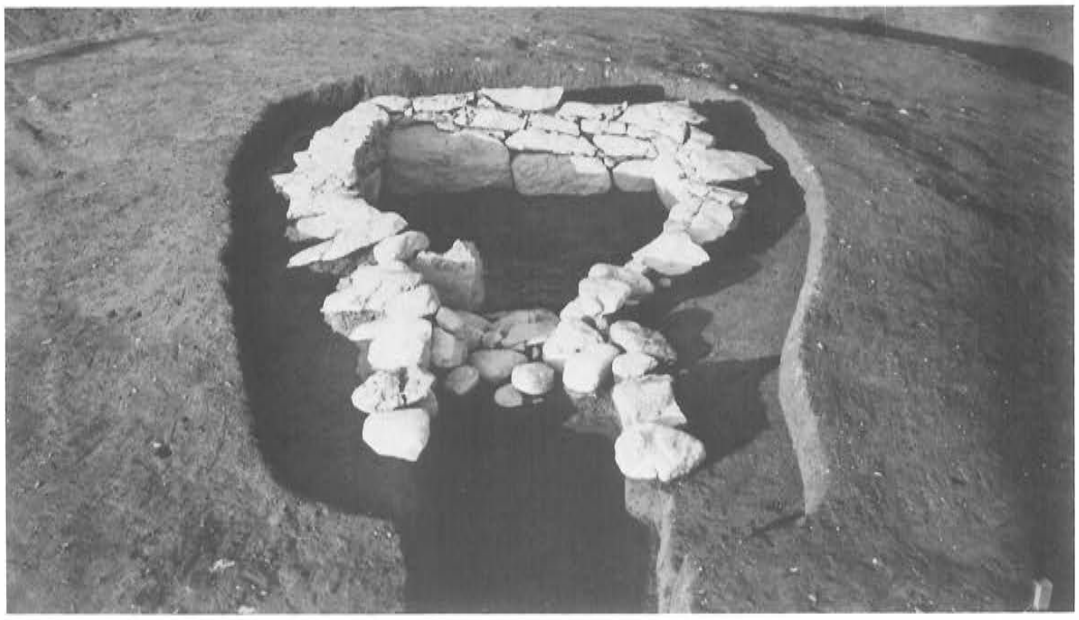
3

1．II区とIII・IV区（東南から）　2．VI～VIII区調査前の状況（南から）　3．I区とII区東半（西から）

1

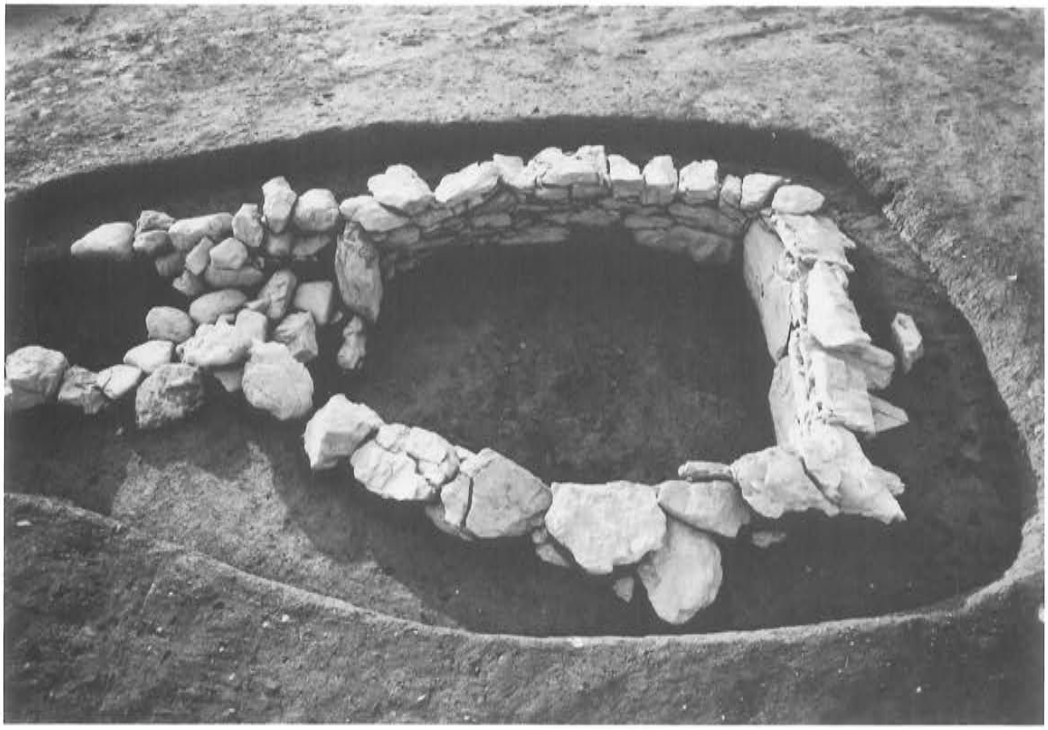


2

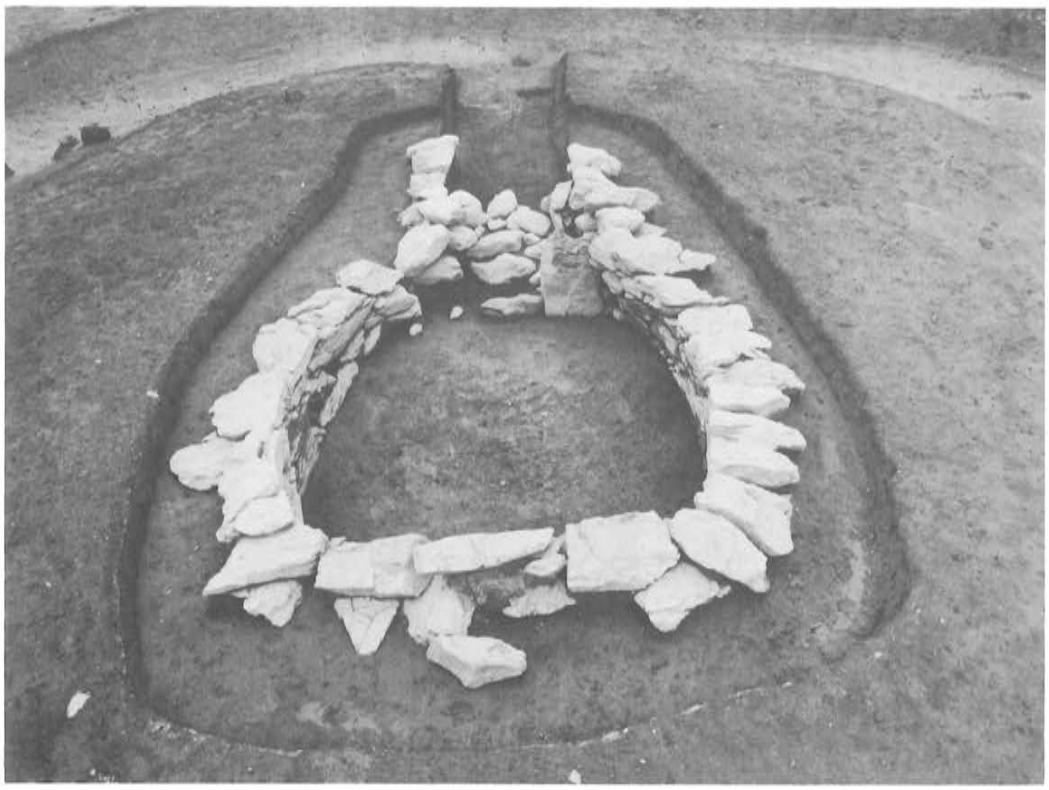


3

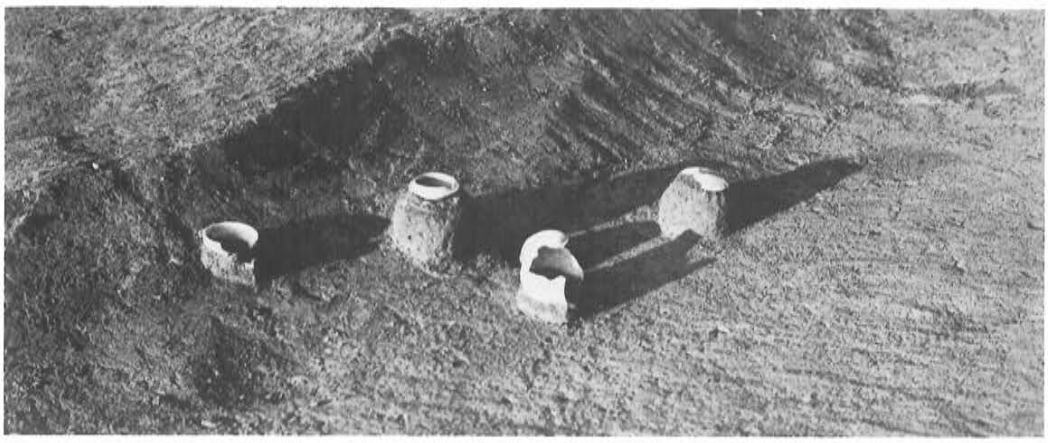
1．1～4号墳気球写真（東から）　2．1号墳（真上から）　3．1号墳石室（南から）



1

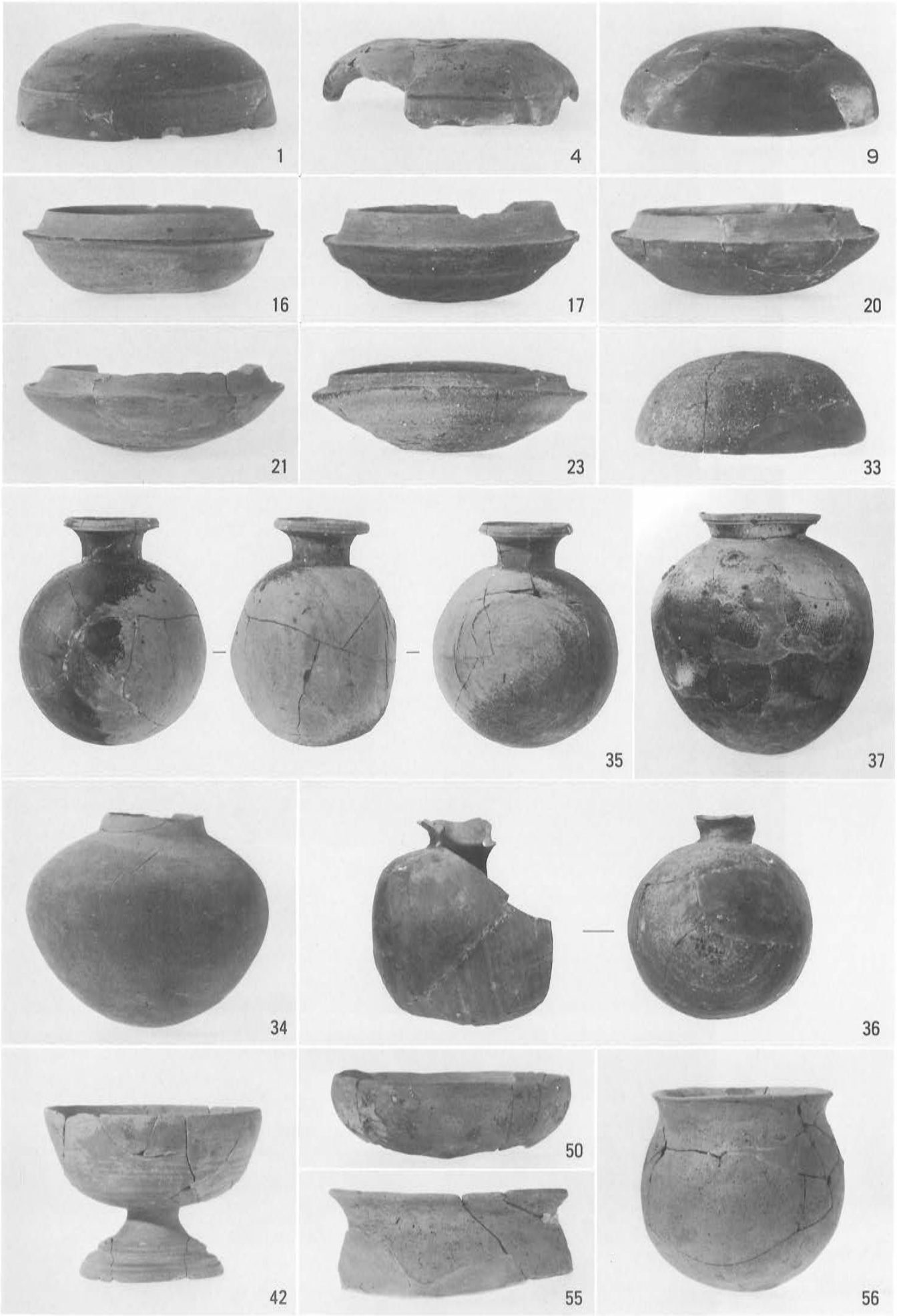


2

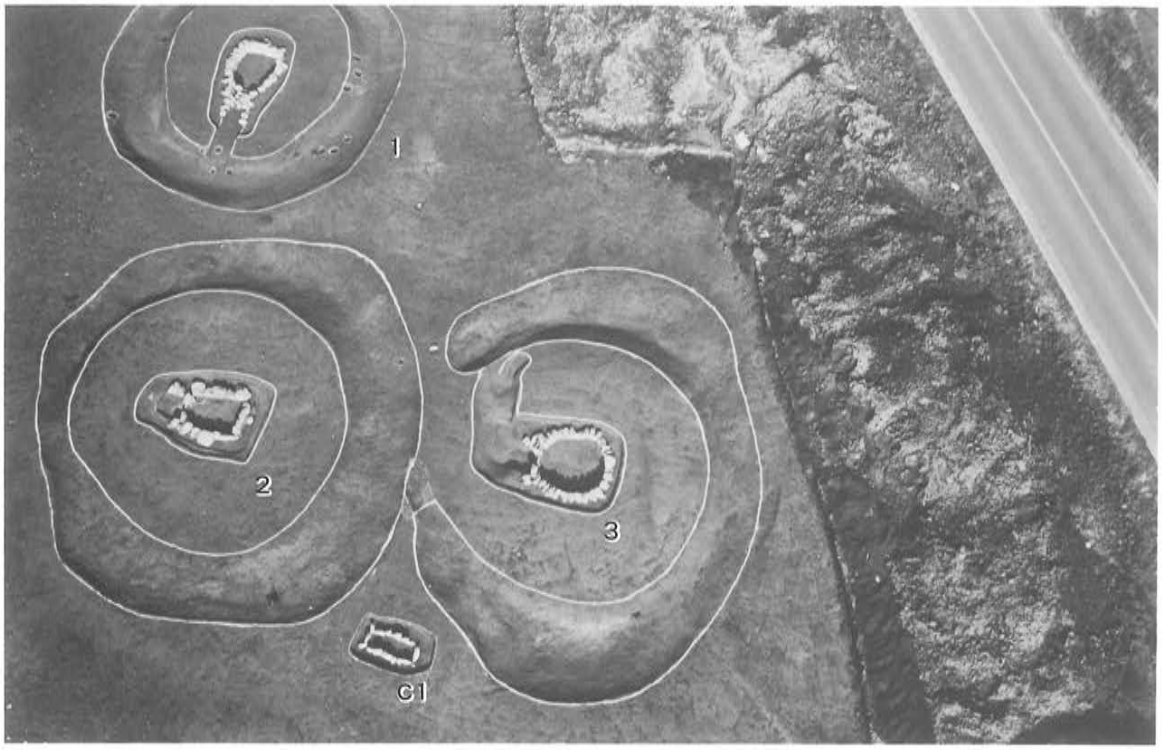


3

1．1号墳石室（東から）　2．同（北から）　3．1号墳周溝土器出土状態（南から）

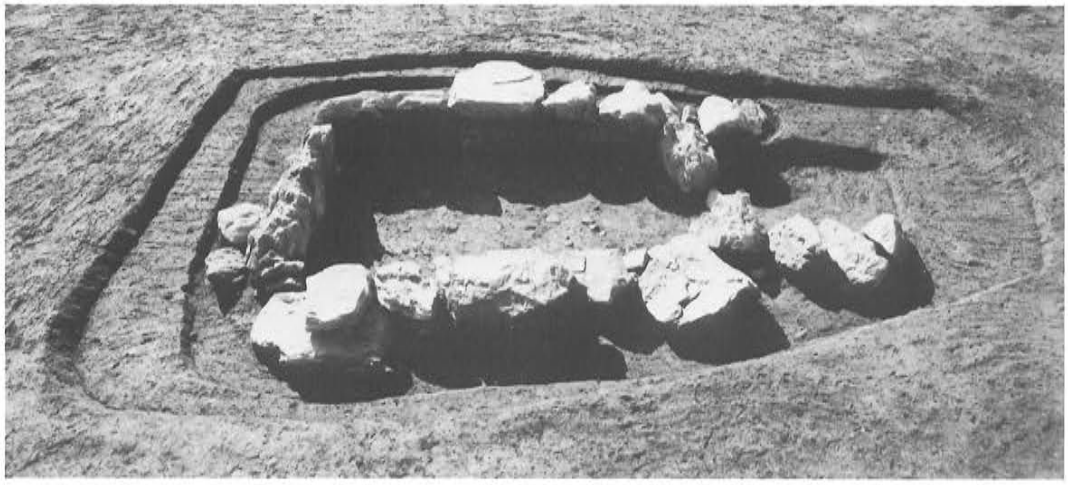


1号墳出土土器



1

2

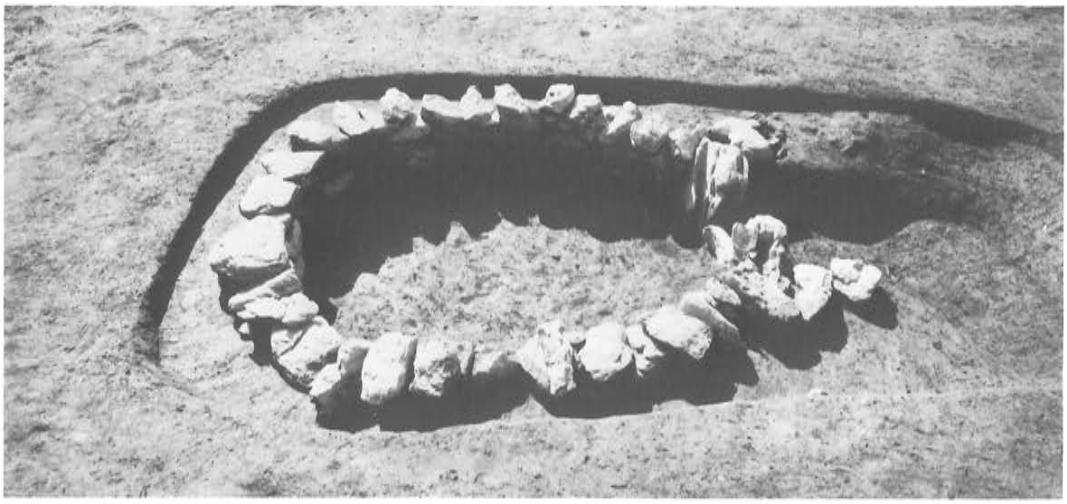


3

1．1～3号墳・C1全景（真上から）　2．2号墳石室（西から）　3．同（北から）

1

2



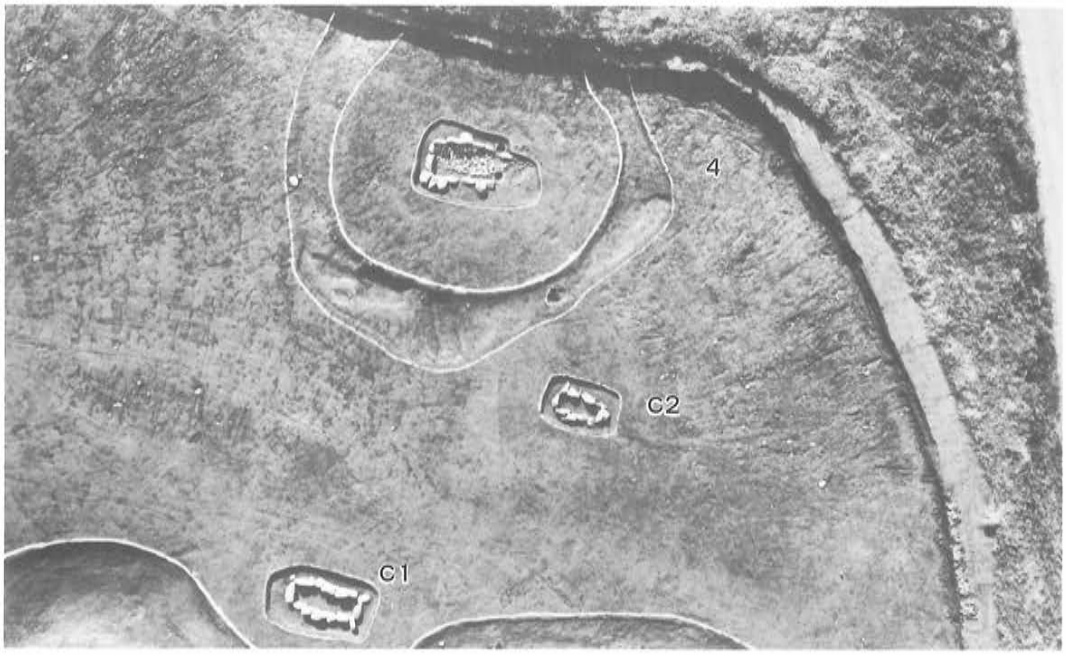
3

1

13

17

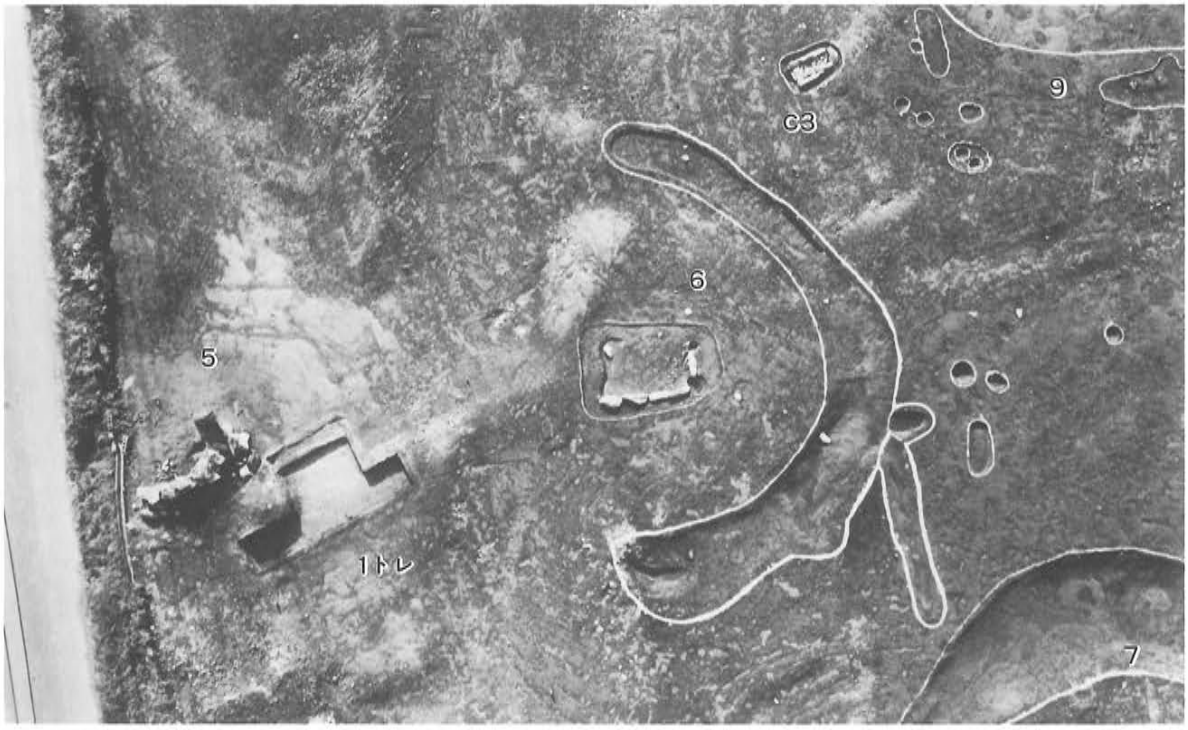
3号墳全景（1：西から）・石室（2：西から、3：北から）・出土土器(1)



1

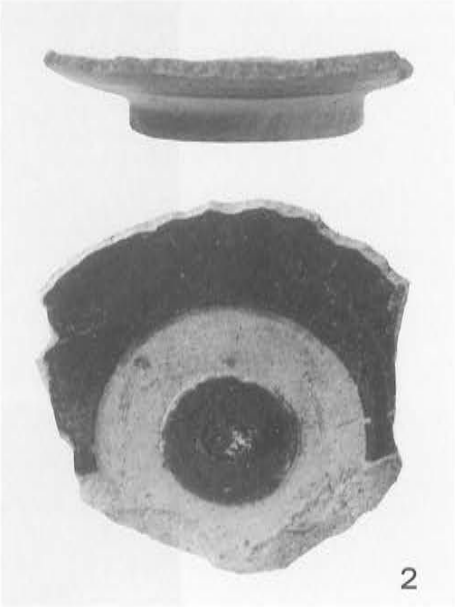
2

1．３号墳出土土器(2)；４号墳全景・Ｃ１・Ｃ２（1:真上から）；４号墳石室（2:西から）



1

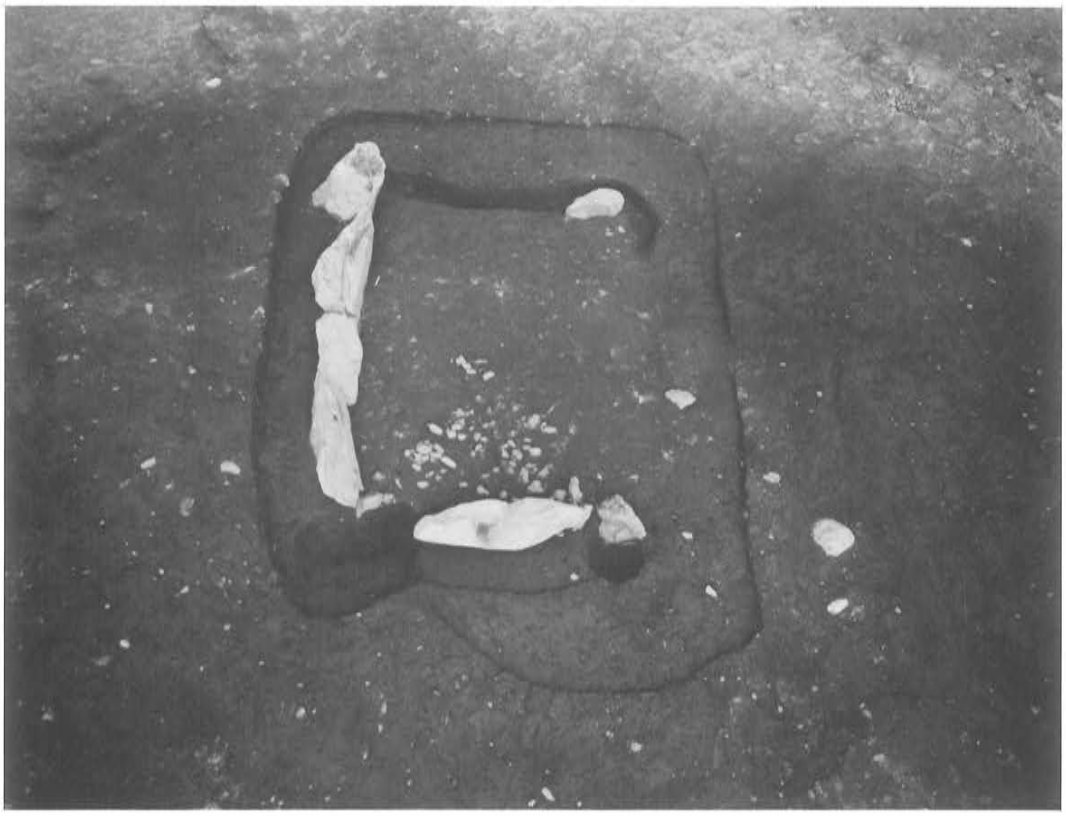
2



2

3

1．5・6号墳全景（1:真上から）；5号墳石室（2:調査前,3:南から）；5号墳出土遺物



1

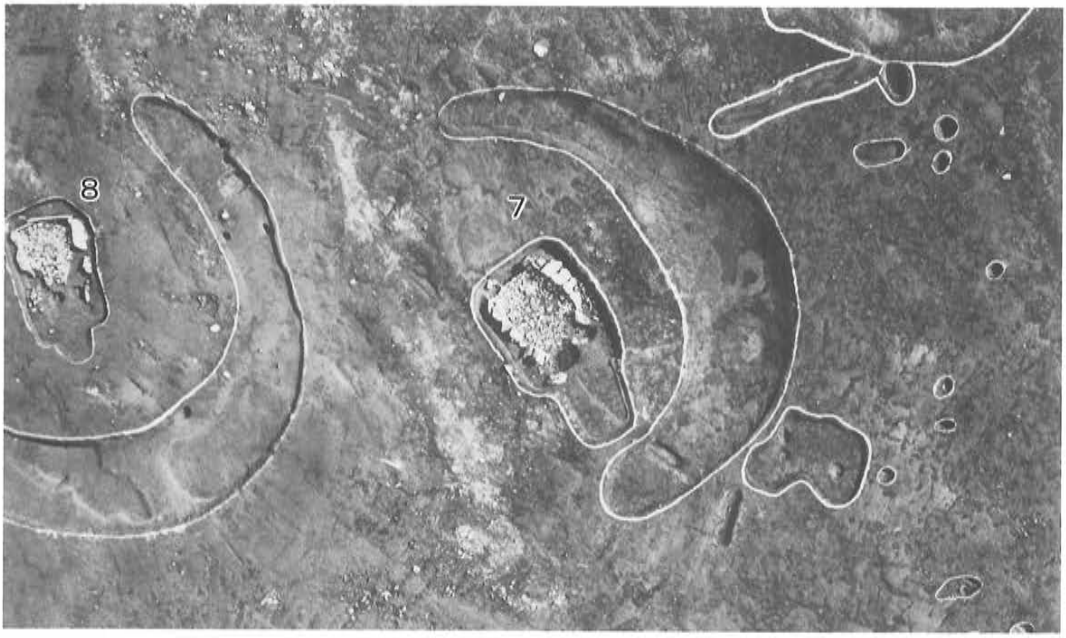
2

3

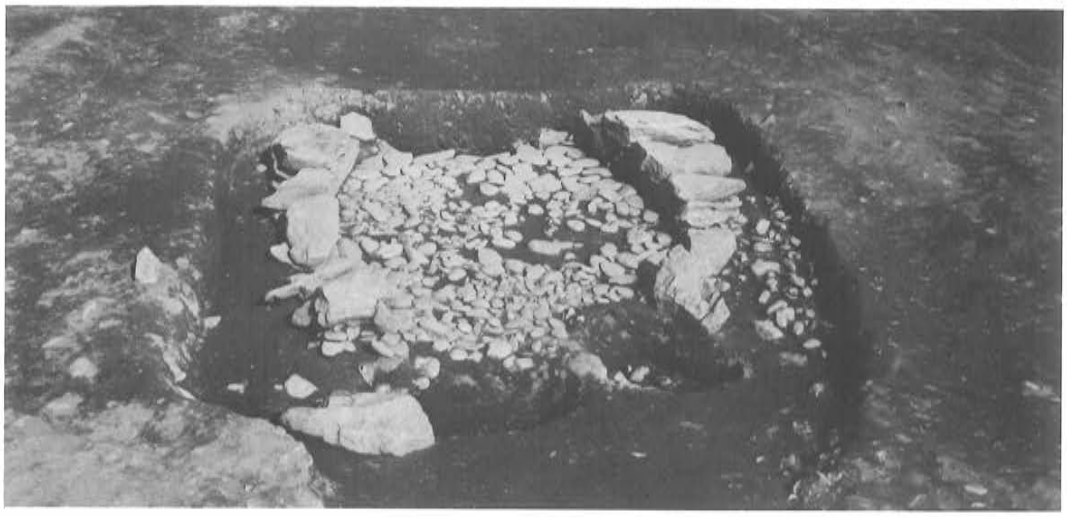
4

8

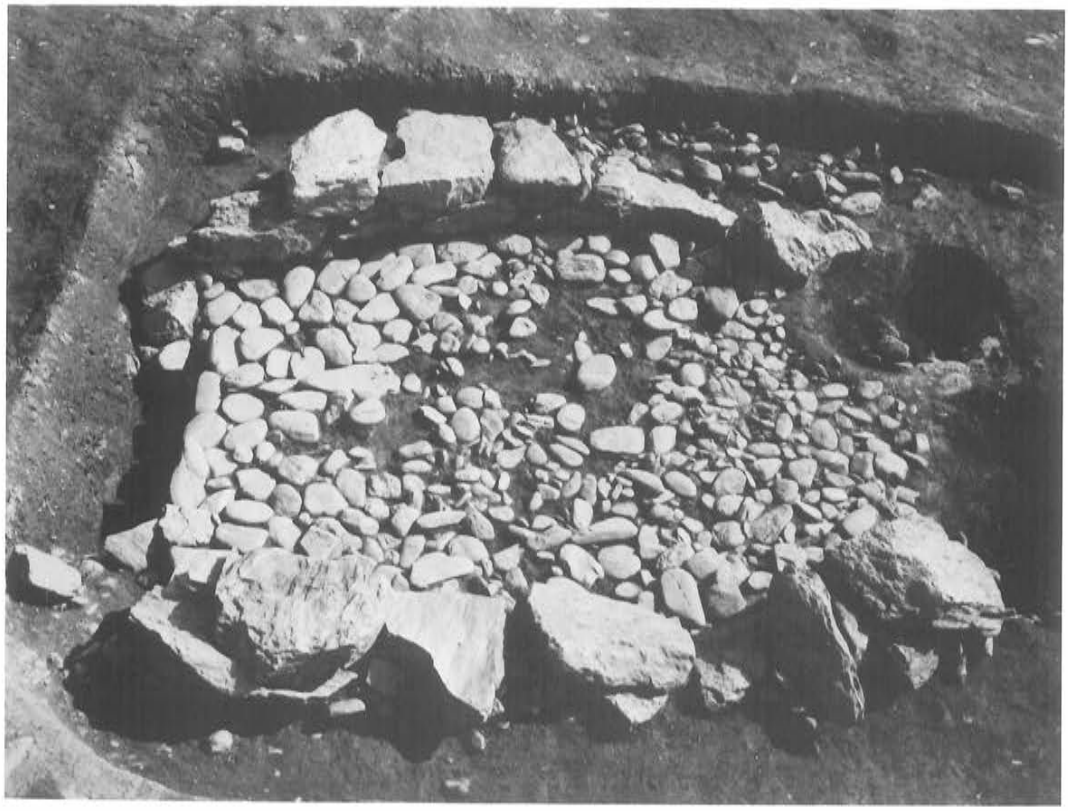
1．6号墳石室（1:西から,2:南から）；出土遺物



1

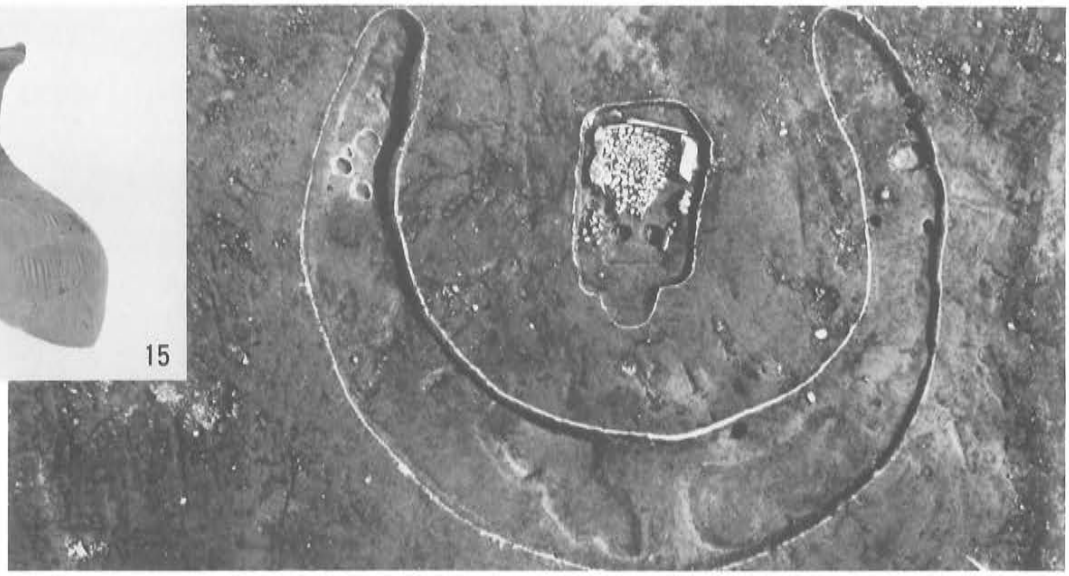


2

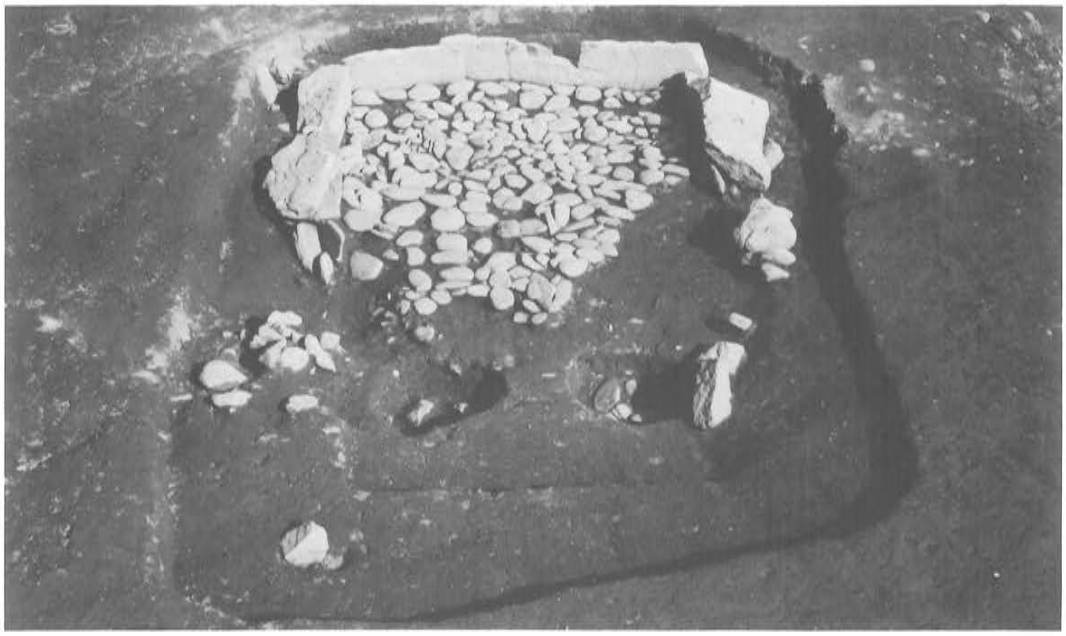


3

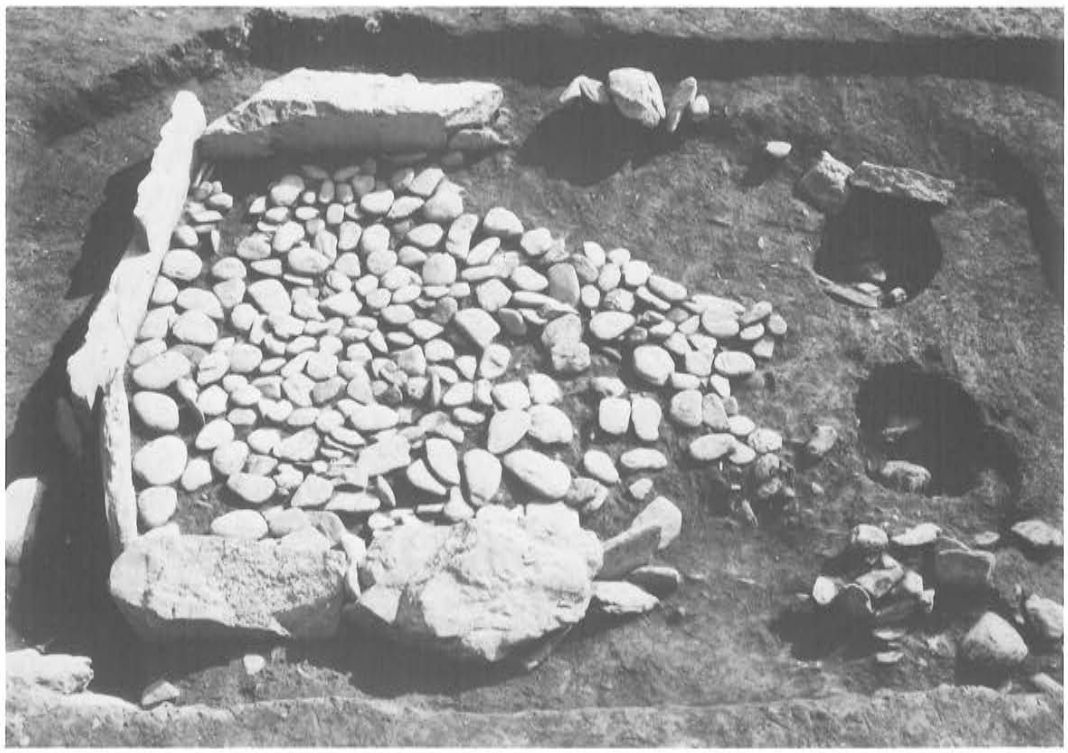
1．7号墳全景（真上から）　2．7号墳石室（西から）　3．同（北から）



1



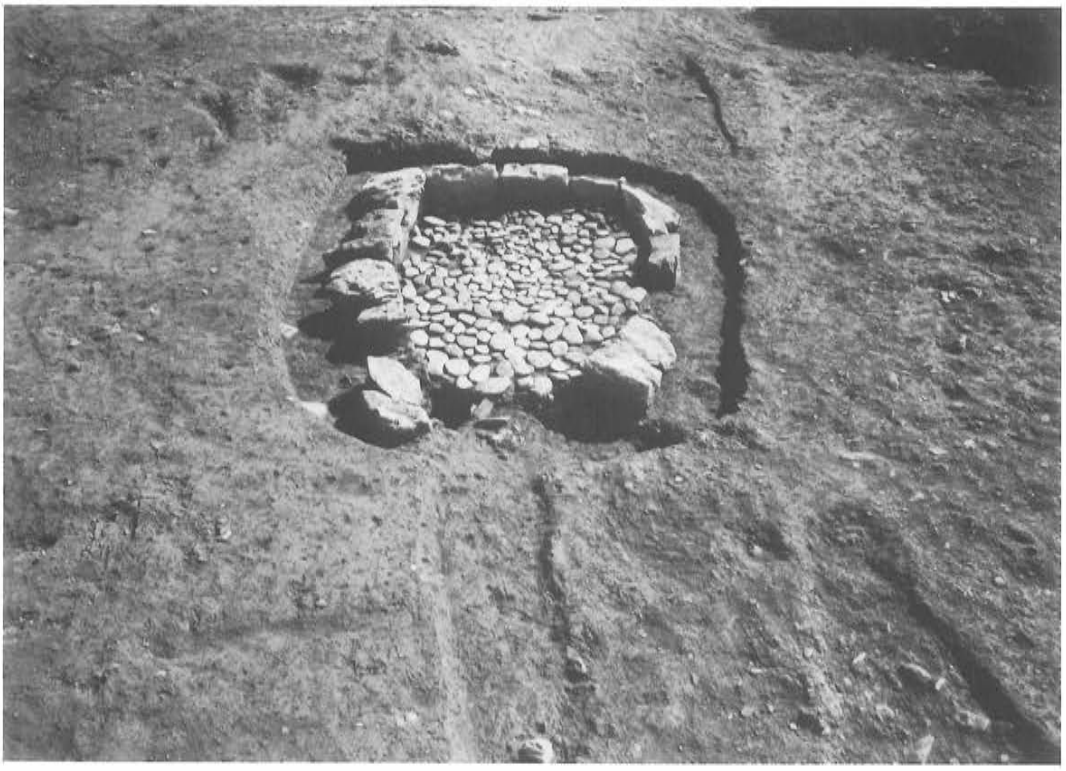
2



3

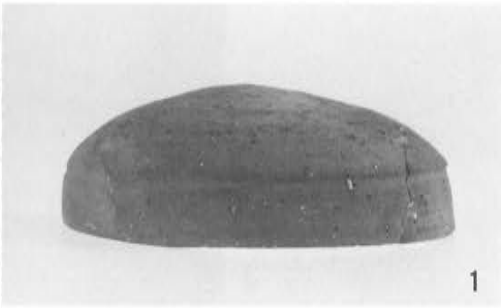
1．8号墳全景（1:真上から）・石室（2:西から,3:北から）；出土土器

1



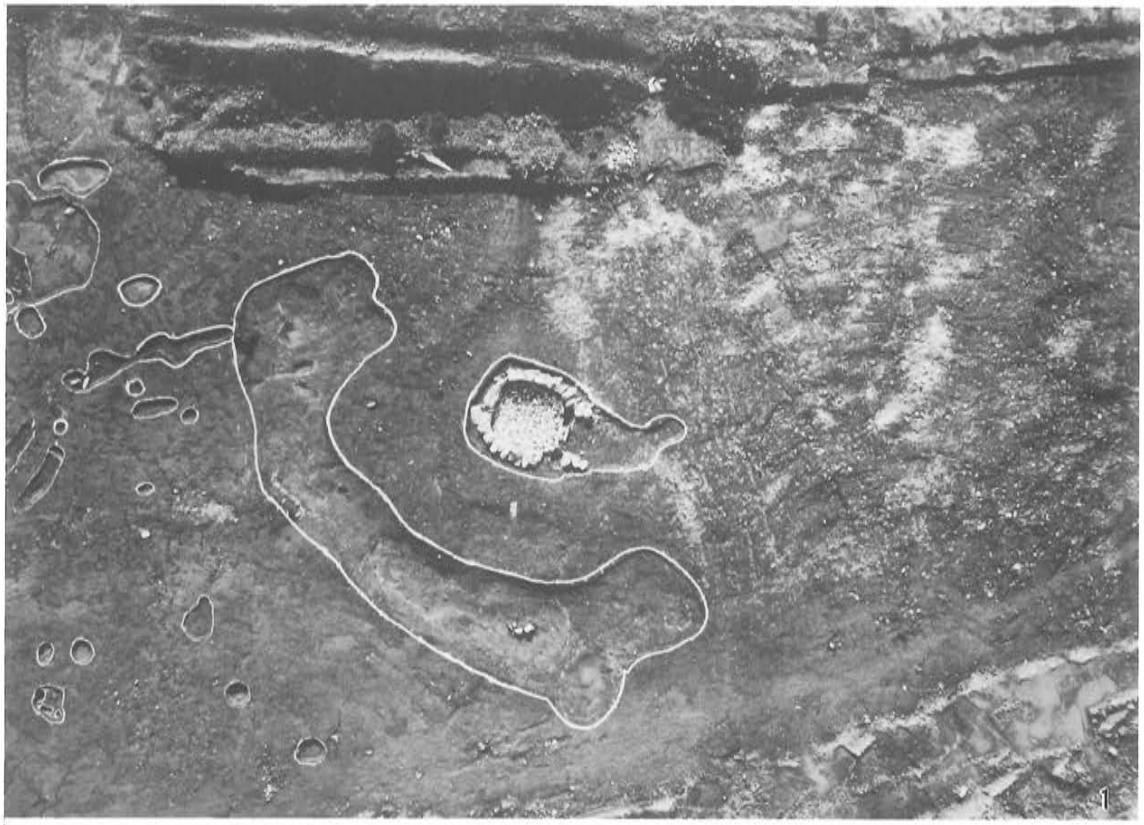
2

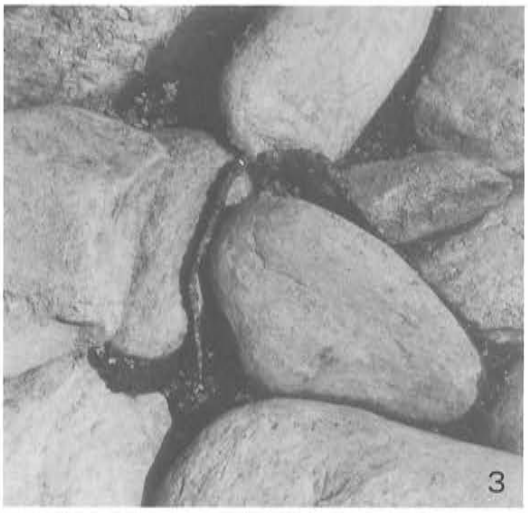
3

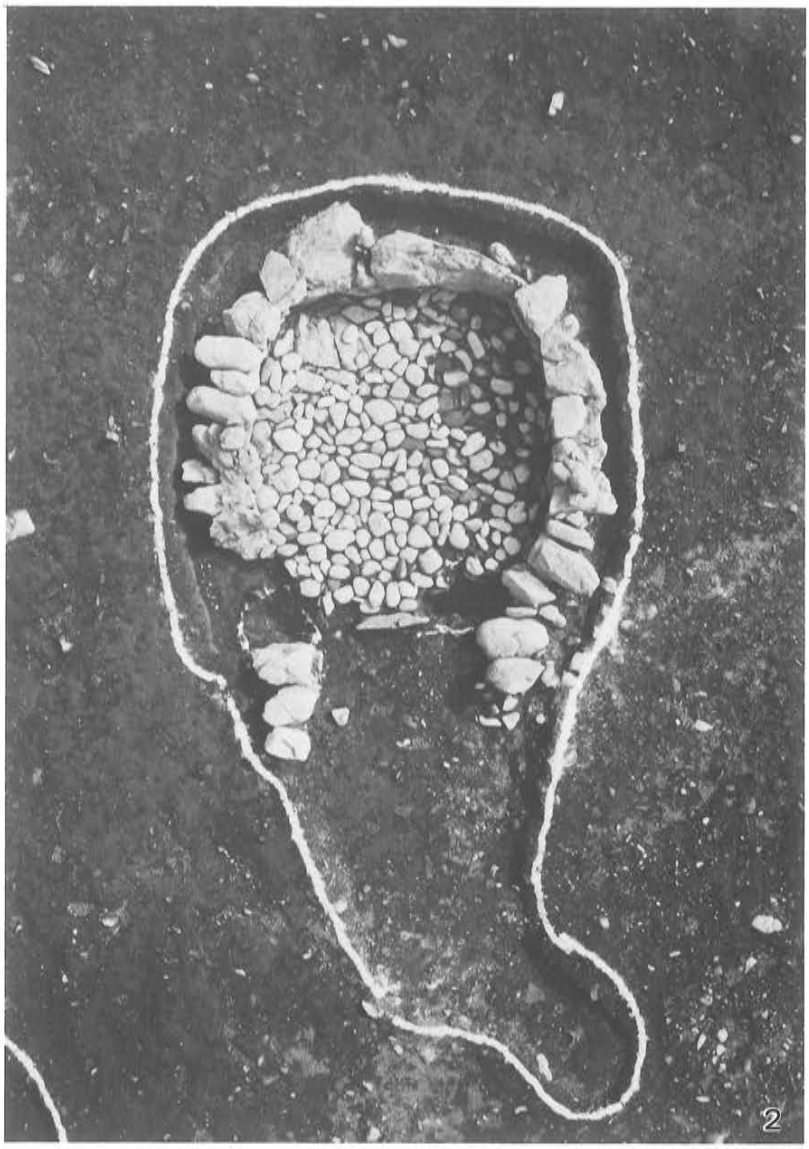


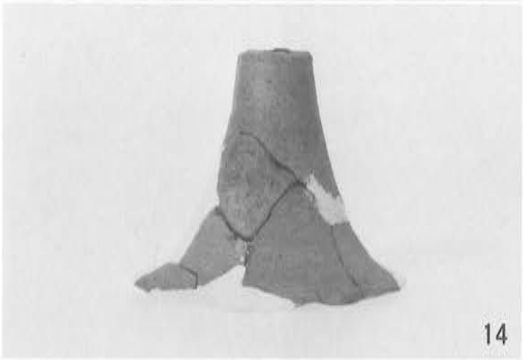
1

1．9号墳全景（1:真上から）・石室（2:西から）・鉄器出土状態（3）；出土土器





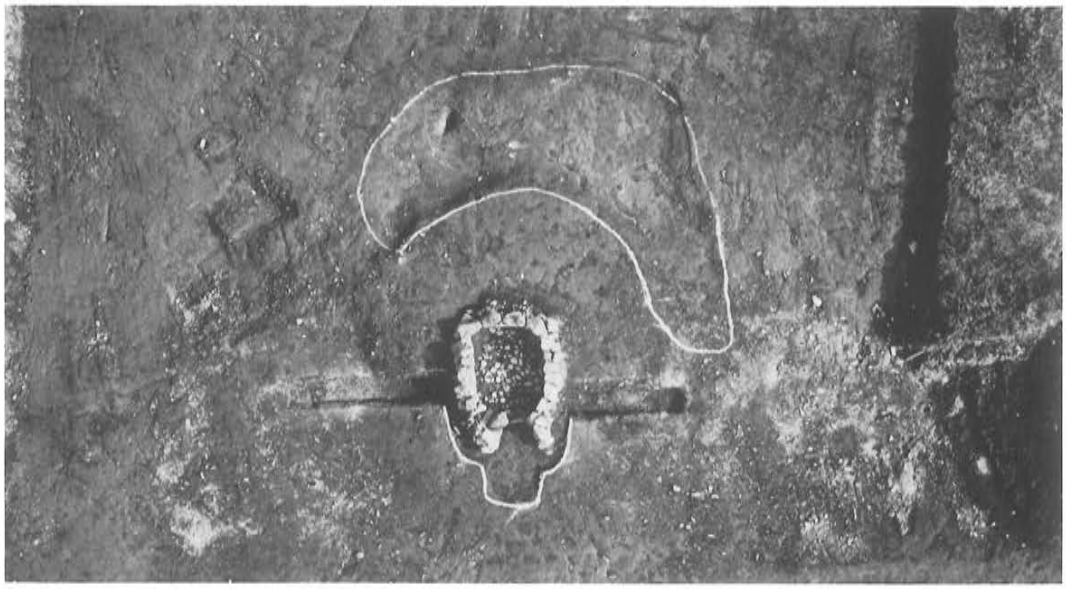




10号墳全景（1:真上から）・石室（2:真上から）・鉄器出土状態（3）；出土土器

1

2



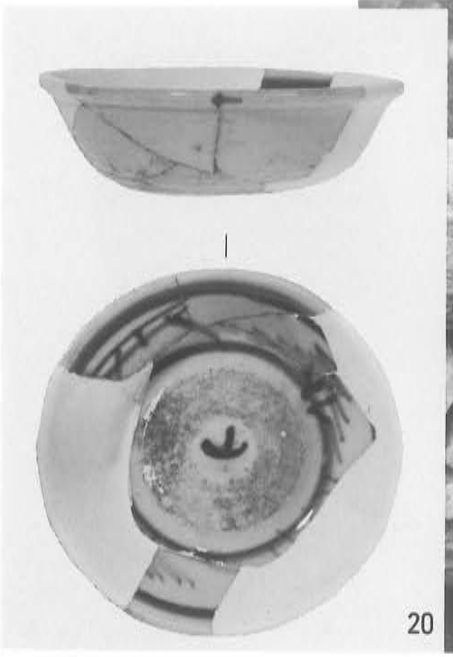
3

4

1．11号墳調査前（北西から）　2．土層（西から）　3．全景（真上から）　4．石室（西から）

1

2



20

3

1．11号墳石室全景（1:北から），玄門閉塞（2），奥壁コーナー（3）；出土遺物

1

2

3

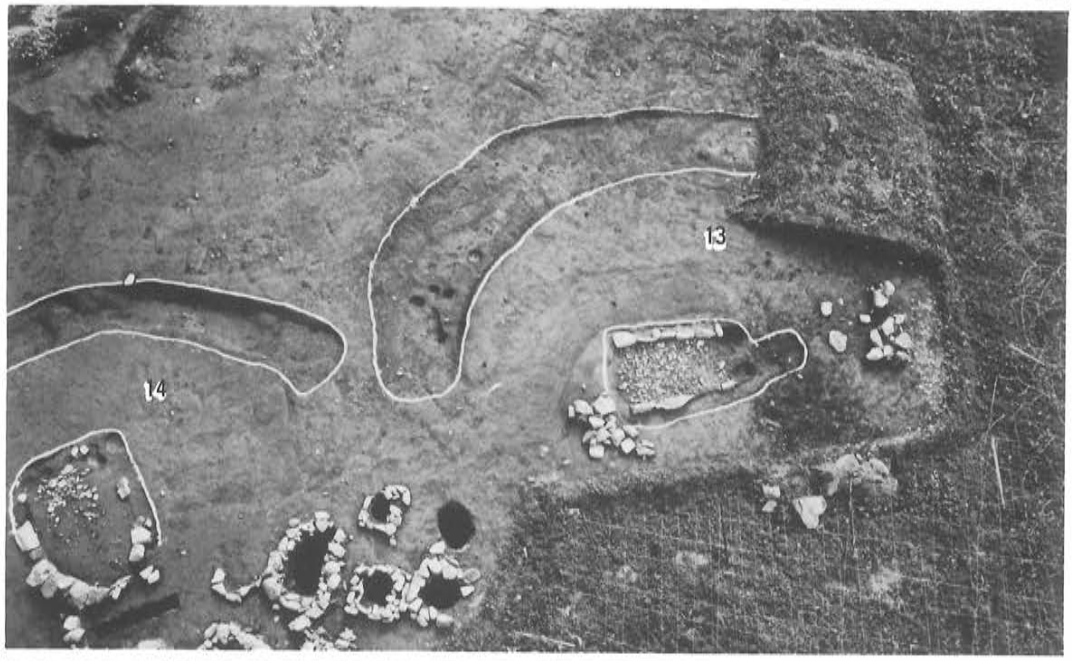
4

5

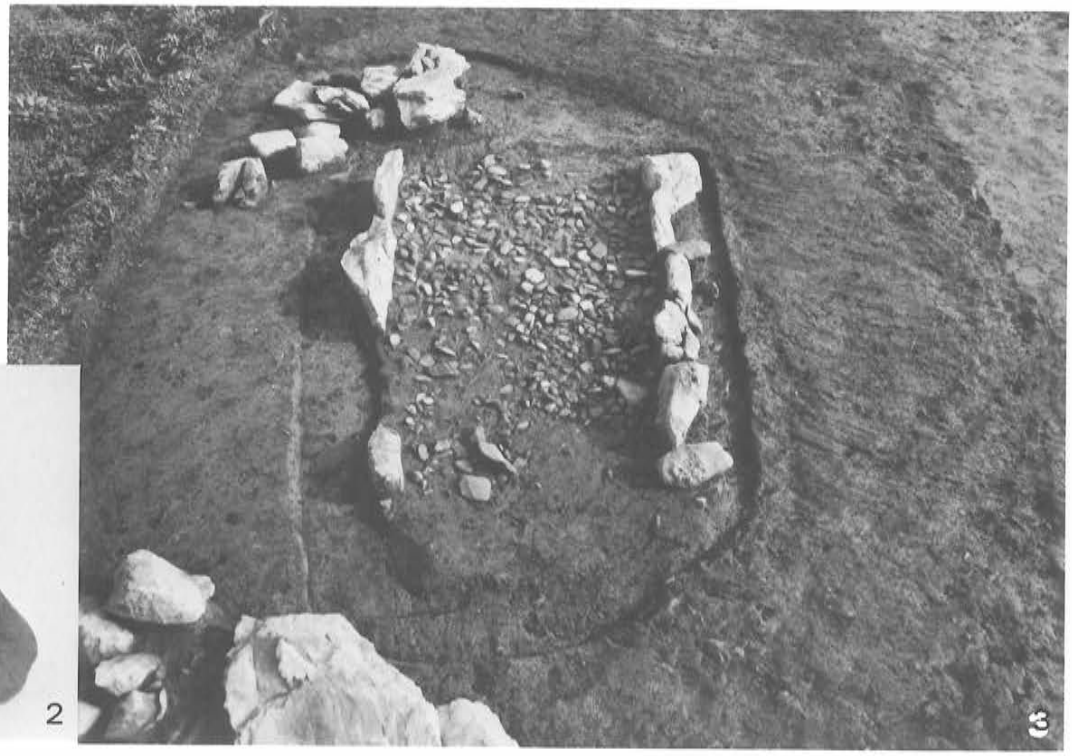
12

1．12号墳全景（1:真上から,2:東から）・石室（3:西から）；出土土器

1



2

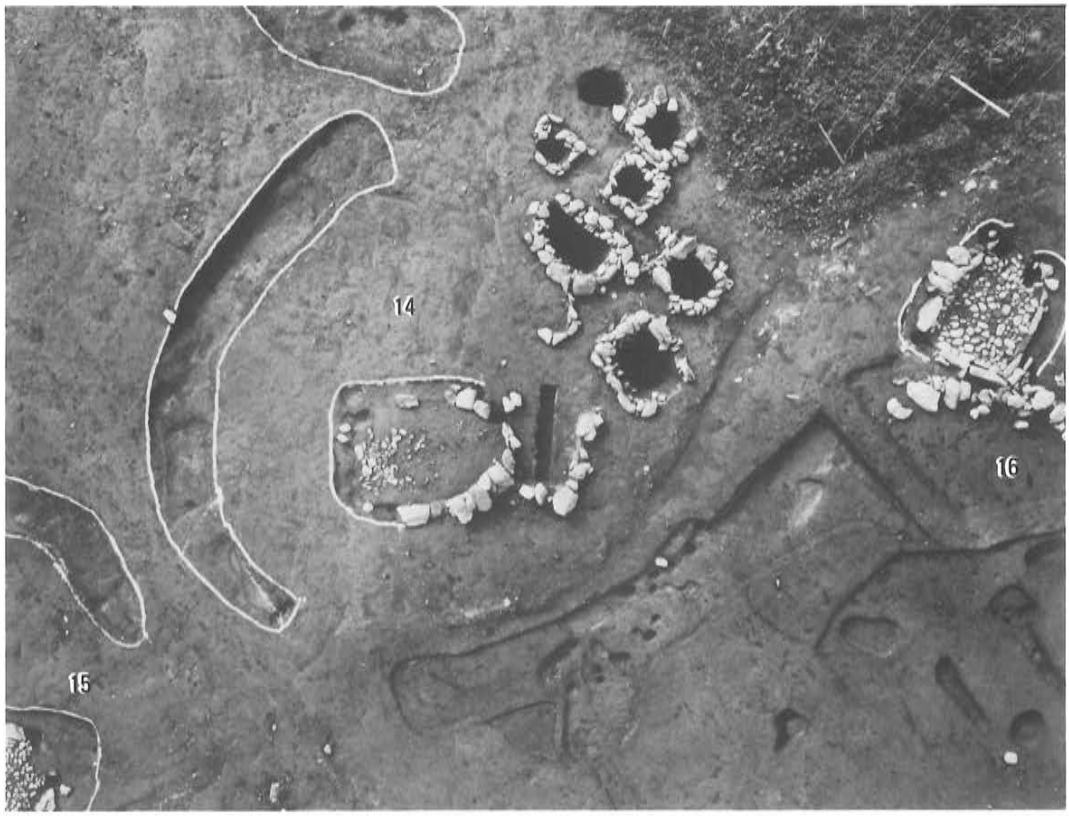


3

2

13号墳調査前（1:南から），全景（2:北上空から），石室（3:西南から）；出土土器

1

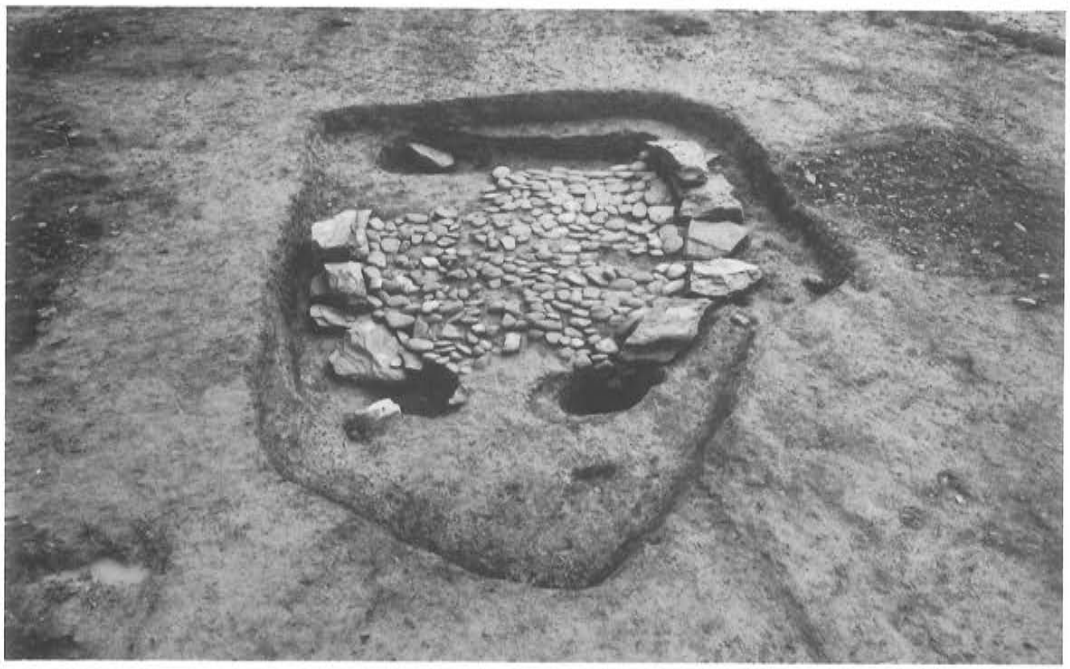


2

3

1．14号墳調査前（北から）　2．全景（南から）　3．石室（南から）

1

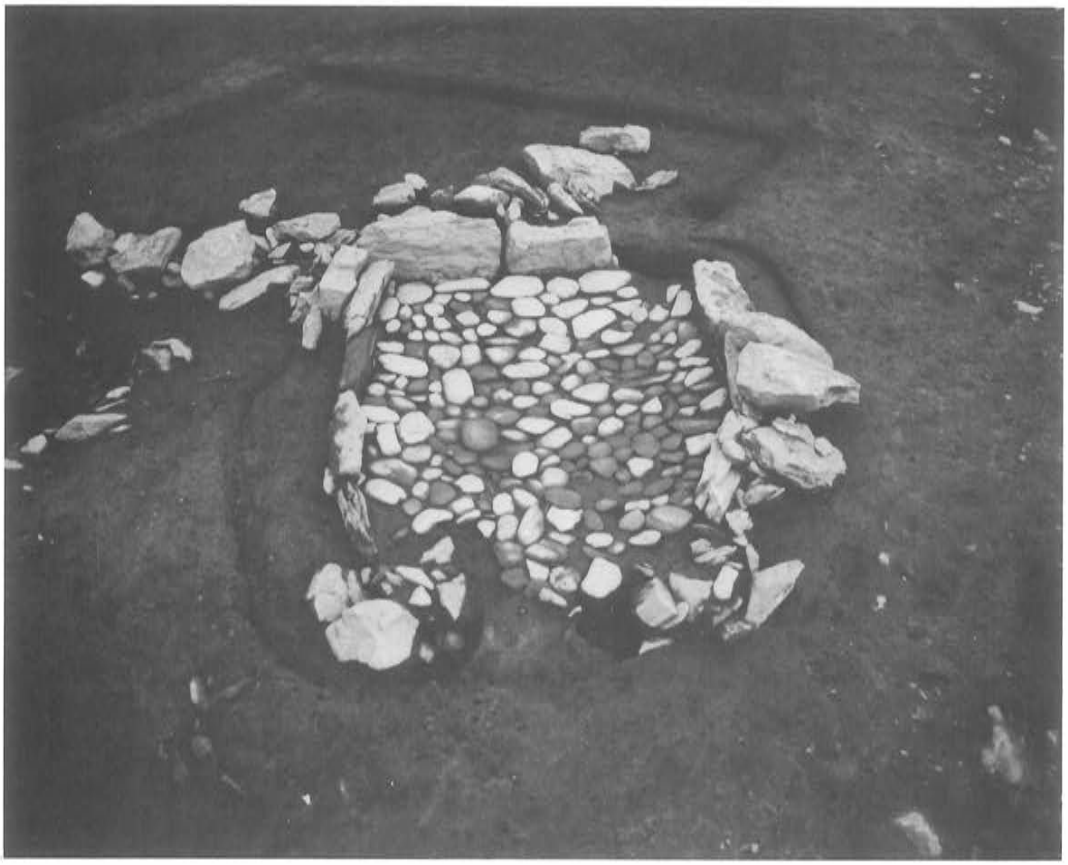


2

3

1．15号墳全景（北上空から）　2．石室（西から）　3．同（北から）

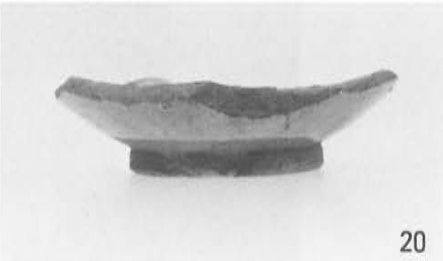
1



2

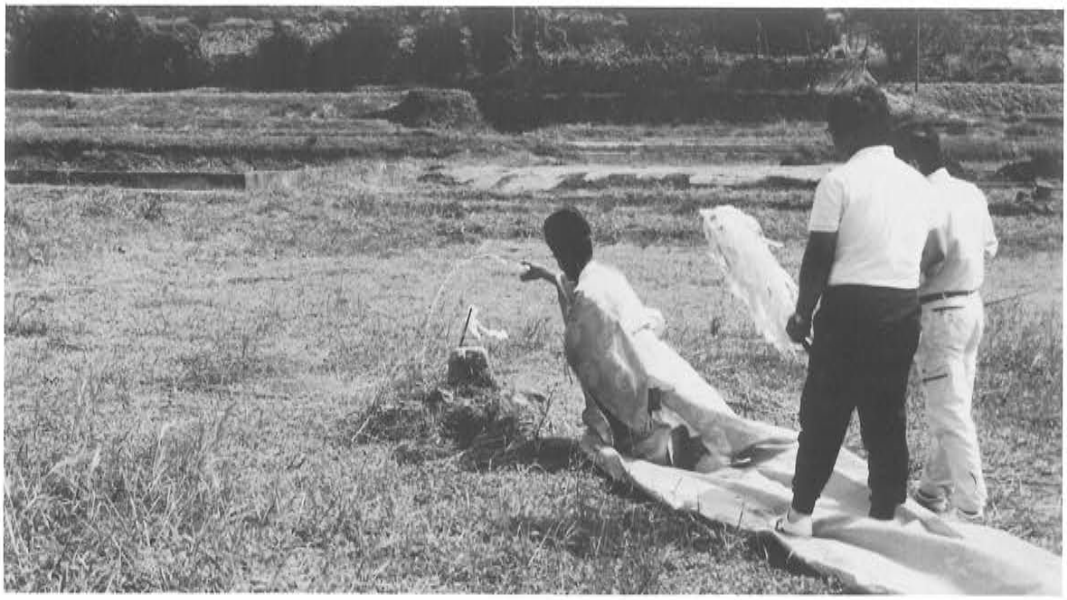
14

18



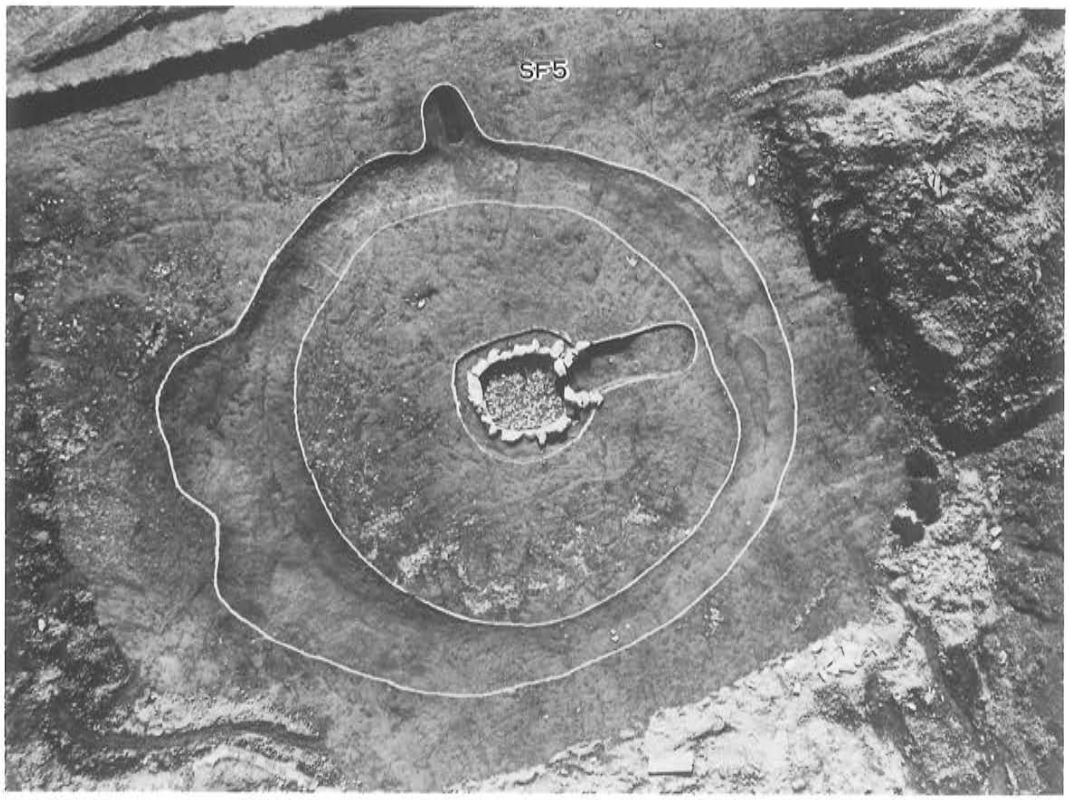
20

16号墳全景（1:真上から）・石室（2:西から）：14号墳出土遺物



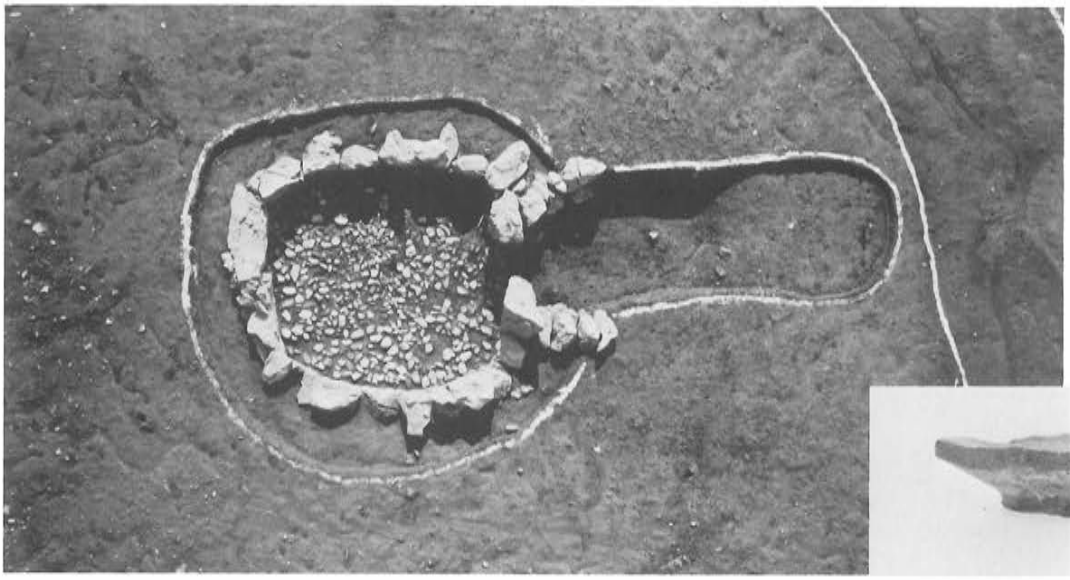
1

2

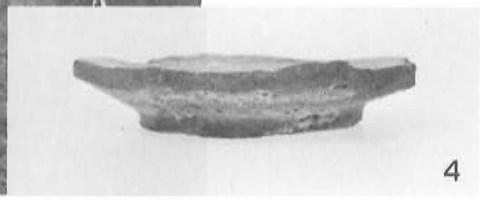


3

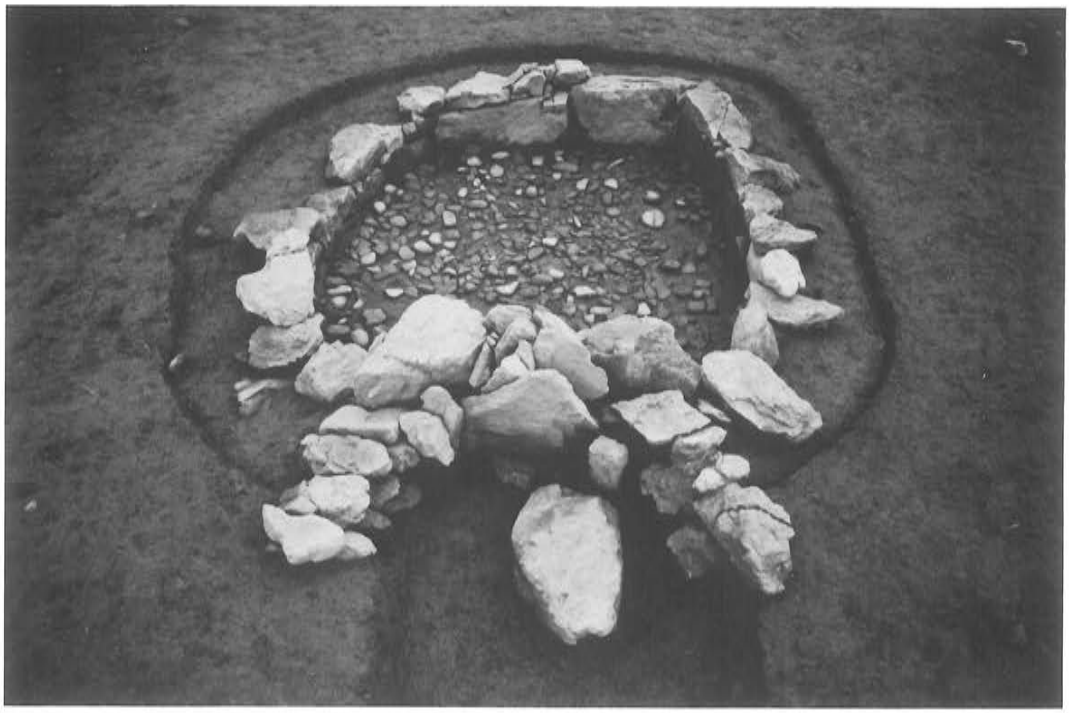
1．17号墳調査前のＳＳ１石組へのお祓い　　2．ＳＳ１（北から）　　3．17号墳全景（真上から）



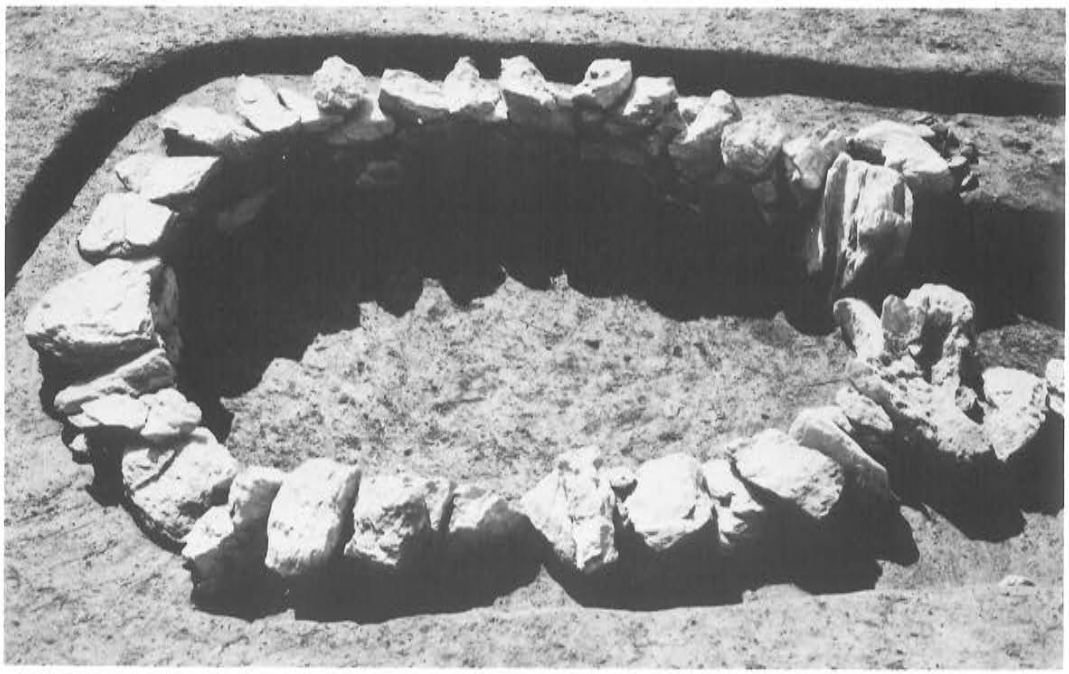
1



4



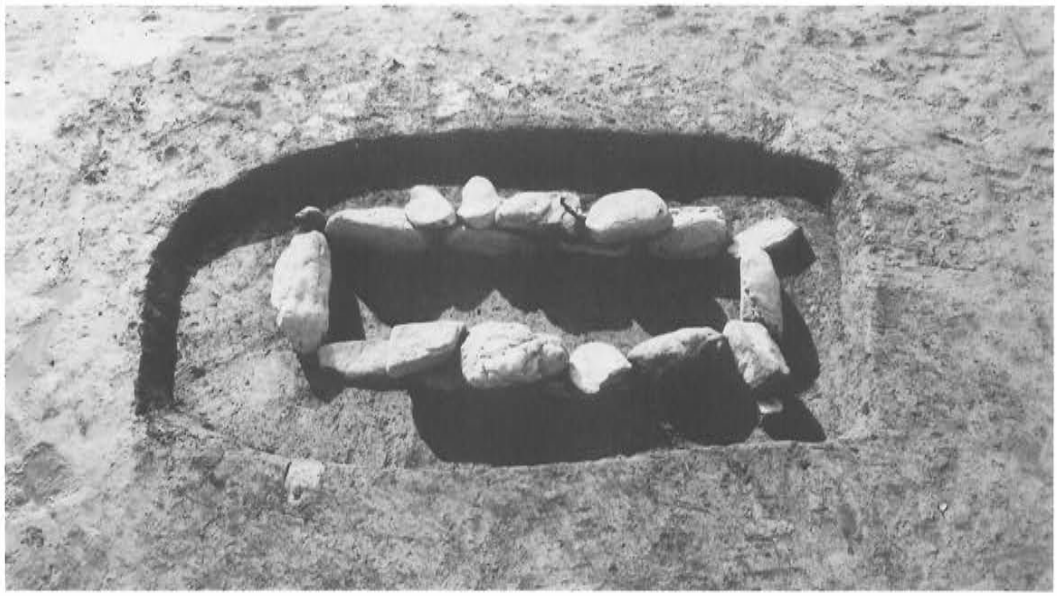
2



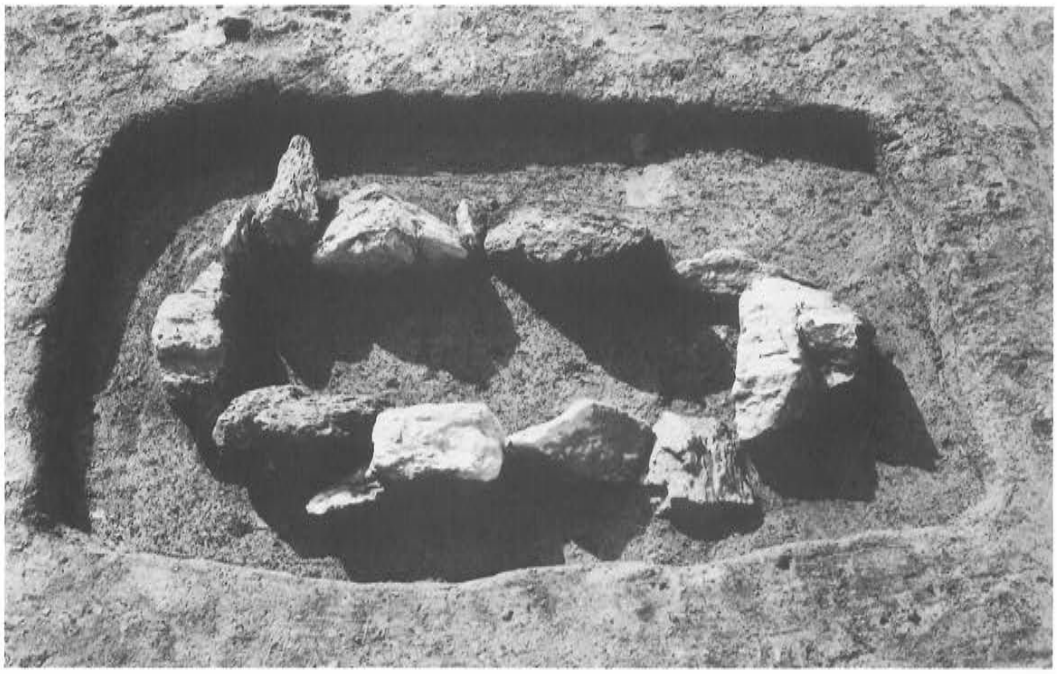
3

17号墳石室（1:真上から，2:西から，3:北から）；出土遺物

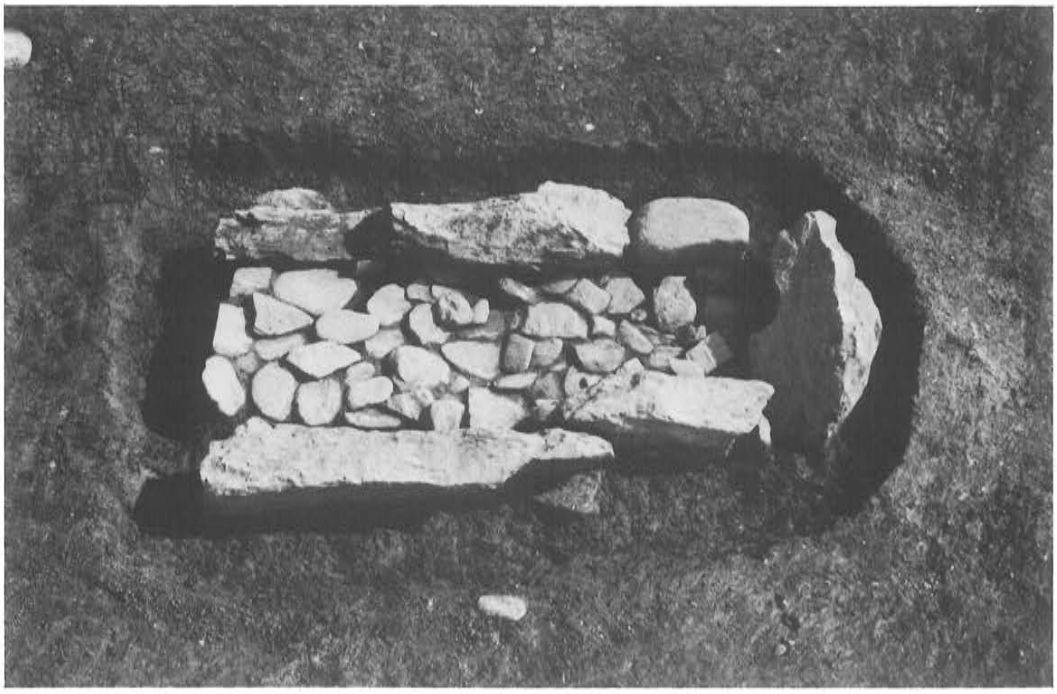
1



2



3



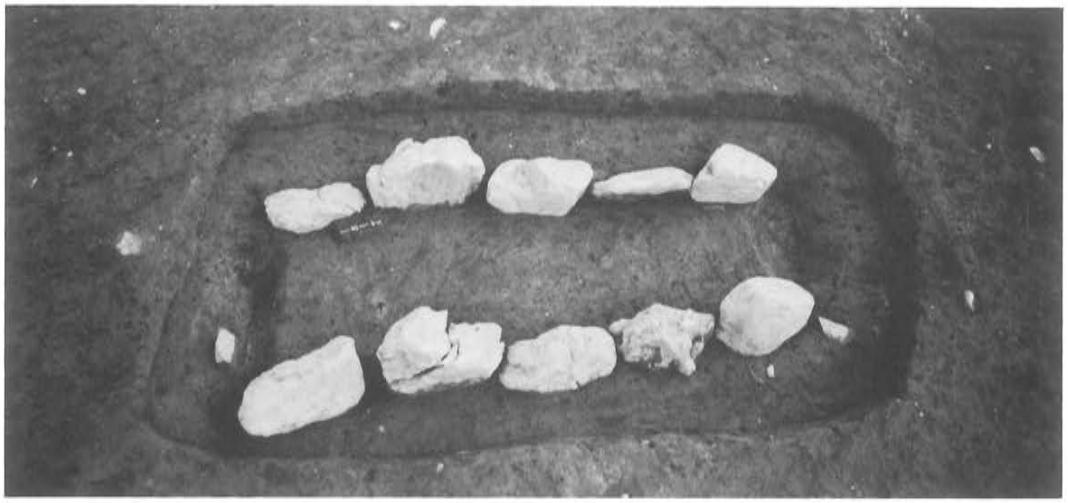
1．C 1（北から）　2．C 2（北から）　3．C 3（南から）

1

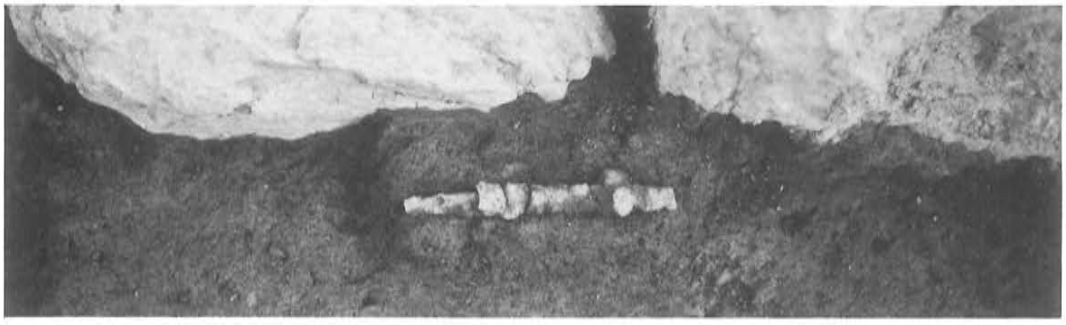
2

3

1．C 4（北から）　2．C 5（北から）　3．C 6（北から）

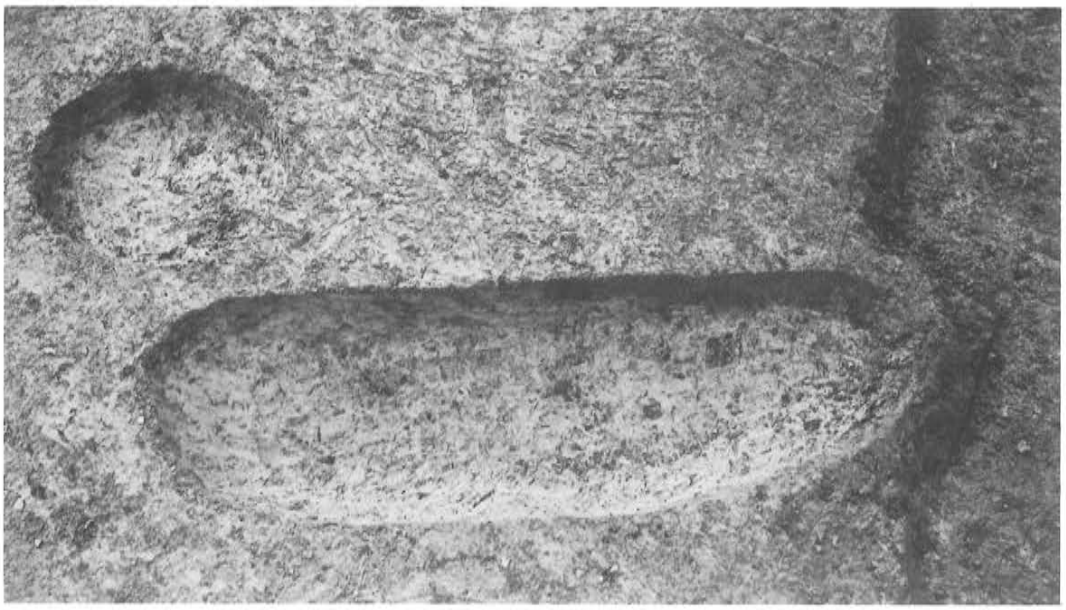


1



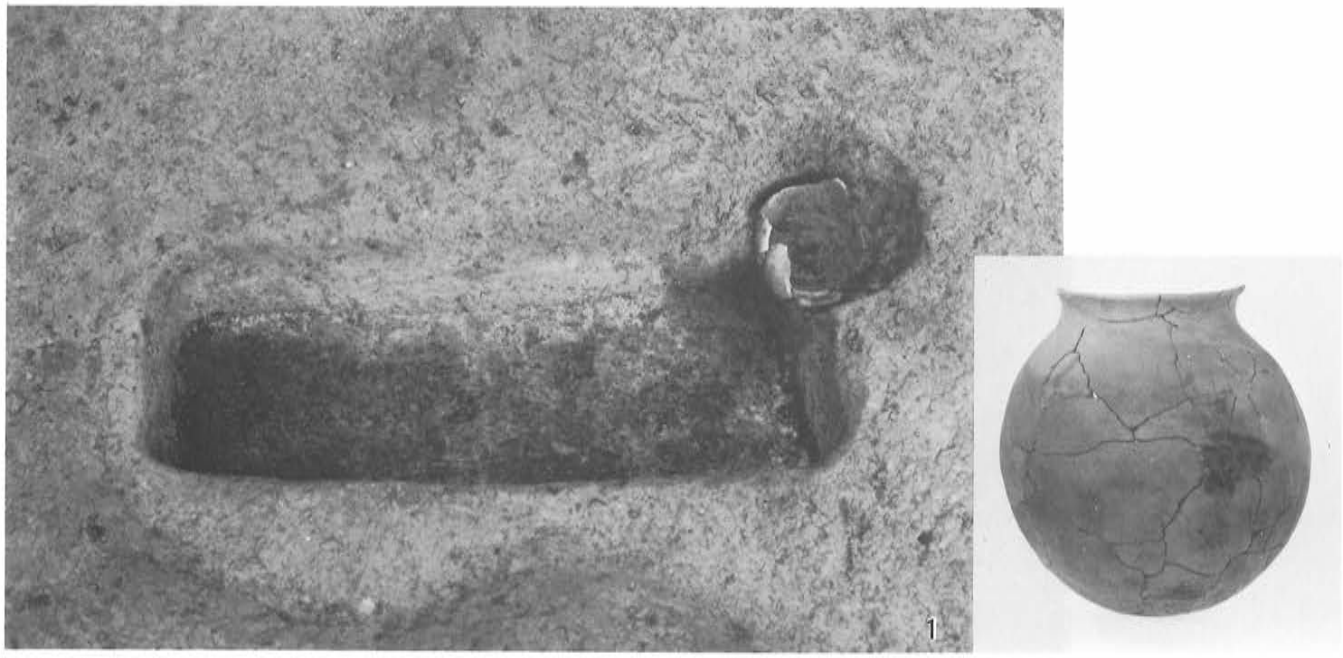
2

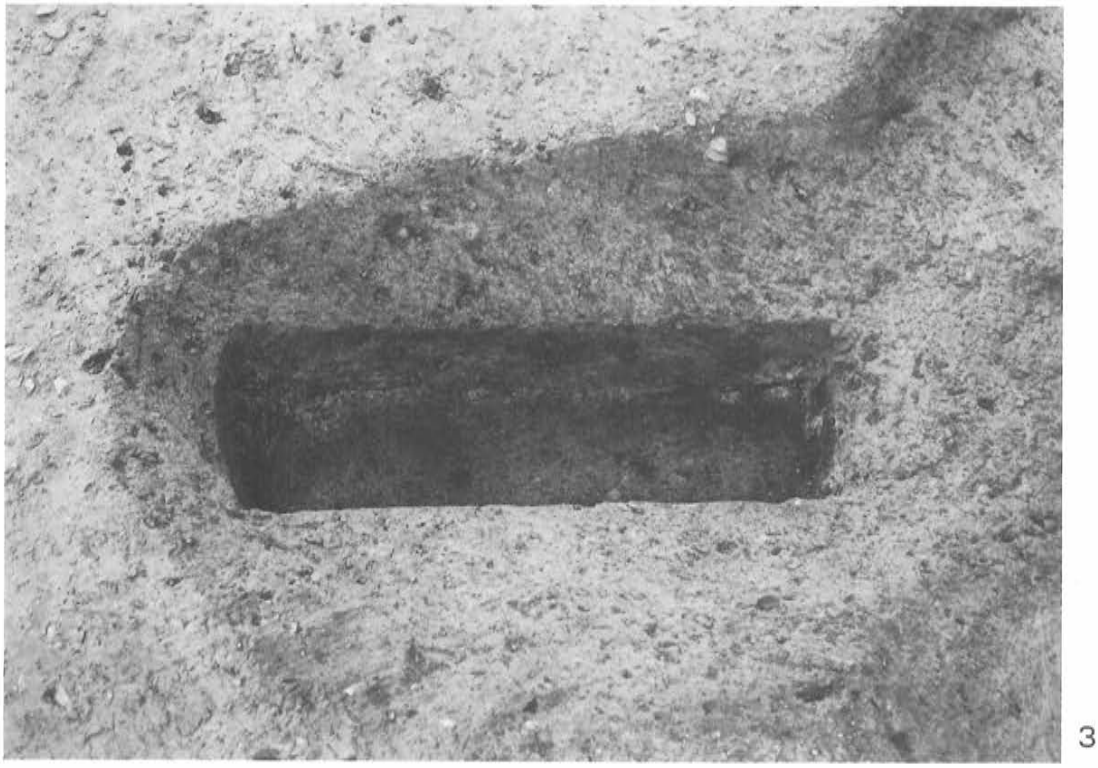
3



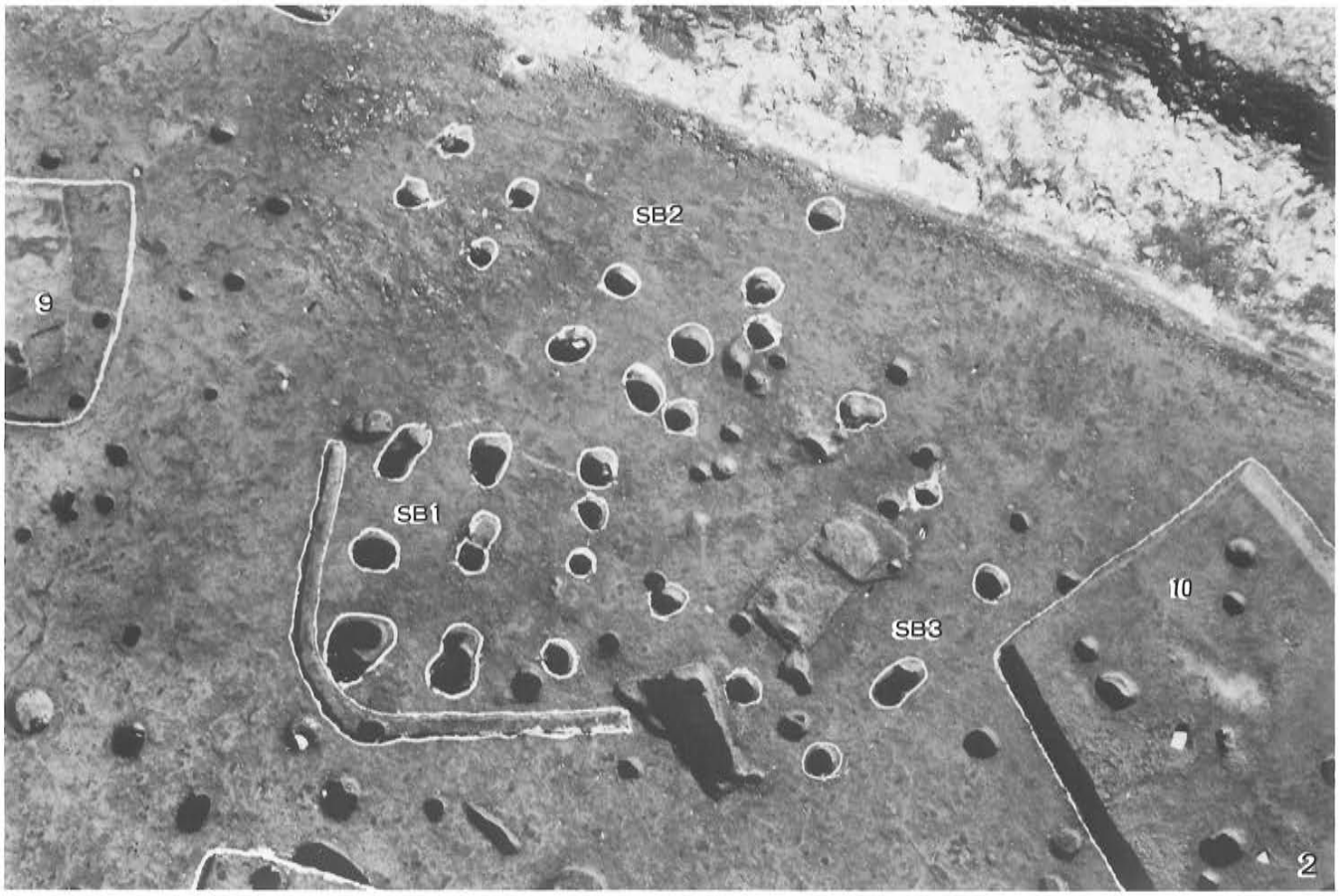
4

1．Ｃ７（北から）　2．同鉄器出土状態　3．ＳＦ１（東から）　4．ＳＦ２（東から）

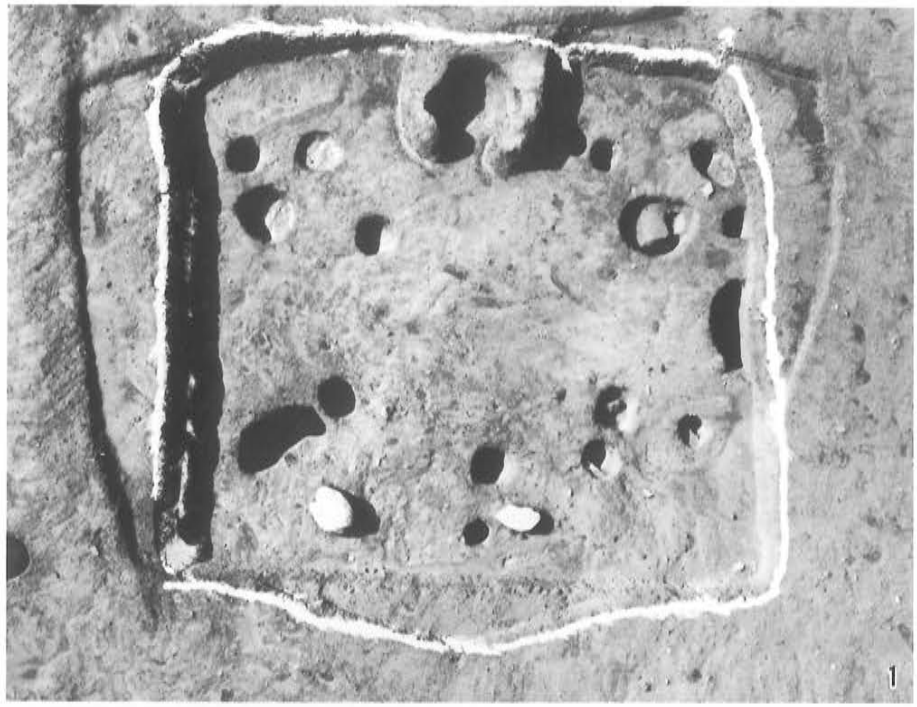


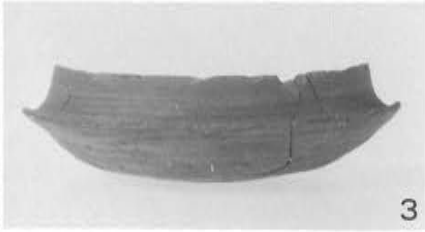


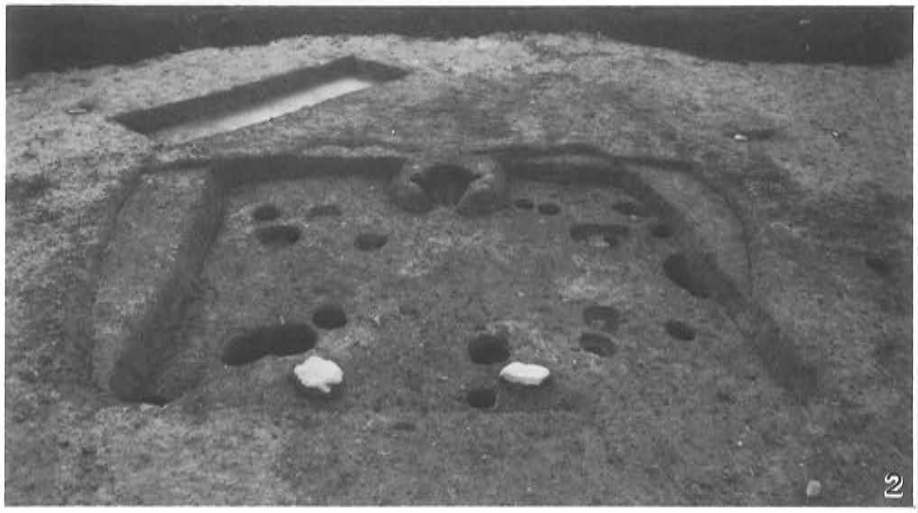
1．ＳＦ３（西から）と出土土器　2．ＳＦ４（南から）　3．ＳＦ５（東から）

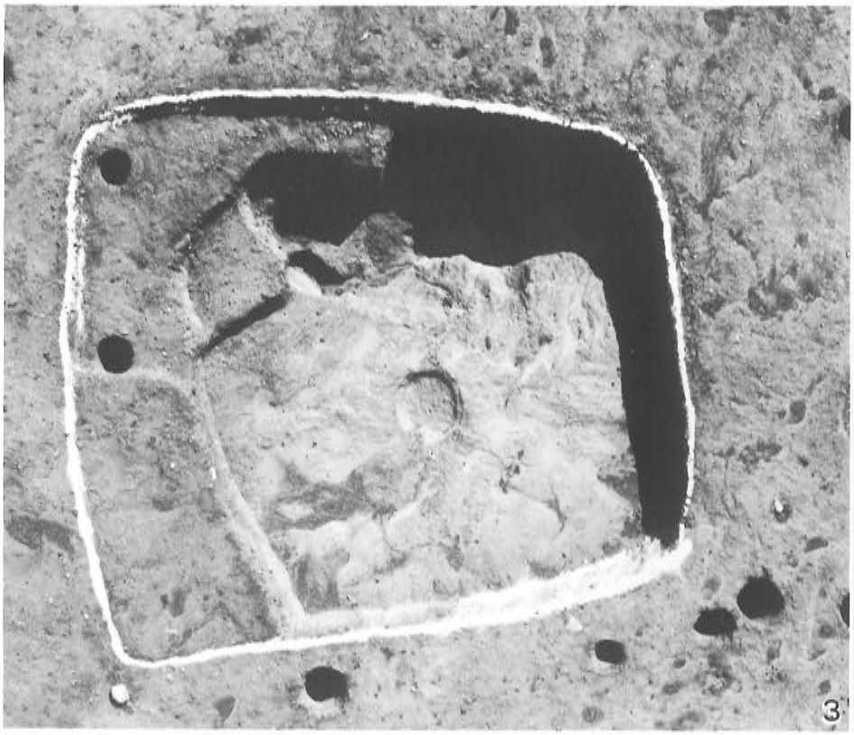


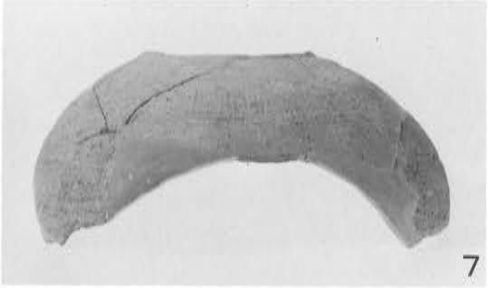
1．古墳時代集落全景　　2．掘立柱建物跡群全景



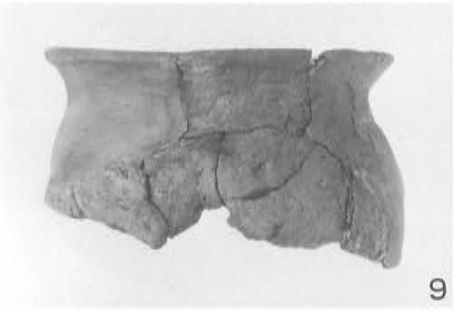


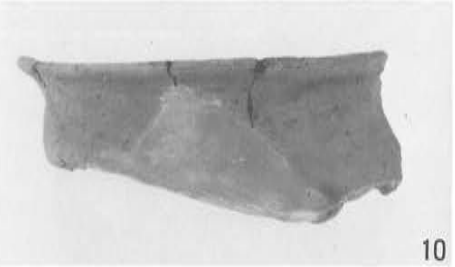


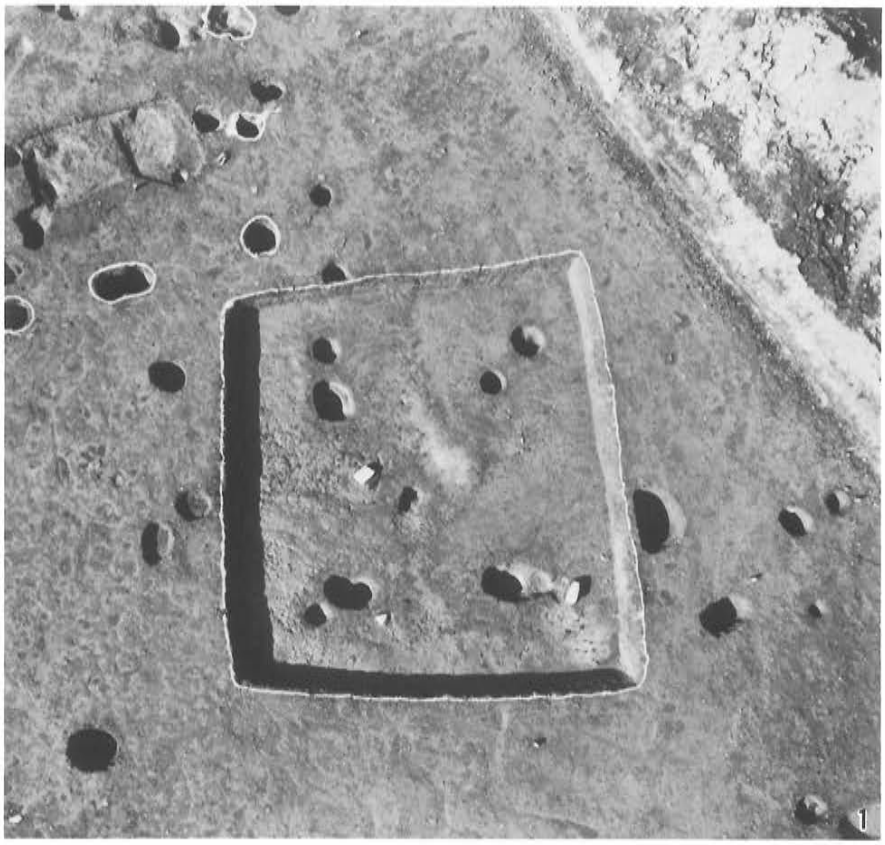


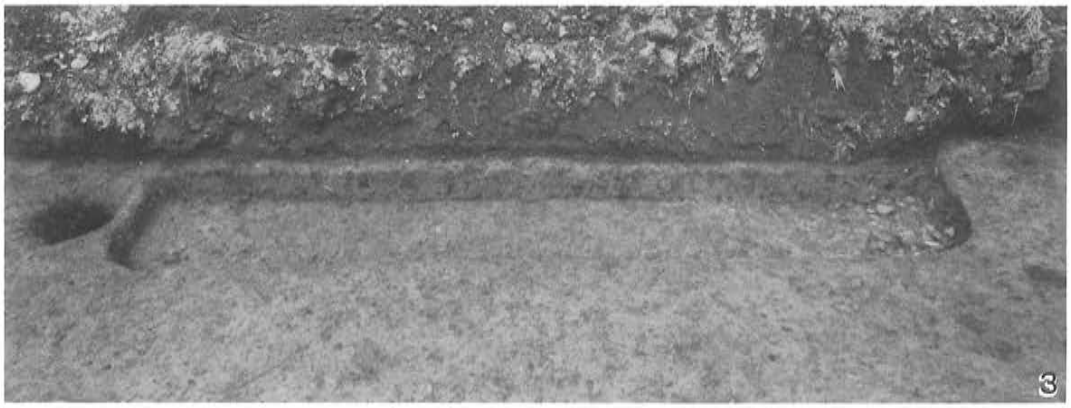


竪穴住居跡（1・2:8号、3:9号）; 8号住居跡出土土器

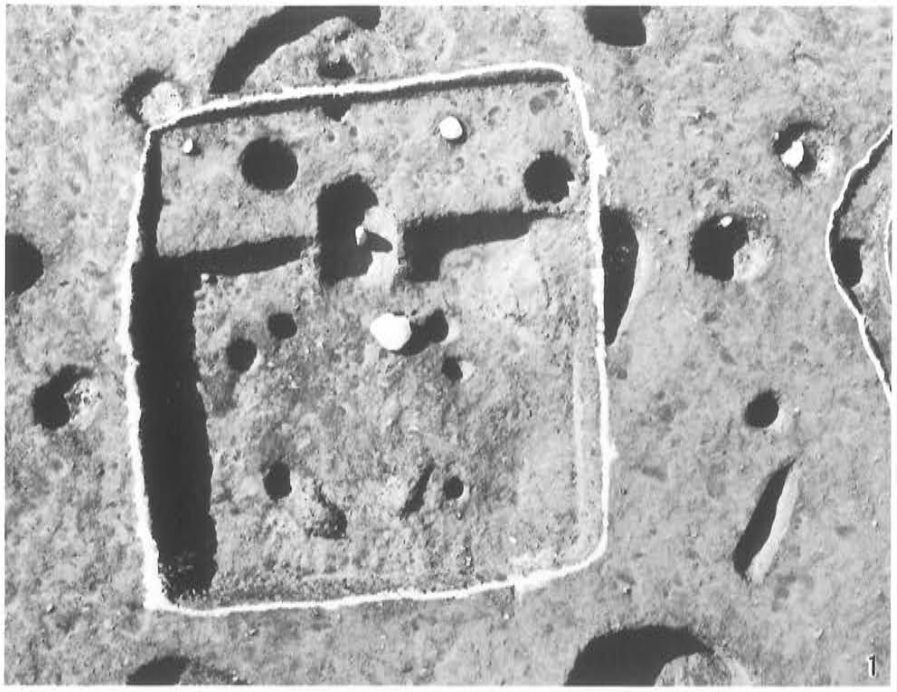


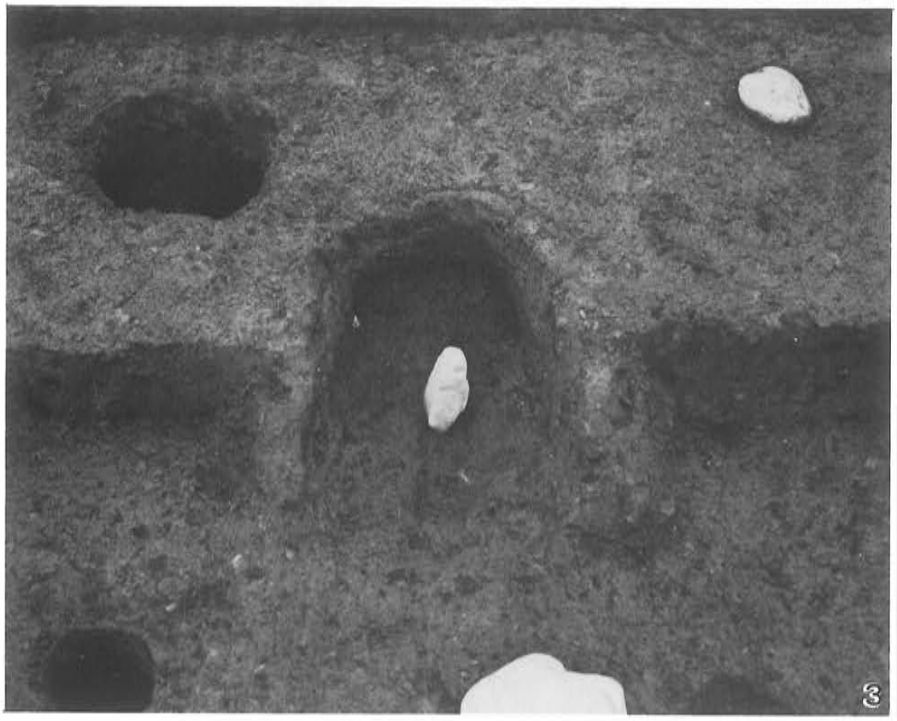


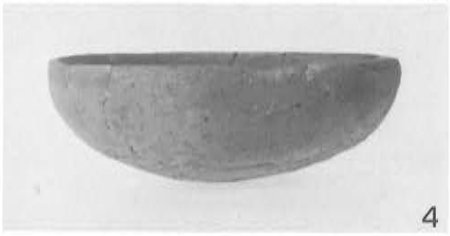


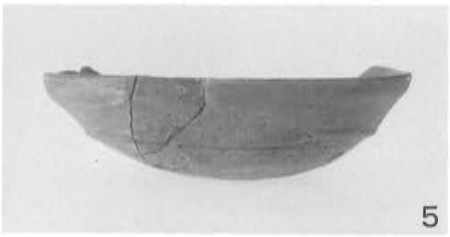


竪穴住居跡（1・2:10号,3:11号）；10号住居跡出土土器



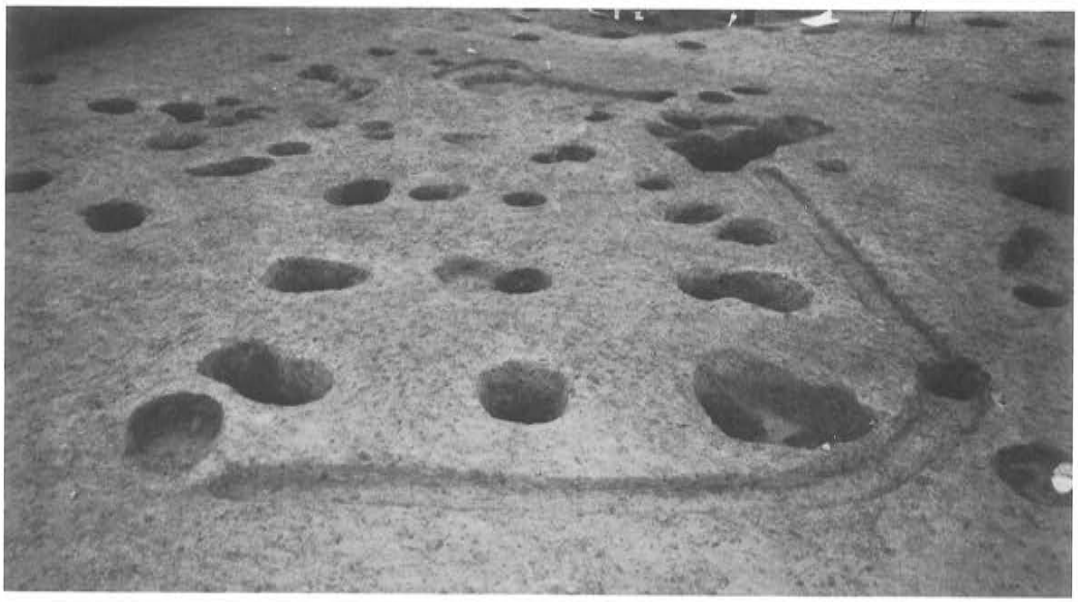






12号住居跡と出土土器

1

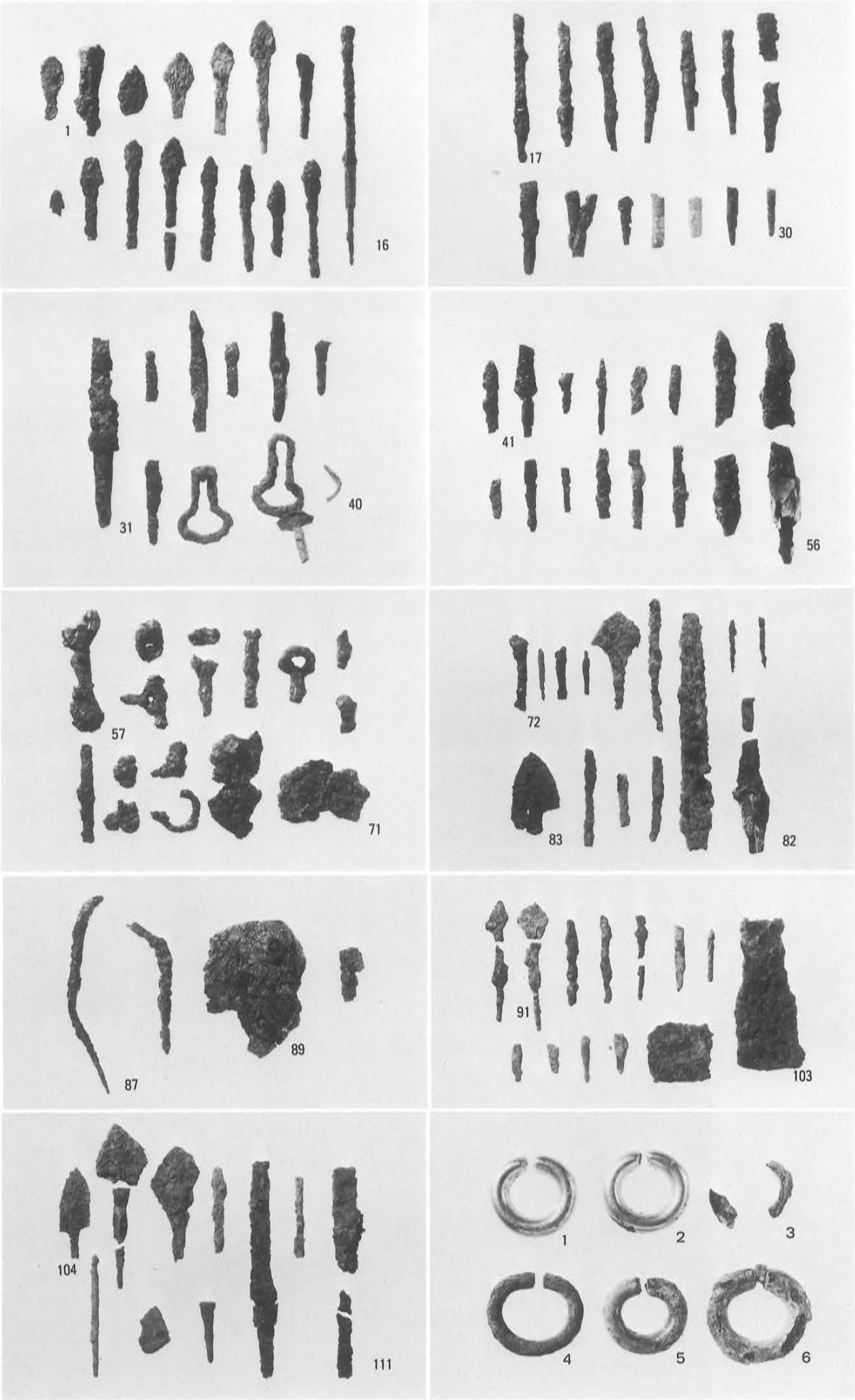


2

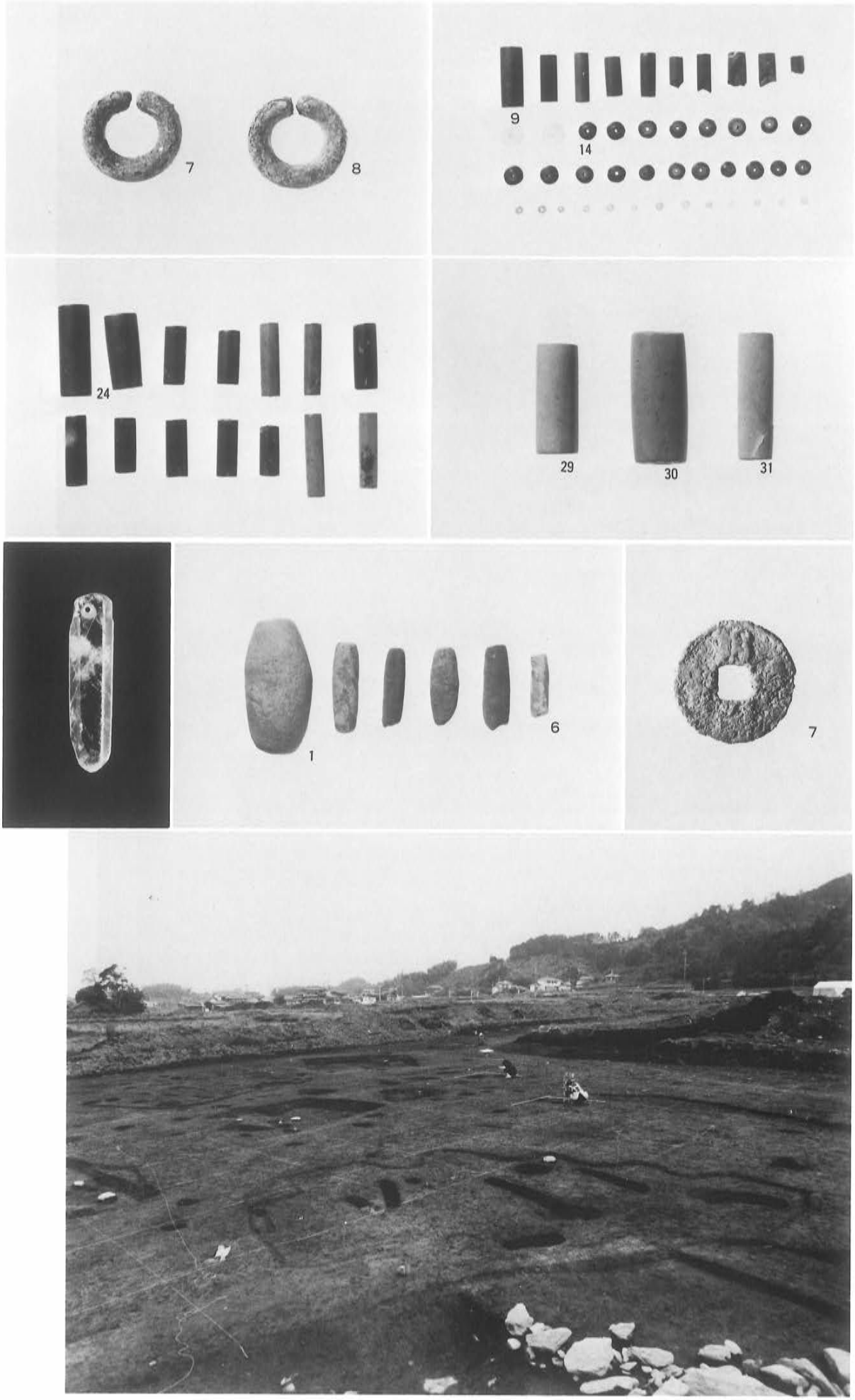
3

4

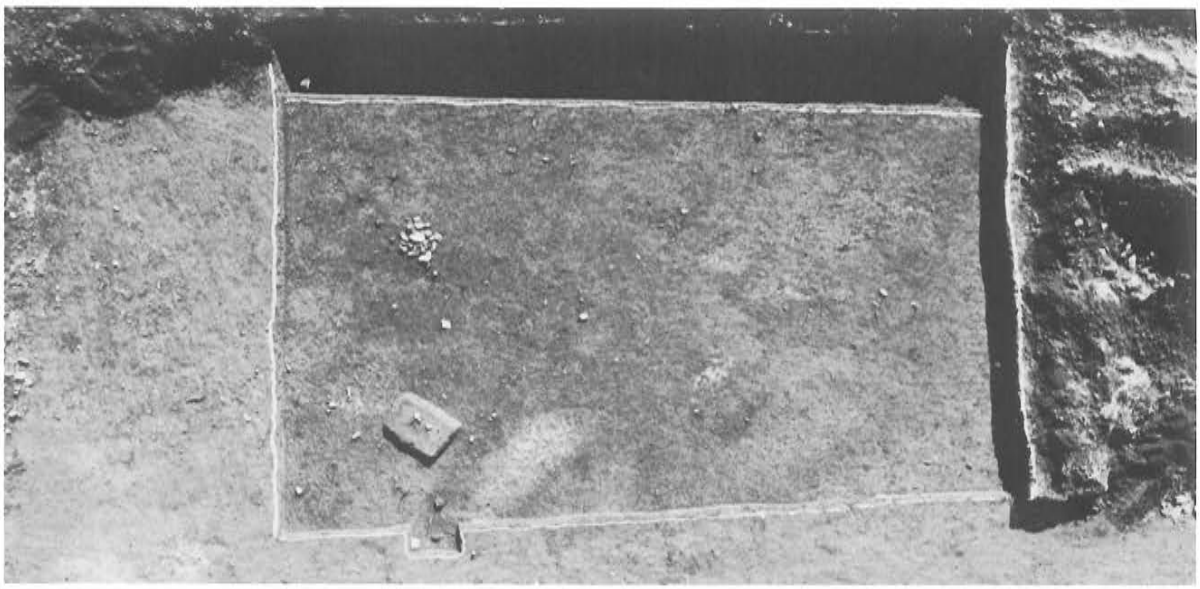
掘立柱建物跡（1:全景,2:SB 1 ,3:SB 2 ,4:SB 3 ）



白木西原古墳群出土鉄器・耳環

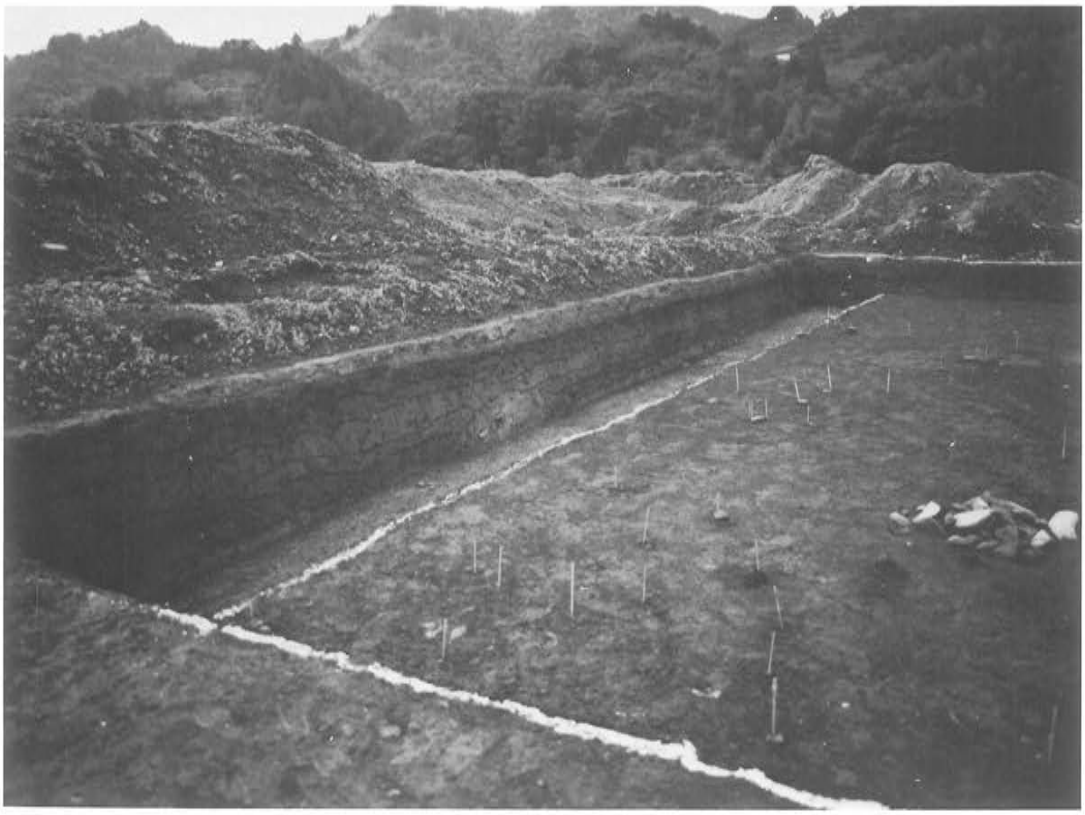


白木西原古墳群出土装身具・銭、Ⅰ区調査風景



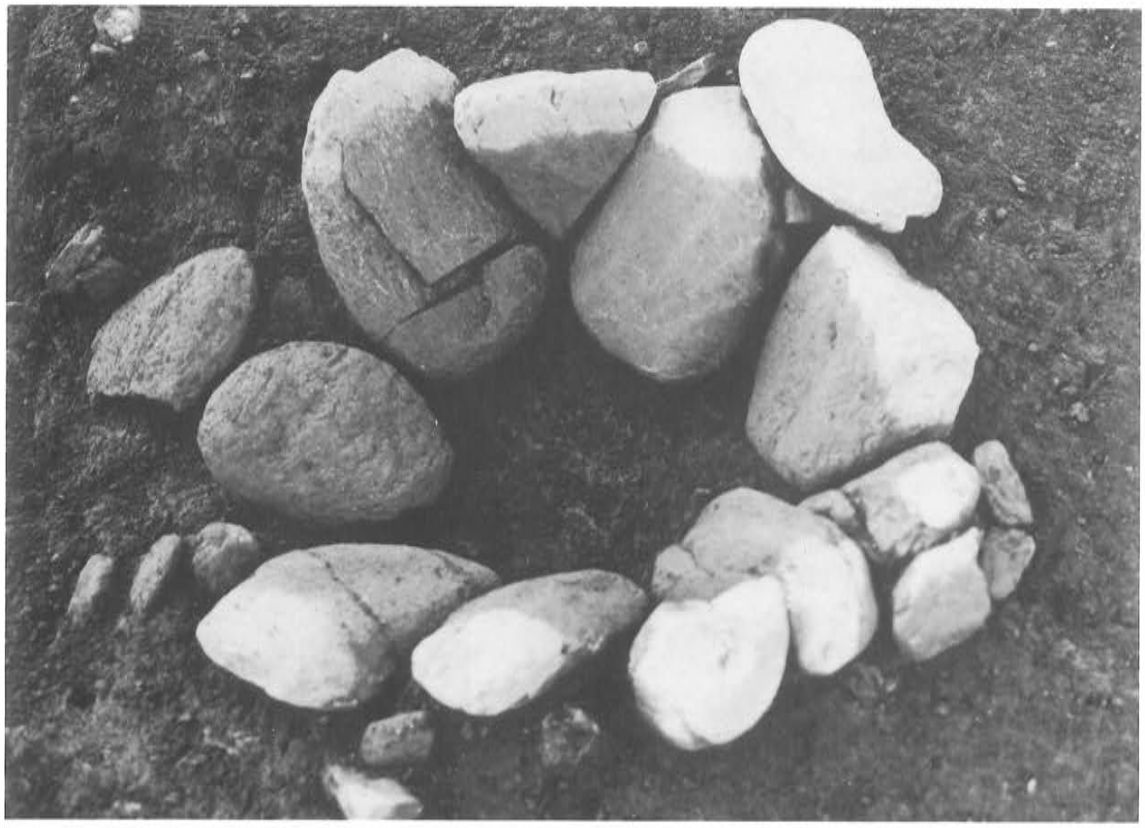
1

2

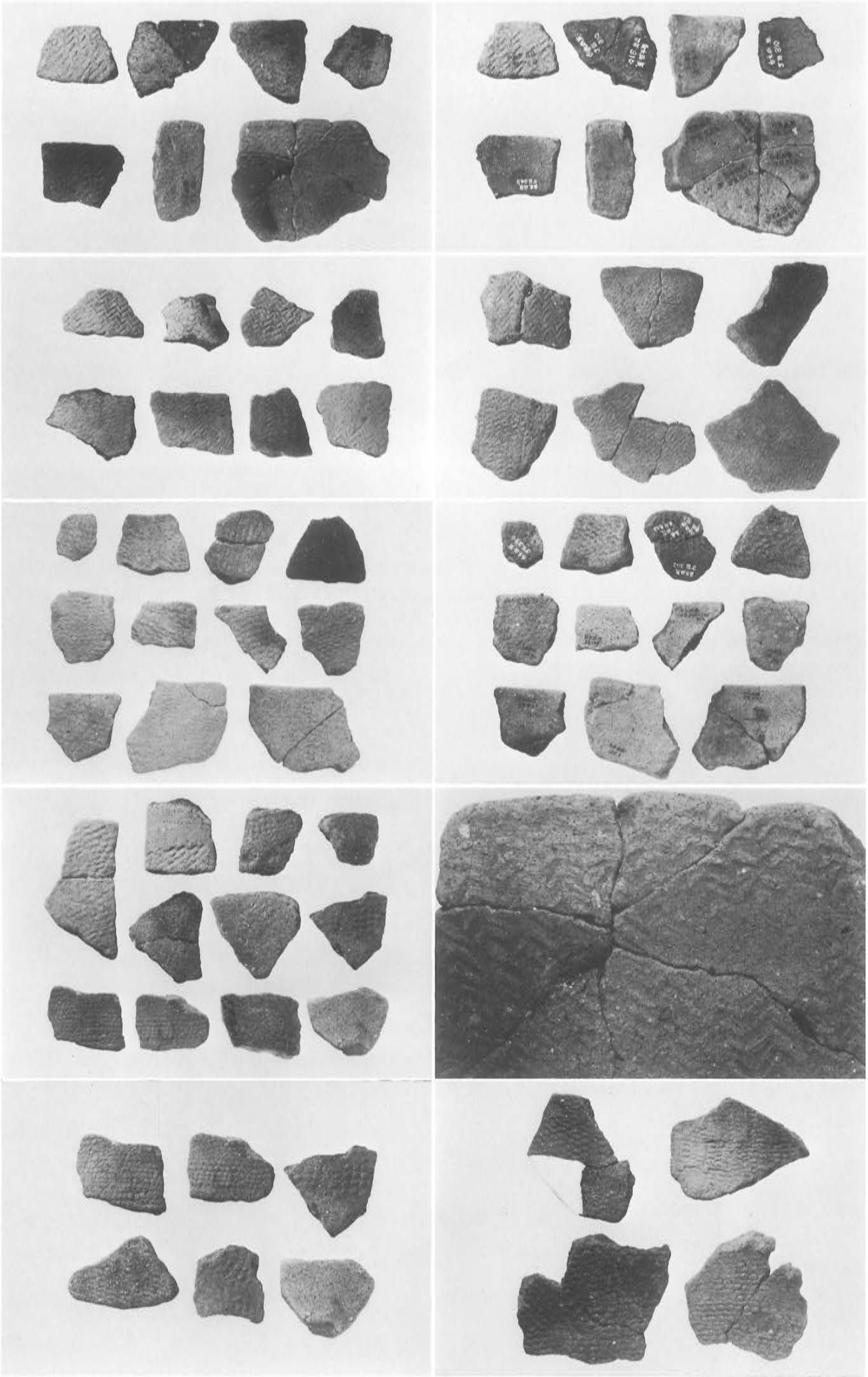


3

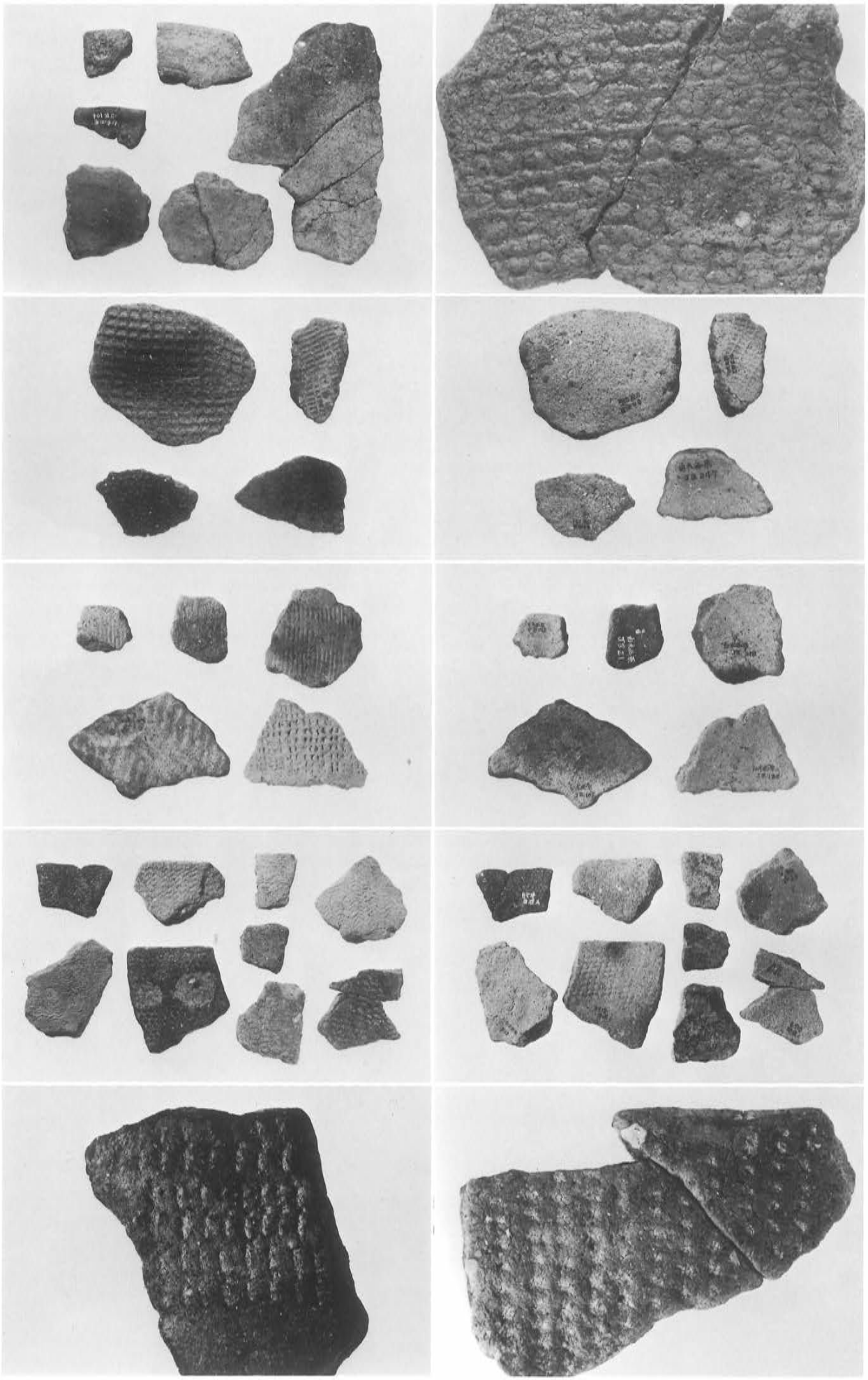
縄文J区（1:全景,2:遺物出土状態,3:南壁土層）



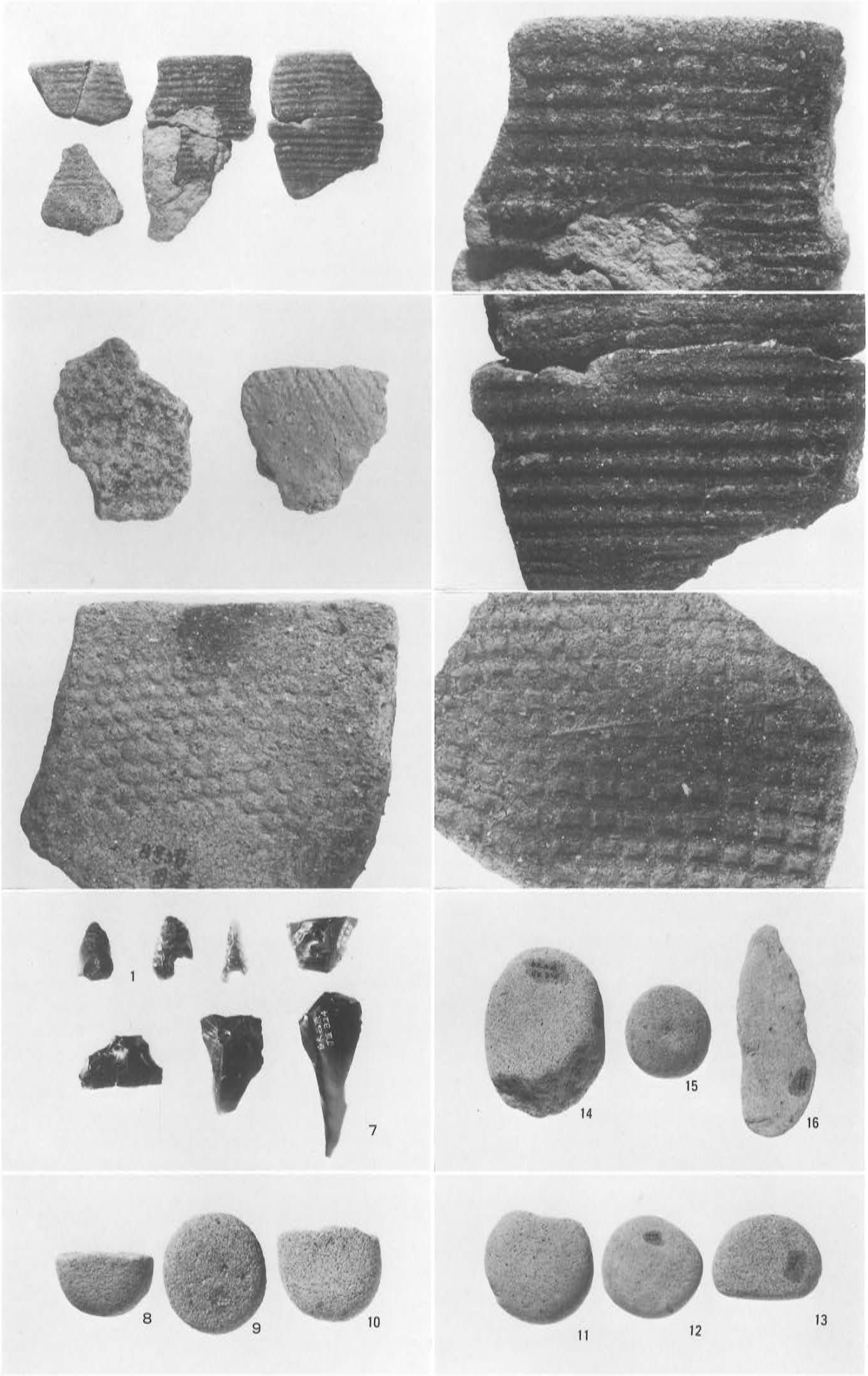
縄文J区石組炉；黒曜石・サヌカイト原石出土状態



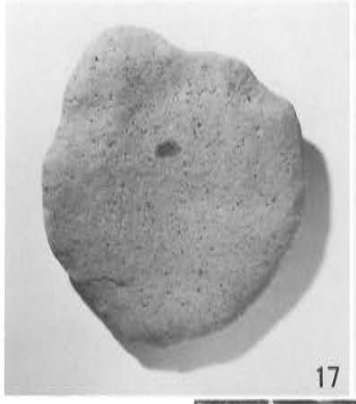
縄文早期土器 1

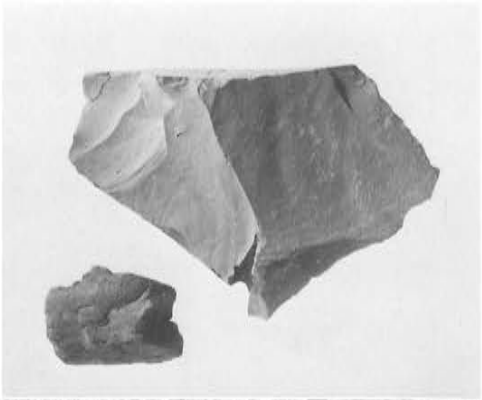


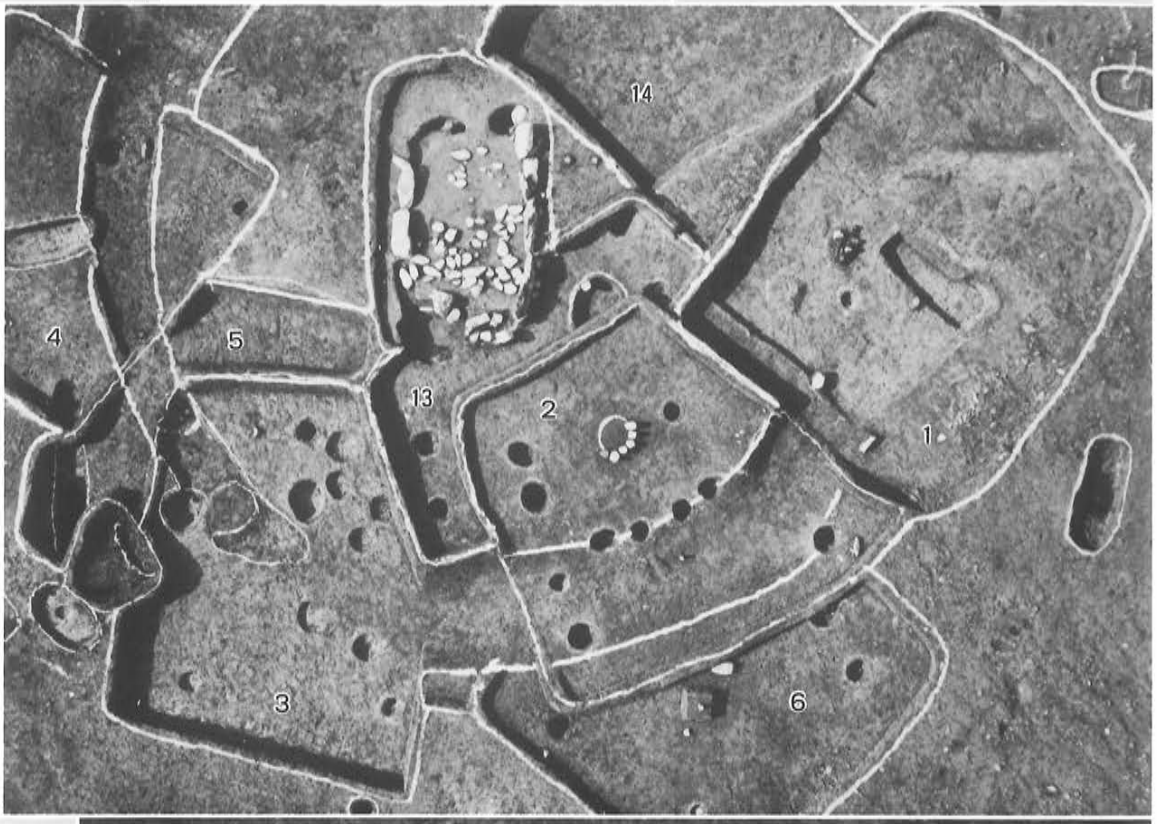
縄文早期土器 2



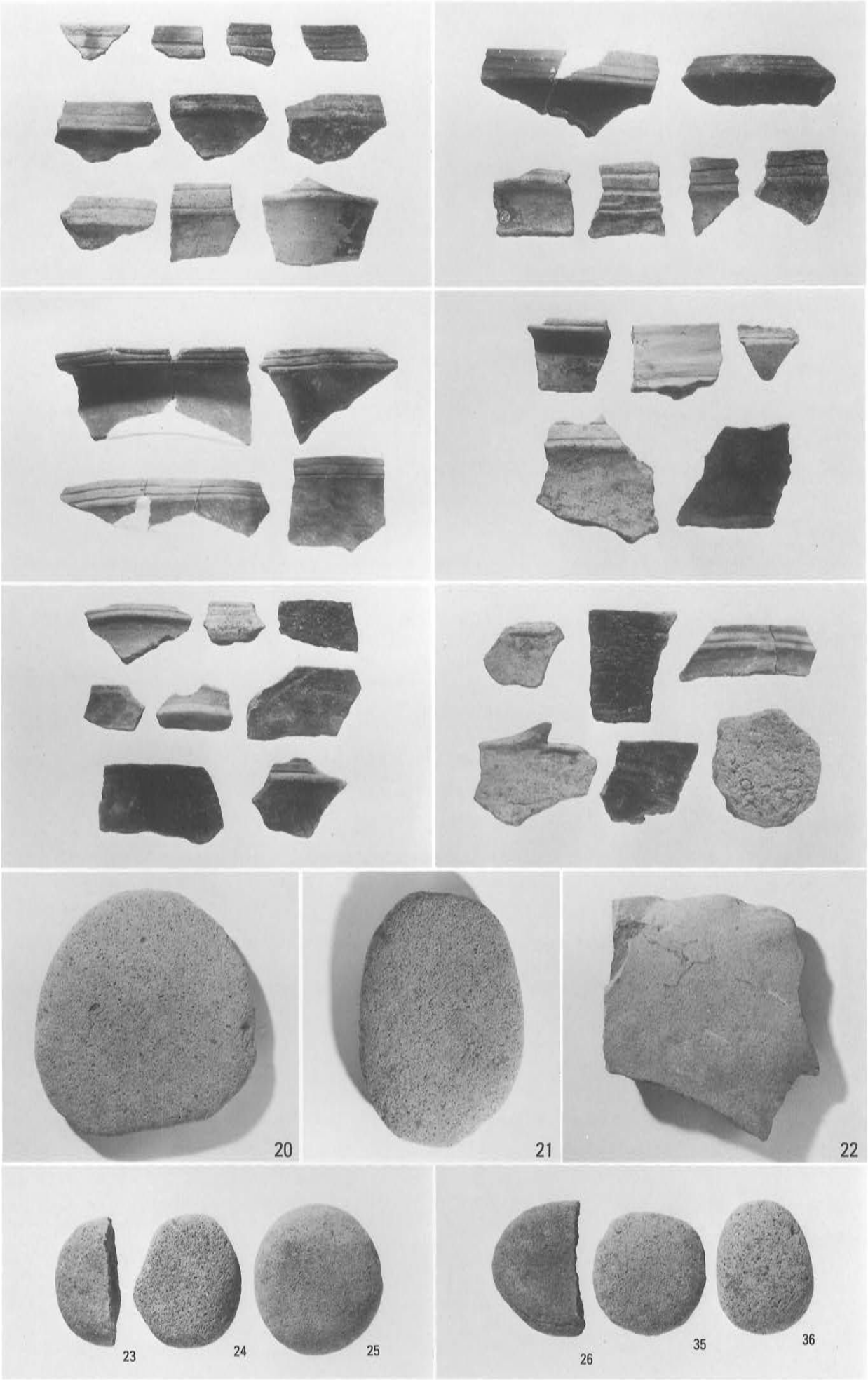
縄文早期土器 3 、石器



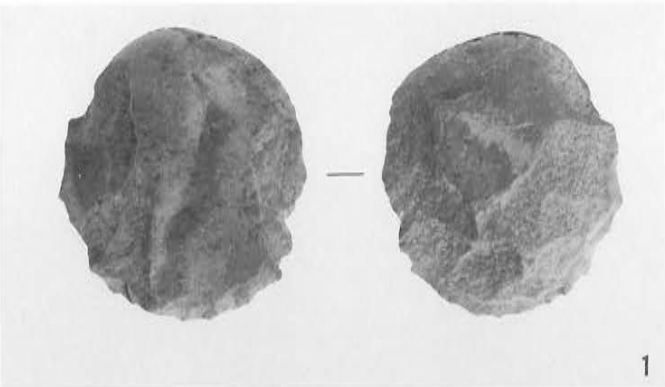


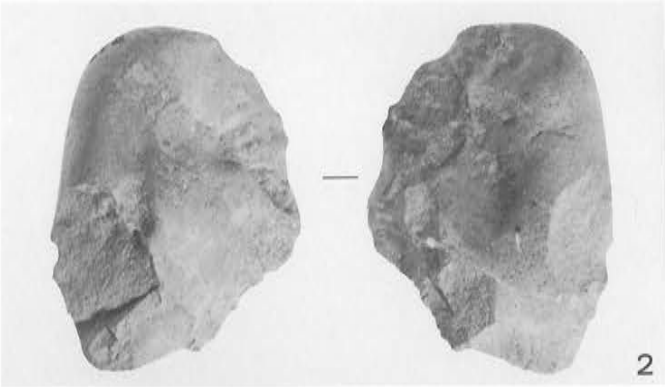


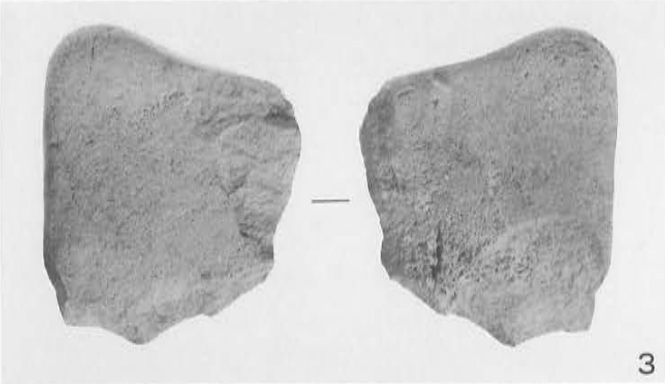
縄文J区遺物；晩期住居群、２号住居跡石囲炉、石鏃

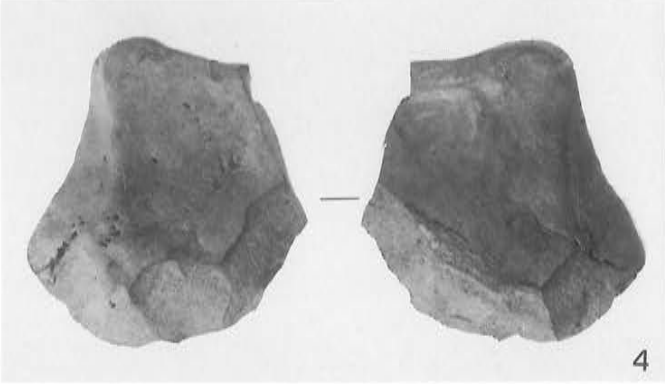


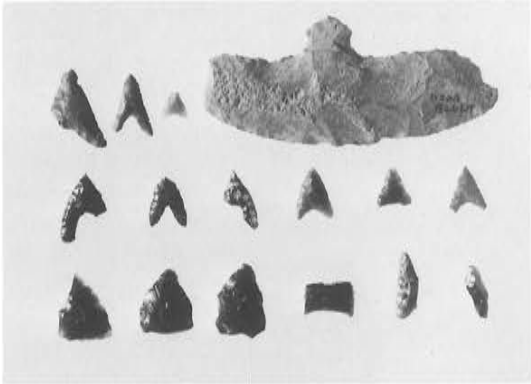
縄文晩期土器・石器

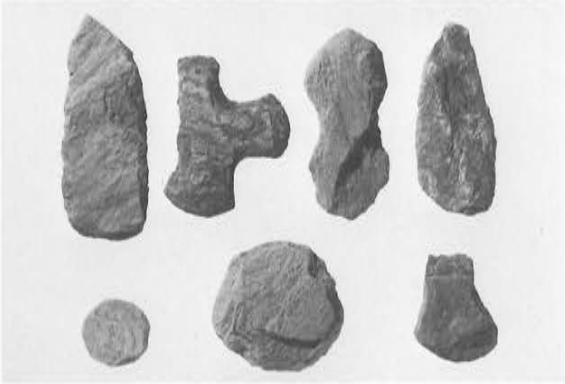


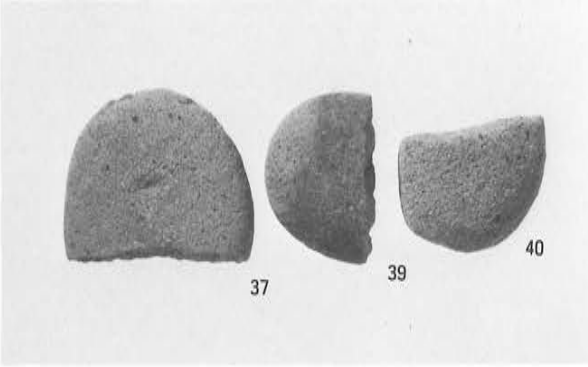




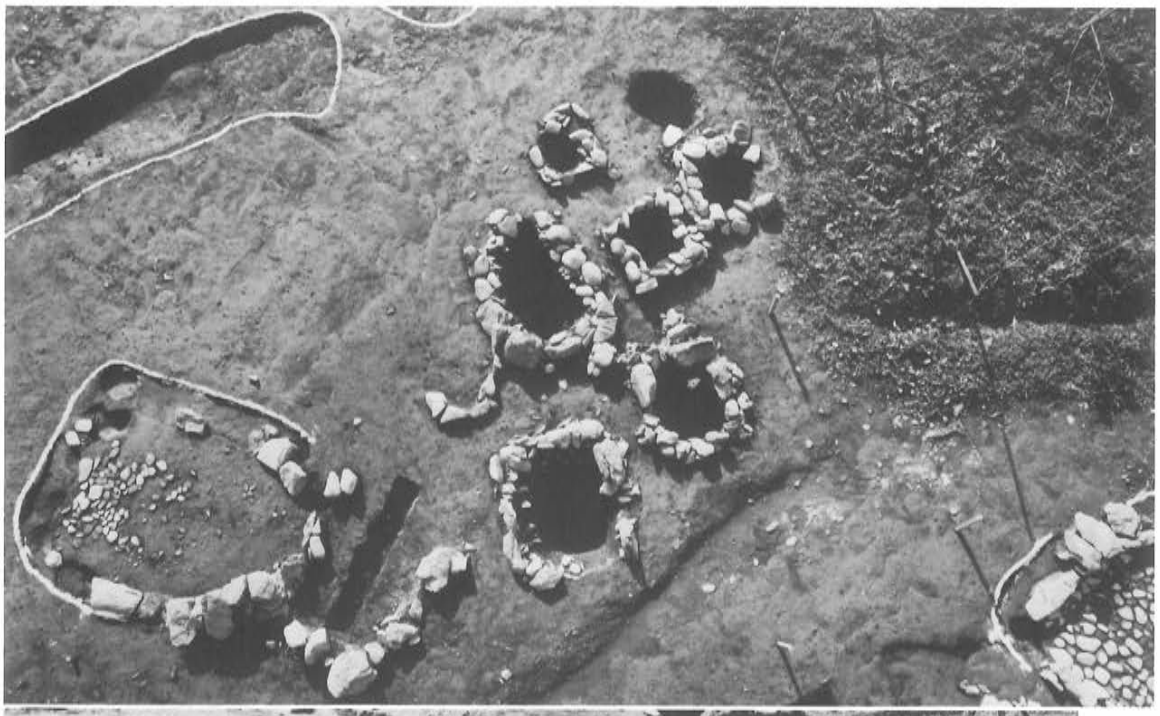




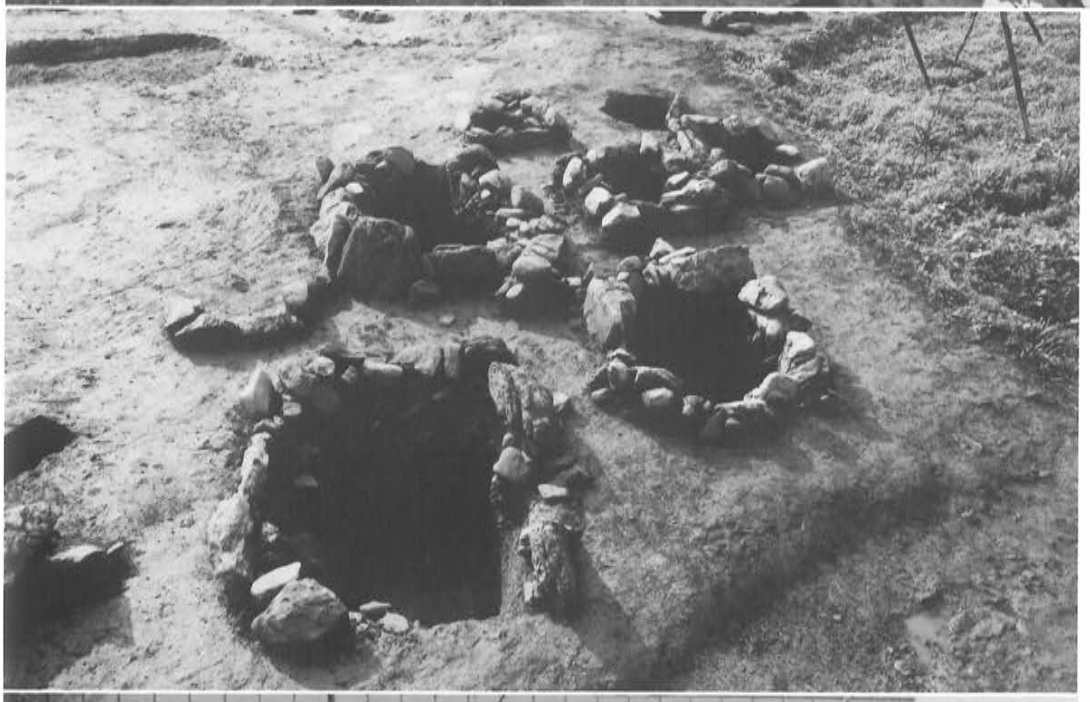




礫器、石鏃、石斧等



1



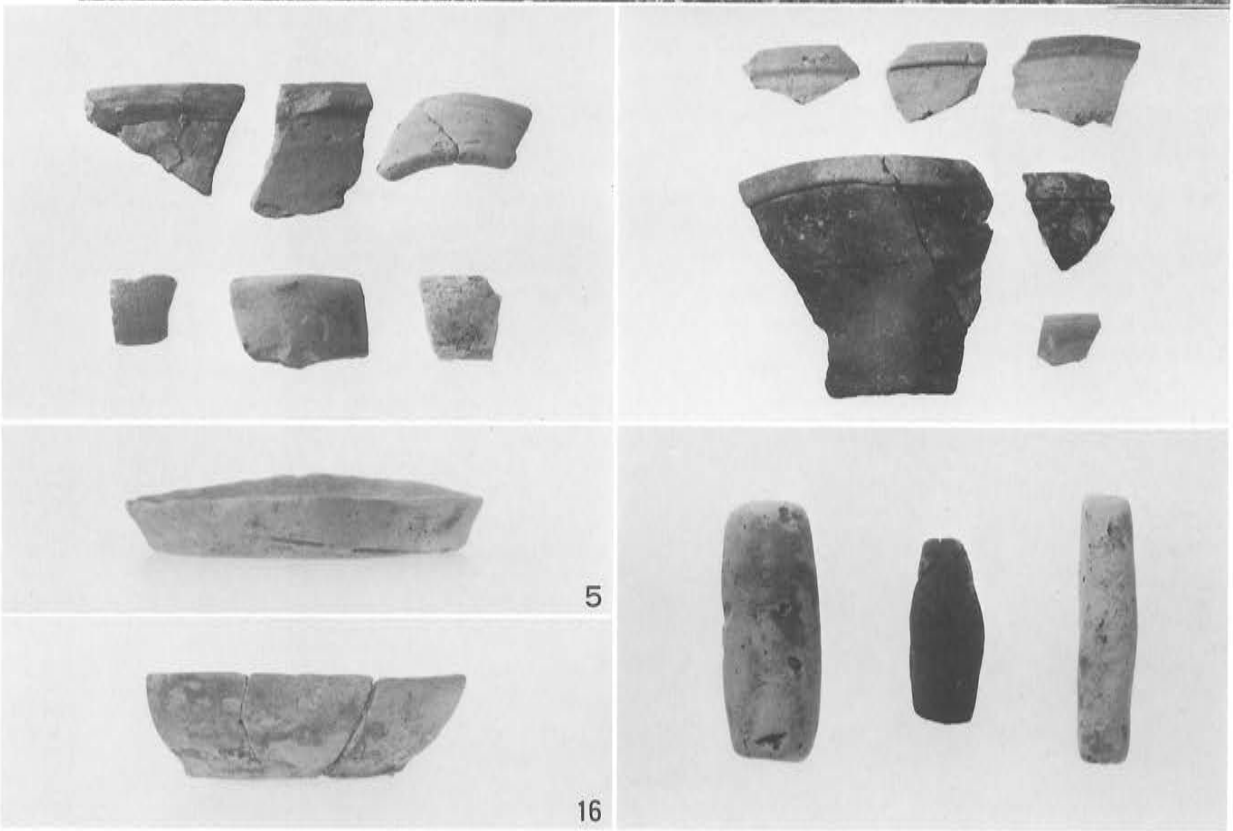
2

3

1．近世墓全景　　2．同（北から）　　3．墓石

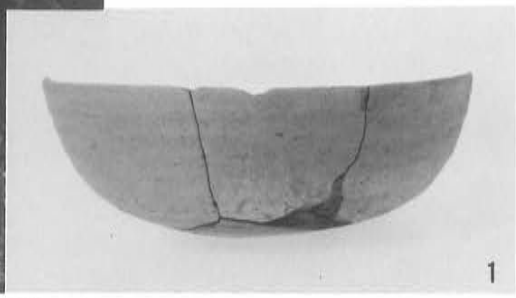
1

2

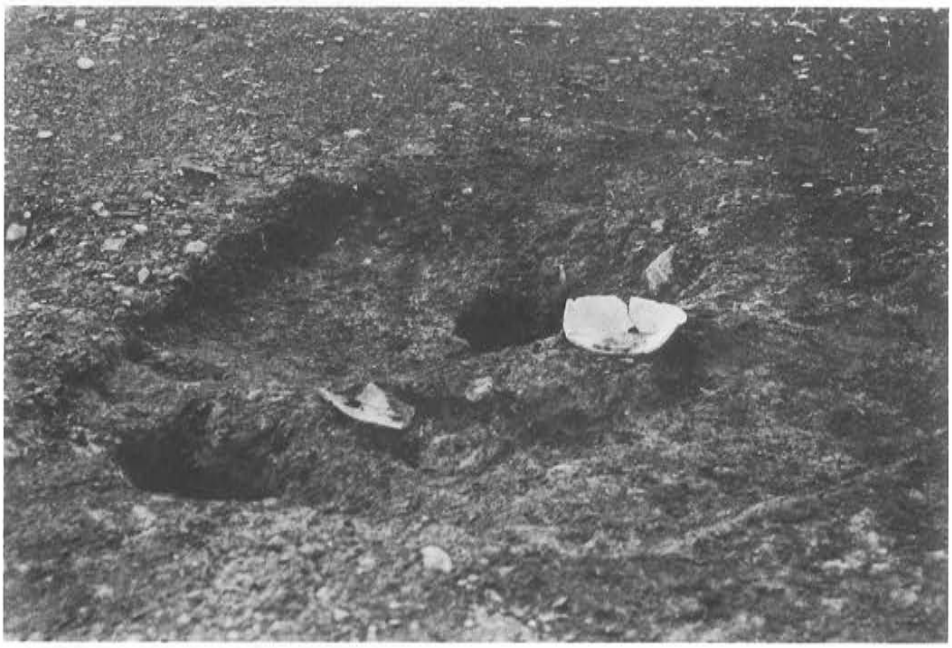


Ⅲ・Ⅳ区と出土遺物（1：Ⅲ区、2：Ⅳ区）

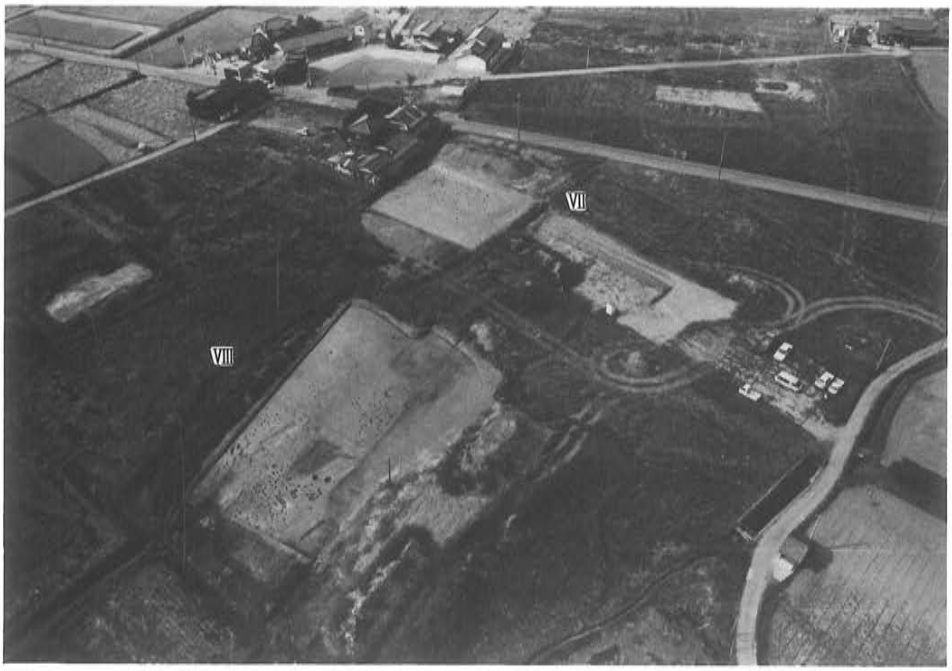
1



1



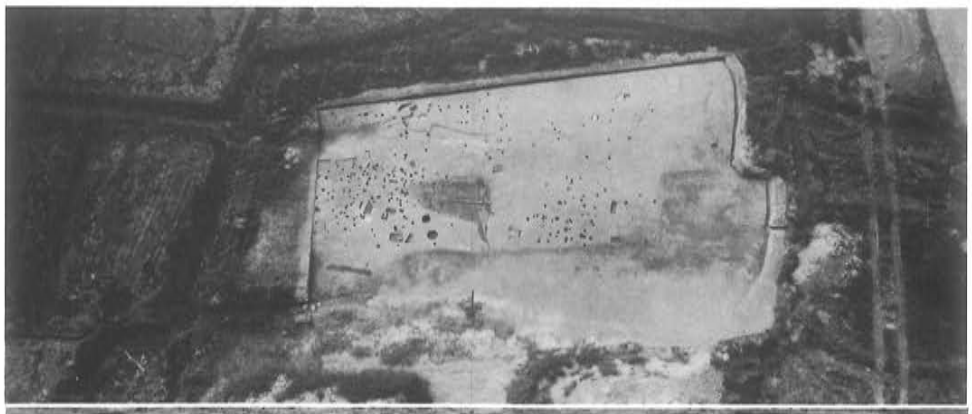
2



3

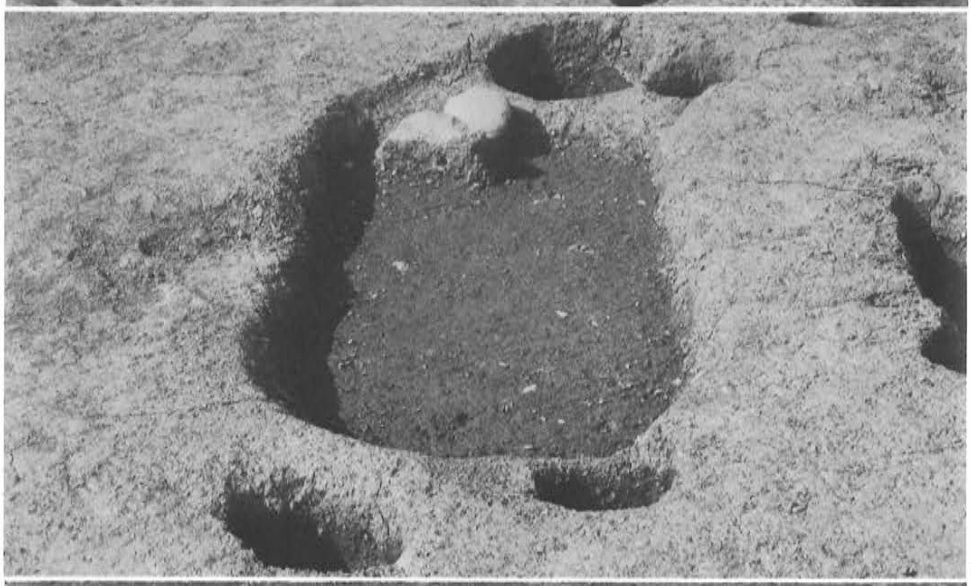
1．Ⅵ区全景　2．Ⅵ区土壙１と出土土器　3．Ⅶ・Ⅷ区全景

1



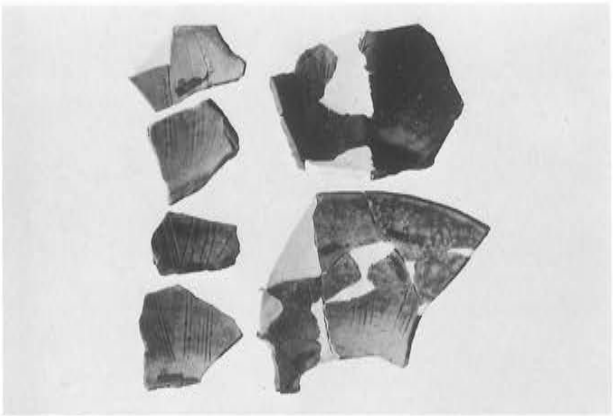
2

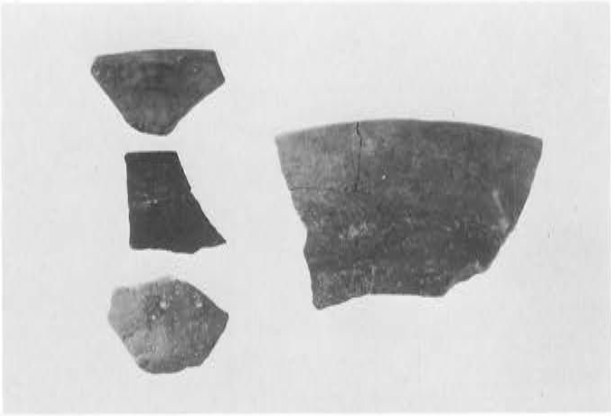
3

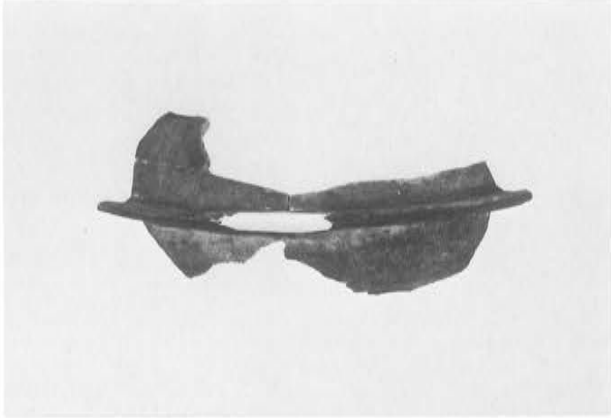


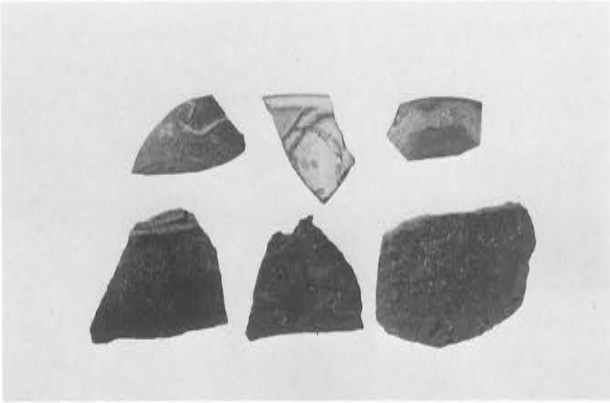
4

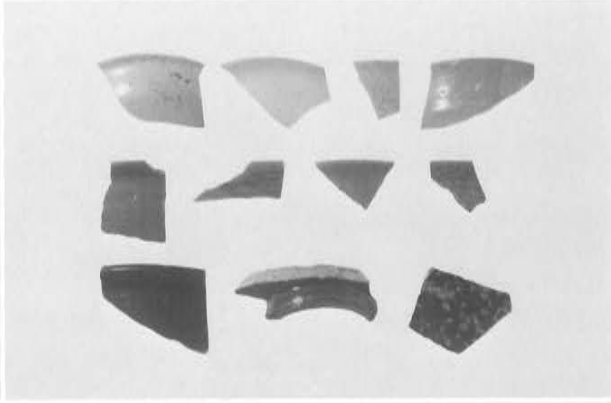
1．Ⅷ区全景　2．SX 1　3．SK 1　4．SK 3

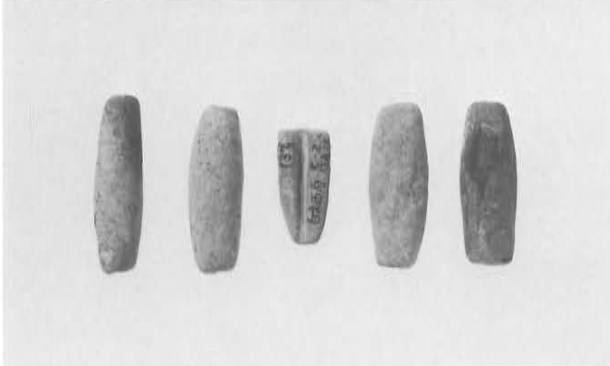


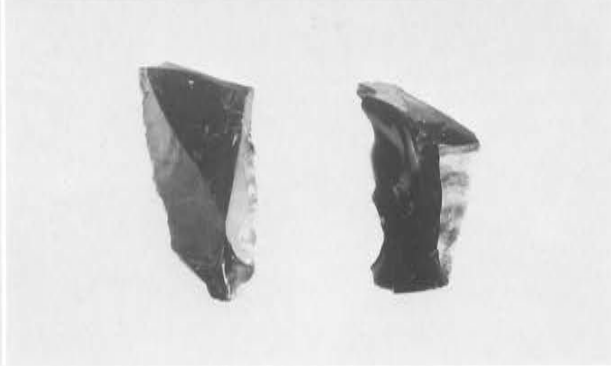












Ⅷ区SX 1 出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	しらきにしばるいせき
書　　名	白木西原遺跡II
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	立花町文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編 著 者 名	伊崎俊秋・永田寧・横田義章・水ノ江和同・杉原敏之・吉田東明
編集機関（発行機関）	立花町教育委員会
所 在 地	〒834 福岡県八女郡立花町大字谷川1130　Tel 0943—23—5141
発行年月日	西暦　1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふ り が な 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
白木西原 しらきにしばる	福岡県八女郡 ふくおかけんやめぐん 立花町大字白木 たちばなまち　しらき 字西原 にしばる	405434	720233	33度 10分 4秒	130度 48分 43秒	19930924 ～1993120	約15,000	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項
白木西原	集落	縄文時代早期	石組炉	1基	押型文土器・石鏃・叩石	縄文早期押型文土器は楕円・山形・格子目とそろっている。
	集落	縄文時代晩期	竪穴住居跡	9軒	土器・十字型石器・石鏃	
		弥生時代			土器	
	集落 墓地	古墳時代	古墳	17基	須恵器・土師器 鉄器・玉類	古墳群17基は5C末～6C中に築造されたもの
			石棺墓	7基		
			焼土壙	5基		
			竪穴住居跡	5軒		
			掘立柱建物跡	3棟		
		中世	掘立柱建物跡	2棟	土師器・青磁	
			土壙	6基		
		近世	墓地	7基		

白木西原遺跡II

立花町文化財調査報告書

第8集

1995（平成7）年3月31日

発行　立花町教育委員会

福岡県八女郡立花町大字谷川1130

印刷　赤坂印刷株式会社

福岡市中央区大手門1丁目8—34

電話　092（751）7431